
魔法少女は諦めない

夜長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女は諦めない

【Nコード】

N6609U

【作者名】

夜長

【あらすじ】

それは、平凡な魔法少女だったはずの私、高町なのはに訪れた突然の事態以下略。

逆行した高町なのはがいちゃこらするだけの話です。どろどろした内容にはなりません、認識の相違によってはそう見えるかも知れませんが、気に入っただ方は気が向いた時にでもご確認頂けたら幸いです。

prologue (前書き)

タグの内容に不安を感じる方、生理的に合わない、この文章は癖があつて読み難い、このキャラ付けはおかしい、気に入らない、などを感ずる方はブラウザのバックボタンで戻つて頂けたら幸いです。

昔からこんな感じなので矯正するのが難しく、恐らく直すことができないと考えてのことですので、済みませんがご了承ください。

prologue

激痛に顔を顰め、気を抜けば遠のく意識を繋ぎ止めながら、高町なのはは苦悶の吐息を吐いた。最早何処へ向っているのか、自分自身にも分からず、それでも足を引き摺って、前へ、前へ進んでいく。辺りの景色は荒野が続くばかり、人気も無く、少女の後ろには点々と血液の足跡が続くばかり。

「……いと」

少女の口からはうわ言のように言葉が漏れる。片手で押さえた腹部からは血が零れ落ち、虚ろな瞳にはもう何の輝きも宿っていない。それでも足は勝手に動いていく。

簡単な任務だった筈なのに。後悔だけが頭を過ぎっていく。慢心していた訳でもない、疲労が溜まっていた訳でもない。ただ単純に自分の弱さが原因で、この結果がある。

何も出来ずに、後悔して、苦痛に塗れて、死ぬ。こうなるんじゃないかと、本当はずっと思っていた。杖を、魔法の力を手にした時から、なんとなくそうなる気がしていた。最年少で執務官になれても、どれだけ魔力量が桁違いでも、本当は戦う覚悟も度胸も無い自分は、いつか付いて行けなくなる。

「……かえらないと」

その一心で、死体となった身体を動かしていく。

少女は、任務の帰りに正体不明の機械兵器に襲撃された。形状はカプセルの形をした小型と、球体形状の大型機。どちらも魔法の結合を阻害する領域を展開していたが、不安定で何よりガス欠でも起こしたように効力が急降下したため、楽に片付けることが出来た。

戦闘が終わり、大型機の残骸を調べていた時のことだ。残骸の中枢から懐かしい感覚を感じ中を覗いて見ると、なのはが魔法と出会う切欠となったジュエルシードが組み込まれているのが分かった。ジュエルシードが何年か前に、研究を終えたため本局の保管室に移送される途中、何者かに奪取されたことはなほも耳にしていた。

膨大なエネルギーを蓄える宝石。これを燃料に機械兵器は動いていたのだらうと考え、ジュエルシードを手にとると、宝石は封印こそ解かれていたものの、魔力の大半をその身に宿したままだった。注意して見てみると、機械兵器は内側からも魔力による衝撃を受けたように拉げている。

戦闘中のガス欠は、そもそもジュエルシードから安定して魔力を引き出せずに不具合でも起こしたのだろうか。そんな思考を廻らせながら、並列思考で管理局との連絡を取ろうとしていたなのはは、ふと、腹部に痛みを感じ視線を落とした。

空洞が、出来ている。

思い出したかのように、後から後から血液が流れ始め、なのはは「えっ……？ えっ……？」と困惑の声を漏らしながら、お腹に出来た穴を押さえる。現実感が無く、服に穴でも空けてしまったかのように、ぺたぺたと手で傷口を覆っていると、次第に手は赤黒く染まり、痛みはじくじくとなのはに現実を突き付け、追い詰めていく。自分でも驚くほどの悲鳴を上げながら、困惑や怒り絶望、緋い交ぜになった感情に涙を流し、振り向き様に砲撃魔法を撃った。

そこから先は、良く覚えていない。

背後にいた襲撃者がどうなったのか、自分の身体がどうなっているのか、何処に向かって、自分が、歩いているのか。

唯一分かることは、相棒であるレイジングハートは損傷して沈黙し、反対の手にはジュエルシードを握り締め、血は止まらず、足は次の瞬間には崩れ落ち、自分は、死ぬ。

後悔は、ある。それ以上に「やっぱりこうなってしまった」という、諦めのほうが強い。入局したときから志も、目標も高町なものには無い。ただ漠然と友達の手助けがしたい、一緒に居たい。一緒に入局した二人と違って、何て安易な気持ちなのだろうかと考えていたなのはには、いつも不安が纏わり付いて離れなかった。

魔法なんてファンタジーな言葉で誤魔化しても、自分の砲撃は、父や兄が振るう剣よりも、ずっと痛くて恐い。信念の籠っていない力はただの、暴力でしかない。

本当は戦いたくなんてない。痛い思いをするのも、相手に痛い思いをさせるのも、嫌いだ。

何より、そんな才能しか持っていない自分自身が、大嫌いだった。

「……かえりたい」

一途に、友の為に。

こんな才能でも、フェイト・T・ハラウンと八神はやての役に立てるなら。その一身で、様々な苦手を風潰しに克服し執務官になった。役立たずだと、思われなくなかった。

「かえりたいよ」

最初と最後には三人一緒。

入局した時に三人で交わした約束。スタート地点は同じでも、これから別々の道を進むことになる。なのはは執務官として、フェイトは教官として、はやては兎に角偉くなるために、同じ管理局でも一緒には居られなくなる。だから、最後には高官になった八神はやての元に全員で集まろう。

自信満々に笑いながら「専属の執務官にしてやるから待ってる」と言っていたはやてと、それなら自分も偉くなる、と言ってそれに

噛み付いていたフエイトが脳裏を過ぎつた。二人は、きつと他愛も無い談笑程度にしか思っていないだろう。

そんなことを考えて、血塗れのなのはは薄らと笑みを浮かべた。

「かえり、たかった、な……」

他愛も無い談笑に、他愛も無い約束。

それだけが、高町なのはの全てだった。闇の書事件を終えて、魔法少女高町なのはから、普通の何の取り柄も特徴も無い高町なのはに戻った少女には、その約束が全てだった。嬉しかった。二人が自分を必要としてくれる。そのためなら、嫌いな力も好きになれる。これから先も戦っていける、そう思っていた。

二人に会える機会が減つてくると、段々と独りになる時間が増えてくる。幼いころのトラウマが浮かび上がり、感情が揺れ動くのを止めていく。日々が移ろい、なのはの心は色を失った。偶に二人に会うとき以外は、宛ら鉄の女のように任務に当たり、周囲の評価とは反比例するように、不安ばかりが募り心を締め上げていた。

結局、根底にあるのは何の取り柄も無い高町なのは。

完璧な執務官を装っていてもいつか襤褸が出るんじゃないか。

二人は順調に歩を進めているのに、自分は何処かで躓くんじゃないか。

もしかしたら、もう、必要とされていないんじゃないか。

なんで、こんなことを続けているんだろう。

「……ごめん、ね」

そんなことばかり考えていたから、罰が当たったんだ。

そう、思った。同時にもうそんなことを考えなくて良いんだと、何処かでほっとしている自分が居る。

前のめりに倒れ込み、最後に人生でも振り返ろうと瞼を閉じても、

走馬灯なんか見えやしなかった。そんなものだろうと自嘲していると、身体から急速に熱が引いてく感覚がした。約束は、守れそうにない。

あの頃に、戻りたいなあ。

皆で笑っていた、あの頃に。

弱弱い呼吸音に掻き消され、呟きは、声に出ることは無い。思考は痛みで混濁していたが、感覚が無くなっていくことで一瞬だけ杖を手にする前の自分の姿を思い出した後、高町なのはの意識は遠退いていった。瞼を透過してみえる、青白い神秘的な光に包まれながら。

prologue (後書き)

数年振りの執筆なので、読める文章になっているかどうか心配しています。

今更原作主人公逆行物などという化石のようなジャンルの小説ですが、楽しんで読んで頂ける方に楽しんで貰えれば、私は嬉しいです。

一話

今まで生きてきて、と言えるほど長く生きてはいないのだろうが目覚めは人生で最悪のものであった。頭が酷く痛み、跳ね起きようと脚に力を込めても、視界が一回転するようになりと引っくり返り、うつ伏せから仰向けに体勢を変えるだけに留まった。きっと数時間洗濯機にでも入れられていたらこんな気分かも、と混濁する思考を慣らしていると視力が段々と回復していく。

緑。空を覆い隠すほどの新緑が高町なのはの視界を覆い尽くした。金槌で連打されているような頭の痛みに耐えて周囲を見回しても、同様の光景が広がっている。鳥の囀りを聞き流しながら、這いずる様になのはは身体を起こすと、背中を近くの大樹に預け一度大きく深呼吸をする。

「どこだろ、ここ」

疲れきった様子を隠すことなく、吐き捨てるように声を漏らす。荒野を這いずり回っていた記憶が蘇り、もうどうなっていてもいい、と投げやりに自分の身体を見詰めると、お腹に開いた穴は跡形も無く消え去っていた。血の跡も、バリアジャケットが解けた後も転びながら歩き回ったお蔭でずたずただった服装も、夢か幻だったかのように、全てが元に戻っている。

唯一、握り締めていた輝の入ったレイジングハートと、通り過ぎた激痛の余韻だけが、自分が死ぬ寸前まで行って死に損なったのだとなのはに教えてくれた。管理局員か誰かが助けてくれたのだろうか。それとも死に損なったと感じているこの感覚すら、死んでしまった自分が最後に見ている夢なのかも知れない。

何にせよ、今のなのは出来ることは少ない。

「……っ！」

痛みを感じる身体を騙しながら無理やり立ち上がると、木に寄りかかって荒げた息を整える。魔法は使えないのだから、歩くしかない。幸いと言つていいのか、周囲は平地で、少し放れたところには人が散策するために設けたような道があることが分かる。鬱蒼と茂る大森林かたまたま前人未到の山奥ではないようだと考え、足を引き摺りながら、時折木に寄りかかりながら、なのはは人気がある方向を探して歩き出した。

人通りの疎らな町並みに独り取り残されたかのように、高町なのはは立ち尽くしていた。見覚えのある町並みと、通り過ぎる人々なのはの故郷のそれと酷似している。それどころか、今まさに実家のご近所さんに「なのはちゃんどうしたの？ 顔色悪いわよ」と声を掛けられた。間違いなく第97管理外世界、地球、それもなのはが住んでいる海鳴市である。

どういふ状況なのか、なのは自身上手く飲み込めていない。身体は重く、頭には霧が掛かっているかのように思考が働かない。ここは地球で、ここには高町なのはの家がある。家族は、少なくとも味方だ。

兎に角、今は家に帰りたい。臨死体験のお蔭で身体の調子の悪さは元より、精神的にも滅入っていることを自覚したなのはは、具合が悪くて早退してきたと適当に誤魔化すと、その場を離れる。

「こつち、だつたかな」

休み休み歩きながら、なのはは辺りをきよるきよると見回す。頻繁に通る道なら話は違つのだろうが、車で通つたことのある程度に

しか知らない道を完璧には覚えていない。思えばこの辺りを歩いたのは、ユーノ・スクライアとジュエルシード探しの為に各方面を歩き回ったときが最後だ。

「あれ……？」

ふと、足を止め思い出す。そう言えば握っていたジュエルシードは何処に行ったのだろう。ポケットを探しても見付からず、かと言ってなのはが倒れていた周囲の様子を思い出しても、ジュエルシードの姿はなく魔力も感じられなかった。

放置して置く訳には行かないが、当ても無く探して見付かる状況でもない。恐らくは自分をこの場所に転移させた人物に持ち去られたんだろう。死に掛けの自分を回復させてくれたのだから悪い人ではないと思いたい、そう考えて溜め息を吐くと、休憩をやめて歩き出す。

何やら先ほどから、奇妙な違和感を感じてならない。

身体の具合が悪いからとかではなく、目に映る光景や上手く説明できないが、雰囲気、何処となく違う。本当に些細なことなのかも知れない。あそこに見えるスーパードは少し前に潰れてしまったよな、とか。夏に差し掛かって気温も暖かった筈が、何処となく今日は肌寒い。記憶違いかも知れないし、偶々、今日は寒い日なのかも知れない。

気のせいだろうと思いつつも、なのはの足取りは速さを増していた。気温とは別に悪寒が背筋を走る。気にすることじゃないよ、考えすぎだよと呟いて心の安定を図ると、出来るだけ振り向いたり余所見をしないように前に向かっていく。

思えば、心配して声を掛けてくれた女性も奇妙なことを言っていた。

「髪の毛どうして切っちゃったの？」と。

高町なのはの髪型は肩に掛からないくらいのショートヘアだ。それは小学校に上がる前に、子供っぽく見られたくないからと母にせがんで髪型を変えてから、今の今まで変わらない。それ以前は二つに分けてリボンで纏めていたが随分前の話になる。

きっと、他所の子供と混同してしまったのだろう。

現在の状況には全く関係のない話になるが、自分も騙せない嘘は自分を追い詰める材料にしなければならない。

いつからだろう、諦め癖が付いたのは。

いつからだろう、あまり泣けなくなつたのは。

ごみ箱に投げ捨てられた比較的汚れの少ない『2005年』の新聞紙を一瞥しながら、なのはは歩みの速度を緩めた。何もかも、全部手遅れな気がした。

本当に、気持ち悪い。身体も、心も。

「ただいまー！」

元気な声を上げて、玄関を潜って行った少女。髪の毛を白いリボンで二房に纏め、明るい笑顔を可愛らしい顔いっぱい貼り付けて典型的な良い子なのだろう、教科書に書いてあるような。

高町家に帰宅した少女を、人目を避けるように離れた位置から見詰めていた高町なのはは考える。自分は、あのくらいの年齢の時にあんなに明るくは振舞えなかったと。静かに、邪魔にならないように、そんなことばかり考えて、周囲には大人しい子供だと認識されていた。幼かった頃独りにされたことで、どこか家族に対しても壁を感じていたのかも知れない。無論、仲が悪かった訳ではないが、両親も自分との距離を測りかねている、そんな印象をなのはは感じていた。

あんな風に、なろうとした時期もあった。
だから、なのはには理解できた。
あの娘は、高町なのはだと言うことが。

「はあ……」

最近、溜め息が多いことを自覚しながら、人気が無いことを確認し、その場にへたり込んだ。不思議と、泣き叫んだり取り乱すことはなかった。ただ、少しだけ乱れた呼吸を整えるために大きく深呼吸をする。

きつと、もう少ししたら取り乱すのだろう。

落ち着ける場所にも着いて、今後のことを考え始めたら、嗚咽を漏らすことになる。

最も、そんな場所が、あるのであればの話。

「これから、どうしよう」

少し、整理をしよう。『この場所』は2005年の3月、高町なのはが生きていた時代よりも大凡3年程前の地球、生まれ育った街、海鳴市。単純に時間が巻き戻った訳ではなく、若干の差異が生じている似て非なる世界。違う過程を経た二種類の高町なのはの存在を確認する限り、重なり合う部分もあれば違う部分もあるのだろう。そして何より……。

「また……独りぼっちになっちゃった」

似ている人間は居るだろう。似ている町並みも、似ている場所もあるのだろう。

しかし、この世界で『高町なのは』を知るものは誰一人としていない。

死に掛け、意識を朦朧としながらも強く願っていた。高町なのはが少しでも幸せを感じていたあの頃に戻りたい。確証はないが、ジユエルシードが願いを叶えたのがこの結果。歪んで叶った願いは、確かに傷を癒し、時間を超越して高町なのはを救った。

この世界に、既に高町なのはが存在することを除けば、確かに願いは叶ったのである。

全ては自業自得でしかない。頭では理解しつつも、果たしてあの場所で苦しみながら死ぬことと、現状の、どちらに救いがあったのだろうか。

少なくとも、今のなのはの心には、欠片の光も射し込んではいない。

「あれ、なのは……？」

急に背後から掛けられた声に、びくりと肩が震えた。その聞き覚えのある声に、思わず漏らしかけた舌打ちを飲み込むと、なのはは自然を装って立ち上がり、スカートの汚れを払い振り返る。

どこか雰囲気の違いに不安げな視線を送る女性の名前は、高町美由希。高町なのはの姉であり、正確には同じ姿、同じ経験を持つた似て非なる人物。なのはは確認するように頭の中でそれを反芻すると、訝しげな視線で美由希を見返す。

「どうしたの、こんなところに座り込んで。それにその髪……」

「人違いではありませんか？ 私はなのはと言う名前ではありませんし、貴女とも初対面の筈です」

「えっ、で、でも……」

「すみませんが、用事がありますので。失礼します」

突き放すように、有無を言わずに会話を打ち切るとなのはは再び背を向けて歩き出した。ここで逃げるように走り去ったのでは、

引き止められる可能性もある。レイジングハートが損傷している今の自分では高町美由希から逃げ切れることは困難だろう。早足にならないように心掛ける。

執務官になって公私の切り替えとして使うようになった仕事用の口調。同一人物に見られないようにするには丁度いいのかも知れない。

今のなのには何一つ無い。手持ちのお金も寝泊りするのに十分とは言いがたく、身元を保证するものが何もない以上、様々な面で不便であることは想像に難くない。

高町家の家族は、基本的に善人だ。末娘とそっくりな自分が泣きついて事情を話せば力になってくれる可能性は高い。しかし、その道を選択することは、ある意味でこの場所で生きる高町なのはを苦しめることになる。

少女の抱えるコンプレックスは、思いのほか根が深い。
未来の自分など目の上のたんこぶでしかないのだから。

「……もしもし、なのは何？」

携帯電話で本物の妹と連絡を取る美由希の声を背に、もう此処に近付かないほうがいいと考える。こんなこと、改めて考えるまでもないことなのに。

生きるためなら、大切なもののためなら、どんなことでも出来る。当ても無く彷徨うだけのなのには、生きる理由も、大切なものも、遠く離れてしまっている。

「ごめんね、お姉ちゃん」

風に掻き消された言葉は、誰にも聞こえることはなかった。
身体は、鎖を巻きつけられたように、重くなっていた。

二人の少女が夕暮れ時の街を駆けていく。路地から路地へ、時折足を縛れさせながら、前を走るもう一人の少女に肉迫する。

「こらっ！ 待ちなさいよっ！ 無視すんなーっ！」

「あ、アリサちゃん、ご近所迷惑だよ！」

息も絶え絶えで顔を怒りに染める少女の名はアリサ・バニングス。高町なのは友人の一人で、鮮やかな金髪に美少女と呼べる容姿、頭脳明晰で運動神経それなり、両親金持ちの何処に出しても恥ずかしくないお嬢様であるが、残念なことに彼女の性格は直情型の行動派であった。

お嬢様のステータス宜しくバイオリンの稽古を終え、友人の月村すずかとアリサの迎えの車に乗り、帰宅する際のこと、車の硝子越しに見覚えのある少女と擦れ違った。

少女の名前は高町なのは。友人の少なめなアリサにとっては、すずかともう一人の友人である少女、高町なのはは親友と無い胸を張って言える程、自他共に仲の良さを認めている。小動物のような可愛らしい仕草は、これまでに何度もアリサの荒んだ心を癒してくれている。

車を飛ぶように降り近寄ると、服屋の硝子を鏡代わりにして「体まで小さくなってるよ」とか「穴塞いだ分減らされたのかなあ」とか訳の分からないことをぼそぼそ呟いていた少女の姿にアリサは驚いた。

チャームポイントの二本の触覚が、なくなっている。

アリサは密かになのはの頭に生えるあれが気に入っていた。可愛い顔立ちに仕草を備えたのはだから、あの髪型が似合うのであって、例えアリサが真似た所での愛くるしさは再現できないだろう。それを切るなんてとんでもない。

だがしかし、ここで怒鳴り散らすアリサではない。乙女が髪を切ったのだ。余程のことがあったのだらうことは想像に難くない。今すべきことはなんだアリサ。断髪の原因が失恋ならば相手を八つ裂き火炙りに、それ以外なら優しい言葉と態度で傷が癒えるまで根気強く励ますべきだ。何にせよ、理由を聞かなければ。

刹那の間に思考を終わらせたアリサは、恐る恐るといった様子を隠せずになのはに声を掛けた。思えば、彼女の失敗の大半は、理性的な行動をする前にすずかに相談したり任せたりしないことにあるのではないだろうか。

「な、なのは。か、髪、どうしたの？ 誰かにやられたの？ 辛いことがあるならあたしに」

漸く現場にすずかが到着した頃には、全てが手遅れだった。珍しく不安な表情で何かを問い掛けるアリサと、髪をばつさりと切ったなのはに驚いたのも束の間、振り返ったなのはに再度驚いた。

具合でも悪いのか見るからに顔色が悪いなのはは、在ろう事か露骨に嫌そうな表情を浮かべ、数秒の間アリサの顔をまじまじと見据えてばそりと言った。

「……最悪です」と。

「人違いですので失礼します」と逃げるようにすずかに告げて走り出したなのはに、二人は半場呆然としていたが、唐突に誰かの血管が切れる音がした。俯いたままだったアリサは乱れた髪を？き揚げると出会ってから今までで一番綺麗な笑顔を浮かべながら、なのはの背中を睨み付ける。

「待てこら」

「アリサちゃん!？」

「ちょっと待てこらあああ！」

こうして追跡劇に至る。アリサは酸欠を通り越してランナーズハイに到達し、すずかはフィジカル的には余裕だったがメンタル的には限界な追いかけっこに強制参加させられていた。

先程までは。

今は一人、とぼとぼと海鳴公園へ向う道をとぼとぼと歩きながら、高町なのは（仮）を搜索している最中である。既に沈み掛けの夕日が、痛いくらいにすずかの心に染み渡っていく。

数分前のことだ。逃亡を図る少女の背に手が届くか届かないかのチャンスに喰らい付けずに盛大に転倒したアリサ。慌てて抱き起さずすずか。哀れんだような視線をアリサに送り逃亡を再開するなのは（仮）。

少女を見失ったことだけならいざ知らず、神経を逆撫でられたアリサの怒りは怒髪天を突く勢いであった。

「どっち行つたのよあの女あ！ すずかはこっち行つて！ 掴まえたら羽交い絞めにして押さえといて！」

「で、できないよ！ もうやめようよアリサちゃん！」

すずかは、これ以上あの少女を追い駆ける気はなかった。普段のなのはの様子とあの娘を比較しても、本当に人違いの可能性が高い手っ取り早く確認するために携帯電話を取り出すと、高町なのはにコールするとアリサとすずかの知る彼女の怯え混じりの声が聞こえた。

『も、もしもし、えっと……すずかちゃんもなの？』

「……………うん」

『わ、わたしは今日は帰ってからずっとお家に居て、それで、お姉ちゃんとアリサちゃんも見たって言つてて、アリサちゃん、すごい

怒ってて」

「うん、大丈夫だよ、なのはちゃん。凄く似てる人だったから、驚いて電話しちゃっただけだよ。アリサちゃんが迷惑かけてごめんね」

後半涙声のなのはを優しい声で宥めながら、すずかは考える。同一人物でないことは分かっている。しかし、どんなに似ているといつても限度がある。あの娘の顔立ちや体格、髪の色や声に至るまで、無関係というには不自然なほどに似過ぎていたことは確かだ。もしかしたら踏み込んではいけない複雑な家庭の事情があるのかも知れない。

追いかけるのは、気が進まない。そうは考えつつも、すずかの体は操られるように公園に近付いていく。何故だろうと自問自答すると、答えは直ぐに返ってきた。

匂い。咽返るような甘い匂いが、この道に残っている。

「こっち、かな。良い匂いがする」

なのはに電話を掛ける前から、アリサの目を気にする必要が無くなってから、すずかは正気でいることを止めていた。あの娘に近付いたときに感じた匂い、何処かで嗅いだことがあるようなそれは、好きな匂いでもあり、嫌いな匂いでもある。いつもなら嫌悪するのであろう赤い液体の匂い。

似ている。つい先日、家庭科の授業で高町なのはが指を針で傷付けた。本当に小さな傷だった。なのはは苦笑しながら、アリサは「馬鹿ねえ」と言いながらも可愛らしい絆創膏でなのはの手当てをしていたのを覚えている。

あの時も、こんな匂いがした。

ちよつとだけ、どんな味がするんだろうと考えて、冷静になつてから死ぬほど自己嫌悪に陥った。でも、でも、今はこの感覚に再び支配されてしまっている。

あの娘は、気だるげではあったものの怪我をしている様子が無かった。

それなのに、全身から、特にお腹と口元から、理性を奪い去るほどの血の匂いがした。

返り血とかではなくて、あの娘の血の匂い。

高町なのはの血と同じで、少しだけ違う。

勘でしかないこの認識に、すずかは絶対の自信を持っていた。追い駆けている時に感じた汗や、吐息から匂いとそれを照らし合わせ、耳に届いた呼吸のタイミングや足運びの癖などから、少し体力の付いたなのと言った考えると丁度良いのかも知れない。

理性的な面では友達の心配をしていた。あの娘はなのはと縁が深いのだろうか。大量に血液を流していた可能性がある。早く見付けてあげないといけない。

綺麗な隠れ蓑に身を隠しながら、本能的な面では理解していた。

もっと近くへ。近付けば、甘い匂いに満たされて気持ち良くなる。そうしたら、どうしよう。

本当は、分かってる。

選択肢は二つも三つも用意されていないのだから。

「みつけた」

少女の姿が見えたので、思わず身を物陰に潜めた。こちらに気付いた様子もない少女は、疲れた表情を隠すこともなく、足取りも重そうに公園に入っていく。先程とは打って変わって弱弱しい様子を見せる彼女の姿が、すずかの琴線に掠めるように触れていく。

徐に携帯を取り出し、数度の入力の後、耳元に当てる。相手はもちろんアリサ・バニングスだ。

『すずか、見付かったの?』

間髪入れずに電話に出たアリサに苦笑する。一人になって多少の冷静さを取り戻したのか、幾分落ち着いた様子のアリサ。付き合いの経験からこういう場合のアリサは半分自分の非を認めている場合が多いことをすずかは知っていた。

ゆつたりとした動作で空を見上げ、言葉を返す。

「……ううん、見付からなかった。それと、ごめんねアリサちゃん、お姉ちゃんから電話があつて、外食する用事ができたから今から迎えに来るって、うん、ううん、ごめんね。うん、また来週学校で」

だらりと携帯電話を下ろす。空に浮かび始めた満月は気のせいか吸い込まれそうなほどの輝きですずかを照らしている。

今日は本当に月が綺麗だ。

一話（後書き）

すずかさんがアップを始めたようです。

周りの人物が規格外な所為でアリサが普通の小学生女子の基準になるなんて……。

皆様の感想心よりお待ちしております。

二話

海鳴公園。昔は魔法の訓練に良く足を運んだその場所で、高町なのは泣いていた。ベンチ上に体育座りになり、声を押し殺しながら流れた涙を袖で拭う作業を、只管に繰り返す。

原因は色々ある。明日のことを考えるだけでも悲しくなり、家族のことを思い出しても憂鬱になり、二度と会えない友を想っては半泣きになり、先程追い駆けられた二人の顔を思い返して涙の堤防は決壊した。

泣けば、また少し戦えるようになる。

戦っていれば、元々いた場所に戻る。

その可能性が殆どないことを、なのはの冷静な部分は理解していた。それでも現実から目を背けなければ、心の大事な部分が壊れてしまうことを同時に理解している。故に在りもしない希望をちらつかせて、自分自身を奮い立たせるしかないのである。

既に日は落ち、長かった今日ももう終わる。

明日からは持久戦になるだろう。泣き腫らした目元をそのままに、寝床であるベンチに横になる。幸い近所のスパーから持ってきたダンボールがある。何も考えずに持って来てしまったが、取り合えずこれでいいだろう。海鳴市には悪漢から少女を守る小太刀二刀がいるらしいし、レイジングハート無しでも簡単な射撃魔法なら使うことができる。それに、他を考える余裕も気力もない。

少し早いが就寝しようと、目を瞑った時のことだった。

「なのはちゃん」

何者かの声に跳ね起きた。執務官としての経験から不測の事態にも余裕を見せたいところだが、必要以上に警戒してしまうのは現状を考えれば詮無きことだろう。思いの外、近い距離まで接近を許し

たことも理由に挙げられる。臨戦態勢で相手を見遣ると、先の逃走にて巻いた筈の少女が、柔らかな笑顔を浮かべて佇んでいた。

「……すずか？」

「わたしの名前、知ってるの？ うん、すずかだよ、なのはちゃん」

「あれだけ大きな声でお互いを呼び合っていれば、嫌でも覚えます。それと、私の名前はなのはではありません」

「……いいよ、なのはちゃんじゃなくても。ねえ、お名前教えて」

どうも、様子がおかしい。

少なくとも高町なのはのいた時間の月村すずかは、アリサを宥めていたすずかの姿や言動を見るにほぼ同じようだと感じていた。引っ込み思案で、御淑やかで、仕事で小さな怪我をしたなのはに会うと息を荒げて物陰からこちらを見詰めてくる、そんな女の子だった。アリサも同様で、なのはの知るアリサは少し恥ずかしがりやだったが、概ねやりたい放題のアリサに大きな違いはない。

しかしどうだろう、向かい合う彼女の様子は、突き放されても何処吹く風と受け流し、妖艶にも見える笑みからは十分な余裕が伺える。何はともあれ、泣き疲れて逃げる気力もない。見た目とは裏腹に、運動神経抜群な彼女に本気になられては厄介だ。至急、帰宅して貰う必要がある。

「教える必要はありません、もう二度と会うこともないでしょうから。さあ、帰っていただけませんか？」

「泣いてたの？ 眼、真っ赤だよ」

「っ、あなたには、関係のないことです」

思わぬ切り替えしに、頬が熱くなるのが分かる。管理局に入りたての頃は、良く一人で泣いていた。その前からずっと泣くときは一人で、誰にも迷惑を掛けないように気を付けていたからだ。

口元を手の甲で押さえくすくすと上品に笑う彼女の姿に、不自然さを怪しむべき理性が負け、思わず苛立ったような口調で返してしまふ。

「ねえ、どうして泣いてたの？ どこか痛いなの？」

「か、関係ないと言っています。早く、帰ってください。いい加減にしないと、私も怒ります」

「んーん、やだ。帰るなら、一緒に帰ろ？」

「……もう、勝手に言っていないさい」

私は寝るところなんですから。

言葉には出さずに、座り込んで眼を瞑る。何が面白いのか、んふふーと笑いながらご機嫌な様子の彼女は、脅威にはなるとは思えない。

飽きればそのうち立ち去るだろうと無視を決め込んでいると、スキップでもするように弾んだ足取りで近付き、なのはの隣に腰掛ける。

「ねえ」

「静かにしてください」

「……えへへ、顔赤い」

「う、うるさいです」

「……」

「……」

「……」

「……？」

唐突な沈黙を怪しんで、薄目で隣を確認すると、目を閉じてにへらと表情を崩したずかが見えた。くすぐったそうに、時折鼻の頭を人差し指で搔いている。

「……あの、何を、しているのですか？」

「……いいにおい」

「臭い？」

「うん、近くだと、ほんとにいいにおい」

我慢できずに尋ねると、思わず引くような答えが返ってくる。臭いなどと言われても、精々汗くらいしか心当たりがない。ぐりぐりと髪の毛に顔を押し付けてくるすずかを押し退けながら、なのはは考える。そう言えば、昔にもすずかがこんな感じになったことがある気がする。

確か、いつのことだっただろうか。アリサと二人で、大事な話があるからと月村邸に連行されて……。

「お腹」

「はい？」

「お腹、怪我してない？」

一瞬、鼓動が高まる。どうしてそれをと口に出しかけて、思い出す。

連行された月村邸で決死の形相のすずかに、何だか血を定期的に取り込まないと具合が悪くなる特殊な体質であることを説明された。隠さなければならぬことだが、友達に正体を偽ることに良心の呵責を感じていたらしい。その時はアリサが泣きながら抱擁を交わしていたので空気を読んでそれに習ったが、正直クローンやらフェレットやら使い魔やらプログラムの知り合いには事欠かなかった。最終的にアリサと「すずかはすずか」と言う結論で締めくくった。

その後、悪乗りに加えてすずかの正体に嫌悪感を持っていないこと示すために、血を吸ってもらったがことがある。

今のすずかはその状態に良く似ていた。

自分自身では怪我也消え、良く分からないが、腹に穴が開いて血塗れで這い回っていたときの残り香か何かは残っていて、それに反応してしまい今の状態になったと考えられる。

吸い終わり、欲望に負けてしまったと後悔していたはずかを思い出す。自分には、ずかの気持ちの一割も理解できない。所詮は他人、理解できる筈もない。それでも、正常な思考を失うほど血液を求めているのに、それをしたくない彼女の気持ちを尊いと思うし、理解したいとも思う。

今こうして会話を交わしてられるのも、友人である高町なのはと似た少女を氣遣つての思いがあればこそ。

明日からのことを考え、人恋しさを覚えていたのもあるが、本当に良い子なんだと改めて思い、涙腺が緩む。彼女は、怪我をしているのかも心配して声を掛けてくれたのに、邪険に扱ってしまった。高町なのはと関連がある人間とは、冷たく接しようと考えたからだ。その気持ちに偽りは無い。異物である自分が、なのはに取って代わって良い訳がない。

それでも、自分がずかに対して取った態度は恥ずべき行動だとそう思う。

穏便に、安心して彼女には帰宅して貰いたい。彼女がこうなってしまったのは、間違いなくなのはに責任がある。家族も心配しているだろうし、そう考えると益々申し訳ない思いが込み上げてくる。

だから、偽者でしかない『高町なのは』ができる最大限の笑顔で、ずかにお言おう。

心配ないよと、だから今日のことは忘れて欲しいと。本能に耐えて、打ち勝ったずかには敬意すら覚える。

なのはは出来る限りの笑みを浮かべようとしたが、先程まで泣き腫らして疲れきった表情筋は、微笑を形作るに留まった。

「ごめんなさい。貴女のこと、誤解していました。その、心配してくれていたのですね」

初めてのなのはからの好意的なりアクションに、すずかは身を乗り出してなのはの言の続きを待つ。

罪悪感から、少しでもすずかの不安を拭い去る方法はないかと考えたなのはは、はっと思い付いた。

徐に上着の裾に手を掛け、胸元の下まで一気に捲り上げると、すずかに向けて言い放った。

「ご覧の通り、傷一つありません。どうか、私のことは気にせず……」

視点が、唐突に回転するのが、ゆっくりと理解できた。視界いっぱい広がる夜空には、満月の強い光に負けないように、小さな星々が世話しなく瞬いている。

後頭部をベンチに強かに打ち付け、起き上がるのも億劫だとばかりに脱力して、なのはは考える。

太陽の光は、強過ぎて疲れてしまう。月の光は、臆気で不安な気分させられる。

やっぱり私は、無数にあって、必死に自己主張するように瞬く、小さな星の光が好ましいと思う。

平凡で弱虫なのに、誰かに必要とされたくて足掻き続ける、そんな自分に、少しだけ似ているような気がするから。

なのはを押し倒し、剥き出しのお腹に抱き付きながら「ごめんなさい」を繰り返すすずかの髪をそっと撫でる。彼女の息は、獣のように荒い。これから味わう獲物を前にして舌舐めずりをしているように、謝りながらも彼女の瞳はぎらぎらした光を灯し、こちらの瞳をじっと見据えている。

世界はいつだって、こんな筈じゃなかったことばかり。

そんな言葉を最初に言い始めた奴を、無性にぼこぼこにしてやりたい気分だ。

お腹から胸元へ、徐々に這い上がってくる少女の指先を感じながら、なのははそんなことを考えずにはいられなかった。

何故、こんなことになってしまったのか。

そう考えているのは、組み伏せられた少女だけではなく、組み伏せている少女も同様のことを考えていた。

月村すずかの一族は所謂吸血鬼の一族である。夜の一族と呼ばれる者たちは、容姿、頭脳、運動神経に優れ、特殊な力を持つ代わりに、生きるために人間の血液を必要とする。

すずかにとって己の体質は病気であり、血液は薬のようなものだった。定期的に摂取する必要があるそれを怠れば、忽ち我が身を蝕んでいく。本来であれば、異性の血液を摂取するのが好ましいと姉は言っていたが、すずかには知らない異性の血を啜るのはどうしても気持ちが悪く感じてしまう。

そのため、すずかは今まで女性の血液しか飲んでこなかった。

だからだろうか、わたしはこんなことをしてしまっている。

こんなことをしてしまっている自分を、心の何処かで嬉しく思う。

「あー、あつ、あ……」

惚けたように口を開き、組み伏せた少女の首筋を甘噛みし続ける。悲鳴一つ上げない少女は口を一文字に結んで、母親が子供をあやす様にすずかの髪の毛を梳いてくれていた。安心させるように、何でも知っていて、それでも受け入れてくれてるかのよう。それが、余計にすずかの琴線を掻き乱す。

首に舌を這わせると、少女の体がびくりと震えた。噛むことはできない。それをすれば、自分が人間でないことを認めてしまうようで、怖かった。これから一生付き合っていく体質に、負け続けるの

だと思えると、怖くて堪らない。

だからこうして、中途半端に欲求を解消して、誰かが自分を止めてくれるのを待っている。

少女が、拒絶してくれることを、待っている。

「……まるで、赤ちゃんみたいですね」

「ごめんなさい、ごめんなさいっ、んっ」

息継ぎをするように、肌に吸い付く。既に赤い跡が点々と刻まれている。

少女は飽きたように言いながらも、突き飛ばすこともせず、すずかの行為を受け止めていた。突き離して欲しいと、そう思う。しかし、髪を梳いてくれる手を、同時に心地良く思ってしまう。

「いいえ、原因は私にあるのです。あなたは、何も悪くありません」

「違うよ、わたしが……こんな体だからっ」

「ええ、わかります。お互いに、タイミングが悪かったのでしょうかね」

暖簾に腕押しとばかりに、すずかの言葉をひらりと交わし続ける少女。高町なのはと言葉遣いも雰囲気も違うが、時折合わさる憂いを帯びた視線が、何より少女が別人であることをすずかに教えてくれる。

永遠に続くと思われた時間に変化が見えたのは、その数秒後のことだった。

呼吸のために少女の肌から口を離すと、後頭部に圧力を感じた。少女の手のひらが、自分の頭を押しているのが分かる。焦ったすずかが少女に視線を送ると、少女は柔らかな笑みですずかを見詰めていた。

「せめてものお詫びです。どうか、受け取ってください」
「えっ！？ あっ、んっ」

驚きの声を上げる前に、半開きだった口が、少女の首筋に無理やり押し当てられた。尖った犬歯の先が肌に触れると、漸くすずかは少女の言葉を理解して、声にならない悲鳴を上げた。血を吸われるということは、搾取されると言うことだ。誰だって、恐怖や嫌悪を覚えるに違いない。

すずか自身、逆の立場なら冷静ではいられない。見ず知らずの、それも襲い掛かってきた吸血鬼に血を与えることなど出来はしない。眼球だけを動かして、必死に少女の顔を視界に映そうとするも、出来るはずもなく押し当てる力が強くなっていく。

本当なら、拒むことも出来る。すずかにはそれだけの力があるのに、今は、力が入らない。

どこかで、期待している自分が、拒む力を奪っていく。

遂に犬歯が肌を引き裂き、ほんの少しの血液が口内に流れると、全身が震えた。気が狂うほどの歓喜を与えてくれる、脈打つその刺激に、すずかの意識は完全に本能の中に埋没していった。自らの意志で牙を深く刺し込み、強請るように首を振って傷口を広げ、溢れる血液を吸出していく。

「すずか、おいしい？」

子供のような口調の問い掛けに、誰に聞かれたのかも分からずに狂ったように頷くと「よかった」と再び声が返ってきた。こんな仕打ちを受けて尚髪を梳いてくれる温かな手の感触と、遠くに聞こえる姉の悲痛な叫び声を最後に、すずかの記憶はぷつりと途切れたのだった。

あの後、疲労に出血の連動攻撃を喰らって意識を失ったのはだったが、起床すると其処は何処かのお屋敷の寝室のようだった。良く見ると、すずかの家の雰囲気は何となく似ている。加えて夥しい数の猫が、なのはが起きることで出来たベッドの空間を塞いだ。ここは恐らくすずかの家だ。

我が物顔で一塊になって眠る猫達を眺めながら、人肌が恋しい年頃なのだろうと考えていると、侍女さんが迎えに来た。すずかの家以外だったら、逆に怖い。

侍女さんことノエル・エアリヒカイトとの問答もなく、促されるままに通されたサンルームで、出された紅茶を啜る。朝日を受けながら優雅に紅茶を嗜む姿は一見様になっているように見えるが、なのは自身は緑茶派であり、紅茶は名前も味も興味がなく、作法も腹芸の一つとして覚えたに過ぎない。

興味はなくとも、美味しい物の良し悪しは分かる。ブルジョアは毎朝こんなものを飲んでいるのかと、起き抜けの思考を駈らしていると、テーブルの向かいで咳払いが聞こえた。

「随分と、手馴れているのね。貴女くらいの子供は、紅茶なんて出されたら大抵戸惑うものよ?」

「実家が喫茶店を営んでいるので、嗜む程度には」

飽きたような口調で言葉を発した人物、名前を月村忍。月村すずかの姉にして、すずかを全体的に大人にして、相応な落ち着きとサデステイックな威圧感を纏わせると彼女のようになる。備考として、高町なのはの兄、高町恭也の恋人。今のなのはにとっては、厄介な存在。

しかし、対峙した忍はどこか申し訳なさ気な表情で、少しばかり拍子抜けしてしまう。何かされたらどうかと思いつきながら、差し込む日差しのもりにつとつとと船を漕いでいると、忍に指示され

ただろつノエルが控えめに袖を引いて起こしてくれる。

「昨日は、すずかのことと迷惑を掛けたわね。姉として、謝罪するわ」

「……？ ああ、そのことでしたか。すずかにも伝えましたが、構いません。非は私にあり、生肉を巻いて虎の檻に入った私が、浅はかだったのでしょうね」

「虎、ね。確かに、貴女から見たら獣も吸血鬼も大して変わらないのかも知れないわ」

皮肉交じりに返答すると、紅茶を口に含み、喉を潤す。非は自分にあると感じてはいるが、すずかの勢いには、ほんのちよつとだけ引いてしまった。意趣返しのもりの冗談だったが、むつとした表情を見せた忍とノエルに気付き、内心で慌てて付け加える。

「失言でした。誤解しないで頂きたいことは、彼女に血を吸われることに嫌悪感はありません。気に障ったのでしたら謝ります」

「……いいのよ、私が大人気なかつたわ。それはそうとおかわりはいかがかしら、なのはちゃん？」

十分大人気ないなこの人。思わず、素の言葉が頭を過ぎつたが、はふうと一息吐いて、僅かに残つた紅茶を啜る。

月村忍は、このような駆け引きに強い女だ。なのはとて、弱い訳ではないが経験値の差でどうしてもこちらの分が悪くなる。勝機が在るとすれば、彼女はこちらを『高町なのは』だと確信し、舐めきっていること。

「頂きます」

「あら、私には否定しないのね」

「貧乏性なので。貰える物は何でも貰います。病気以外は」

「……そう。なら、こちらもお返しするわ。昨日の晩、寝かせるのに邪魔になると思って預かったものよ」

ノエルを経由して紅茶のおかわりと一緒に運ばれてきたものは、なのはの携帯電話。ロックは掛けているが、その分野ではエキスパートな彼女ならば、恐らく中身は見られているのだろう。だからこそ、開き直ることも出来ると言うもの。

「携帯電話を盗み見るような女性は、男性に嫌われますよ」

「貴女の家族に連絡を取ろうと思ったの。すずかを探すときに、高町のお家には電話したのよ。そのときに、もう一人のなのはちゃん、アリサちゃんから、貴女のことを聞いたの。信じてもらえるか分からないけれど、アドレス帳しか見ていないわ」

「……そうですか。画像フォルダは、見ていませんか？」

「なあに、恥かしい写真でも入ってるの？」

「……ええ、まあ、人並みには」

「ふふ、最近の子は進んでるのね。安心して、すずかに誓って見ていないわ」

誰にとって恥かしいかは知らないが。

妖艶な笑みを浮かべて、子供をからかう様に言う忍の様子に、なのはは心の中で「ああ、これは本当に見ていないな」と確信しながら、話題を変えるために態とらしく待ち受け画面を見せる。女友達だけで撮った集合写真が待ち受けに設定してあるが、すずかとアリサ以外の娘は、忍には誰か分かりはしないだろう。

「……時計が狂ってますね」

「ええ、ついでに西暦もおかしなことになっているわね。見たことのない機種のようにだし。ねえ、聞きたいことがあるのだけれど、三年後の私は変わりなかったかしら？」

「三年もあれば、それなりに変わりますよ。色々」と

彼女の明晰な頭脳は、ある程度こちらの正体に当たりを付けている可能性がある。寧ろ、勝算しかないからこそその余裕なのだろう。この程度の譲歩は已むを得ないかと考え、また一口紅茶を口に含んだ。ブルジョワに対する怒りが一層募る。気合を入れ直したなのは、再び戦端を開くべく、言葉を発した。

「来月頃に、海鳴市を中心として、地球は滅亡の危機を迎えます」「地球滅亡つて、随分と大きく出たわね。差し詰めなのはちゃんは、悲惨な未来を変えにきたターミネーターってところね。私に何かできることはあるかしら？」

殲滅者。言い得て妙だと思う。その名を名乗っていたなのはそっくりな彼女は、思い返せばこの世界の高町なのは良く似ていた。明るくて力強い、一番星のような女の子だった。

忍は口調こそ冗談めかしてはいるものの、眼光が尋常ではない。携帯電話と容姿だけでは、此処まで信じられるに値しないことを、なのはは知っている。眠っている間に精密検査でもされたのだろうか、或いは変なところでお人よしな面が、無条件で未来のなのはを同情し、信じているのか。

何にせよ、話が早い。

「……いいえ、現地の魔法少女が勝手に何とかしてくれます。貴女が何かする必要はありません」

「……タイムマシンとか、超能力なら兎も角、魔法少女は予想してなかったわ」

「私にとっては前の二つが眉唾物だと思いますが。話を戻します。危機に対して対抗できる人間は、非常に限られていますので、任せる他にありません」

「『なのはちゃん』と貴女だけってこと？」

忍の問い掛けに、数年前の記憶を思い出す。高町なのはは、家族を、今までの生活を、これからの日常を守るために戦った。戦うことは、好きではない。脅えながら、泣きながら、見つとも無く抗うことしか出来なかったが、それでも後悔しかなかった訳ではない。掛け替えのない友は、戦う力を得なければ、出来なかっただろうか。

誰かの役に立てる。この街で、たった独り、高町なのはだけが、本来なら一生花開くことなかった魔法の才能を開花させ、全力全開で、必要としてもらえる。プレッシャーは子供だったなのはの心を押し潰さんばかりであったが、それ以上に、確かな喜びを感じていた。

歪んでいることは、自覚している。それでも、高町なのはにとって、命を賭けても良いくらい大事なこと。

だからこそ、不安な表情で問い掛ける月村忍に、胸を張って、堂々と、答えることが出来る。

「違います。この世界の『高町なのは』、ただ一人です」

「そんなんっ、なら、貴女は……」

「私は、完全な事故でこの時間にいます。見て分かるものでもないのですが、時間移動の際にリンカーコアと呼ばれる魔力を精製する器官に傷を負い、魔法は使えても、まとも戦える状態ではありません」

「……そう、なの。ごめんなさいね、貴女の気持ちも考えずに」「構いません。出来る限り、協力するつもりでいます。それに、そのために頼みたいことがありますし……」

そう一言告げ、弱気になった彼女に、頼る相手がいないことから屋敷に匿って欲しいことと、元の世界に返れる可能性があるので、

高町の家に関することを知らせないで欲しい旨を切り出すと、すずかのこともありあっさりとした承を貰えた。

本当は、万に一つの帰還の可能性はない。

本当は、リンカーコアも負傷していない。

レイジングハートがオートリペアから復帰すれば、直ぐにでも戦える。

けれど、『高町なのは』のためにも、それだけは出来ない。

かと言って、完全に放置も出来ない。ジュエルシールドは、必ず一つは手に入れて、色々試してみる必要がある。

もしかしたら、帰れるかも知れない。

そう考えなければ、今すぐに、死にたくなってしまふから。

その後の遣り取りは、緊張感を欠いたものだった。魔法見せてとせがまれるままに射撃魔法を高そうな花瓶にぶちかましたり、すずかによって月村家吸血鬼の秘密暴露会があったことや、ジュエルシールドの特徴と危険性や魔法の原理、自分が現状に至った経緯について話していると日が高く昇っていた。

幸い休日で、すずかも昨夜の疲れから未だに眠っていると聞き、なのはも疲れが残っていることから一眠りすると断り、サンルームを後にしようとする。

扉の取っ手に手を掛け、そこでふと、思い出して足を止め、月村忍を振り返る。もう一押し必要かも。彼女に見放されれば、明日からの生活に関わる。アドバンテージを、最後に取り返すのも悪くない。

「どうかしたの、なのはちゃん？」

「……そう言えば、月村邸に滞在させて貰うのに、お礼を忘れていました」

「いいのよ、そんなこと。すずかのお詫びも含めてのことだから」

「いいえ、さすがのことは私が悪いのですから。そうは言っても、手持ちがありませんので……」

手のひらを立てて振り、要らない要らないと可愛らしくアピールする忍に、一歩一歩近付きながら、携帯電話を取り出し、手早く操作して、待ち受けを変更する。

この頃は、割と幸せだった。父も母も、本当に涙を流して喜んでた。ぎくしゃくした家族関係だったけれど、二度と会えない状況になって、両親には申し訳なく思う。私ならやれると、大丈夫だから、子供扱いしないでと啖呵を切った自分が、情けない。

携帯を写真立てのように忍の前に置き、何これとアホの子のように首を傾げる彼女に微笑みながら、再び出口に向って、近づいた時よりもゆっくと、歩いていく。やがて、待ち受けの内容を理解した忍が、携帯を鷲掴みにしてわなわなと震え出す。

「えっ!?! ちょっと、な、なのはちゃんこれ、あれっ、うそ、けっ、けっ、けっこ!?!」

こんなに狼狽した忍を、なのはは初めて見る。久方振りに子供のように笑いながら、なのはドアに手を掛けて、顔を真っ赤にして頭から湯気を立てる忍と、携帯のディスプレイを覗いて固まってしまったノエルを振り返って言った

「言ったでしょう。三年あれば、って。気にはなっていました、が、やっぱりなのはが二人いては紛らわしいでしょうから、そうですね……」

これからは、シュテルと、そう呼んでください。

この名前は、かつて戦った高町なのはの写し身の名前。自分を模倣した存在、はやては劣化コピーなどと呼んでいたが、高町なのは

を模して作られた存在は、なのはのにとって理想の姿に限りなく近かった。

全力全開で戦って、私は負けちゃったけど、すごく楽しかったよ。また、しようね。

僅差で競り勝ち、彼女が消える間際まで、彼女はそう言って微笑んでいた。彼女のように、少しでもなれたらいい、そう想い名前を借りることにする。

最も、今の忍に聞こえているかは定かではないのが。

「それでは、さらばです……忍義姉さん」

返事を聞くことなく、扉を閉じた。

恭也と忍の結婚式は、極少数の身内だけで教会を借りて行われた。わいわい騒がしい雑多な人間を集めた結婚式よりも、二人の新たな門出を誓うだけの式は、なのはのにとって好ましかった。憤ましかかと言っても、その後はバニングス家や高町家のごり押しでウェディングドレスもケーキも食事も豪華絢爛そのものだったが、正装した兄と義姉、二人に抱かれた新たな命が、とても神秘的に見えて、趣味のカメラに、携帯にと写真に収めまくったのは、良い思い出だ。

この世界も同様になるかは分からないが、「出来婚かぁ……そっかぁ……」とにやにやしながら悶えていた忍を見る限り、時期は早まるかも知れない。

早まった、かな。色んな意味で。

まあ、被害の大半は兄に行くのだから、いいか。

抜けた血を取り戻すべく、猫ベッドに飛び込んだのはは、ぼんやりとそう考え、眠りに着くのだった。

二話（後書き）

第二話がこんな感じになったのも、全部アリサ・バニングスって奴の仕業なんだ。

ごめんなさい、嘔吐しました。多分すずかさんの所為です

誤字はきつとあるので、後から修正します。皆様の感想心よりお待ちしております。

三話

その日、月村すずかが起床すると休日が一日減っていた。

頗る調子の良い体調とは裏腹に、精神は昂揚し切った状態から急にブレーカーを落されたかのように疲れが残っている。

すずか付きの侍女、ファリンに手を引かれ洗面所までよろよろと赴く道すがら、昨日、正確には一昨日に何があったのか思い出そうとするも、覚醒しきっていない頭ではどうにも上手くいかない。

歯磨き粉の付いた歯ブラシを口に突っ込み、覚束無い動作で歯を磨き終える。

いつ切ったのだろうか、犬歯辺りの唇が傷ついていて、僅かな痛みを訴える。寝惚け眼でコップを探し手を伸ばすと、誰かの手によって既に水の入ったコップが手渡された。

「おはよう。いつも、このくらいの時間に起きるの？」

「あ、ありがとう。ううん、今日は偶々遅かっただけで……」

聞き覚えのある声に思わず言葉を返したが、ファリンとは先程分かれ、姉の起きる時間はもっと早い。自分以外にこの場を訪れる人物は居ない筈だった。

ぱつと隣を見ると、さも当然とばかりに黒地にシンプルなデザインの寝巻きに身を包んだ少女が、歯ブラシを動かしながら「どうでした？」とばかりに、すずかに怪訝そうな眼差しを送っている。既にシャワーを浴びたのか、肩にはタオルが掛けられ、しっとりとした水を帯びた髪の毛からはすずかの使っているシャンプーと同じ香りがした。

「え……え？」と口をぱくぱくと開いたり閉じたりしているすずかを横目に見ながら口を濯いだ少女は、すずかの様子に首を傾げる。

傾げた首には、点々とした赤い痕と可愛らしい絆創膏が貼られており、自身の行為が夢の類では無く、現実の行為であったことの証拠として残っていた。

どうして此処に、いや、まずは謝らないと。そんなことを考えながらも、自身の刻んだ生々しい情欲の痕跡に顔を赤らめずか。何も出来ずに沈黙すること数秒後、少女が合点がいったとばかりにぼんと手を打った。

「あ、話し方、変、かな？　ずっとお仕事の喋り方だと、疲れちゃうから……」

「え、ち、違うよ。変じゃないよ！　ただ、その、首の、それ、ごめんなさいっ！」

「うん、気にしないで。痛みもないし……ほら、全然平気」

そう言って、貼ったばかりであろう絆創膏を剥がすと、うつすらと瘡蓋の痕があるだけで表面上は痛々しいようには見えない。しかし、吸血鬼の噛んだ二つの傷痕は、他の吸い付いた赤い痕に比べて明らかに目立つ。元々、それを隠すために貼っていたのだろう。

落ち着きのある、小さな子供を安心させるような微笑で、さすがに「ね？」と問い掛ける少女。先日のを寄せ付けられない威圧的な雰囲気と、壁を感じさせる喋り方がまるで嘘のように、口調も物腰も柔らかく、今の少女の姿からは改めて高町なのは印象を強く感じています。

少女が髪を乾かし終え、さすがの緊張が解れた頃、冷静になっただろうかと思っ。

どうして、この子は平然としていられるんだろう。

普通に考えても、さすがのした行為は消し去ることの出来ないトラウマを相手に植え付けてしまうのではないだろうか。少女の様子を見る限り、姉の月村忍によって記憶の改竄を受けたようにも思えない。

すずかを恐れることなく、自然体な少女。秘密も何もかも初めから知っていて、旧知の友とでも一緒に居るように、不快にならない距離感を保っている。

「あの、私のこと、知ってます？」

「今は、同じ年だから、普通に話してくれたら嬉しい。うん、ちょっとだけ知ってる。生きるために、血が必要なことと、ちよっぴり力持ちなこと」

「だったら、どうして……気持ち悪い、よね？」

偽りのない自分の本心。秘密を知られることを恐れる自分、秘密を隠して友達と接するのを嫌悪する自分、全てを打ち明けてこの悩みから抜け出したい自分。

受け入れて貰えれば、それが最良の結果であり、いつそのこと拒絶して貰えれば、それはそれで諦めがつくのではないだろうか。いつか拒絶されるなら、何れ独りになる定めなら、友達二人の好意に甘えていられる時間が、長ければ長いほど別れは辛くなる。

だからこそ、友達に良く似ている、見ず知らずの少女に、聞いて見たかった。こんな歪な自分を、どんな風に思っているのか。

沈黙が痛かった。目をきゅっと瞑り不安に体が震える。あの夜と同じように、返事を待つすずかの髪に、そっと少女の手が触れた。

「気持ち悪くない、って言っても、きつと信じて貰えないと思う。

私はすずかのことを知ってるけど、すずかは、私のこと、何も知らないから」

「それは……」

「だから、知って欲しい。全部は話せないけれど……」

すずかの不安が、少しでも減るように。

桜色の光。少女の人差し指に温かな光が灯り、ゆっくりとすずか

の唇をなぞる。初めは、手品か何かだと思った。何をされたのだろうと、指の離れた場所を確かめると、自らの牙で傷つけた唇から、痛みも痕跡も感じない。

「私ね。これでも昔は、魔法少女だったんだよ？」

「回復は、あんまり得意じゃないんだけどね」と苦笑して呟く少女の指と顔を、すずかの視線が行ったり来たりしていると、ファリンが朝食の用意が出来たことを知らせにやってきた。直ぐに行きますと素っ気無く応えたのはやはり少女で、鉄面皮に覆われた表情を見ていると、今までの遣り取りも全て夢だったのではないかと思ってしまう。

「ご案内しますねー」とファリンに無理やり手を引かれて行く少女。抵抗しながらも振り返った表情は相変わらずの無表情であったが、すずかにはどこか嬉しそうに見えた。

少女がシュテルと名乗り、これから暫くの間月村邸に滞在することをすずかが知るのには、これから数分後の出来事である。

時刻は既に登校時間、アリサ・バニングスの機嫌は頗る悪かった。本日は月曜日、先週末のこともあり休日の間、月村すずかに連絡するも何故か繋がらない。日曜日のお昼頃になって繋がったと思いきや、受話器越しの相手からは無言のプレッシャー。

「……もしもし、すずか？」

「……」

「ちよっと、何とか言いなさいよ」

「……」

電話に出た以上、誰かはいる。引いたら負けだと思ったアリサは、無言の何者かに十分ばかりの間罵倒を浴びせていたのだが、途中で扉の開く音と「な、何してるのシユテルちゃん？　そ、それ、私の電話だよ？　え、しーって……？　……っ！　だ、誰かとお話してるの！？　ねえ、誰とお話してるの！？　も、もしかしてアリサちゃ……どうして逃げるの！？　待ってよシユテルちゃん！　シユテルちゃああんっ！？」とすずかの声が聞こえ、揉み合う音と共に電話は切断された。

数分後、すずかから謝罪のメールを受信する。内容は、土曜日は携帯を忘れたまま家族と出かけていたこと、朝から緊急の家族会議があつて今日もちよつと忙しいとのこと、先の電話は猫のシユテルちゃんが悪戯して通話ボタンを押してしまったこと。

信じてもいいが、アリサが受話器越しに感じたこちらを小馬鹿にしたような気配は、絶対に猫のものではない。そもそも猫は電話を啞えて走らないし、「はあ……」などと露骨に飽きたような溜め息は吐かない。

強いて言うほど何かをされた訳でもないが、無性に腹が立った。偽なのは事件が尾を引いていることも、腹の立った要因の一つに数えられる。何より腹が立つのは、親友のすずかがアリサに何か、と言つか誰かを隠していることだ。

人間である以上、隠し事の一つや二つ、もつと沢山あるだろう。それにしても杜撰な誤魔化し方じゃないだろうか。誤魔化されると思っていたのだろうか。すずかは少なくとも、もつと聡明な娘だ。しかし、彼女はちよつとだけ、本当にちよつとだけ他人に流され易い。誰かに入れ知恵された形跡がある。

別に、他の友達と遊んでいたからといって、アリサは不機嫌になどならない、ほんの少ししか。

正体不明のもやもやを抱えながらも、翌朝のバスですずかを問い質すことはしなかった。アリサは大人な女の子。容易く感情を表に出したりなどしないのだ。

すずかも内心気まずいのか、なのは、アリサ、すずかと仲良し三人でバスに揺られる間も、沈黙の時間が続く。すずかは時折なのは様子をじっと見詰めて、感心したような仕草を見せていた。

先週末のことを思えば、無理もないことだとアリサは憐憫を含んだ視線を二人に送る。

「え、と。二人とも、休みの間は何してたの？」

痛みすら感じるギスギスとした空気を変えようと、高町なのはが戦場に斬り込んだ。内容もアリサにとって都合が良い。アリサは二人の間に挟まってちっちゃくなくなっていたなのはの腕を、思わず優しく抱いた。アリサの無言の応援を感じ取ったなのはの顔も綻ぶ。

「私はね、お母さんと一緒にお菓子作ったんだ。上手に出来たら二人にも味見して欲しいな」

ああ、これで良い。高町なのはは、これが正解なんだ。

先週末に歪められてしまったなのはの姿が、真のなの是由って浄化されていくようだった。因みにアリサの日曜日は、疑惑のすずか事件後はなのはと電話したりメールしたり遊んだりして過ごした。すずか分こそ足りなかったが、非常に満足のいく、幸せな休日だった。

天使のようななのはの笑顔に感動したアリサは気恥ずかしさから俯いたまま、肌触りの良いなのはの手をそっと握った。「良く分からないけど、アリサちゃん喜んでるからいいか」とばかりに、首を傾げながら微笑んで、アリサの手を握り返してくれるなのは。

アリサは何故か、自分の心の汚さを垣間見たような気がした。

「ずっと、そのままなのはでいてね」

「……？ うんっ！」

同じ人間とは思えないわ、この娘は。

アリサはなのはをかいぐりかいぐりしながらすすかを見ると、すすかは何処か遠い表情をしていた。なのはの可愛さに中てられたのだろうか。

テンシヨンと機嫌を大きく回復させたアリサは、「すすかは？

何で家族会議なんてしてたの」と出来るだけ自然を装って聞いてみることにした。案の定「家族会議……？」と興味を示してきたなのはを味方に付ける。

酷く狼狽するかと思われたすすかだが、若干落ち込んだ様子で口を開く。

「親戚の子が、家に住むことになって……」

「親戚って、どんな子なのよ」

「え、あ、うん、ふ、不思議な娘かな。私と同年なんだけど、大人っぽくて、お姉ちゃん、はしゃいじゃって……」

「溺愛しちゃって……」と続けるすすかの言葉に、若干棒読みながらも言い知れぬ説得力を感じる。確かに姉の忍の雰囲気から考えると、親戚の娘とは言え猫可愛がりするのは珍しいような印象を受ける。

と言うか、こいつだろ。電話に出たの。

追求はしないが、すすかの様子から相当厄介な人物であることが伺える。寧ろその子を庇って誤魔化していたのなら、すすかを責めるのも酷な話だろう。

性格悪し、と心のノートに書き留めるとアリサは現実逃避の為になのは分を補給する。すすかが話を終えれば、アリサの番だ。

日曜日こそなのはと遊んだが、すすかが居ない時に遊んだ話を「いやー、あれは楽しかったわー」などと楽しげに話せる訳もない。

なのはだっけ空気を讀んだのか天然だったのか知らないが、それを

避けて話をしたのだ。二度言おう、出来る訳がない。

しかし、アリサは土曜日は日がな一日中ごろごろして過ごしていた。

捏造することは簡単だが、二人に申し訳ないような気がするし、かと言って正直に言うのは恥かしい。

迷いに迷った挙句、結局アリサは、己の恥を晒すことでその場を乗り切った。

「ごめんね、アリサちゃん。朝言った子、急な話だったから、色々必要なもの足りなくて、その、ごめんね」

「私も、今日はお店手伝うってお母さんと約束してて……アリサちゃん、ごめんね」

放課後になって偶々習い事や塾がなかったアリサは、すずかとなのはを誘って遊びに繰り出すつもりでいた。しかしながら、最近運勢急降下中のアリサの願いが届くことはなく、焦り焦りと言った様子で謝るすずかと、どんな約束でも、自分で交わした約束を違える気はないと武士道宛らの鋼のメンタルを持つなのはの前に轟沈したのであった。

「いいのよ、気にしなくて」と、表面上誘いを断られても大して気にしないクールな女を気取って見てはいるものの、内心では体育座りで「あたしは嫌われてない、あたしは嫌われてない」と自己暗示を掛けるくらいには深い傷を負っていた。

最初こそプライドが勝って気取っていたが、いざ帰る段階になつて形振り構っていらなくなる。

格好悪くても、ここはどちらかに食い下がるべきだ。

アリサの心の闇が、そう囁いた。賛成多数で脳内会議を即座に締めくくると、その方向で思考を働かせる。なのはは、無理だ。手伝

いをしているなのは所に「あ、あたしも手伝ってあげるわよっ！」と訪問するのはあまりに不自然。その作戦に成功している自分が想像できない。

となれば、必然的にターゲットはずかに絞られる。

アリサの怪しげな視線がはずかを捕らえた瞬間、勘の良さ故かはずかの体がぴきりと強張った。ああ、あれは脳内会議を開いている時の表情だ。

「ねえ、はずか。あ、あたしも……」

「ひ、人見知り！ その娘、人見知りするから！ ま、また明日ね！」

体育の時は手を抜いていることを薄々感づいていたアリサとなのはだったが、その時のはずかのスピードは尋常ではなかった。ぽつんと取り残された二人は、黙ってはずかの去った後を眺めていた。

「女の子走りって、あんなに早いなだね」

「……そーね。何よ、もう、ぐすっ」

本当に体育座りでの字を書き始めたアリサに、なのはが話し掛けるも、心の折れたアリサにはどんな言葉も涙目を助長する要因でしかないのだった。

なのはは苦笑すると、不貞腐れて「あんたもあたしを置いて行けばいいんだわ」と訴えるアリサの視線を受け止めて、隣にしゃがんだ。大好きなのはにすら、僅かな敵意の籠った雰囲気発するアリサも何のその。朝とは逆に、アリサの頭をかいぐりかいぐりする。

「……今日はお店忙しいかも知れないから、誰かに手伝って欲しいなあ」

「……っ！」

「誰かいないかな、アリサちゃん？」

見えなかった筈の未来が、見えた気がした。

子供のようにぱつと顔を上げたアリサをなのはは、ふわふわの笑顔で迎え入れてくれる。頬に触れる温かな手を取ると、なのははただ「うん」と頷いてくれた。

アリサは、黙ってなのはに抱き付いて、泣いた。

校門前で人目も憚らずになのはの腕の中で泣いていたアリサは、暫くの間これをネタにからかわれることになるが、アリサは何故か満更でもない様子で受け流していたと言う。

すずかは隣を歩く少女と、先程別れた友人の高町なのはを比べていた。

今の少女の姿は伊達眼鏡を掛け、すずかがいつか挑戦しようと思つてクローゼットの奥に閉まっておいたちよつとボーイッシュなパンスルツクを着こなしている。少なくとも、なのはがこの格好をしていても、恥かしかつてもじもじとして動けずにいると思う。すずかでも、多分そうなる。

しかし、中身は全然違うのかと聞かれれば、ふとした瞬間に見せる細かな仕草は、高町なのはと類似している部分はあると思う。無意識だと思うが、昨日一日を通して、独りでいるのを怖がるようなそんな様子を見て取ることもあった。

シユテルと名乗った少女のことを、あまり多く知っている訳ではない。

少し先の時間から事故で戻ってきた高町なのはであること。

戻る前と後では、完全に同じ世界ではないこと。

魔法が使えること。

使えるようになった切欠は、もう直ぐに起きる魔法の宝石による

事件であること。

「本当に、なのはちゃんじゃなきゃ、駄目なの？」

「ええ。自慢になります、高町なのはは桁違いの魔力を持っています。遠目に見る限り、この世界でも同じのようです」

「……シユテルちゃん、その喋り方やめようよ」

「……知らない人が多い場所だと、少し恥かしいです」

僅かに頬を染め、そっぽを向いてしまったシユテルにすずかは苦笑する。恥ずかしがりやは人に言えた義理ではないが、やっぱり似ている部分も多いなあと考えてしまう。

すずかは出来ることなら、シユテルと仲良くなりたい。

何れは元の時間に戻ることは分かっている。それでも、例え僅かな間だとしても、吸血鬼としての自分を受け止めてくれた彼女の力になりたい。

シユテルの世界のすずかは、勇気を出して全てを告白した、らしい。自分の未来に嫉妬をせずにはいられない。あっけらかんと「吸いたいときは我慢しないで言ってください」と告げたシユテルの様子に、距離感を計り兼ねていたすずかは大いに脱力してしまった。

彼女にとって、あまり特別な行為とは認識されていないようで、強めのスキンシップ程度にしか思っていないのだろう。一人で騒いでいた自分に、赤面してしまう。

因みに、まだ頼むことは出来ていない。いつか、そんな日が来るのだろうか。

弱気になってはいけない。それが自然なくらいにシユテルと彼女の世界のすずかは近かったのかと考えると、自分も頑張ろうと発破を掛けた。無言で一山幾らの安い緑茶パックを1ダース購入しようとしているシユテルから、半分を奪い取って棚に戻すと、すずかは話を進める。

「でも、痛かったり、恐かったりするんでしょ？　なのはちゃんが、そんなこと……」

「例えば、高町なのはがやらなかったとしても、時空管理局が何とかしてくれるかも知れませんね」

時空管理局。世界は無数にあり、魔法が公に存在する世界や、地球のように存在していない世界がある。時空管理局は、言わば魔法のある世界、管理世界を取り締まる警察のような組織で、魔法のない管理外世界で悪いことをしている魔法使いを捕まえたり、今回起きる事件のように管理外世界に流れ着いた、魔法の技術で作られた物体を回収する役割もあるらしい。「大体あつてます」とお墨付きをくれたシュテルは、苦々しい表情をしていた。

魔法の才能を買われたシュテルは、この組織で働いていたようだ。その任務が原因で現在ののような状況になり、苦労していることを考えると、すずかもあまり好意的にはなれそうにない。でも今は、なのはやシュテルが戦わなくていいなら、嫌いな相手にも頭を下げられる。

「管理局の人に連絡して来て貰えば、なのはちゃんは、戦わなくていいの？」

「ええ、まあ……今回は、戦う必要はありませんね」

「え……？」

今回つて、とすずかが自販機の前で何かを熟考しているシュテルに問い掛けようとすると、「遅いか、早いか、ってことです」との言葉と共に清涼飲料水の入った缶が手渡された。シュテルはカフェオレの缶を片手に、スーパ―を指して歩いていく。母は最後に食べる性質らしく、微妙な飲み物を我慢して飲むことで、楽しみにしている飲み物を最後に際立たせるとか良く分からないことを昨日の夜に言っていた。今夜は緑茶メインと暗に告げているようであった。

魔法のない地球にジュエルシードのような物体が落下してくるのは、極めて珍しいケースだと言うことは、姉とシュテルの話を知っている。しかし、今の彼女の口振りから察するに、この事件には、姉にも話してないだろう続きがある。

「ジュエルシードの封印が終わっても、すぐに魔力を持つ人間を手当たり次第に襲撃する事件が起きます。今度は、実戦慣れした魔導師が相手です」

管理局を早期に呼び寄せることは、経験を積む機会を奪うことになりません。

続けて聞こえてきた言葉は、混乱の最中にあるすずかの耳を素通りして行ったが、聞き逃せないこともあった。

「ま、魔力つて、シュテルちゃんも危ないってこと!？」

「可能性はありますが、ご心配なく。元の場所に戻れなかったとしても、月村家からは出て行きます」

「ち、違うよ。出て行くとかじゃないくて、シュテルちゃんだって、なのはちゃんなのに、戦ったりとか、そんなの……」

「私もそれなりに強いつもりですけども、所詮は並より上程度です。月村の家には迷惑を掛けないように」

「そういうこと、言ってるんじゃないよっ!」

平然と語りながら歩くシュテルの後頭部に、すずかの怒声が浴びせられた。

手を引かれ振り返ると、すずかはさめざめと涙を流しながら、シュテルを睨んでいた。「心配するよ、ばかあ……」とすずからしからぬ口調でがん泣きを始めると、いよいよ人の流れが二人を避け始めた。

周囲の視線が、痛い。そう感じて、すずかを伴って逃げるように

その場を離れるシュテル。シュテルは目立つわけには行かない身だと理解していても、すずかは泣かずにいられなかった。

自分は大丈夫だからとか、言わないで欲しい。出会ったばかりなのに、出て行く話とか、しないで欲しい。そんな大事な話を、姉でなく自分しか居ない時にしないで欲しい。どうしたら良いか、分からなくなる。

連れて行かれた公園で言いたいことを全部吐き出し終わると、すずかの涙は自然と引いていった。肩で息をしているシュテルに謝って、流れた涙分を清涼飲料で潤すと、ほふうと溜め息を吐いた。負の溜め息ではなく、どちらかと言えばすつきりとした正の溜め息であった。

「……ごめんなさい。少し、焦っていたみたいです」

「ううん。でも、勝手に居なくなったら嫌だよ」

とぼとぼと二人で、帰り道を歩く。

シュテルはすずかに怒られたことがショックだったのか、何処か気落ちしているように思える。先程の遣り取りは、すずかにとつての容量オーバーに近いものがあつたが、それ以上にすずかがシュテルの様子から感じ取つたことが原因だった。

姉と話している時は、平然と元の時間に帰る方法のアプローチ方法をバリエーション豊かに説明していたが、出て行くとか、この先の出来事を語つた彼女の声は真剣その物。冗談めかしての言葉なら、此処まで気にかかることはなかったのだろうが、すずかはその第六感染みた感覚に引き摺られるように一つの予想に辿り着いていた。

この娘は、もしかしたら、もう帰る場所なんてないのかも知れないと。

「あの、すずか」

「えー!? あ、どうしたの?」

「いえ、すずかは悪いことばかり気にしています。でも、良いこともありましたよ」

「……良いことって？」

「疑惑の眼差しを感じます。そこは信用してください。友達が出来たんです」

「友達……？」

ええ、アリサとすずか以外の友達です。

その言葉に、ちよつとだけすずかの涙が零れ、無意識に口元を覆い隠す。

ああ、自分とアリサは必要以上になのはを拘束していたのではないだろうか。自責の念がすずかの心を締め上げる。締め上げている途中で、「そう言えば私もなのはちゃんとアリサちゃん以外友達いないかも……」と気付いてはいけなない事実が付き、二重の苦しみを味わう事となった。

内心で吐血しながらもシュテルに「友達も魔法使いだっただの？」と問い掛けると、シュテルは珍しく無邪気な笑みを見せる。本当に嬉しそうに、自分のことのように、「ええ、戦ってる時は凄く格好良いんです」と話し始める。

丁度、曲がり角に差し掛かった時のことだった。

不意に現れた車輪に、二人が危なげなく回避すると相手が車椅子であることに気が付いた。すずかが相手を気遣って近寄ると、車椅子を運転していた少女も、驚いた様子ではあったが、心底申し訳なさそうに謝るすずかに「ええよええよ」と緩い言葉で返す。

良く見れば、同じ年くらいの少女のようだった。

「あの、お家の人は……あ、その、ご、ごめんなさい」

「あー、ええよ気にせんでも。図書館くらい一人でも行けるし、こう見えて結構力持ちなんよ？」

力瘤を作るポーズでにへらと笑う少女に、すずかの表情も自然と柔らかくなる。髪はシュテルよりも少し長いくらいで、交差した髪留めが可愛い。関西弁と京都訛りが混ざったような、耳当たりの良い言葉も明るい口調の少女に似合っている。

すずかと少女は暫くの間、謝罪混じりの世間話でも交わすように踏み込み過ぎない会話を続けていたが、ふと少女が気付いたようにすずかの後ろに視線を送った。首を傾げて口を開く少女。すずかは何か、後ろのシュテルから脅えるような雰囲気を感じた。

「そつちの子も転んだりせえへんかった？」

はやて。

俯いたシュテルの口元から、声が聞こえた気がした。すずかは何のことが分からなかったが、少女はシュテルの雰囲気を感じ取ったのか、敢えて大げさなりアクションで「んー？」と首を捻っている。

「私ら、どっかであったことある？ いや、うん、言い辛いんやけど、私あんまり物覚えが……」

少女、はやてが言葉を終えるよりも先に、シュテルは来た道を逆走し始めた。口元を押さえ、顔色が悪いのが、走り出す瞬間にすずかの目に映って見えた。数秒の間、はやてと一緒に固まっていたすずかだったが、正気を取り戻したはやての「何か、悪いことしてもうたみたいで」との言葉に三度程全力でごめんなさいすると、シュテルを追い駆けて走り出した。

背中越しに聞こえた頑張つての言葉に、本当に健気な良い子だったなあと振り返り、逃亡した同居人の追跡に全力を傾けるのであった。

「えっ……うっ……」

公衆トイレの一室で胃の中の物をぶちまけているシュテルを発見したのは、追跡後数分のことであった。震えながら嘔吐する彼女の姿に、すずかも顔を真っ青にして背中を擦る。

シュテルが呟いたのは、先の少女の名前、だと思う。それでも、知り合いや友達であるのなら、すずかやアリサの時のように平然と受け流す筈だった。

一頻り吐き出して、落ち着きを取り戻した様子のシュテルに肩を、いや、もう半分持ち上げる勢いでベンチに運び、寝かせると、初めてシュテルの覚束無い視線がすずかを捕らえた。

何を言ってくる訳でもなかったが、一瞬ほっとしたような表情が見て取れた。シュテルが何かを恐がっているようだと感じたすずかは、シュテルの手を握り、そっと、驚かさないように小さな声で問い掛けた。

「さっきの車椅子の子、知ってるの？」

シュテルは、視線をすずかから外し、曇った空を見詰めると目元を腕で隠してしまった。一度だけ、下唇を噛みすずかの手を握り返すと、少しだけ体から力を抜いて、言った。

「知りません。あんな人」

そう言ったシュテルの表情は隠れて分からないが、声色は、何処か後悔を含んでいるようだった。

動けなくなってしまうたシュテルを三十分ほど膝枕して介抱したが、体調は良くなり、結局すずかがおんぶしてその日は帰ることにした。力無く腕をすずかの首に回し、弱気に「ごめんね、迷惑掛

けて」と時折呟く彼女に、腕に込める力が一層増した。

守ってあげたい。強く、そう思う。

彼女を傷付ける全てから、子を守る母親のように。

魔法の力が無くても、自分出来ることを探していこう。

虚勢を張ってまで前に進んでいこうとする、彼女の支えになれるように。

三話（後書き）

はやてさん登場回。でも多分読者の方が望むはやてはこっちじゃないんでしょっね。

誤字脱字は前話のような感じで細々と直していきます。皆様感想を心よりお待ちしております。

四話

夕日に染まる森林世界で一人、少年は戦っていた。

中世的な顔立ちに金色の髪の毛、独特の文様の縫い付けられた民族衣装に身を包んでいる。息を切らし、疲弊している様子ながらも、注意深く辺りを観察すると草叢を掻き分けてがさがさと大きな存在が這い回る音が聞こえてきた。

「くっ……」

思わず、息が零れる。

低い呻り声と共に、草叢の中から大きな赤い目が一對、少年を見据えていた。毛むくじやらの体から一對の触覚が靡き、体は軟体を思わせる程にぶよぶよと波打ち、今にも襲い掛からんばかりに眼球は殺気立っている。

だがしかし、少年とて無力では無い。

懐から取り出した紅い宝石を浮遊させながら指先で保持すると、緑色の光が進り、忽ち幾何学模様の魔方陣を空中に形作る。収束しながら密度を増していく魔方陣に焦りを覚えたのか、大きな眼球を更に大きく見開くと、赤い目の怪物はゴム毬の如く草叢から飛び出した。

猪染みた加速で少年を押し潰さんばかりに突進する怪物を前にしても、少年は恐怖と興奮に顔を強張らせたまま、魔方陣に手を翳し続ける。

「妙なる響き、光となれ！ 赦されざる者を、封印の輪に！」

詠唱に呼応して、強く発光する魔方陣。させまいと、内側に隠した太い前腕と爪を剥き出しにして、怪物は少年に向かって跳躍する。

「ジュエルシード、封印！」

怪物が衝突する瞬間、盾のように広く展開した魔方陣は、怪物の巨体を受け止めると、閃光を放ちながら中空に留まった怪物を弾き返す。ぼたぼたと、肉片とも血液とも知れない物体が地面を塗らした。どうやら、手傷を負わせることには成功したようだった。抵抗されたことで脅威を感じ取ったのか、まだまだ余力を残した様子を見せながらも、怪物はゆっくりとした動作で逃走を計る。

追撃を、そう思い身を乗り出す少年だったが、怪物に手傷を負わせたのと同様に、少年の力も疲弊しきっていた。膝からも力が抜け落ち、体が重力によって地面へと押し付けられていく。

「逃がし、ちゃった……追い駆け、なくちゃ……」

体から完全に力が抜けると、少年を中心に緑色の発光現象が起こった。僅かに残った意識で、SOSのシグナルを送っているのだろう。管理外世界であるこの地球で、魔力を持つ人物は極々限られている。そんな僅かな望みに縋り付いてでも、少年は使命を遂行しなければならなかった。

しかし、その望みも、届くことはない。

赤い瞳が、横たわる少年だったものを見詰める。魔力の消耗を抑えるために小動物の姿に変化した少年に、最早脅威は感じられない意識を失うのを待っていたのだろう。音を消して草叢に潜んでいた巨体が、再び少年に迫っていた。ジュエルシードの暴走体である怪物は、食欲を持たない。

しかし、暴走した状態を維持するためには、魔力が必要だ。僅かにも魔力を体に残す、目の前の小さな存在を取り込むために、裂けた口を開く。

この瞬間、全ては始まりを告げることなく、終わりを迎えようと

していた。

「ふむ、こうなりましたか」

それは、有り得たかも知れない、可能性。

それを善しとしない者の介入がなければ、現実の結果として、これから先の出来事を真っ黒に塗り潰していただろう。

第三者の声と共に、怪物の足元に桜色の光弾が撃ち込めれ、まるで線を引くかのように地面に六つの穴が穿たれた。

何処からの襲撃だと、血走った目玉で周囲を見渡すも、姿を確認することは出来ない。線とその向こうに横たわる獲物を見比べ、意味を理解したのだろう。怪物は苛立った様子で、地面に引かれた線を大爪で抉るように叩き付け、空に向って咆哮する。

「捕らえました」

『Flash Impact』

音と衝撃が、同時に訪れた。

怪物の無防備な脇腹に突き刺さる、長柄の武器に因る一撃。体をくの字に折り曲げ歪めながら、巨体がふわりと、僅かに空へと打ち上げられる。

理解出来かねる状況。停滞するように遅く流れる時間の中で、己の腹を打ち据える杖と、打点を中心に内側を焼くような閃光、いつの間接近されたのか、それを一瞬の間に行った少女の姿を、確かにその目に写していた。

直に打ち込まれた圧縮魔力は、怪物の体内で炸裂すると、草叢の向こうへと巨体を吹き飛ばした。手応えを確かめているのだろうか、杖を振り切った姿勢を数秒維持すると、ゆったりとした動作で乱れた髪の毛を撫で付ける。

『追いますか？』

「……いいえ、放置して構いません」

『御意のままに』

少女の姿は、異様であつた。

胸元には紫のリボン、黒地に赤のラインで装飾されたバリアジャケットは、色合いが適当であればお嬢様学校の制服のようでもある。デバイスである杖は、本来であればコアに当たる部分をバリアジャケットと同色の布で巻き、同様に顔の目の下から首までを覆面も宛らに覆い隠している。

正体を隠したいのか、本気で隠すつもりもないのか、風に靡く髪に手を当てながら、草叢の向こうへ遠ざかっていく音を確かめる。再度攻撃に転じる程の余裕はないだろうと見切りを付け、電子音声との遣り取りを終えると、地面に倒れたフェレットと、その近くに落ちた赤い宝石に視線を落とした。

「ジュエルシードは、此処にありますから」

少女は腰を落とし片方の膝を地面に着くと、赤い宝石に手を伸ばす。

何の感情も宿していない少女の瞳から、心の中を読み取ることは出来ないが、宝石を手に取り、労わるように付着した土を指で拭き取る姿は、何処か寂しげに映った。

壊れ物を扱うように、愛しい物にでも触れるように、繊細に、丁寧に、指を滑らせていく。一度、二度繰り返して、完全に汚れが消え去っても、拭い続ける少女は、魅入ったように視線一つ動かすことなく没頭している。

『マスター』

「ん……？」

『私を、見てください。私は、貴女だけのデバイスです』

遂にはバリアジャケットの裾や袖まで使い始めた少女に、布で覆われた杖から抗議が声上がる。磨く手を止め、愛杖を宥めるように柄を上から下にゆっくりと撫で下ろしてやる。布越しに不満を訴えてるように発光していた杖からの光が弱くなると、少女はほうと一息吐いて、最後に一度、コア部分にそっと触れた。

「ごめん」と小さな声で謝ると、磨いていた宝石を、自らの杖へと近付けていく。

赤い宝石から、青色の宝石が引き摺り出され、杖のコアへ吸い寄せられると、青白い強い光が木々を照らし、辺りを包み込んだのだった。

「……………って言う夢を見たの」

高町なのはの口から告げられた夢の内容は、意外と詳細であった。早朝の通学バスで登校する間、手持ち無沙汰を紛らわすためにしていた他愛も無い会話。アリサは「寝る前にゲームでもしてたんでしょ」と微笑みながらなのはをからかっていたが、同様に微笑みを浮かべるすずかの内心では警鐘が鳴り止まずにいた。

シュテルが月村家に滞在して、既に二週間と少しになる。例の事件が起きる予定の四月に入り、すずかも気合いを入れて日々の生活を送っているが、未だ世紀末の予兆は見えてこない。

昨日のことになる。すずかが帰宅するとシュテルは出掛けており、月村邸には居なかった。外出自体は珍しいことではないが、いつもは不安定なシュテルを心配してすずかが付き添っていただけに、慌ててファリンに尋ねると、何でも魔法の杖の修復が済んだのでりハビリに行つて来るとのことらしい。

危ないことでもしてはいないだろうか、変な人に絡まれてはいないだろうか、と子の帰りを待つ母親のような気持ちでそわそわと玄関で待っている、日も暮れかかった頃「ただいま帰りました……どうかしましたか？」と、普段と変わらない様子の彼女が帰ってきた。

一通り体を弄って、怪我の有無を確かめてから、今度は連れて行くように念を押す。調子は悪くないか、どんな魔法を使ったのかとシユテルの話聞いて、それで、普通に皆で一緒に夕食を済ませ、普通に一緒にお風呂に入って、普通に一緒に寝た。

強いて違うところを言うのなら、夕食の際にシユテルが湯のみを倒してしまった際に、左手を抱えるようにして震えを押さえていたことは気に掛かっていた。火傷を負った訳でも、怪我をしていた訳でもなく、シユテル自身、何故震え出したのか分からない様子であった。

夜中に魔されることや、偶に脅えるような仕草を見せるようなことともあるので、今回もその類だろうと、落ち着くまで左手を擦っていたのだが、ふと、前にシユテルから聞いた話を思い出す。

初めてジュエルシードを封印した時は、暴走体が恐くて、泣きながら逃げ回って、やっとのことで封印した、らしい。

暴走体は、毛むくじやらの団子みたいな奴だった、らしい。

今のなのはの話は、本当に夢の類だろうか。イメージを飛ばすような魔法も、確かがあると聞いたような気がする。

「すずか、着いたわよ？」

「え、あ、うん」

「どうしたの、寝不足？」

「うっん、そんなことないよ。ただちょっとぼんやりしちゃっただけ」

戦えないと、彼女は言っていた。

杖が直っても、魔力の源であるリンカーコアは早々治るものではない。だから、自分が高町なのはに出来ることと言えば、正体を隠したまま、念話と言うテレパシーの魔法でアドバイスを送ったり、もしもジュエルシードを拾ったら届けるとか、そのくらい。

それも必要ないのかも知れないと、自嘲するように語っていたシユテル。

悪いとは思いながらも、それを聞いて、すずかはほっとしてしまっただ。

シユテルが、これ以上頑張って戦わなくても良いのだと思っただらだ。时空管理局が来るまでの間、なのはとなのはに魔法を教えた協力が頑張ってくれたら、なのはの当面の危機も去る。

でもそれなら、今の話は、何のことだろう。
帰ったら、問い詰めてみよう。

そう心に決め、アリサとなのはの後ろに付いて、校舎の門をくぐった。

どうにも嫌な予感が消えない。いや、初めから彼女が何かを隠している感覚はあったのだ。

ただ、それを見ない様にしていただけで。

切欠は、昼前の授業で、将来の職業が話題に上がったことだった。昼食を食べながら、お互いの将来のヴィジョンについて語り合う。小学生らしからぬ内容の話をしながら、すずかはお弁当に箸を伸ばした。

すずかのお弁当は、少し前から中身が変わっている。良くも悪くも無難で外見よりもバランス重視だった前までと違い、見た目も可愛く、桜色が多くなった気がする。

居候少女が、ただ飯ばかり食べてるのも居心地が悪いと言ってすずかのお弁当を作り始めたのだ。そうは言っても、ノエルとフアリ

ンと一緒に掃除洗濯もそつなくこなすし、姉と一緒に何やら難しい計算を手伝っていたり、帰ればシュテルが作ったシュークリームでお茶をする訳で、別に負い目を感じなくてもとすずかと思う。

「喫茶店の娘ですから」と薄い胸を張った少女の作ったシュークリームは、翠屋の味がした。

出来る素振りを見せていなかったところは不安だったお弁当も、普通に美味しい。ただし、毎日桜でんぶを巧みに使って模様を描くので、ちょっとだけ見られるのは恥かしい。

話を戻そう。なのは以外の二人はある程度、自分の利点欠点を理解しており、アリサは両親の後を継ぎ、すずかは工学系の専門職に就きたいと話すと、なのはは浮かない顔をしていた。どうやら、将来の選択に迷っているようだった。

「……私、特技も取り柄も特にないし」

「ばかちんっ！ 自分からそういうこと言っんじゃないのっ！」

そう言ったなのはの顔にレモンのスライスを投げ付けながら、アリサは憤っている。すずかもそれは同様で、思わず口を挟んだ。

「そつだよ。なのはちゃんにしか出来ないこと、きつとあるよ」

言ってしまったから、すずかを激しい自己嫌悪が襲った。

嫌な言い方かも知れないが、高町なのはにしか出来ないことなんて、そんなのない方が良いに決まってる。

そんなものがあつたから、これからは危ない目に遭わなければならぬ。シュテルだって、あんな風に苦しまなくて良かったのに、そう考えずか顔は僅かに顰める。

特技も取り柄もないと、なのはは言った。

暗くなり掛けた雰囲気消そうとしてなのはにじゃれ付いているアリサの言うように、なのはは理数系の成績が良い。取り柄がない

なんてことはない。

しかし、シュテルは言っていた、「魔法は、突き詰めれば数学や物理の計算」だと。魔力の量だけが、魔法使いの才能ではない。そう考えると、アリサの言葉を素直に受け取ることが出来なかった。

誰だって、怪物と戦ったりなんてしたくない。例えどれだけ勝算があっても、誰かが何とかしてくれるなら、そう思ってしまうだろう。

それなのに、優しい高町なのはが戦うのは、何のためだろうか。

持ち前の正義感だろうか。それとも表面に浮かんでこないだけで、本当は強いコンプレックスを感じているのかも。

「だ、だってなのは文系苦手だし、体育も苦手だし！」

大きな声に思考を中断して、アリサとなのはを見ると、なのはの背に馬乗りになったアリサが、なのはの両頬を引き伸ばしている。完全に悪乗りしてしまっているのか、アリサは若干恍惚とした表情でなのはの頬の感触を楽しんでいた。

明らかに、理性を失っている。

「ふ、二人ともだめだよ！ ねえっ、ねえってば！」

流石に止めないと声を掛けながらも、すずかは思考を再開する。

もしも、なのはが自分に特技も取り柄もないと思っていて、それをずっと気にかけてきたのだとしたら、シュテルも、もしかしたら、それも、聞いてみよう。出来るだけ、早く。

アリサを羽交い絞めにし、流暢な英語でギブアップを連呼している声を無視しながら、すずかは涙目で感謝するのはに微笑むのだった。

「シユテルちゃんっ！」

放課後、すずかにしては珍しく慌しく帰宅すると、靴を脱ぎ捨て、荒々しい動作でシユテルの部屋の扉を開いた。目当ての人物は居らず、普段はすずかの部屋と一緒に過ごすことが多いので、自室へ向い扉を開くも、同じように姿はない。

すずかは、焦りに焦っていた。

帰り道、塾へと向う途中、アリサが近道だからと人気のない林道を選択した。三人で並んで歩いていたのだが、どうにもなのはの様子がおかしい。急に立ち止まったかと思うと、急に走り出したり、まるで見えない何かを感じ取っているようだった。

嫌な予感を感じながら、すずかが走っていったなのは追いかけると、そこには傷ついたフェレットがいた。痛々しい姿のフェレットに猫好きなすずかも同情せざるを得なかったが、フェレットの首元を見て表情が強張るのを感じた。

紐に吊るされた赤い宝石。

これは、見たことがある。此処最近毎日のように。

同居している少女が、首からぶら提げているものと、同じ物。形状こそ丸い宝石のようだが、魔法を使う為の杖、デバイスと呼ばれる武器。

不測の事態に思考停止を起こしたすずかを他所に、あれよあれよと言う間にフェレットを動物病院に連れて行くこととなり、流されるままに付いて来てしまった。暫く安静にした方が良く、明日まで預かっておく、との獣医の言葉を聞いて我に返る。

明日では、もう遅い。

そう思い至ったが早いか、すずかは体調不良を理由に塾を休むと二人に伝え、帰宅したのだった。世話しなく走り回り、厨房や庭の木陰など居そうな場所を探したが、見当たらない。最後の手段だと、姉の部屋の前に立ち、深呼吸してからノックして入室する。

最近、姉はちょっと変わった。誰かの携帯電話を見ながらにややしていたり、高町なのはの兄である恭也を家に招く頻度も多くなつた気がする。

なんでだろう、とシュテルに尋ねると、真剣な顔で両手ですずかの肩をがっしり掴むと、「私は知らないけど、どんなに慌てても、忍さんの部屋に入るときは一声掛けようね」と言われた。何でも、家族関係に亀裂を入れないためには大切なことらしい。

部屋に入ると、姉は椅子に背を預け、穏やかに読書を楽しんでいた。

「あら、帰つてたの、すずか？」

「うん、ただいま。お姉ちゃん、シュテルちゃん知らない？」

「また魔法の練習してくるって、さっき出て行つたわ。今日は、少し遅くなるそうよ」

「……連れて行つてって、言ったのに。じゃなかったっ、お、お姉ちゃん、大変なのっ！」

拾つたフレットのことを事細かに話すと、忍は表情を変えずに「そっか、今日からだつたのね」とだけ応えようと、本を閉じて窓の外に目を向ける。考え込んでいるような忍の様子に居ても立っても居られなくなつたすずかは、部屋を後にしようとするが、いつの間にか後ろにいたノエルに片手で静止される。

もう片方の手には、紅茶が二人分用意されたトレイが乗せられていた。

「落ち着きなさい、すずか。待っていれば、その内帰ってくるわ」

「でもっ、シュテルちゃんが危ないことしようとしてるのに……」

「いいから、こっちに来て、座りなさい」

姉の強めの語調に、洪々と言つた態度を隠さずに、すずかは忍の

隣に腰掛ける。姉の冷静な態度が、今のすずかには苛立たしく感じ
てしまう。

そんなすずかの苛立ちを感じ取ったように、忍はすずかに緩やか
な口調で語り掛ける。

「シユテルちゃんは、色々なことを一人でやろうとしてるわ。私た
ちに詳しいことを伝えないのも、必要以上に巻き込みたくないから
よ」

「う、うん、それは、分かってるけど……待ってるだけなんて、嫌
だもん」

「ふふ、大丈夫よ。本当なら、なのはちゃん一人でも何とかなるの
よ？ 今この街にはシユテルちゃんだっているし、今日だって、な
のはちゃんのサポートに行っただけよ。それに、すずかにだって出
来ることはあるわ」

「……できることって？」

「帰ってきたら、おかえりって言ってあげなさい。心配したって、
沢山伝えてやりなさい」

微笑む姉の表情を見ても、不安は拭えない。

それでも、姉が言ったこと以外に、すずかが出来ることは思い付
かない。本当なら、一緒に居てあげたい。シユテルも何らかの訓練
を受けているらしく、動きの機敏さには驚くものがあるが、結局の
ところ子供の範疇でしかない。

すずかの方が、力も強いし動きも速い、持久力だってある。

逃げる手伝いくらいさせてくれたって、そう思う自分も居れば、
未知の魔法を前にして足を引っ張ってしまいかねないことを理解し
ている自分もいる。どれだけの体力を持っていても、空を飛ばれて
はどうしようもない。

忍の言っていることは、大切なことだと分かっている。

シユテルは、すずかが帰宅すると僅かにほっとした表情をしてく

れる。自分の帰りを待つてくれていたんだと思うと、堪らなく嬉しかった。普段澄ましたシュテルの時折見せる寂しがりな部分が、すずかは可愛く見えて仕方がなかった。

だから、待つてあげないと。

悔しげな表情を隠しきれずに、短く「うん」とだけ返事をする、すずかは姉の部屋を後にする。今日のすずかは、何をしでかすか分からない。そんな雰囲気を読み取ったのか、すずかが自室に戻るまで、黙つてノエルが追従してくる。

自室の扉を閉め、力なくベッドに倒れ込むと、からっぽになつてしまつたような感覚がすずかを包んだ。

今は、無事を祈ることしか出来ない。

しかし、吸血鬼の自分は何に祈ればいいのかだろう。シュテルやなのはに、こんなことをさせる神様になんて祈りたくない。

いつそ眠つてしまえば、そう思い、すずかは小さく頷いて目を閉じたが、何時まで経つても、睡魔が襲つてくることはなかった。

すずかが居なくなつた自室で、月村忍は考えていた。

シュテルから、大方の荒筋は聞いた。

ジュエルシードの発掘者の船が事故に遭い、地球に積荷を落とすてしまったこと。

発掘者が責任を感じ、一人先行して封印作業を行っていること。

頼みの綱の時空管理局は足が遅く、戦線に加わるまでにはまだまだ時間が掛かる上に、封印処理が済んでいるからと余裕を扱っていることもそれに拍車をかけていること。

なのはと先行した魔導師の少年、ユーノ・スクライア、そして時空管理局の到着によつて、ジュエルシードは全て封印され、事件は解決すること。

後にもう一つ事件が起こるが、こちらの詳細は未だ教えて貰えて

いない。連続通り魔傷害事件みたいなものだということだけで、今はまだ起こる可能性があるとしたか言えないそうさ。

「……めでたしめでたしって言うのは、嘘ね」

執務官をしていたと言う、その頃ならどうだったのか知らないが、今のシュテルは割と何を考えているのか分かり易い。表面上は繕えていても、心音や体温の微妙な変化であったり、勘に頼る部分が多いが瞳の色であったり、色々な面で読み取れることもある。

そんな一筋縄で終わるような、簡単な話ではないのだろう。

恐らく、怪我也、本当はしていない。

魔法の性能については、シュテルの協力の下データ収集をしていたのだが、当然ながら低い威力の射撃魔法では、理解できることは少ない。それにしても、その大元であるリンカーコアが不調だと言うのに、寸分変わらず同じ計測値が続くものだろうか。

忍や恭也でも、同じ威力、同じ速度、同じフォーム、同じ位置にボールを投げ続けると言われても何球続けて出来るか分からない。

「なのはちゃんじゃなきゃ駄目な理由、か」

その一点に関して、強い執着があることは理解していた。

シュテルが全部やるうと思えば、簡単なのだろう。次に起きる事件に備えて、なのはに経験を積ませると言うのなら、それも真実なのだろう。

けれども、それだけではないことも、確かだった。

それが何にせよ、安心できることは、本来なら高町なのは一人で解決できる事件に、シュテルという戦力が保険として存在することは喜ばしい。何とも気分の悪くなる話ではあるが、打算的な考えもしなければならぬ。

これからの生活を考えるのならば。

忍は、シュテルのことを気に入っている。この気持ちに、嘘偽りは一切ない。嘘がある程度分かれると言うことは、本心もある程度は分かるということ。二週間と少しの関係ではあるが、根が良い子であることは忍含め、ノエルもファリンも共通の認識であった。

忍は、シュテルに貰った携帯電話を手に取り、画像フォルダを開くと、一覧表示にして上から眺める。恥かしいからとメールの遣り取りは全て消去したが、写真に関しては偶に見返すこともあるとの理由で、忍に関する写真以外にも手付かずのままである。

髪の毛の長さの違いはあれど、すずかとアリサと出会ってから小学三年生頃までのシュテルは、この世界のなものと区別が付かない、自然な笑みで写っている。しかし、いつからか、何処か不自然な、無理をしているような笑顔が多くなっている。

後半になると、忍と恭也の結婚式を前後に、誰かと撮った写真など殆ど無くなってしまうている。髪を二房に纏めた金髪の娘と、交差印の髪留めを付けた日本人の娘との写真を最後に、なのはの写真は存在しない。

「どっつして、こうなっちゃったのかしらね」

哀れに思う。シュテルにとっては不愉快だろうが、あんな風に感情を押し殺して、何が彼女を変えてしまったのだろうと。同時に、彼女を守れなかった周りの人物に怒りを覚え、未来の自分を不甲斐無く思う。

本当に、この場所に帰るのが、彼女にとって幸せなのだろうか。ああまでして、成すべきことがあったのだから、当然戻りたくはあるのだろう。所詮自分やすずかは、彼女にとっては似ているだけの代替品に過ぎない。

それでも、守りたいと思う。

忍は兎も角、すずかの気持ちは、間違いなくシュテルの心の安定を保つのに一役買っている。もしも帰れないのだとしたら、妹とし

て面倒を見るつもりで準備はしていた。ずずかも懐いているし、忍にとつても無理して背伸びしているようなシュテルは愛らしく、この暮らしが続くことは望ましい。

包み隠さず言えば、在りもしない孤児院から引き取った名目で、もう月村シュテルの戸籍を作ってしまったている。

「……早く、帰ってこないかなあ」

代替品でも、いつかは本物に成り代われる。

帰れるのであれば、残念だが泣いて見送るしかないが、帰れないのであれば、それでも構わない。ずずかが帰りを待つことしか出来ないと考えるように、忍には失敗したときの受け皿を作ってやることしか出来ない。

何時になるか分からないが、今日はシュテルが帰るまで起きていることにしよう。

そう思い、一息吐いた忍は、手元の本へと視線を落とすのであった。

何の、冗談だ。

シュテルは、目の前の光景を見て内心で吐き捨てるように言った。夕方に月村家を出たシュテルは、動物病院が見える通りに身を潜めていた。

不測の事態が起こる可能性は十分にあったから、時間も早くから待機を始めていたのだ。結果から言えば、不測の事態は起こらず、ユー・スクライアの魔力の残滓を嗅ぎ付けた毛玉が動物病院に突っ込んで、ユーノは念話を発しながら逃走した。

震えが走る左手を、強く握り締める。

あの怪物は、シュテルにとってはトラウマのある存在。追い掛け

回されて、一步間違えば食われるかと思つた程、苦戦を強いられた。初めての变身に、初めての魔法、初めての敵と来ては戸惑わぬ者など居ないだろう。決して言い訳をするわけではないが、シュテルはその時はまだ、平凡な何の特技も取り柄もない小学三年生女子。

例に漏れずシュテルは見つとも無く涙で顔を汚し、プロテクション連打と飛行による逃走を繰り返す消耗戦の末、やっとのことで封印できたのだつた。小学三年生の頑張りには、上出来ではないだろうか。

この世界の高町なのはとて、きつと同じ結果になるに違いない。しつこいようだが、あの戦いは、激戦だつた。烈火の将との本気の勝負でも、あれほどの苦戦は強いられなかつただろう。経験の無さが何より痛い。下手を打てば、負けていたのはこちらだつた。

だから、毛玉が病院を壊した時点で、シュテルはこっそりと上空に舞い上がっていた。

高町なのはの活躍の機会を奪うつもりは、毛頭ない。しかし、一度くらいは謎の熟練魔導師として、魔法少女のピンチを救ってみた。口が裂けても言えないが、こんな気持ちは久し振りだつた。

高町なのはがいる世界で、シュテルに存在価値など欠片もない。唯一不測の事態に対処することが自身の必要とされる全てだと考えている。昨日、ユーノから奪い、基、借り受けたジュエルシードを使ってレイジングハートに残つた転移魔法のログと照らし合わせていたのだが、どうも芳しくない。

そのこともあつてか、シュテルにしては珍しく張り切つてことに当たっているのがあつた。後は、高町なのはのピンチを待って、颯爽と駆け付けるのみ。

問題が起きたのは、もう一発脇腹に打ち込んでやろうと、杖を握り締め意気込みを新たにしていた時のことだ。

「ジュエルシード、封印っ！」

『Sealing Mode Set up』

声が聞こえると同時に、シーリングモードを起動させたなのはが踊るように回りながら、毛玉怪物を雁字搦めに拘束する。咆哮を上げる毛玉に脅えることもなく、なのはは低いながらも中空へと飛び上がった。

『Stand by ready』

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアルXXI！」

何だか、映画かアニメを見せられているような光景だった。

シュテルは焦れば良いのか、安心すれば良いのか分からずに、上空で冷や汗を滝のように流している。何故流れているのか、自分でも分からない。上手くいくのは良いことの筈なんだ、だからこれは違うんだと胸に手を当てて呪文のように唱えても、気分は少しも落ち着かなかった。

「ちがう、ちがうもん。こうじゃないもん」

取り乱したように言葉を発すると、幼い口調で震えたような声が出てしまった。

これは、きつと、何かの間違いなんだと、遂にはぼやけてしまった視界を袖で拭っていると、遙か下で監視を行っているサーチャーから音声が伝わってくる。

「封印っ！」

『Sealinn』

やめて、と思わず声にならない声を漏らす。

数本に分かれた桜色の閃光が、身動き一つ取れない毛玉を次々と貫いていく。一瞬、毛玉の赤い目玉と、サーチャー越しに目が合っ

たような気がした。物言わぬ宝石に戻った毛玉を、シュテルは呆然として見詰めている。沈黙が続く空の上で、夜風が涙に濡れた頬を撫でていく。

数分も経たずに、全てが終わっていた。パトカーの音に驚いて逃げていくのはを追う気持ちには、どうしても成れない。月村邸を指して、低速で空を飛んでいく。

『あの、マスター？』

「……なんですか？」

『私は、私が壊れるまで貴女と一緒にです。変わらずに、貴女と共に在ります。今までも、これからも。だから、あの……元氣出してください』

「……こわれるときはいつしよですよ」

レイジングハートをぎゅっと抱きしめると、体勢を崩した所為か、気が緩んでしまったのか、アクロバットのように急降下し、揃って悲鳴を上げた。もう離さないとばかりにコア部分に頬を摺り寄せるシュテルを、必死に説得し、何とか体勢を立て直す。

尚も声押し殺して泣いているシュテルと、宥めるレイジングハートの二人は月村邸に帰るまで、同じようなことを繰り返しては先程見てしまった嫌な光景を必死に忘れようとしているのであった。

四話（後書き）

シュテルさんが格好良く見えたり見えなかったりする不思議。貴
重なレイジングハートさんのシリアスシーンです。

皆さんの感想を心よりお待ちしております。

五話

猫じゃらしが左右に揺れると、それを追いかけて猫が跳んだ。爪の先が届くかどうかの寸前で、猫じゃらしは持ち上げられ、空振った猫はカーペットに着地する。白毛に黒の縞の模様が特徴的な子猫は、楽しみにピンと尻尾を立てると、再び揺れ動くターゲット目掛けて飛び掛った。

すずかは、遊んで貰ってご機嫌な子猫と、パジャマ姿でベッドに横たわり、死んだ魚のような眼で猫じゃらしを振り回しているシュテルを眺めていた。

「しゅ、シュテルちゃん、楽しい……？」

「たの、しい……？」

「あつ、ううんっ、いいの！ なんでもないよ！」

虚ろな目で見詰められたすずかは、思わず直視出来ずに視線を逸らした。

シュテルが帰って来たら、色々なことを言いたかった。危ないことは出来るだけしなくて欲しいし、魔法の練習だけなら連れて行って欲しい、内緒で何かしているのなら、本当のことを話して欲しい。我慢していることがあるのなら、言って欲しい。

力になれることが、あるかも知れないから。

外も暗くなってしまう、自室で待っているのに我慢できなくなっただすずかは、そわそわと廊下を往復していた。しかし、一向に帰宅してくる様子はなく、遂に夜も更け、すずかの表情にも悲壮なものが見え始める。心配したファリンを伴って玄関先で待っていると、夜空に流れ星のような物体が飛行してくるのが分かった。

桜色に発光する飛行物体がシュテルだと気が付いたすずかは、喜びに飛び跳ねる勢いで降下してくる少女の下へと向うのであった。

受け止めんばかりの速度で走りながら、すずかは何て声を掛けようと考えていた。色々なことを聞きたかったけれど、無事で帰って来てくれたのならもう何でも良い。

今はただ、抱き締めたい。

しかし、駆け寄って跳び付こうとしたすずかの視界に飛び込んできたのは、女の子座りでへたり込み、両手で顔を覆って涙を流すシュテルの姿だった。散々泣き腫らしたであろう眼は充血し、普段の涼しいような表情も崩れ、小さく開いた口からは嗚咽が漏れている。初めて逢った時も、こんな風だったなあ。

「……すずかっ……すずかあ」

現実逃避していたすずかは、自分と呼ぶ声に意識を取り戻す。

涙に濡れたシュテルの瞳が、こちらを見上げている。母猫を見付けた子猫のように、何度も、何度もすずかの名前を呼んでいた。普段の素っ気無さとのギャップに、すずかの全身をむず痒いような感覚が走るが、理性で押さえ込み、冷静に視界に映る内容を租借していく。

「しゅ、しゅて、ちゃ、しゅてちゃ、何で、泣いて、あ、ああ……」

心臓を氷柱で刺し抜かれたような衝撃がすずかを襲い、無意識の内にシュテルを担ぐと、悲鳴なのか何なのか分からない声を上げながら、姉の部屋に押し入った。静止する忍や侍女二人を完全に意識の外に排除し、抜け殻のように無抵抗なシュテルを下着姿になるまでひん剥いて、外傷が無いことを確認する。

傷一つ無い、吸い込まれるように白いシュテルの肌がそこにはあった。

ぺたぺたと触りながら、ソファアに横たわるシュテルを転がし、背中もぺたぺたと一通り触り終える。良かった、怪我のようなもの

は見当たらない。安心して額の汗を拭いながら一息吐き、乱暴でもされた後のような惨状のシュテルを抱き締めていると、何故かノエルに羽交い絞めにされた。至福の温もりが、遠退いていく。

残念そうに舌打ちする忍とファリンに首を傾げながら、すずかはシュテルを凝視する。部屋は常に暖かめに設定されているが、微動だにしないシュテルの格好は、何だか寒そうだ。

頭の中が急速に冷えていくのが分かる。冷静さを取り戻し、拘束が解除されると、ノエルに言われた通りにすずかはシュテルに服を着せる。姉にプレゼントされたが、いつもは絶対に着ようとしないフリルの沢山付いたドレスを、やりきった顔で着せ終わると、改めてシュテルに泣いていた事情を聞く。

「……自分が、情けない。消えてしまいたい」

負の感情に塗れてしまっているシュテルから根気良く事情を聞き出すと、どうやら直接的に何かされた訳ではないが、なのはに泣かされて帰ってきたらしい。

「全部あの子にやらせればいいんです」と不貞腐れて呟く、ちょっと回復したシュテルが言うには、なのはは異常なほど肝が据わっていて、一撃で毛玉の怪物を封印してしまったとのこと。思い出してしまったのだろう。語るシュテルの瞳は再び水気を帯び始める。

何のために存在するのか分からなくなって、悲しくなって、涙が止まらなくなってしまった。

それを聞いたすずかは、昼間のことを思い出す。コンプレックスのことも強ち的外れではないのかも知れないと考えたすずかは、「大丈夫だよ、シュテルちゃん」はシュテルちゃんだよ」と囁きながら、シュテルを抱き締めた。最初は小さく頷きながらされるがままだったシュテルも、忍とファリンも同様に纏わり付いてくると、気恥ずかしくなったのか、頬を薄っすら染めて、微笑ましげに眺めていたノエルに助けを求める。

若干いつもの調子を取り戻したシュテルと揃って入浴し、いつものように寝巻きに着替えすずかの部屋で寛いでいたのだが、冒頭に至る。シュテルと戯れている猫は、女の子で名前をメイと言う。同い年の猫の中では一番小さく、猫社会での力関係は弱い。そのことを気に掛けているのか、シュテルは良く餌の時間に端っこに居るメイに餌を与えたり、読書中には膝の上に置いて居たりする。

アニマルセラピーと言う訳ではないが、衰弱を見せるシュテルが元気になるようにと思い、すずかが寝室に連れて来たのだが、逆効果だったのだろうか。機械的な正確さで猫の跳躍を回避すると、メイがカーペットへと落下する様をじっと見て、「わたしみたい」と小さく呟いている。

シュテルちゃんは、一生懸命頑張ったのに。

口元に手を当てて、零れた涙をそっと拭くと、メイを取り上げるように抱き上げた。今日はもう寝よう。寝て忘れてしまおう。猫を取り上げられて機能停止を起こしたシュテルに向って、メイの手を握り、さよならをするように振る。

「ほら、また明日、ね。シュテルちゃん」

「……うん。おやすみ、ルシフェリオン」

「違うよっ！」と突っ込みたい衝動を気力で押さえ込む。今のシュテルには何が致命傷になるか分からないのだから、慎重に行動するに越したことはない。人の家の猫に変な名前付けて呼ぶシュテルをお淑やかに受け流したすずかは、動かなくなってしまったシュテルに布団を被せて、その隣へと潜り込んだ。

シュテルの方へと体を傾けると、シュテルもすずかの方を見詰めていた。相変わらず虚ろな瞳ではあるものの、疲れたようにとろんとしていて、可愛らしい。

思えば、平然としているように見えて、いつもシュテルは緊張していたのではないだろうか。時折弱さは見せるものの、冷静沈着な

キャラクターを装い続けるのは、きつと疲れてしまう。

だから、すずかの前でだけは、素の彼女で居て欲しい。

シュテルになる前の、高町なのはに戻って欲しい。

「シュテルちゃんは、頑張ってるよ」

「……がんばって、ないよ。わたしは、いらないこ」

「駄目だよ、そんなこと言ったら。私は、シュテルちゃんが居なくなったら嫌だもん。ね、要らなくないの」

そう言つて髪を撫でると、そっぽを向いて布団の中に潜ってしまった。追いかけて潜ると、シュテルは丸まって小さくなっていった。口を布に押し当てたまま喋っているのか、聞き取り辛い声が聞こえてくる。

「うそだよ」

「嘘じゃないよ。どうしてそう思うの？」

表面上余裕があるように返せたものの、すずかの心中は穏やかではなかった。

シュテルとは月村家の誰よりも近い距離に居ると自負していたすずかは、現在のシュテルを大きく下回るテンションへと急落下し、まさに「疑われた……死にたい」状態である。何か理由がある筈、とすずかの往生際の悪い部分が何とか表面上平静を保ってくれているが、返答によっては再起不能の傷を負いかねない。

「……すつてくれない」

逸る鼓動を抑えつつ、シュテルの言葉を待つと、数秒か、数十秒した後、蚊の鳴くような声が聞こえた。やった、嫌われてないと歓喜した次の瞬間、背筋に冷たい物が這い上がってきた。すつてくれ

ない、とは何のことだろうか。

十中八九、吸ってくれない、だろう。

「す、吸わないよっ！ シュテルちゃんはお友達だもんっ！」

「……うん、そうだよね」

ほっと溜め息を吐き、すずかは胸を撫で下ろす。例え、シュテルにとつては何でもないことだったとしても、すずかにとつては雲よりも遙かに高いハードルなのだ。今のシュテルは正気ではない、寝惚けている弱みに付け込むなんて、と自らに言い聞かせる。決して気持ち昂ぶってしまった訳ではない。

深呼吸を繰り返して、やっとのことで冷静さを取り戻したすずかは思う。いい加減寝よう。このまま続けることは、自らの首を絞めることに成りかねない。最後の遣り取りを終えてから、身動き一つしないシュテルを見る限り、もう眠ってしまったのだろう。すずかが小さな声で「おやすみ」と言っつて、瞼を閉じた時のことであった。

「わたしのなんか」と、再び蚊の泣くような声が聞こえたのは。

布団を跳ね上げて、仰向けの姿勢から腹筋の力のみで起き上がると、すずかは錆付いたロボットのような動きでシュテルの肩に手を当てる。蚊の鳴くと言っつよりも、最早普通に泣いているのか、嗚咽にも似た音が聞こえてきた。すずかには、それが泣き真似か否かを判断できない。

「ち、ちが、違うよ。そ、そういうことじゃなくて……」

「……おやすみ」

「い、ごめんね、ち、ちがうの、あ、あの、あのね、い、いやじゃ、なくて」

声は、もう返ってこない。

ただ無言の圧力と、背を向ける少女の真っ白な首元だけが、すずかの思考を支配していた。無駄に良く見える夜目が、今は無性に恨めしい。思わず飲んだ生唾を、浅ましいと戒めるも、少女が態と肌蹴て露出した肩から目が放せない。

その気になつてはいけない。でも、その気にならなかつたら、それはそれでシュテルの気持ちを踏み躪ることになるのではないだろうか。

迷いながらも、意識してしまつた体は熱を帯び始め、呼吸は荒くなつていく。思春期の少年のように露骨に反応するすずかの肉体は、意識とは別に臨戦態勢を整え始める。赤面する顔の温度がすずかの頭に伝わって、湯気を上げ始めた時のことであつた。

これは、仕方が無いよ。

悪魔の囁きが、聞こえた。「あああ……」と思わず助けを求めて声を漏らしたが、すずかの中の天使は助けに来てはくれない。最初から居ないのではと思つてしまふくらい、反論の声は上がらなかつた。

誘つてるもん、我慢しなくても良いんだよ。

すずかの中に巢食う悪魔は、巧みに自己弁護と言つ名の大義名分を与えると、それつきりすずかに丸投げしてしまふ。真っ白で綺麗な肌に、牙を突き立てて傷付けたい。猥染みた低俗な欲望で、シュテルの気持ち汚してしまいたい。頭の中に浮かんだ本能を首を振つて追い払つと、入れ替わり立ち代り、次々と似たような想いが頭を埋め尽くす。

もう、限界だつた。葛藤の末何も出来ずに敗れたすずかは、灯りに吸い寄せられる蝶のように、シュテルに覆い被さると、理性を繋ぎ止めていた何かを断ち切つたのであつた。

高町なのはは、極々平凡な小学三年生である。

しかし、それも昨日までの話。一夜にして魔法少女へとランクアップした高町なのはは、日夜海鳴市の平和を守るべく、戦いの最中に身を投じるのであった。

「おはよー！」

魔法少女だろうが何だろうが、それでも日常は続く。

昨夜、ジュエルシードの封印を終えたなのはは、魔導師の少年ユーノ・スクライアの事情を聞き、ユーノを家に置いて貰えるように家族を説得した。魔法のことは内緒にしなければならぬので、ユーノはフェレットとして飼うことになり、父と母に揉みくちゃにされた疲労が見えていたが、なのはは初の戦闘も何のその、変わらず元気である。

挨拶と共に教室に入ると、アリサが、昨日ユーノを預けた動物病院で車の事故があったらしいことを教えてくれる。ユーノの安否を心配して痛ましげな表情を見せるアリサに、二重三重のオブラートで包んだ真実を説明していると、ふと、さすがが話に参加していないことに気が付いた。

いや、寧ろ、教室に居ない。

「あれ、さすがちゃんは？」

「あー、昨日さすが調子悪かったじゃない？ 今日も体の調子悪いみたいで、少し遅れてくるって。メール来てなかった？」

言われて携帯電話を開くと、朝のどたばたの所為で気が付かなかったのか、確かにさすがかからのメールが届いていた。概ねアリサが伝えてくれた内容と同じだったが、文章が矢鱈と他人行儀で丁寧な言葉遣いであった。もしかしたら家族の誰かが代理で送ってくれたのかも知れない。

昨日別れた時は、体調不良なのに全力疾走だったので、アリサなんかは明日には元気になってしていると高を括っていたのだが、予想は外れ、体調は悪化してしまったようであった。なのはは二人揃って心配している旨と、ユーノを飼うことになった経緯をメールにまとめ、送っておくことにした。

授業の時間になると、なのはとて集中しなければならない。無論、ユーノからの念話にである。

ユーノが故郷でジュエルシードを発掘し、保管するために輸送していた所、時空間船が事故に遭って、21個のジュエルシードは偶然海鳴市の周辺にばら撒かれてしまったこと。

責任を感じて一人で戦ってはいたものの、魔力が尽き、魔力を持つ者に助けを求める念話を発していた所、高町なのはに出会ったこと。

独りぼつちで戦うのは、辛かったんだろうな。

小さい頃の経験から、同情的な思いと共に、昨日みたいに自分の力を役立てられるなら、手伝ってあげたい。そんななのはの考えを他所に、ユーノの話は続く。

『今まで見付けられたのは、まだ、たった二つ……』

『あと19個かぁ……』

『あ、うん、いや、その……』

『……？ どうしたの？』

計算は合っている筈なのに、返ってきたユーノの答えは、歯切れが悪く、何とも言い辛そうだった。なのはは首を傾げ、ユーノに問い掛けると、思いもしない言葉が飛び込んできた。

『ごめん、一個取られちゃって、今は、昨日封印して貰った一つだけしか……』

『えっ、でも、取られちゃったって、誰に……？』

ジュエルシードは基本的に、十分に魔力を蓄えた状態のそれが人の思念を取り込んで暴走する、所謂実体を持たない暴走状態と、動植物を核に取り込んで実体化したまま暴走する状態の二通りがあるが、どちらもまともな思考も儘ならず文字通りの暴走体らしい。

ユーノの話を書く限り、封印されたジュエルシードを奪っていくような感じには思えなかった。

『なのはと会う前に、僕はシリアルXXIのジュエルシードを封印しようとして、失敗した』

『うん、だから怪我してたんだよね』

『本当は、怪我じゃ済まない所だったよ。助けて貰ったんだ、知らない魔導師に』

その時に、レイジングハートに保管していたジュエルシードを持って行かれたけど。

辛そうに話すユーノの話を聞いていると、なのはの頭の中にはその場面が容易く頭の中に浮かんでくる。見覚えがある毛むくじやらの怪物と、それを一撃で撃退した、魔法使いの少女。目元と髪の毛以外をバリアジャケットで覆い隠した姿は、何処か自分に似ていたような気がする。

『……私、その娘、見たことあるかも』

『え……あつ、そっか。レイジングハートが念話を飛ばしてくれてたから、見ても不思議じゃない、か』

結局、その少女については、目的も何もかも不明とのことらしい。昨日襲われた時も駆け付けてくれたのは、なのはだけだったこともあり、無条件に味方とは考えられない。ジュエルシードが目的ならば、昨日の戦いに姿を現してもおかしくないことから、案外一つ

だけ手に入れて満足してしまい、もう姿を現すこともないのかも知れない。

どのような人物にせよ、ジュエルシードはたった一つでも大災害を引き起こす可能性を秘めた危険な存在。探して簡単に見付かるような人物ではないのだから、出会うことがあるのなら、一度しっかりと話し合う必要がある。

謎の魔導師の話から離れ、今後のことを話し合つと、ユーノは迷いながらも、魔力が回復するまで手伝つてくれたら、これ以上関わらないで欲しいことをなのはに告げた。

今まで詳細に教えてくれたのに変な話だと、なのはは薄っすらと笑みを浮かべた。何となく、ユーノの気持ちは理解できる。真面目なものもあるのだろうが、その実、心細いのかも知れない。ジュエルシードを二個封印する過程で、あんなに傷だらけになって、その上、未知の魔導師の存在。不安になるなと言う方が、無理がある。本当は、なのはに最後まで協力して貰いたいのだろう。

ユーノは、なのはには魔導師の才能があると教えてくれた。未だ少年ながら、ユーノは大人顔負けの魔導師の才能を持っていて、そのお蔭もあつて、発掘チームの責任者を任されていた。そのユーノを遥かに上回る才能が、高町なのはには存在する。

困っている人が居て、助けて上げられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけない。

父親の言葉を思い出す。立派な志だと理解しつつも、本音を言つてしまえば、今日と言う日を迎えるまで、自分には、一生無縁な言葉だと思っていた。高町なのはは、これから先、ずっと困っている側で、助けられるのを待っているだけの、何の取り柄もない、平凡なのはのままだと、ずっと、思っていた。

こんな私でも、困ってる人を助けられるんだ。

誰かの力に、なつてあげられるんだ。

私なんかに、才能つて、あつたんだ。

ほんの少しだけ、視界がぼやけるのを感じ、授業が続いている教室で目立たないように、袖で目元を拭った。

運動音痴で、家の手伝いと言ってもウエイトレスの真似事、友達二人と比べても頭も余り良いとは言えない。容姿こそ母譲りのためか悪くはないのだろうが、中身がそれに伴っているとは思えない。せめて、お行儀良くしなくちゃ、両親の言うことをちゃんと聞いて、学校でも真面目に勉強して、置いていかれないようにしないと。良い子でないと、いつの間にか、また独りになっちゃう。

『ちゃんと魔法使いになれるか、あんまり自信ないんだけど』

果たして、この言葉はユーノに向けての物か。或いは自分自身に向けての言葉だろうか。人伝の評価など、矢張り信用ならぬと思っているのなら、それもなのはの本質なのかも知れない。実感が持てないのに喜んで、実は糠喜びだったのでは、あまりにも救われなから。

いつまで良い子でいられるのか、分からない。

秀でた能力を何一つ持たないのは、年齢と共に上がり続ける良い子の基準に追い付かれることを恐れていた。何れは、付いて行けなくなる。そうなったらアリサやすずかとは、一緒には居られなくなるのではないか。家族にも、期待されなくなるのではないだろうか。また、あの時のように。

でも、もうこれからは、脅える必要は、ない。

『私、頑張るから』

決意は、既に胸の内側に宿っていた。

決して褒められた志ではない。それでも、なのはの心の隙間だった部分が熱い気持ちで満たされていくのが分かった。一度掴んだの

なら、二度と手放すつもりはない。誰かの役に立てる、皆を守れる力が、私の中にあるのなら。

私が、魔法少女になる。

この瞬間、高町なのはは、初めの一步を踏み出したのであった。

因みに、昼頃に遅れてやってきたすずかは、終始具合が悪そうに机に突っ伏し、「私は……、私って……なんで、我慢が……」と後悔したように繰り返していた。言葉とは裏腹に、時折覗く口元は何かを思い出したように弧を描いている。アリサと二人で、今日はそつとしておこうと心に決め、何も見なかった設定で放課後まで通したのだった。

私は、こんな所で何をしているのだろう。

季節も移ろい、生暖かくなってきた風を受けながら、神社の屋根の上で待機していたシュテルは思う。昨日は、散々な目にあった。何もかもが空回りで、高町なのはには、危うく再起不能に追い込まれるところだった。だと言うのに、こうして不測の事態に備えて、すずかを学校に送った足でぶらぶらとしていたら、この場に辿り着いてしまっている。

まるで甲斐甲斐しく世話を焼く新妻のようだ。自虐的な笑みを浮かべながら、レイジングハートを只管に、丁寧に磨き続ける。『私も、私も』と余りに煩いので、折角出来た暇な時間を有効活用しようと、月村家から持たされている、矢鱈と高そうなハンカチで磨いているのだった。

磨くからには愛を込めて全力でと張り切ってみたものの、高が布切れの分際で至高指触りを魅せるハンカチの値段が気になって集中できない。絶え間なく聴こえる、無駄に艶やかなレイジングハートの嬌声も、集中を阻む一要因になっている。

今日は、多分これだけしかしないで終わるんだろっとなあ、と遠く
の空を眺めていた時のことであった。犬の散歩中に綱を離してしま
ったのだろっ。先行して走る子犬と、それを追い掛ける女性の姿が
視界に映った。子犬は勢いをそのままに、茂みの中に飛び込んでい
く様を、シュテルは冷めた瞳で見下ろしている。

「……………今回も、何も起こりそうにありませんね」

『はあ……………はっ……………ん、あっ……………ああ、いい……………』

「盛りのついた雌デバイスは、奉納しちゃいましょうね」

赤い宝石を賽銭箱の上で吊り下げ、落とすか落とさないかのぎり
ぎり感を楽しみつつ、愛杖の悲鳴をにやにやしながら聞いていると、
茂みの中から立派に成長した子犬が顔を出した。血走った四つの目
玉に、甲殻の如く黒光りする全身装甲を纏った獣は、慕っていたで
あろう飼い主に餌を強請るような目を向け、一步、また一步と近付
いていく。お腹を、空かせているようだ。

折角レイジングハートとの愛を再確認する時間であったが、どう
やら時間切れのようだった。高町なのはが来ないのであれば、女性
を助け、ジュエルシードは置いていく。来るのであれば、何もする
必要はない。

「あ、あんな長いのに、覚えてないよ!」

シュテルが考えを纏めるよりも早く、鳥居の方から少女の声が聞
こえた。今週の、魔法少女リリカルなのはが始まってしまった。お
腹の辺りが痛くなるのを感じつつ、少女と小動物の注意が暴走体
に向けられた瞬間に、茂みの中へと低速飛行で隠れることにする。こ
の距離では、迂闊な行動を取れば感付かれる恐れもあるので、魔力
は最小限に使用を留めた。

シュテルが視界を確保した時には、変身シーンは終わっていた。

起動パスワードは、聴こえてこなかったことを考えると、シュテルは膝を着いて顔を覆った。

「もう、やだ……省略された……」

『マスター、基本は大事、です。基礎、反復、応用！』

「……うん、基本は、大事。ありがとう、レイジングハート」

馬鹿正直に起動パスワードを唱えていた過去の自分を思い出して、激しい後悔が込み上げて来る。「何となく唱えなくても行ける気がする」とは薄々感じてはいたものの、ルールはルールだからと真っ直ぐ一直線に無意味な拘りを抱えて戦っていた自分は、何だったのだろうか。

また一つ、思い出を打ち砕いた高町なのはを睨み付けると、暴走体の突撃を無傷で耐え切り、暴走体が鳥居に登って繰り出した渾身一撃すらも、プロテクションで弾き返して逆にダメージを負わせている。

最早、何も言うまい。

あの娘は最初から、なるべくして魔法少女になったのだろう。同じ姿をしている悪魔か魔王の生まれ変わりだと思って、気にしないようにしようと心の中を落ち着かせる。次回予告の時間になる前に撤収しようと、昨夜からむず痒く疼く首筋を擦って居た時のことであつた。

封印を行っていた高町なのはを、黒色の閃光が貫いたのは。

二度目の戦闘も、何だか肩透かしを食らったような気分であつた。ジュエルシードがどれ程危険で、封印するのが難しい物体だったとしても、なのはの意志を汲み取ったレイジングハートは、意図も簡単に敵の攻撃を防いで見せた。半信半疑だった己に宿る才能を、

確かに手のひらを通して感じる。疑い混じりから、確信へと変わった魔法の力にはしゃいで、凶悪な犬の姿をした暴走体を封印しようと魔法を放つ。

高町なのはは、負ける気がしなかった。

生まれて初めて自身の才能を自覚し、仮初の万能感に包まれていた。それが悪いことだとはいわれない。抑圧された状態から解放され、天狗にならない人間は少ない。二度、三度とその状態で勝利が続けば、仮初の自信も真実へと昇華し、何れ敗北を知ったとしても決して折れることはない、不屈の心を手に入れていたのだろう。

羽ばたくことすら儘ならないなのはは、未だ折れ易い。

「なんでっ！ さっきは、こんなのっ、簡単につ！」

「お、落ち着いて、なのは！」

ユーノの声も、混乱したなのはに届くことはない。

黒色の閃光に横撃されたのはだったが、その一撃はなのはの護りを撃ち抜くには至らなかった。強固な防御は閃光を飛散させ、力なく構える大型の暴走体を威嚇するに留まる。何者かに因る襲撃。射線を辿ると、なのはとユーノの視線は一つの物体に収束した。

一言で言えば、ロボット。カプセルのような形のロボットが、無機質なカメラアイでなのはを捉えている。

良く確認すると輪郭があやふやで、幽霊のように黒い靄に包まれたかと思うと、球体の大きなロボットの姿へと膨れ上がった。萎むようにカプセル状に縮んだりを繰り返している。共通点と言えば、臃げに見える機械の中心から、青白い光が零れている。

「……思念体だ」と言うユーノの言葉に、呆然と立ち尽くしていた自分に気が付き、レイジングハートを構え直す。発動したジュエルシードに惹かれて集まって来たのだろうが、一つが二つに増えたところで。そう思い、封印魔法を無意識に構築し直していた時のこと、敵の姿が、再び変化した。元々、半透明だった思念体の姿が霧

のように霧散し広がると、犬型の暴走体へと重なり、留まった。一つに収束した暴走体が、黒い霧に包まれながら、なのはへと迫る。防御は既に済んでいるなのはは、もう一度弾き返すつもりでいた。

衝撃と共に、プロテクションから、亀裂の入る音。

「え……？」

「なのは！ もう一度防御を！」

ユーノの声に盾を張り直すと、暴走体は一度距離を開き様子を伺っている。

ジュエルシードを増やし、力を増しているのか、消耗している様子は無い。寧ろ、この霧の包まれているなのはの方が消耗している感覚が抜けずにいた。先ほどの衝撃は、暴走体の合体する前と大して違わなかったと言うのに、防御は容易く碎かれるところであった。新たな張り直した防御も、段々と厚みを減らしているような気がする。

そう、まるで、魔法の発動を阻まれているような。

そこから先は、繰り返しだった。霧のよって弱められた盾を食い破られるたびに、新しい盾を用意するも封印できる隙は見えて来ない。他の魔法を試そうにも、肝心の高町なのはが混乱の中にいた。初めて感じる、死に直面する感覚。

誰かの役に立てる筈だったのに、こんな簡単な封印できる筈なのに、物語の主人公みたいに、皆を助ける筈だったのに。

危ないこと、恐いことだと知らない訳じゃなかった。けれど、知っているのと体験するのでは全くの別物だ。絶対の自信を持って繰り出した魔法が効かない、効果が打ち消される。

まるで、本当は無力な自分を、引き擦り出されるような気分だった。

「やだっ！ やだあっ！」
「あ、あぶないっ！」

遂に、対処が遅れた。

押し切れると確信した暴走体の連撃に、護りが打ち破られ、未だ次の防御は用意できていない。所謂、詰みの状態であった。恐怖のあまり瞼を瞑り、歯を食い縛る。真つ暗のなつた視界の中に、両親と姉の姿を見た気がした。バリアジャケットが威力を減衰させると言っても、拳で殴られた経験も無いものには、想像を絶する痛みだろう。恐怖に、体が強張る。大きな爪が、風を切る音がした。

「今回だけ、ですからね」

鈴の音のように、涼しげな声がなのはの耳を打った。

獣の悲鳴をBGMに、涙目のなのはが前を見ると、小さな背中があった。夢の中で思念体と戦っていた魔導師の少女が、なのはを護るように立っている。肩ほどで切られた髪は風に靡き、杖を振り切った片手をそのままに、余った片手で髪の毛を押さえていた。なのはと似たようなデザインのバリアジャケットに身を包みながらも、色と細部が違うだけで頼もしい印象を与えてくれる。

顔を隠す布に一度指を掛けて直すと、同じく布に包まれたデバイスを横に振り抜いた。コアと思われる部分が、一瞬輝いたかと思えば、複数の眩い光球が一行に整列している。

「……直ぐに済みます。良い子にしてください」

なのはに対して落ち着かせるように言うと、少女は一步前へと踏み出す。臆することなく、怪物の前へと、光の弾丸を従わせて歩く姿は、落ち着いていて、経験の違いが見て取れる。

なのはの瞳には、少女の姿が、子供を護るヒーローのように映っ

ていた。

五話（後書き）

末っ子無双だと思いましたが。来週のリリカルなのはは放送中止ですよ。

六話

高町なのはは、眼前の光景に心を躍らせる。

魔導師の少女は、ジュエルシードの暴走体である獣が回復するのを待っていた。まるで恐怖を知らないかのように倒れた獣の近くまで平然と歩み寄ると、路傍の石でも見下ろすように、黙って獣が足掻く様を機械的に視界に収めている。総勢十二の数を持って展開する桜色の光球は、尚も少女の背後に付き従い、明確な意思を持たぬ筈の暴走体を威圧し怯ませる。

漸く起き上がった獣は、怒りを隠すことなく血走った眼を見開き咆哮すると、距離を取る為に後方へと跳躍した。威勢の割りに気が小さいと感じたなのはは、直ぐにその認識を改めることになる。

靄が獣の頭部に集中し、触角のように揺れ動く実体を形作つたのだ。昨夜封印した思念体も同様の器官を有していたが、この獣の場合、何かが違う。無機質な光沢を放つ、機械のコードを思わせるような触覚の先端に黄色いセンサー状のパーツが組み込まれている。なのはが思考を働かせている間にも、状況は変化する。触覚の黄色い先端が、黒色の光を放ち、段々とその輝きを強くしていく。

自身が、一度喰らった閃光と似ている。しかし、ジュエルシードの思念体であったロボットが撃ち出した射撃と比較して、触覚の先端部に集束する光は、ずっと強力に見える。二個になって出力二倍などと単純な考えでは済むまい。喰らえば、無傷ではいられないくらいのははは、魔法使いとしての経験が浅いのははにも十分理解できる。

だと言うのに、少女は、未だ射撃魔法であろう光の弾丸を展開し続けている。

防ぐか、避けるかしなければならぬ筈だ。それなのに、目に前で敵が攻撃の溜めを行っているのに、邪魔をする訳でもなく、少女はただ無表情のまま、冷めた視線を獣に送っていた。外見からは、

少女が何を考えているのか、理解することは出来ない。

「わ、私が、防ぐ……」

防ぐから、そう続けようとした言葉は、唐突に途切れることとなった。

言葉と共に、棒立ちだったなのはが前に踏み出すと、膝から力が抜け、引っ張られるように地面に尻餅を着いたからだ。先程、襲い掛かれた恐怖と、寸前で助けられた安堵によって、腰が抜けていた。恥かしさ以上に、情けなさが強い。ユーノに心配されている声も耳に届いていないのか、なのはは少女の行動を見守るしか出来ない自分に齒噛みする。

どうするつもりなんだろう。少女は、明らかに戦い慣れている魔導師。きつと、なのはには考え付かないような、凄い魔法や作戦があるのだろうか、期待と不安の入り混じった視線を少女に向ける。その時だっただろうか、ユーノの甲高い声にか、なのはの視線には定かではないが、なのはが座り込んだことに少女が気が付いたのは。

ふと、少女が、なのはを振り返る。

「どうか、しましたか？」

「え、あ、ごめんなさい。さっきので腰が抜けちゃって……じゃな
いっ！ 前見てっ！ 前っ！」

「……前？」

何のことか分からないと首を傾げる少女の姿は、年相応に見えて可愛らしい。なのはも状況が状況でなければ、心の安定を保つのに役立てることが出来ただろう。

その背後に、犬歯剥き出しの甲殻獣と、その頭一つ上で極光を放つ悪意の塊が無ければの話である。何で振り向いちゃったのと、頭

を抱えそうになるのはだったが、原因は自分を心配してのこと。怒りを覚えるのはお門違いと言うものだ。

なのは頭の中身など知りもしないとばかりに、少女は体ごと此方に振り返り、それどころか近寄って来る勢いだ。なのはが静止すると、閃光のチャージが止まったのは、恐らく、同時だった。

眼を焼くような大出力の光線が、放たれようとしている。少女は元より、直線状にいるのはとユーノも同様に生命の危機を迎えようとしていた。ああ、やっぱり駄目かも、と半場諦めていたなのはの視界を、桜色の光が過ぎ去るのを感じ取る。

慌てて通り過ぎた物体を目で追うと、虚仮脅しの如く役割を果たしていなかった弾丸が大きく弧を描き、少女の背中に向って打ち出されていた。魔力弾は霧に減衰させられながらも、怪物のがっしりとした四肢と踏み締めた足場を直撃する。まるで、背中に目が付いているかの如く正確なコントロールで、展開していた全弾が、忽ち石畳を抉り取っていく。

崩れる足場とぶよぶよの何か、悲鳴を上げて体勢を崩した獣の四つの瞳が、驚愕に大きく見開かれ、頭上の触覚から、火花が飛び散る。

瞬間、視界が黒一色に染まるほどの強い光が、神社の境内を包み込んだ。

緩やかに流れる時間の中で、大人一人を軽く覆い隠す太さの光線が、なのはの斜め上を通過していく。一直線に見当違いの空へと放たれた黒線は、雲に小さな覗き窓を開けると、数秒もしない間に勢いを減じて消失した。

過ぎ去った方向に一度目を遣り、啞然とするなのはとユーノ。

少女の背後から放たれた、一撃必殺の光線攻撃。そんな状況も何処吹く風と、自然体に佇んでいた少女は眼を細め、ゆっくりと口を開いて言った。

「前なら、始めから見えています」と。

同じ色の瞳が向かい合い、なのはと少女の視線が、交わる。心臓の鼓動が、一際激しさを増した気がした。

遠距離攻撃中の機動力低下を不利と悟ったのか、獣は少女へと肉薄し、少女も杖のコアに圧縮魔力を集束すると、それに応えるように振り下ろされる爪に、牙にと応戦する。足元に桜色の小さな羽根を展開し、僅かに宙へと浮かび上がりながらの高速近接戦闘は、宛ら踊っているようになのはの目には映っていた。

二、三度打ち合っては、減衰によって構築が解ける前に靄の範囲外へと飛び去り、再構築しながらの射撃による牽制へと切り替える。流れるような動きは、体を慣らしているような余裕すら伺えた。

駄目だ、やっぱり格好良い。目が、離せない。

登場の時から感じていた、胸の高鳴り。自覚すると、より心音が高まっていくのを感じて、段々と顔も熱を帯びていく。憧れの人物を前にして固まってしまった乙女のように、鼓動の音が鳴り止むことは無い。へたり込んだままの姿勢で、ユーノと同じように惚けた表情で、少女の戦闘を眺めるだけのなのは。

そうだ、私は、何をしているんだろう。

魔力はあるのだから、戦う力があるのだから、出来る事がある筈なんだ。少し前に踏み出せば、ほんのちよつとだけ手を伸ばすことが出来れば、自分も舞台上上げられる筈なのに、なのははこうして観客に甘んじている。凄くて、強くて、格好良い、クールな魔法少女に助けられる、平凡な少女Aでしかない。

私は、私は、昨日までの私から、変れたと思ったのに。

「……凄い。あの魔導師の子、苦手な距離がない。って、あつ、捕まった!？」

「えっ!？ だっ、駄目! 受け止めたら……」

ユーノの声に意識を浮上させたなのは、少女の戦闘に集中する。

離れた位置で戦っていた少女は、いつの間にか触覚を増やした暴走体によつて四方から組み付かれ、防御魔法を展開するしかない状態に追い込まれていた。しかし、ユーノが近くで慌てていたからだろうか。なのはは冷静に、少女の表情を観察することができた。

そこには、動揺も、恐怖もない。牙を剥き出しにして、殻に籠った少女を引き摺りだそうと必死な暴走体を見遣り、飽きたように一息吐いた仕草を見せると、減衰によつて消耗していくシールドの内側を、人差し指で横一直線になぞってみせる。

「……お腹が、空いているのですか？」

『Barrier Burst』

少女の言葉に呼応した女性の電子音声と共に、防御魔法の表面に魔力が集束し、炸裂する。衝撃を直に受け、錐揉みながら弾け飛んだ暴走体は、自慢の甲殻を石畳で削り、土埃の中へと倒れ伏した。脚部への射撃、前面甲殻への近接、そして今の反撃のダメージが効いているのだろう。始めの奇襲と同様に、中々起き上がることが出来ずに、崩れた石畳に足を掛けては転び、悔しげに触覚を揺らす暴走体。

なのはの口元から漏れた吐息は、果たして安堵に因るものか、それとも感嘆に因るものか。恐怖によつて冷たくなっていた胸の内を、冷め遣らぬ興奮が、再び熱くさせていく。何かしなくてはと思う感情以上に、次は、次の魔法はと、期待してしまう自分がある。

そして、少女は、なのはの期待に応えた。

もがき続ける暴走体へと向けられた少女の杖に、四つの環状魔法陣が取り巻いていく。桜色の環状魔法陣は、瞬きする間に集束を終え、極大の輝きを持って後に発動する魔法の威力を物語る。二本の足で大地を踏み締め、両手で杖を握る少女の背中へ、同年代の少女とは思えないほどに、なのはの心に安心感を与えてくれる。

「遠慮は要りません。思う存分喰らってください」
『Divine Buster』

解き放たれた魔法の名は、砲撃魔法。

杖の先端と暴走体を真つ直ぐに繋いだ光の道は、犬型暴走体に纏わり付いた靄を端から引き剥がし、尚も勢いを増していく。膨大な魔力によって構築された必殺の砲撃は、靄の減衰効果をこれでもかと言っほど完膚なきまでに撃ち抜いていた。

力任せに魔力の放出を行った先の黒色砲撃とは、全く違う。威力も、集束速度も、少女の魔法の方が、ずっと洗練されている。見る者の目を奪う、圧倒的な輝きを眩しげに見詰めながら、なのはは思う。

あの娘が、きつと魔法少女なんだ。

高町なのはがなりたかった、理想の姿。

テレビの中でしか見たことが無い、誰かのピンチに颯爽と掛け付けて、何も言わずに護ってくれる。綺麗で格好良い、皆が憧れるヒロイン。

昂揚した気持ちだが、冷水を浴びせられたように冷めていくのを感じる。浮かれていたんだ。はしゃいでいたんだ。誰かの為なんて、護りたいなんて言いながら、本当は楽しいと思っってしまった。思い通りに操ることが出来る、凄い力を手に入れて、嬉しくて仕方が無かった。魔法は皆を護るための手段でしかないのに、それを、目的に摩り替えようとしていた。

良い子でいることから逃げ出したくて、親しい人物から見放されることから脅えて、ずるしようとしていたんだ。

困っている人が居て、助けて上げられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけない。なのはは、初めて与えられる側から、与える側になろうとしていた。巢で餌を強請るだけの雛鳥をやめ、自

らの力で羽ばたこうとしていた。それなのに、現実には、こんなにも、高町なのはに優しくくない。

改めて思うことは、結局の所、高町なのはは、どんなに才能を持っていても、『助けられるのを待っているだけの』、高町なのはではないと言うこと。脅えて座り込んで、護られるだけの、臆病な少女。それ以上でも以下でもない。

少女を見詰めていた視界が、一瞬にして曇る。

泣いちゃいけない。我慢しないと。まだ何か出来る。必死に自分を奮い立たせようとしても、喉元を競り上がってくる嗚咽は、止めることができない。

本当の自分と向き合うことが、こんなにも辛い。何でも出来ると思ったのに、魔法少女になって、あの娘みたいに、格好良く戦って、誰かを護ってみたかったのに。

俯いたまま、目元から零れる落ちた雫が、バリアジャケットに包まれた膝を濡らしていく。ユーノや少女に気付かれたくなくて、そつと二人から見えないように体を傾け、声を押し殺して、なのはは泣いていた。

いつそ、最初から、何も知らなければ。あの時、ユーノの念話に聞こえない振りをしていたら、こんな想いは、しなくても良かったのではないだろうか。もっと頼りになる誰かが、代わりにユーノを助けに来てくれたかも知れないのに。

こんな、誰にも必要とされない、私なんかより……。

「……………立ってください」

「……………ふえっ？」

嫌な感情で、なのはの心が満たされる。思考が悪い方向へ、悪い方向へと繰り返し繰り返しなのはを苦しめていた。

それを遮ったのは、他でもない、先程まで戦っていた筈の、魔導師の少女だった。既に封印を終えてなのはに声を掛けたのかと思え

ば、砲撃魔法の直撃を受けた暴走体は合体する前の状態へと分離し、倒れたまま微動だにしない。ロボット型の方は特に酷く、その体積を大きく減じており、犬型の方は靄を盾にしたお蔭か、数分もある状態であれば回復し、再び襲い掛かってくるだろう。

何故、放置しているのか、なのはには分からずに首を傾げていると、少しだけ苛立ったように眉を顰めた少女に、片手を握られ、引っ張り起こされる。立ち上がりはしたものの、なのはは困惑を涙でぐしゃぐしゃになった顔に貼り付けて、少女を見ることしかできない。

「どうして、泣いているのですか。もう、ほら……」

「あ、じ、自分で拭けますから、汚しちゃうから、あっ、うっ、あの、ごめんなさい……」

なのはの表情に初めて驚いた表情を見せた少女は、ポケットからハンカチを取り出すと、それを見詰めて、何かを思い出したのか無言で仕舞った。自らの体をぼふぼふと何か無いか探すように叩いて何もなかったのだろう。激しい戦闘を経ても汚れ一つ無い自らの袖で、なのはの顔を丁寧に拭ってくれた。

拭き終えた少女は、申し訳なさでいっばいのなのはの手を引いて横たわる二体の暴走体へと歩き出した。焦るなのはに対して、少女は何でもないような口調で言った。

「ジュエルシードを封印します。貴女は、獣の方をお願いします」

「えっ！　そ、そんな、私、で、できないよっ！」

「……封印魔法は、使えるのでしょうか？」

「そ、そういうことじゃなくて、戦ったのは、あなただし……、私は、その、何も、出来なかったから」

少女に引かれる手を引き返し、歩みを止めた。

どんなにジュエルシールドが危険な物で、適切に封印して置かなくてはならない物でも、見ず知らずの誰かの手に渡してはならない物でも、なのはにも、意地くらいはある。少女にとっては、二つとも封印して持つて行くことは簡単な筈だ。魔力切れの様子も無いし、なのはの手を借りる理由なんて、何処にもない。

お情けで封印させて貰っても、それではなのは自身が納得できない。

なのはの頑固な意志を感じ取ったのか、少女は露骨に面倒だと言わんばかりの溜め息を吐いて、なのはの両肩に手を掛けた。同じ背丈、同じ髪の色、同じ瞳の色、同じ格好、同じ魔力光、同じ、同じ、何処までも、少女の姿は、なのはに似ている。

それでも、瞳の奥にある真剣な何か、高町なのはとは決定的に違う。

「助けてあげられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけない」

「ど、どうして、それを……」

「封印してください。他の誰でもない、貴女の力で」

なのはの疑問など、一切答えるつもりなどないのだろう。

少女の真摯な眼差しと、真っ直ぐな言葉は、空けられていたなのはの胸の内に、まるで初めから在ったかのように沁みこんでくる。再び、鼓動が高鳴った。少女の瞳から、目を背けることが出来ない。なのはは、ただ、熱に浮かされたように、少女の言葉を繰り返す。

「私の、力？」

「ええ、貴女だけの力です。望むままに、振るいなさい」

「望む、ままたって、でも、今日みたいに……」

「失敗したって、全てが終わる訳ではありません。大丈夫ですよ、貴女なら、何とでもなります。それでも、間違えてしまうことが恐

いなら、そうですね……」

その時は、私が手を貸してあげます。

なのはの前に現れて、ずっと無表情か呆れ顔だった少女が、初めて見せた微笑に、思わず見惚れてしまった。本当に、何をしても、少女の一挙手一投足がなのはの心を惹きつける。

何で、こんなに信じてくれるんだろう。

初対面なのに、なのはの心を見透かしたように、ずっと欲しかった言葉を掛けてくれる。無条件に、期待してくれている。もっと、もっと「大丈夫」って言うて欲しい。肩を掴んでいた手が離れ、そつとなのはの髪を撫で、そのまま頬へと添えられる。

触れられている部分が、熱い。

柔らかくて冷たい手のひらの感触に、安堵してしまう。

時間が止まったような錯覚を覚えながら、少女が顔が近付いてくるのを、ぼんやりと眺めていた。何故、だろう。ぶつかってしまふのではと危惧するべきなのに、母親に抱かれている時にも似た感覚がなのはを包んでいた。この娘は、安心できる。高町なのはに、痛い事なんてしない。そんな確信があった。

「大丈夫。あなたなら、できる、ね？」

「うん……うんっ！」

耳元に寄せられた少女の口から、囁くような声が聞こえると、なのは強く頷く。落ち込んでいた気持ちには、もう何処にも存在しなかった。素っ気無く離れて杖を構えた少女に習い、なのはも暴走体へと杖を向けた。なのはのタイミングに合わせるつもりなのか、少女から先に動く気配は感じない。

今なら、何でもできる。レイジングハートを強く握り締めると、シーリングモードへと切り替え、暴走体を拘束する。同時に、隣からも封印魔法が展開され、ロボットの体を雁字搦めに拘束した。な

のはは大きく一息吸い込むと出せる限りの声で、呪文を紡ぐ。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアルXVI！」

「ジュエルシード、シリアル……XXI」

後方で封印を行う二人を見ていたユーノが、驚愕の声を漏らした。なのはも、重複した21番のジュエルシードを疑問には思うが、今は、封印が先だ。なのはと、舌打ちでもしたそうに瞳を細くした少女の杖が、淡い桜色の光に包まれる。

「封印っ！」

『Sealing』

体を構築していた魔力を、空気中へと拡散させながら、二体の暴走体は物言わぬ、小さな宝石に姿を変えた。封印を施された二つの宝石は、封印を行ったそれぞれの魔導師の元へと浮遊し、デバイスの中に収められた。

なのはがレイジングハートを抱き寄せ、確かめるように紅いコアを見詰めていると、後ろからユーノの声がした。はつとして振り返ると、封印を終えた少女が、普通に帰宅しようとして、石段に足を掛けている所であった。

「ま、待つてください！ あなたは、何の目的でジュエルシードを集めているんですか？ それに、今のジュエルシードは……」

「ご覧の通り、21番です」

応えた少女の指先には、なのはが昨日封印したのと同じ、XXIの刻印が刻まれた宝石があった。ジュエルシードに、同じ番号は存在しない。なのはがユーノから聞いた話が正しければ、あの娘が持っている宝石は、ユーノが発掘した物とは違うジュエルシード、な

のだろうか。分からないことは、聞いてみよう。

「あ、あのっ……」

「問答をするつもりはありません。高町なのは、ユーノ・スクライア」

「な、なんで僕らの名前を……」

「二度は、言いません。私の目的は、この21番のジュエルシード。必要のなくなった13番は、ここに置いていきます。それでは、さらばです」

速攻で出鼻を挫かれたなのは、ショックを受けて涙目のまま固まってしまった。

少女は、そんなのはを若干微笑ましげに見遣った後で、先日ユーノから奪っていったジュエルシードを石段の一番上に置くと、背を向けて離れていく。このままでは、見えなくなってしまう。硬直から復帰したなのは、石段まで走ると、癖なのだろうか、乱れた髪を撫で付けながら歩く少女の背中に声を掛ける。

「あっ、あっ、あのっ！」

「……大声でなくとも聞こえます。何ですか？」

「お、お名前教えてくださいっ！」

言ってから恥かしくなつて、封印を行う前から火照っていたなのはの頬が、益々酷くなるのを感じた。何を口走っているのだろうと、俯き加減で少女を見ると、口元に握り拳を当てて、目を細めていた。や、やっぱり笑われている。

「ううう」と気恥ずかしさを誤魔化すために小さく呻っていると、少女が再び髪へと手を当てながら、なのはと視線を合わせ、考え込んでいる。心臓の音が、痛い。沈黙が、とても長く感じる。不安と期待に頭の中を掻き回され、なのはが茹で上がった頃、少女は口を

開いた。

「……シユテル、です」

「しゅてる、ちゃん……？」

小さく名乗った少女、シユテルの名前をなのはが繰り返すと、何故か少女の方が薄っすらと顔を朱に染めた。可愛い。隠すようにそっぽを向いているのが可愛い、凄く可愛い。喜色満面のなのはを一瞥して、困ったように眉を八の字にしたシユテルは、照れ隠しか、軽く舌打ちして背を向けた。

「ちゃん付けなんでしたか……」と良く分からないことを呟きながら、遠ざかっていくシユテルを本当は引き止めたかったが、今はきつと、これで良い。奇妙な感覚だが、また逢える、そんな気がする。手を貸してくれるって、約束もしたし。

シユテルの手が添えられていた頬に、自らの手を当てると、とても冷たく感じられる。それほど熱を帯びていたことを自覚して、また温度が上がった。

「何者なんだろうね、あの子？」

「……うん、格好良かったね」

「え、何て言ったの。なのは？」

「えっ！ なっ！ なっ！ 何でもないの！ にゃははは……」

結局、なのはが帰宅した後も、なのはの体から、熱が抜けていくことはなく、家族に大いに心配されることとなった。入浴後も布団に潜った後も、熱病に浮かされたように冷め遣らぬ興奮に、なのはは身を任せる。目を瞑って、昼間の出来事を振り返る。何度も、何度も、あの娘のことを思い返すと、安心感がなのはを包み込んでいく感覚がして、段々と意識が深いところへと埋没していく。

また、逢いたいなあ。

「もつと、お話したいなあ」

あの合体したジュエルシードの暴走体と戦うまでは、なのはの心は誰かに必要として貰いたい、それだけだった。良い子でいたい、そんな強迫観念にも似た目的以外の物が、今のなのはの胸の内には確かに存在する。

私だけの力、あの娘と同じ色の、魔法の力。

昨日までの自分から、ほんの少しだけ、変わったような気がした。浮かんで消える泡のような思考を最後に、なのはは意識を手放すのであった。

格好付けて、別れようとしたのに。

なのはに呼び止められた所為で、シュテルは、バリアジャケットに覆面、レイジングハート装備と言う、ご近所さんに見られたら立場の危うい格好で歩かざるを得なくなっていた。神社から離れた場所まで歩くと、なのはの追跡を警戒して飛翔し、月村邸の最寄の物陰で変身を解く。念のためにとすずかに持たされている伊達眼鏡を身に付けると、住処の門を目指して帰路に着いた。

目立たないように手のひらで頬を叩き、平常心、平常心と反芻する。基本的に、シュテルは友人に対して、ちゃん付けもさん付けもしない。歳がある程度離れているのなら何かしら考えるが、フェイトと組んで馬鹿みたいに模擬戦模擬戦言ってくるシグナムなどが良い例である。トイレの中まで待ち伏せる人に敬称は要らない。

まさか自分にちゃん付けされるのが、あんなに恥かしいことだとは思わなかった。

火照った頬をぺちぺちと叩いて、熱を冷ましながら、高町なのはのことを考えていた。魔法の才能は、凄まじいの一言に尽きる。封

印魔法にしる、起動パスワードの省略にしる、無意識にその発想に辿り着くのだから、天賦の才を持っていることは間違いない。

しかし、その実、中身の方は、矢張りと言うか何と言うか、高町なのは高町なのとは言うか。シュテルほど酷くはないのだろうか、若干の歪みを内に抱えていることも見て取れた。誰かに無条件で肯定して欲しい、もっと期待して欲しい、そんな欲求があったから、シュテルの言葉にああも反応したのだ。

なのはが泣いていた時は、やっぱり助けに来ないほうが良かったのではと不安になったものの、何とか最後には調子を取り戻すことが出来たようで、来週にはまた元気にリリカルマジカルしている彼女の姿が見られることだろう。アドバンテージが奪われることを恐れて、簡素な射撃と近接の他には、割と難易度高めな砲撃魔法しか使用していないので、簡単には真似されることはないと思う。

思えばあの砲撃は、フェイトとの初戦で思い付いて実行したものだ。思い入れもそれなりにある。なのはが使うにしる、適正などの関係もあるし、大技だけあって一般的に習得も難しい。簡単には、多分、きつと、いかない。

「このジュエルシード、21番だったんだ」

手の中で玩んでいた宝石。

もう一つのジュエルシード、リアルXⅩI。直後の襲撃やどたばたで番号は確認していなかったが、シュテルがこの場所に転移した際に一緒に流れ着いた、未来のジュエルシード。恐らく、カプセルの形をしていた思念体は、シュテルの思念を吸収して発動したのだと考えられるが、詳細はシュテルにも分からない。

ただ、改めて手元のジュエルシードの魔力反応を見る限り、昨日まで調べていた13番とは若干の違いを感じる。違和感程度ではあるが、ロボットと同じ魔力結合を阻害する領域を展開していたことから、もしかしたら、結合阻害にエネルギーを引き出しやすいよう、

何かしらの細工を施されている可能性もある。

魔力の結合を阻害する。魔法が使えなくなる。そう言えば、時の庭園で見た虚数空間とやらも同様の効果を持っていたと覚えがある。専門ではないので分からないが、強ち見当違いという訳でもないのかも知れない。

何にせよ、少なくとも、これ一つあればこの世界のジュエルシードを調べるよりも、何か理解できる確率はずっと上がる。ユーノの元々のジュエルシードを奪う必要もないこともあり、思わぬ儲け物だった。

『マスター、マスター』

歩きながら、思考を平常運転させていると、レイジングハートの呼ぶ声がした。

意識を浮上させると、テンション高めにシュテルを呼ぶレイジングハートは、瞬くように小さく発光を繰り返している。桜色の発光現象は、現代技術を使用した物と比べ、繊細で幻想的な輝きをしているので、見る者が見れば怪しまれることになるのだろう。

いつもなら、レイジングハートを嗜めるところであるが、今のシュテルは、普段のシュテルとは一味違う。少しだけ、本当に少しだけ、テンションが高かった。

『やりましたね、マスター！』

「うん、や、やったね、レイジングハート」

レイジングハートを両手で包んで、小躍りしたい気持ちを抑えて、小さく飛び跳ねた。こんなに良い気持ちで戦えたのは、久しぶりであった。

本当なら、昨日の夜にこうして飛び跳ねることが出来た筈なのに、思い出ブレイカー高町なのはの手によって、散々な目に遭わされて

きた主従。今日の戦闘で、悲願であった魔法少女のピンチに颯爽と駆け付ける謎の魔導師を達成し、シュテルの心は綺麗な感情で満たされていた。レイジングハートと共に「がんばったよ、私、がんばった」と喜びを分かち合うシュテルは、童心に返って笑顔まで浮かべている。

『最後の砲撃とか、凄く良かったです！ 目に物見せてやりましたね！』

「ありがとう。でもね、レイジングハートが応援してくれたから、わたしも……がんばれたんだよ」

本日の戦闘中、シュテルの思考の大半は、どうやって見栄えを良くするか、その一点に傾けられていた。

何と言っても高町なのはの前で戦うのだから、見つとも無い真似をすれば、二度と立ち直れないことも考えられた。ちよつと演出過剰なくらいが丁度良い、とのレイジングハートのアドバイスを的確に守りながら、余裕のある戦闘を心掛け、シュテルは最後までそれをやり遂げることが出来たのであった。

宝石状のレイジングハートを胸に抱いて、一人テンション高くにやにやしているシュテルは通行人からやや白い目で見られていたが、そんな小さなことが気にならないくらいには晴れやかな気分だった。「レイジングハートが」「マスターの方が」と、現役の魔導師が見たら引くくらいにお互いの奮闘を称えあいながら歩いていると、月村邸へ到着する。

流石にこのような状態で月村家に帰っては、からかわれることは目に見えている。すずかにも、きつと何があったのか根掘り葉掘り聞き出されることだろう。緩んでいた気を引き締めるように咳払いを一つすると、普段のシュテルへと気持ちを切り替え、玄関の扉を開く。

「ただいま帰りました」
「お帰りなさいませ、シュテルお嬢様」

別人のように口調を切り替え、帰宅したシュテルを出迎えたのは、珍しくノエルであった。

屋敷の端から端へ、忍の手伝いと世話しなく働いているノエルが、夕方も前にこうして手が空いている状況は珍しい。珍しいとは言え、絶対にないと言う訳でもないので、ファリンが頑張っているのだろうと、この時のシュテルは気に留めなかった。

恭しく頭を下げて出迎えたノエルを、シュテルはじと目で睨みつける。

「……何度も言ってますが、お嬢様はやめてください」

「何度仰られても、こればかりは承諾しかねます。ああ、そうでした。すずかお嬢様がお部屋で待つて居られますよ」

ノエルに促され、シュテルはすずかの部屋へと向う。

何度言っても同様に話を逸らされたりして、のらりくらりと回避されるので、今では半場諦めてしまっている。部屋への向う際に、何故か付いてくるノエルが気になったが、すずかに何か用事でもあるのだろうか、シュテルは大して疑問に思うことなく流してしまっただ。

すずかは、初めてシュテルの血液を吸った時よりも随分早く回復した。と言ってもお昼前ではあったが、前に比べれば大分早い。昨夜は僅かに残っていた理性が歯止めを掛けたのか、吸血の途中ですずかは気を失ってしまった。

だからこそ、戦闘を終えたシュテルも体力に余力を残している訳であるが、すずかはそう言う訳にもいかない。起床してからも何処かぼんやりしており、学校を休む訳にはいかないと言うので、不安に思ったシュテルが普段とは逆に付き添って登校したのだが、大丈

夫だっただろうか。

「どうぞ、お入りください」

シュテルが部屋の前に着くと、何故か妙に威圧感を感じた。

上手く説明出来ないが、雰囲気重い。ノエルも言葉の割に扉を開けるでもなく、少し離れた位置からシュテル入室を促すだけしかしない上に、普段からすずかの部屋の周りをうるちよろしている猫の群れも、物陰に隠れるようにして鳴りを潜めている。嫌な、予感がする。

だからと言って入らない訳にはいかないのです、大きく深呼吸をして扉をノックすると、いつもと変わらない明るいすずかの声で「入っていいよ」と声がした。逆にそれが、シュテルの恐怖心を煽る。

恐る恐るシュテルがすずかの部屋へと入ると、そこには、暗黒空間が広がっていた。

カーテンは全て閉め切られ、電気も付いておらず、真っ暗なすずかの部屋の奥の方に、恐らくすずかであろう人影が直立している。俯き加減の顔に髪の毛が掛かっており、表情を確認することは出来ない。何処のホラー映画だと思いつつ、シュテルはすずかに近付きながら、声を掛けた。

「すずか、どうしたの？ 電気くらい……」

「……どうして、最近、お家に居てくれないの？」

髪の間から覗いた紅い眼が、シュテルの瞳を射抜いた。

ゆっくりと近付いてくるすずかに恐れをなして、無意識の内に後退る。確かにレイジングハートが復活してから今日までの三日間、家に居てすずかを出迎える側だった筈のシュテルは、積極的に外出していた。すずかの言いたいことは重々理解しているだけに、シュテルは視線を明後日の方へと向けて、真っ赤な瞳から目を逸らすこ

としか出来ない。シユテルの沈黙に勢いを付けたさすが、畳み掛ける。

「シユテルちゃんが待ってると思って、今日、急いで帰ってきたのに……お外で何してたの？」

「ま、魔法の練習を……」

「嘘、吐いてる。帰ってきた時のシユテルちゃん、すごく嬉しそうだったもん」

いつの間にかすずかの手の中にあたりモコンをテレビに向けてと、今まで月村家では見せたことのないような無邪気な笑顔で、足取り軽く玄関へと向うシユテルの姿が映し出される。

高町なのはならいざ知らず、シユテルがこれを行っている様を見られるのは、悶死するほど恥かしい。

羞恥と、己の迂闊さを呪いながら、シユテルは両手で顔を覆った。映像で残っていると言うことは、何れこの屋敷の住人全てがこれを見ることになる。それ以前に、すずかが独力で監視カメラを利用するとは考え難い。少なくとも、忍は既に裏切っている。

何時になく強気なすずかは、一步一步と着実に距離を詰めながら、シユテルを更に追い詰める。

「練習だって、連れてくつて、約束したのに。私、まだ一回しかシユテルちゃんの魔法、見てないのに。昨日だって、泣きながら帰ってきて、すごく心配したんだよ。それなのに、今日も内緒で……」

「それは、その、ごめんなさい」

「謝っても、許してあげない。昨日の夜だって、態と肩はだけで、あ、あ、あんなこと、させて、私だって、私だって、怒るんだから」

これは、非常に厄介なことになった。

こうなってしまうたすずかは、手に負えるものではない。持ち前

の高速思考でそう結論付けたシュテルは、じりじりとシュテルに
じり寄って来るすずかから後退り、後ろ手にドアノブを手繰り寄せ
ると、逃走を計るべく扉に力を込めた。

しかし、扉が開くことはない。再度力を込めるも、扉の向こうに
バリケードでも在るかの如く、シュテルの非力な腕力ではびくとも
しない。鍵が掛かっているのかと確認しても、内側から掛ける鍵で
ある以上、シュテルが掛けない限り、掛かっている訳もない。

不思議に思い、扉に耳を当てて外の物音を探ってみると、何やら
女性が、「申し訳ありません、申し訳ありません」と念仏のように
唱えている声が聞こえた。噂には聞いていたが、凄まじい力で押さ
えられている扉に、月村家脅威の技術力を実感する。力一杯扉を叩
いてみても、ノエルの謝罪の声が大きくなるだけで、力を緩めるこ
とはない。

どうやら、味方なんて、初めからこの屋敷には居なかったようだ。

「……また、どこか行くの？」

直ぐ後ろに居る誰かの声がした。

耳に掛かる息と、背中に感じる冷たい体温。もう、逃げられない。
咄嗟に理解したシュテルではあったが、諦める訳にはいかないと、
眼前の扉を拳で叩き続ける。

誰かの冷たい指先が、シュテルの腰元に添えられた。「ひっ！」
と柄にもなく可愛らしい悲鳴を上げると、背中に感じる圧迫感が増
す。腰に張り付いた手は、這い上がるように、ゆっくりと上へ、上
へと登ってくる。気の所為でなければ、耳に掛かる息も、興奮して
いるのか荒くなっていた。

確かな身の危険を、感じる。

「ひっ、あっ、あっ、いやですっ！ ひゃっ、出してっ！ ノエル
！ だ、出してください！」

「……ねえ、知ってる？　輸血パックつて、すごく美味しくないんだよ」

「だして……ひ……無理、矢理は……や……ん……やめて、すずか……」

「シュテルちゃんに……教えてもらったんだ」

「ん……や……あ……あ……」

それつきり扉を叩く音は止み、シュテルの体が、影の中へと消えていく。

吸血姫に捕まった獲物は、巢の中に引き摺り込まれて、夕食にされてしまうのだろう。日頃からシュテルに不満を訴えていたすずかの溜飲が下がってくれることで、明日からの安定した平和が約束される。そのためには、多少の犠牲は付き物である。

扉の外で罪悪感から謝罪を続けながらも、万力のような力で扉を固定していたノエルは、扉に掛かる力がなくなると同時に、その場に座り込んだ。今日のシュテルは珍しく何だか機嫌が良さそうだっただけに、物凄く悪い事をしてしまった感覚に苛まれる。忍とファリンの賛同で多数決に敗れた以上は、従うしか選択肢はなかったとは言え、何てことをしてしまったのだろう。

そんなノエルの思考とは裏腹に、体は扉の向こうから僅かに漏れる喘ぎ声を聞こうと、扉に張り付いていた。

頑張っても報われるとは限らない。

そんな言葉を体現する主を想い、邪魔だとはかりにすずかに上着ごと放り投げられたレイジングハートは、部屋の隅で涙を流すのであった。

六話（後書き）

噛まれてるだけですよ。言うまでもないと思いますが。

誤字は随時修正更新していきます。

金曜日から沢山の方にお気に入り登録して頂き、五話投稿前と比較して、現在大凡四倍となりました。紹介して下さった方、新たに読んで頂いた読者の皆様に感謝致します。

読んで頂ける方が増えることは、私にとっても至上の喜びであります。同時に、しばかれて海に捨てられるのではと戦々恐々としております。どうかお手柔らかにお願い致します。

七話

暗い部屋の中、すずかは捕らえた獲物を味わっていた。

弾力のあるベッドの上で、既に気絶してしまつたシュテルを組み伏せ、首筋に舌を這わせる。舌先に感じた二つの穴に舌先を容赦なく押し込むと、甘美な呻き声と共に、止まっていた少女の血液がすずかの口内を満たしていく。傷を刺激する度に、絡めた指や脚、密着する体全体から、シュテルの体の震えが伝わってきた。弱弱しく、時折薄っすらと開いた目で、「あつ……あつ……」と鳴く少女が、堪らなく愛おしい。虚空を見上げる少女の頭に手を当てて、いつも少女自身がしているのと同じように、髪をゆっくりと梳いてあげると、再び夢の中へと落ちてゆく。

この快樂を知つてしまつたら、もう見ず知らずの他人の血液なんて、欠片の価値も見出せない。お淑やかお嬢様ぶつて、お友達だから、吸いたくない、なんて、一皮剥けば本能の赴くままに欲しいものだけを求めてしまう。今だけだからと言いついて、本当は、ずっとこうしていたいのに。柔らかなシュテルの胸に顔を埋めると、ぴくりと小さな体が跳ねた。

いつもすずかをからかっているシュテルを、今はすずかが好きなようにしている。

どうしようもない程、背徳的な感覚がすずかの全身を走る。今の気分を表すのなら、幸せの一言に尽きる。酸欠になる直前まで口を押し付け、空気を求めて顔を上げると、上半身裸の少女の姿が良く見える。思わず、口元が緩んだ。

すずかがシュテルの首筋に付けた二つの傷口。ここ以外からは、吸いたくなくなつた。首から吸えば、どうしても体と体が密着する。抱き付いて、抱き返されて、唇や舌先に相手の肌を、お互いの体温を感じながらの吸血は、これ以上ないくらい受け入れられている感じがして、何と言うか、すごく、良い。

シュテルはきつと、何処から吸つても平気な顔をするのだから、腕や、指など、そんな味気ない場所からなど御免である。もつと、抱いていたい。シュテルの小さくてか細い体を、抱き締めたい。溢れ出る想いの向うまま、満足するまでシュテルに抱き付いているとシュテルの髪から良い匂いがした。少し前までは、すずかのシャンブーの匂いだったのに、今ではお揃いの匂い。幸せな気持ちが胸を満たしていく。

シュテルの頬に手を添えて、数分の間、何も言わずに寝顔を見詰めていると、色んな感情が湧き上がってくる。

「ずっと、残ってくれたら良いのに」

声に合わせて、腫れ物にでも触るように、慎重に、丁寧に指先で吸血痕に触れる。

すずかの体質に因るものなのか、シュテルの魔法に因るものか定かではないが、この痕は三日と経たずに消えてしまう。それが、今のすずかにはとても悲しいことのように思える。女の子の肌が付いた傷痕なんて、残らない方が良いに決まっている。理性では、そんなことは理解している。しかし、本能に近い部分では、一生残ってくれたら、そう、思ってしまう。

一目見て、すずかのモノだつて分かるようにしてしまいたい。

そんな猥染みた下種な欲望も、今は悪くない提案に思えてしまう。輸血パツクなんて、もう要らない。血なんて、本当は吸わなくなつていい。ただ、この少女だけは、胸の内に抱いていたい。弱りきつて死ぬ瞬間まで、自らの手で、護つてあげたい。

二週間近くの間、一つ屋根の下で暮らしてきた。最早友などと無粋なことは言うまい。すずかはシュテルのことを家族だと想っているし、その話を姉に打ち明けると、姉も柔らかな笑みで同意してくれた。姉だけじゃない、ノエルも、ファリンも、シュテルのことが大好きだ。

「危ないこと、しちや駄目だよ」

「んっ……あ……あっ……」

さすがが何度そう言っただけ聞かせても、シユテルは戦いに行つてしまふのだらう。

苛立ちを誤魔化す為には、再び首筋に舌を這わせる。第三者が見たら干乾びてしまふのではと思ふのだらうが、さすがとてそこまで考え無しではない。舌で傷口を撫でると、心臓の鼓動に合わせて二、三滴分の血液が溢れて止まる。それを口に含み、口内で味わい、さすがの唾液と絡み合った頃に、嚥下しているのである。ほんの少しづつ、ゆっくりと、出来るだけ長い間、こうしていたいから。

それに、吸い過ぎて体調を崩されたら、泣いてしまふ自信がある。正氣に戻った後で己の行為にどれだけ引いたとしても、このやり方をやめるつもりはない。それに、これは、これで、とても良い。良いつたら、良い。

「嘔吐したら、やだよ」

本当のことを、言っただけ欲しい。

例えさすががシユテルの嘘に気付いていても、彼女の口から、真実が聞きたい。さすがに因つて肌蹴られた胸元に、耳を当てる。とくん、とくんとリズムを刻む鼓動の音に、興奮状態にあつたさすがの意識が、眠気が誘われていく。自分の体ならば、枕代わりにされても全然平気であるが、シユテルの体の負担になるのは本意ではない。さすがはシユテルを抱き寄せたまま横に転がると、抱き枕を抱くようにシユテルの体を己の隣に持つてくる。組み伏せたままでは難しいが、これで耳を胸に当てても大丈夫だ。小さく一定の間隔ですずかの耳を打つ心臓の音をBGMに、さすがは考える。

さすがに話してくれないのは、何故だらうか。

答えは、最初から知っている。さすがが、無力だからだ。さすがは、大人に負けない力を持っている。でもそれは、フィジカルな意味での話しに過ぎない。傷を癒したり、空を飛んだりする魔法の力には、遠く及ばない。巻き込みたくない、心配させたくないと考えているシュテルは、さすがに何も教えてはくれないのだろう。

シュテルの気持ちを嬉しく思うと同時に、悔しさが込み上げてくる。魔法の力が無くても、自分に出来ることを、そう思っていた。今でもその気持ちに変わりはない。けれども、実際に何が出来るのか、分からない。毎日一緒に居ることしか出来ないすずかは、本当にシュテルの助けになれているのだろうか。不安が、胸を苛む。

シュテルと一緒にのんびりしている時、彼女の心は癒されているのだろうか。

昨日も今日も、こうしてシュテルの血を吸った。今日など特に最低な行為を行ったというのに、気絶する前にシュテルはすずかの首に手を回してくれた。「ありがとう」と最後にすずかの耳元で囁いて意識を失った少女が、何を考えているのか、少しだけ分かるような気がする。

どんな形でも、誰かに必要として欲しい。

シュテルは、きつと不安なんだろう。すずかに吸血して貰うことで、心の安定を保っている。まだ必要とされていることを、再確認している。そんな、気がしてならない。すずかの心を、未知の感情が締め付ける。切ないような、苦しいような、言い表せない程に色々な感情が入り混じっていた。

力一杯、強く抱き締めたい。その欲求以上に、壊してしまいたくない。傷付いて欲しくない想いの方が、ずっと強い。

「シュテル、ちゃん、泣いてたら、やだよ」

私も、泣いちゃうから。

血液を求める衝動は、既にすずかの深い所に隠れてしまっていた。

抱かれているような状態から、逆に頭を抱いて髪を梳くと、シユテルは幸せそうに口元に笑みを浮かべる。護って、あげたい。この娘を泣かせる全部から、この娘の心を護ってあげたい。

求めてくれるなら、何度だって吸う。吸わせて、欲しい。それでシユテルの気持ち晴れるなら、すずかに出来ることなら、何だつてする。

だから、だから、私を置いてお外になんて、行かないで。いつもみたいに、部屋で待つて欲しい。

無理なことだと、本当は分かっている。今は、血を吸い過ぎて、正気じゃないんだ。正気じゃないから、今だけは、どんなことを思っただって許される。明日のすずかは、覚えていないだろうから。

シユテルの後ろ髪を撫でながら、すずかは全部忘れようとして瞳を閉じた。そんなこと、考えてない。考えては、いけない。自己暗示のように繰り返し繰り返し心の中で唱えていると、シユテルを抱いている感覚以外が遠ざかっていく。

明日は、二人で出掛けよう。

今日見たシユテルの笑顔に負けたくなくて、そう決意したのだった。

アリサ・バニングスは、充実した休日を過ごしていた。

午前中はなのはとすずかの三人で、なのはの父、高町士郎が監督を務める翠屋JFCの試合を観戦し、オープンテラスでケーキをこ馳走になりながらなのはのペットのユーノと戯れ、午後は多忙で休みの取れない父と久し振りにシヨッピング。非の打ち所がないほど完璧な休日の予定だった。いつぞやと、同じ轍は踏まない。アリサ・バニングスの辞書に二の舞の文字は存在しないのだ。

不敵な笑みを浮かべながら、父との待ち合わせ場所に向うアリサは、ふと、友達二人のことを考える。最近、何だかすずかもなのは

も様子がおかしい。疲れているとか、具合が悪そうとか、そういうことではなく、上手く言い表せないが、兎に角、絶対に何かあったことは間違いない。

何をするにも凄く気合いが入っている時もあるれば、頬を薄っすら染めて窓の外をぼんやりと眺めている時もあり、そんなのはを、さすがが時折暗い瞳で見詰めていたり、様々だ。アリサの想像も及ばないような事態が、アリサだけを蚊帳の外に放り出して起こっている。気がする。

今日だって、午後から姉とお出かけと言っていたはずかは、眼が、何と言うか、尋常ではなかったし、ずかだつて動物好きの筈なのに、ユーノに積極的に触ろうとしていなかった。小さな違和感、なのかも知れない。別に、気をつけて見ていなければ、二人は普段とは変わらないし、アリサの気にし過ぎなら、それで良い。良い筈なのに、どうにも変な違和感が抜け切らずに残っていた。

「何か、調子狂うわね。まっ、いつか、楽しかったし」

ずずかと別れ、どうせ近い距離だからと、迎えを呼ばずに歩くことにしたアリサ。偽なのはを追走してから早一ヶ月近くにもなるが、ずずかにならまだしも、体力で偽者とはいえないのはに負けるのは納得がいかなかったアリサは、最近体力作りに余念がない。

なのはをお姫様抱っこできるくらいには頑張りたい。

その一心で、今日まで続けている。一心は一心でも、限りなく邪念に近いのだが、本人は崇高な目的だと思っっているので全く苦にはなっていない。太陽が眩しいなあ、とスポーツ少女を気取って抜かしたアリサが、今日は最後まで良い日になりそうだと、伸びをしなから歩いてきた時のことだった。

「すみません、コーヒーのおかわり頂けますか？」

先のアリサ達三人と同様に、喫茶店のオーブンテラスに腰掛けた同年代くらいの少女が店員を呼んでいた。忙しなく対応して去っていった店員を可もなく不可もなくと思ったのか「ここも来年には翠屋に……」と不穏なことを呟いている。別段そこまでなら、気に掛けたりはしない。アリサが反応したのは、少女の声。他の誰某ならいざ知らず、口調や声量の違い程度で、なのはの声を聞き間違えたりはしない。

初対面の時とは違い、眼鏡を掛けて、今日のすずかの格好にも似た清楚な服装に身を包み、首元を隠すように黒いチヨーカーが映える。少女は、手元の本を読みながら、時折時間を気にして腕時計を見ている。アリサはこの気を逃すと二度目はないと獣のような直感に身を任せ、少女の対面の席まで歩くと、黙ってそこに腰掛けた。アリサに気が付いた少女と、視線が合う。

「……………はあ」

溜め息が、一つ。

それっきり、少女は手元の本へと視線を落とし、アリサを居ない者として読書を続行した。頭の後ろの方で、何かがぶつとりと音を立てた。けれども、まだ、アリサは怒ったりはしない。アリサはなのは分とすずか分を補充したことによって、寛容さには若干の余裕がある。あたしは大人、と心の中で三回繰り返し、少女へと話し掛けた。

「ねえ、ちょっと、こっち向きなさいよ」

「……………何ですか、アリサ？」

「……………なんであたしの名前知ってるのよ」

「追いかけられた時に、そう呼ばれていました」

まあ、そうか。と納得してしまい掛けた自分に湯を入れたアリサ

は、思い出して時計を見た。まだ待ち合わせまで時間があることを確認すると、文庫本を片手にコーヒ―を嗜む少女を見遣る。見れば見るほど、なのはに瓜二つだ。良く良く見ると、眼鏡に度が入っていない。見た目を誤魔化すための伊達眼鏡だろうと予想をつけたアリサは、恐る恐る少女に尋ねた。

「その、あなた、さ。なのはの、なに、なの？」

「なんだと思います？」

「そ、それは、あれよ……い、生き別れの姉妹、とか」

「……やっぱり、そう見えますか」

そう言った少女は、本を閉じると真剣な眼差しでアリサを見詰めてきた。

出会ってからは大体人を括ったような忌々しい表情しか見たことがなかったが、こうして改めて問い掛けてみると、双子か何かとしか思えない。高町家の大黒柱と午前中に話したアリサだったが、士郎の様子からはとても複雑な家庭事情を抱えているような男性には思えなかった。いや、でも、なのはと他の兄と姉は歳が離れているし、まさか、そんな、けれど、もしかしたら。そう考えると、何処も彼処も灰色に見えてきてしまう。アリサが一人百面相を繰り広げていると、ふと、悲しげに顔を伏せた少女の姿が視界に映った。

思わず、血の気が引いた。知らなかったとは言え、人様の家庭事情に土足で踏み入ったばかりか、現在進行形で対面の少女の心の内を踏みにじってしまったている。少女が眼鏡を掛けたり髪を切ったりしてなのはと姿を似せないようにしているのは、それこそ、複雑な事情があるに違いないのに。アリサは罪悪感から、勝気な普段の態度からは創造できない程の悲壮な表情を見せると、少女の手を両手で包んだ。

なのはと変わらない、柔らかくて自分と同じくらい小さな手の感触を確かめると、再度申し訳なさがアリサの感情を埋め尽くした。

いったい、何てことをしてしまったのだろう。思い返せば、初対面の時も、逃げる少女を怒りの感情のままに追い掛けてしまった。戻れるのなら、あの時の自分を張り倒してやりたい。アリサは、震える唇を一度甘く噛み、覚悟を決めて口を開く。

「ごめんなさいっ！ あたし、事情も知らないで勝手なことばかり言っただけ、辛い思いさせて……で、でもね、あ、あたしにできることなら、何でも力に」

「ドラマの見過ぎです」

「だと思っただわよっ！ この、ばかちんっ！」

しれっとした態度で言い放つと、再び本へと視線を落とす少女。

ここまで誰かの首を絞めたいと思ったのは、生まれて初めてだ。続け様に放とうとした罵倒が出て来ず、真つ赤な表情のまま、口をぱくぱくと開閉するしかないアリサ。少女は珍しいものでも見付けたように、ちらちらと此方を伺っては口元に握り拳を当てている。間違いなく、笑われている。

悔しい、心底悔しい筈なのに、なのはが微笑を浮かべていると判断したアリサの脳が、勝手に口元を弧に歪めていく。節操がないアリサの表情筋を見て、俯く少女の体の震えも大きくなった。腹を抱えて笑いたいのだろう。耳元が少し赤い。アリサも、そんな少女を見てにやにやする。可愛いなんて、思っただけ。

負の連鎖が収まった頃、アリサは脱力して予め注文していた紅茶で口を潤した。既に、怒りはない。嘗てない大きな怒りに感情がパニックしてしまった、と言うことにしておいて欲しい。テーブルに突っ伏してじと目で少女を睨むと、小さく首を傾げてきょとんとした目で此方を見ている。不本意ではあるが、ちよつとだけ、きゅんとした。

「……なんか、もう、いいわ」

「賢明な判断です」

どうせ何を聞いても、応えてなどくれないのだろう。

店内に備え付けてある時計に目を向けると、父親との約束の時間も迫っている。アリサとて、いつまでもここうして名も知らぬ少女とお茶を楽しんでは居られない。少女の方も時間を気にしているのか、チョーカーの位置を直しながら、腕時計に目を遣っている。予定があるのはお互い様らしい。

「あんたは、これからどこ行くのよ？」

「一泊二日で家族旅行だそうです。行き先は私も知りません」

「へえ、いいじゃない、そういうの。あたし、結構好き」

「私も、嫌いではありません」

照れたのか視線を逸らして言う少女に、アリサも笑みを深める。

何だか、割と普通に話せる奴だ、とアリサは少女への認識を改めた。

世界には似ている人間が、少なくとも三人くらいは居ると言う。

複雑な事情とか、生き別れとか、テレビの中にしかないようなことを考えるより、偶々似ているだけ、そう考えた方がずっと現実的ではないだろうか。そんなもんだらう。二度とチャンスは無いとか考えたが、海鳴とてそこまで広大な街でもない。この喫茶店近辺に住んでいるのなら、またその内会えるかも知れない。

当たり障り無い会話を交わしながら、お互いに時間を潰していたアリサと少女だったが、気が付くと時間に余裕が無い。慌てたアリサが、お金を置いて席を立つ。最後にまたね、くらい言ってやろうと少女を見ると、複雑そうな表情でアリサを見ていた。

「……アリサ」

「なによ。て言うか、そろそろ名前教えなさいよ」

「父親と出掛けるの、明日にしませんか？」

なんで知ってるのよ。

そう切り返そうとしたアリサを、強い揺れが襲った。地鳴りもなく、唐突に、それこそ地面に巨大な何かでも落ちてきたみたいに、巨大な揺れ。混乱してテールに隠れようとしたアリサだったが、「ちっ」と言う舌打ちの音に気付き、少女も引き入れようと手を伸ばす。揺れの中でも平然と立ち尽くして空を眺めていた少女に違和感があったが、何が倒れてくるとも限らない。放つては、置けない間に合えと、限界まで伸ばしたアリサの腕が、逆に少女に掴まれた。手繰り寄せられて、少女の胸の中へとぼすんと間の抜けた音を立てて収まったアリサ。とても良い匂いがする。なのはとすずかを足したら、きつとこんな匂いだろう。邪な感情に頬を緩めていたアリサだったが、状況を思い出して少女の胸に向けて声を荒げた。

「ちよつ、ちよつと、何するの……」

『Protection』

知らない女性の声が聞こえた。

その声と共に、自動車事故にでも遭ったように、何かと何かがつかり、擦れ合う音が周囲へと鳴り響く。悲鳴を上げるアリサだったが、衝撃は一向に訪れず、恐る恐る眼を開いて少女の胸から顔を出す、眼前には木の根。少女とアリサを避けているのか、ドーム状に広がった木の根の真ん中に、二人だけが立っていた。何が起ったのか、分からない。

一つだけ確かなことは、少女に庇われたから、アリサは無事だった。そのことはアリサも理解していた。少女を見ると、相変らずの無表情のまま、指先を動かして木の根に向けながら、胸元にもう片方の手を当てていた。

アリサの目の前で、今にも暴れだしそうな木の根に、桜色の輪が絡み付いて動きを封じる。流石に、察しの悪さに定評のあるアリサ

でも、ファンタジックな何かに巻き込まれたことは、何となく分かった。少女の邪魔にならないように、背中に張り付くと、そつと声を掛ける。

「……あんた、さ。あれなの、ほらあれ、あー、魔法、使い？」

「恩を感じているのなら、内緒にしてください」

「言っただって誰も信じないわよ。それよりこの根っこ、どうにかしないと」

「どうにかするのは、この街の魔法少女に任せます」

まだ、他にも居んの。

アリサの驚きを受け流した少女は、粗方拘束し終えた根っこを見渡し、漏れがないこと確認すると、人気の無い方へと走り出した。付いて行こうと思ったが、変身シーンとかだったら気まずい思いをすることになる。少女の背中に向って、アリサは声を張り上げた。

「あたしはっ、何すればいいのよっ!」

「そこで待っていてください。直ぐに終わります」

それでは、さらばです。

最後にそう言い残して、少女の姿は路地へと消えていった。暫くの間ほかんとして路地を見詰めていたアリサだったが、飽きてしまひ今度は根っこへと目を向ける。桜色の輪に拘束された根は、膨張しようとしてハムみたいに締め上げられている。恐る恐る輪っかに触れると、じんわりと熱を帯びているのが分かった。

今日は、色々な意味で眠れない日になりそうだ。

考えながら、アリサは鳴り止まない携帯電話を黙らせるべく、それを耳に宛がうのだった。

シュテルは、飛行を続けながら根を拘束し続ける。

街中に広がった根は、アスファルトを押し上げ、車を押し退け、打ち上げていく。膨張しきる前の根であれば、こうして拘束することで動きを封じることが出来るが、どうしても、手が足りない。それでも、嘗て自分自身が戦った時よりも、被害は格段に少なく済ませることは出来る。して、見せる。

大本を封印することは、簡単だ。しかし、高町なのはが覚悟を決めるには、この出来事は必要になる。来る可能性があるのであれば、迂闊に手を出す訳にはいかない。シュテルに出来ることは、裏方に徹して、被害を少しでも食い止めること。悲鳴を上げる声を頼りに優先的に根を拘束し、時には根元から撃ち貫いて、シュテルは一箇所一箇所、地道に制圧を続けていく。

元々、発動の原因となつた恋人二人を隔離することが目的のような節もあり、根は勢い良く近付いてくるものの、人が近くにいと勢いを無くす。シュテルの時は規模の割りに死人も出ず、建物の上や隙間を縫うように膨れ上がって、怪我人も皆掠り傷程度だったが、油断は出来ない。アリスのように、場所によっては力強い膨張に巻き込まれる危険性もある。

神社でジュエルシードを封印してから、既に一週間以上が経過している。高町なのはは、あれから苦戦もなくジュエルシードを封印していた。シュテルはどの戦いにおいても、遠方から少女の姿を見守っていたが、本格的に二度と出番はなさそうであった。なのはは何処までも魔導師向きな胆力を備えていたこともあり、精神的に追い詰められた様子もなく、寧ろ日増しに元気になっているような気さえる。

今回とて、シュテルとは違い、発動前に封印してしまうのではと思っていた。しかし、やせ我慢して疲労を溜め込んでいたのか、自分自身でも疲れに気が付いていなかったのか、高町なのはの初動はいつになく遅い。少なくとも、近くになのはの魔力は感じない。こ

うしてシュテルが出張る程度には、状況は切迫している。

『遂に、私達の出番のようですね』

「……駄目だよ、レイジングハート」

『甘やかすと付け上がりませす。予定もありますし、手早く終わらせましよう』

本日は、月村家一行で旅行の予定であった。

忍やすずかの都合で午後出発となったので、暇潰しとジュエルシードへの保険も兼ねて、喫茶店でのんびりしていたシュテル。すずかに折檻という名の猥褻行為を受けてから、暫くの間大人しくしていたこともあり、こうして単独で外出の許可が下りたのだった。歓迎会兼家族旅行だと聞いてから、すずかは家中のカレンダーに丸を付ける勢いではしゃいでいた。本日も朝から気合い十分に早起きし、瞳をきらきらと、時にきらきらと野生動物のように輝かせるすずかの喜び様を見ていたシュテルだけに、集合の時間に遅れる訳には行かない。

レイジングハートの提案も、また魅力的に感じる。

もしこのまま高町なのはが来ないのであれば、被害は増えるばかりで、収束はしない。いつそのこと、本当に封印してしまおうか。ジュエルシードを置いていけば、後は勝手にどうとでも解釈してくれるだろう。伸びるだけ伸びれば満足して成長を止めることは知っているが、伸びきってしまうと建物と干渉する上、破片や瓦礫で二次被害が起きる。やるなら、早い方が良い。

「……仕方ない、かな」

『やつちやいませう！ あの小娘の度肝を……』

抜いて、と続く筈だったレイジングハートの言葉を掻き消して、轟音が頭上を通過していく。

シュテルと同じ、桜色の閃光。遙か後方より撃ち込まれた砲撃魔法は、力強い輝きを放ちながら、真つ直ぐに木の根が展開する中心へと進み、直撃した。木の根を従える大樹は、僅かに砲撃魔法に耐えるも、抵抗も空しく桜色の極光の中へと飲み込まれていく。桜色の魔力光など、シュテル以外には地球に一人しかいない。誰が撃つたかなど、シュテルとて理解している。どんなに信じがたいことだとしても、胸を締め付ける苦しみと共に、受け止めなければならぬ。

一撃必殺の砲撃魔法を、あんな後方から、何処にあるかも分からないジユエルシードの本体に、命中させたと言うのか。少なくとも、本体を探すにはエリアサーチを展開する必要がある。しかし、不慣れな魔導師が俄仕込みのサーチを行ったとて、範囲は高が知れている。神社でも先頭から今日までの間、高町なのはが封印以外の魔法を使った様子はない。だとすれば、今回が初使用である可能性が高い。それに、前にも述べたが、砲撃魔法はそう簡単に使えるものではない。シュテルがフェイト戦で使用したのも、拡散するだけの所謂飛ばない砲撃。広範囲で短い距離を吹き飛ばす砲撃擬きが偶々近接戦主体のフェイトと相性が良かったに過ぎない。だから、分かる。見ただけで、練習無しに一発成功なんて、出来る訳がない。

シュテルの時は、どうだったろうか。エリアサーチは行えても、範囲が狭いために距離を詰めて飛びながら探し回った。高町なのはが今行った封印と比べて、何と無様なことだろうか。遠距離から本体を見付けて、砲撃魔法で直接封印なんて、格好良いじゃないか。疲労で発動を見逃して、焦りながら、半泣きで本体を探していた自分が、酷く無様に思えてならなかった。

適う訳、ないじゃない。

「……私の、砲撃魔法」

「ま、マスター、あ、あんなのか、形だけで、マスターの砲撃に比べたら……」

「うっん、気にしてないよ。全然、平気。大丈夫だから、レイジングハート」

『ほ、本当ですか……？』

「うん、本当に本当。でも、ちょっとだけ疲れちゃった」

レイジングハートの懸念を他所に、シュテルは気にしていない素振り、手近なビルの屋上に降り立つ。

風に靡く髪を撫で付けると、自然な動作で女の子座りして、空中に溶けるように消えていく木の根を眺める。シュテルの精神も、ずずかの献身もあつて強くなっているのだろうと、主人の成長に涙無くしては見ていられなかったレイジングハートは、少しの間だけシュテルから注意を逸らした。エリアサーチを使ってきた以上、此方の位置も割れている可能性が高い。主人を護るために索敵を行わなければと考え、実行に移す。

「……砲撃、フェイトとはやてが、よく褒めてくれたんだ」

『マ、マスター……？』

「なんでもないの、ごめん。私なんかマスターで、ごめんね」

『き、気にしてるじゃないですか！ 私は、マスターがマスターじゃないと駄目なんですっ！』

シュテルは、空を見上げることで、涙を溢さないように努めていた。

いつの間にか、座り方も体育座りに変わっている。必死で堪えていたのに、零れ落ちた涙を、腕を目元に当てて隠し、小さくなった体を震わせている。「ごめんね」と時折聞こえる声に合わせて、レイジングハートの柄を撫でるシュテルは、誰がどう見ても再起不能の傷を負っているように見える。耐え切れなくなったのか、レイジングハートを掻き抱いて、すんすんと声を殺して泣くシュテルに、機械の体の大事な部分が軋みを上げていく。機械の体を、今日ほど

恨めしく思ったことはなかった。叶うのなら、シュテルを抱き締めることが出来る、生身の体が欲しい。胸部が豊満なら、尚良い。

シュテル自身、もう何も見たくなかった。

泣き喚いたら、もっと惨めな気分になるから、出来るだけ我慢して居たかった。涙を拭うと、何でも無いように空を見上げ、泣いている姿を晒すまいと零れる何かを拭い続ける。強い子の振りは得意だからと、己の心を奮い立たせていた。

『が、我慢しなくていいんですよ！』

「だって、すずか……ひつ……楽しみにしてたのに、泣いてかえたら、しんぱい、させちゃうし」

『……私だって、心配してるんですからね』

「ん……ありがとう」

早く、お家に帰りたい。

シュテルの気持ちは、自分を受け止めてくれる誰かを求めていた。これから皆で旅行だと言うのに、自分の所為で台無しにしたくは無。い。すずかに、これ以上心配ばかり掛けさせる訳には行かない。そう考えていると、不思議と涙が引いていく。ちよつとだけ、元気が出たような気がした。両足に力を込めて、手摺りに寄り掛かりながらシュテルは立ち上がった。

もう、この場所に用は無い。

それどころか、高町なのはには、シュテルの助けなど、最早必要ない。不測の事態が起こったとしても、彼女ならきつと何とかしてしまう。これから先、フェイトとの戦いが始まる。二度と、こうして戦いに割って入ることなどないだろう。それで、いい。元々居なかつた人物が、再び居なくなるだけのこと。

シュテルの体が、ふわりと宙へと浮かび上がる。時間に、遅れてしまう。急ごうと、シュテルが月村邸へと体を向けた時のことだった。

「い、こんにちはっ！ シュテルちゃんっ！」

心臓が、飛び出るほどの衝撃がシュテルを襲った。

毎日聞いている聞き覚えのある声に振り向くと、確りとした飛行魔法で中空に佇む、高町なのはの姿があった。心なしか顔を赤らめ、もじもじと落ち着きなく視線をあちらこちらへと彷徨わせている。外見こそ引っ込み思案の少女でしかないが、今までシュテルとレイジングハートの数々の思い出を打ち砕いてきた実績がある。精神攻撃に定評のある魔法少女の出現に、瞬時に離脱の方向に思考を切り替えたシュテルだったが、戦闘も行わずに逃走すれば、月村家まで追跡される恐れがある。しかし、戦うことは、出来ない。拘束魔法を使えば、そう考えたシュテルの脳内に、先の砲撃による惨劇が浮かびあがった。

これ以上、自分自身の努力の結晶を、奪われる訳には、いかない。既に、対話以外の道は閉ざされている。せめて、手早く、穩便に事が運ぶことを祈り、シュテルは腹を括ってなのはの対面へと飛翔するのであった。

七話（後書き）

アリサは正統派にして清純派ヒロイン。

関係ない話ですが、デビサバ2が発売しましたね。本当に、何の関係もない話ですけどね。

誤字脱字は随時修正していきます。

八話

高町なのはは、今までの人生で一番の輝きを放っていた。

シュテルと出会ってから、今までの間に封印したジュエルシードは全部で二つ。初の変身時に封印した分と、神社で一緒に封印した分、シュテルから返して貰った分で、合計五つのジュエルシードを保有していることになる。昨夜、学校での戦闘でも、その前の戦闘でも、なのはは不慣れながら魔法を操って危なげなく封印に成功している。しかし、地球人であるなのはが魔法を行使することは、即ち本来であれば人体には存在しない器官を操っているようなものなのがいくら才気溢れる魔法少女とは言え、人間、しかも小学三年生の女の子である以上、疲労は免れない。感じたことのない眠気に襲われ、ふらついたことも生まれて初めてである。

体は休息を求めている。それに反して、なのはの心は昂揚していた。

ユーノと出会って、一週間と少し。その間に行われた戦闘は、一度。一度は命の危機も味わったが、他の三度は戦いと呼べない程、なのはにとっては容易い相手であった。杖を手にするまで、使われずに錆付いていたリンカーコアをフル稼働させた所為だろうか、或いは単純になのはの体がまだ魔力に慣れていないのか、確かに体を襲う倦怠感は凄まじい。それ以上に、魔法を使う度に、なのはの思い描いた通りの結果が齎されるのが、楽しくて仕方がない。この街を私が護っているのだと、確かな実感を得ていた。

少し前の自分であれば、もっと難しく悩んでいただろう。己の力を振るうことに、戦って勝つことに、負けることに、助けることに、助けられることに。誰かに必要として貰うには、どうしたらいいのか。独りぼっちにならない為には、どうしたらいいのか。魔法の力を得た高町なのはが、どう行動することが正解なのか。どうすれば、皆の望む良い子でいられるのか。そんなものは、もう要らない。

貴女だけの力です。望むままに、振るいなさい。

力を使う度に、あの子のことを思い出す。強くて、格好良くて、可愛い、理想の魔法少女の姿。折れそうだった高町なのはを、なのはの心を、受け止めてくれた。だからこそ、私だけの力で、高町なのはの魔法で、この街を守ることが出来る。他の誰でもない、高町なのは自身の意志で、シュテルのように成りたいと想う。

大事なことは、どうしたらいいのか、じゃない。

高町なのはが、どうしたいのか。

私は、守りたい。家族を、友達を、これまで当然と思って生きてきた毎日を、守りたい。

とても難しいことだと、理解している。先日の神社での戦闘で、敗北が何を意味するのか、それを思い知らされた。高町なのはの魔力がどれ程強大でも、負ける時はあっさり負けてしまうのだと、学んだ。今だって、本当は怖い。また、負けてしまうのではないか、本当にこれからも魔法と関わっていけるのか、不安になることもある。

大丈夫。あなたなら、できる、ね？

耳元を感じた声が、なのはの脳内に響き渡り、身体が、心が、震える。思わず自らの体を掻き抱くと、高潮していく気持ちと、顕著な反応を示す自らの頬に苦笑した。不安を消したくて彼女の言葉を思い出すと、消すことは元より、まだやれる、もっと頑張れる、そんな気持ちが湧き上がってくる。何度も何度も脳内再生を繰り返している、心臓の音が煩いくらいに思えてくる程に、胸が、熱い。シュテルの声は、どうしても安らいでしまう。逢ったばかりだと言うのに、変な話だと思う。それでも、思い返しているだけで、耳が気持ち良い。頭の中が、蕩けそうになる。

だって、ずるいんだもん。

登場してからずっと堅い口調だったのに、突然そんな風に囁かれたら、変になっても仕方がない。堅い口調も、勿論良い。シュテルの冷静さや余裕が伝わってくるようで、凄く安心できる。でも、それでも、囁かれた時の破壊力は、計り知れない。寝ても醒めても、暇があれば思い出してしまふ。

そのお蔭で、授業中だというのにぼんやりとしてしまったり、だらしく笑みを浮かべてしまったり、全く身が入らない。こんな状態では、いけない。いけないのに、赤くして顔を背けた少女の姿を思い出して、また振り出しに戻ってしまう。自分に落胆して吐いた筈の溜め息も、何だか変に熱い。もう一度、逢いたい。そう考え始めると、切がない。

熱を帯びた頬を、ぱたぱたと手で扇いで、なのはは堂々巡りの思考を一旦打ち切った。

翠屋JFCの試合を観戦し終え、アリサとすずかと別れたなのはは、体の求めるままに休息を取ることにした。朝にユーノに言われた通り、魔法を使い始めたばかりのなのはが、一週間に四つものジユエルシードを封印した。これはかなりのハイペースであり、無理をして体を壊しては元も子もない。目標に近付く為に、やる気十分なのははも渋々同意し、本日は探索を休むことに決めたのであった。

「…………シュテル、ちゃん」

パジャマに着替え、ベッドに倒れこんだなのはは、はふう、と一息吐くと、小さな声で名前を呼んだ。募るばかりの想いから解放されたくて打ち切った思考が、数分の間も持たずに再開されていく。

なのはが探索に向いたい理由は、何も街を守りたいとか、もつと魔法を上手く使えるようにとか、そんな純粹な理由ばかりではない。昨夜、学校でジユエルシードの暴走体と戦っている時も、その前の戦いも、なのはは不思議な違和感を覚えていた。ジユエルシードの

発する魔力とは別に、なのは遙か後方、或いはずっと上空の方に、誰かの魔力を感じる。本来であれば、気付くことは有り得ない程極僅かな魔力。素人でしかないのはがそれに気付けた理由は、その魔力が、自分の魔力に、とても良く似ていたから。

表面上は、常と同じように振舞った。何事もなかったかのようにジュエルシードを封印し、ユーノと共に帰宅する。戦闘中も、帰り道でも、主人の意を汲み取ったのか、レイジングハートが何か言葉を発することもなかった。帰宅してトイレに駆け込んだなのはは、一際強く握り締めていた拳を開いて、汗に濡れた手のひらを自身の頬く鳴り響く胸へと当てて、思い返す。

あの娘が、いた。

その事実が、なのはの心を大きく乱した。本当は、こちらから念話で呼びかけたかった。本当は、近付いてこの間のお礼が言いたかった。本当は、緊張してレイジングハートを握る手はちよつとだけ震えていた。声を掛けてくれる訳でもなく、遙か遠くからなのはを見ていた理由はなんだろう。そう考えた時に、なのはの頭では一つの答えしか浮かんでは来なかった。

その時は、私が手を貸してあげます。

シュテルの言葉を、思い出す。21番のジュエルシードを手に入れたシュテルは、13番のジュエルシードを置いて行ったように、他のジュエルシードには興味がないらしい。それならば、あの場に黙って居る理由なんてない筈だ。なのはのこのことを見ている理由なんて、何も無い筈なのに、封印し終わるまですつと、シュテルはあそこに居てくれた。何のために、なんて、他に考え付かない。

本当に、見守ってくれているんだ。

いつでも助けられるように、守れるように。

「くう、あううう……」

身を振り、足をばたつかせて悶える。こんな姿を家族に見られたら、変な子だって思われる。ユーノにだって、聞かれたら心配されてしまう。枕に顔を押し付けて、声を極力漏らさないように努めながら「にやあああ……」と奇妙な呻き声を上げる。何だろう、この感覚は。生まれて初めて感じる、不思議な感覚。大雑把に大別してしまうなら、嬉しくて、恥かしくて、そわそわしてしまうような、そんな気持ち。兎に角、シユテルの存在に気付いてからと言うもの、寝る前になって物思いに耽ると、胸の鼓動が鳴り止まなくなってしまう。

家族にも、友人にも、頬を染めてぼんやりする姿を見られてしまっている。これ以上、変な勘繰りをされたくはないのに、どうしても治らない。繰り返せば慣れるかも、と思い実行してみても、悪化することはあっても治まりなどしなかった。

「しゅてるちゃんっ、しゅてる、ちゃんっ」

顔に集まる熱と眠気に微睡む頭で、何故か彼女の名前を何度も、何度も呼んでいた。

吐息は運動をした訳でもないのに変に熱く、思考も滅茶苦茶にあちらこちらへと移り変わっていた。どんなに眠くても、それでも、彼女の姿は頭から離れない。名前を呼ぶ度に、胸の内を温かい何かを満たしていく。体中が、火照っていく。逢いたい、もう一度逢ってお礼が言いたい。いっぱい、お話がしたい。一度考えると、堪らなくなってしまう。

「にやあっ、あっ、あ、しゅて、る、ちゃ、ん……んう……」

もっと、上手く戦える。

まだ、休まなくても戦える。

だから、触って欲しい。できるって言うてくれた時みたいに、頬に触れて、頑張ったねって、褒めて欲しい。もつと、もつと期待して欲しい。その為なら、どこまでだって高く昇って行ける気がするから。そして、いつか、あの娘と同じ場所に並んで立つんだ。

並んで立って、どうするのか。その先なんて、まだ見えはしないけれど、この感情は、この意志は、初めて抱いた自分だけのモノだから、手放すつもりなんて欠片もない。冷めることを知らない想いを抱きながら、高町なのはは夕食まで間、夢の中へと潜っていった。

街を埋め尽くす大樹の群れを前に、高町なのはは呆然としていた。やはり休息など取るべきではなかったと後悔しても、今更結果が覆る訳もなく、眼前の光景に焦りばかりが募っていく。翠屋JFCの試合に参加していた少年が、宝石のような何かを持っていたことに、なのはは気付いていた。確かめるべきだったのに、ジュエルシードだと気付いていた筈だったのに。今日は一日しっかり休んで、明日以降の戦いに備えなくてはと、気持ちを切り替えてしまっていた。気を、緩めてしまっていた。

なのはの視界の内で、尚も成長を続ける大樹の根。これだけの規模まで広がってしまった暴走体は、初めて見る。人間が発動させたジュエルシードは、他の生物が発動させたジュエルシードと違い、強い感情に比例して、強大な力を発揮するのだとユーノが言った。破壊された建物、覆い隠された街並みを見て、後悔が胸を貫く。気持ちを新たにしたばかりだと言うのに、この様だ。シュテルと出会ってから、今日まで上手くやってきたのに、こんな所でまた躓いてしまうなんて。様々な思いが、湧き上がってくる。

こんなことになる前に、止められたかも知れないのに。

泣き喚くことも、失望される未来に脅えることも、後から幾らでも出来る。今すべきことをしなくてはと、無理矢理考えを纏め、な

のははレイジングハートを構えた。封印するには、接近しなくてはならない。しかし、それには暴走体の元となっているジュエルシードの位置を特定する必要がある。大樹の群れは街中に広がっていて、何処が中心かさえも不明瞭だ。飛び回って探すのは、飛行魔法に不慣れななのはでは不安が残る。

何より、迷っている時間がない。

「……探して、レイジングハート」
『Area Search』

足元に描かれる、大きな桜色の幾何学模様。

なのはの意志に応えたレイジングハートが、エリアサーチの魔方陣を構築すると、詠唱を待たずして発光を始めた。手順を省略すれば、当然効果は減衰する。しかし、高町なのはの中には、その常識を覆すことができる膨大な魔力と、溢れる才能が、確かに存在する。レイジングハートに呼応して、ビルの屋上に描かれた魔方陣が発光し、無数の光の帯が街中へ放たれた。

サーチャーと呼ばれる魔力で構築された端末は、散らばった位置からなのはに視覚情報を送り続ける。街の空に滞空しているサーチャーが、大樹から枝分かれした木々、大地を砕いて這い出た木の根を映し出していく。次々と切り替わる映像を整理しながらジュエルシードを探していると、高速で飛翔している何かを見付けた。一つのサーチャーでは追い切れなくて、複数のサーチャーで捕捉を試みると、鮮明な姿が頭の中へと浮かび上がる。

「シュテル、ちゃん……！」

名前を口にした瞬間、落ち込んでいたなのはの心に、再び火が灯された。

出会った時と同じように無数の光弾を従えて、建物の間を縫いな

がら飛行しては、伸びる根を根元から撃ち貫き、光の錠で拘束していく。真剣な表情で、逃げ遅れた人が居る場所を制圧すると眉一つ動かさない涼しげな表情で、次の場所へと飛行していった。なのはが到着する前から、少女は戦ってくれていたのだろう。サーチャーから送られてくる映像には、抉り取られたり、身動きの取れない根の姿が無数に映し出される。

頬が熱を持つのが、分かる。そんな状況ではないとは分かっている、止められないのだから仕方がない。戦闘に集中しているしているのか、見惚れてしまうほどに冷たい眼差しの少女は、上空のサーチャーに気付くことはない。最悪の状況ではないと分かかって気が抜けてしまったのか、約束通りに手助けしてくれた少女を、時間がないことも忘れ、数秒の間だけ、じっと見詰める。

やっぱり、私の『魔法少女』は、凄く格好良い。

口元が緩んでいくのを自覚して、手の甲を当てて隠す。当てた手の甲が、強い熱を感じ取る。最近は、いつもこの調子だ。あの子のことを考えると、駄目になってしまふ。心臓の音が煩くて、周りの音も良く聞こえない。瞳が、自然と潤んでしまふ。こんな歪な感情で直視し続けることが恥かしくて、サーチャーが少女を追うのを止めた。

この気持ちをどうしたいのか、自分でも良く分からない。昨日もその前も、話し掛けたくて、でも、どう話し掛けて良いのか分からなくて、逃げるように家に帰ってしまった。それもこれも、シュテルが姿を隠して見守ってくれていたからである。今日は、違う。高町なのはは、再びシュテルに助けられた。二度、救って貰ったのだ。これ以上、彼女の前で醜態は晒せない。

方々へ散ったサーチャーが、一斉に視覚情報をなのはに送り、ジユエルシードを探索する。ついでに、見失った少女の姿も探す。だつて、見ていると安心するんだから、仕方がない。今日こそはお話

したいとか、そんなことなど考えていない。とくんとくと鳴り続ける胸に手を当てながら、情報を処理していると、なのはの仮想視界にその姿が映し出される。

「見付けたっ！」

「本当っ!？」

「えっ!？ あ……うん、み、見付けたよっ！」

ユーノの声に心底動揺した様子を見せたなのはは、若干の時間差を持って二つの目標を捕捉した。大樹の幹に埋もれる一組の少年少女と、その方向を見詰めて考え込むシュテルの姿。その姿は、何かを待っているようにも見える。何をなんて、今更そんな無粋なことを言っつもりは無い。

『Shooting Mode・Setup』

なのはの意志に心えたレイジングハートが、姿を変えた。杖のよなな形から、槍とも銃とも取れる形状へと。黙ったまま、遠距離仕様に変形したレイジングハートを両手に構えた。サーチャーを全て破棄すると、ジュエルシードの方角へと杖を向けた。思い浮かべるのは、あの娘の魔法。力強くて、何よりも綺麗な輝きの奔流。あの日見た、桜色をした四つの環状魔法陣が、レイジングハートを取り巻いていく。

注げるだけの魔力を環状魔方陣へと注ぎ込むと、輝きが際限なく増していく。手加減なんて、したくなかった。あの子の前で、これ以上、格好悪い姿は見せたくなかった。出来上がった魔法が、シュテルの眼にどう映るか考えると、手が震えてしまう。シュテルの魔法と同じなんて、口が裂けても言えないくらい、拙い魔法かも知れない。見た目だけ取り繕った、不恰好な砲撃魔法かも知れない。

でも、それでも、これが今の高町なのはの、全力全開。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアルX……封印！」
『 Divine Buster 』

撃ち出された極光が、大樹へと突き刺さった。

溜めの時間も長かったし、もつと凝縮することだって出来る筈なのに、高町なのはの技量ではそこまで手が届かない。頑張らないと気持ちを新たにしたなのは、白昼夢のように消え去った大樹の群れの、その向こう側を眺めていた。自分自身の本気の、ほんの少しでも、あの娘に気付いて貰えただろうか。全身に熱を送る胸の高鳴りは、未だ止みそうになかった。

なんなのだろうか、これは。

シュテルの心中でそう呟くと、遠くの空をじっと見詰める。別に一方的に聞かされている話の内容を無視している訳ではないが、まるで変身ヒーローが何かに道端で遭遇した子供のように瞳を輝かせる少女を、直視することが辛い。数秒の間そうしていたシュテルだったが、なのはが僅かに頬を膨れさせたの見て取ると、慌ててなのはに視線を戻す。なのはの怒りが恐いのではない。あの砲撃を見た後では説得力の欠片もないが、この時間が一秒でも長く続くことが恐かった。

高町なのはの襲撃を受けたシュテルは、己の置かれた状況を受け入れられずに居た。

「あのね、それでね、シュテルちゃんの砲撃魔法、できるか不安だったんだけど……あの、聞いて、る？」

「……………ええ」

不安げに尋ねるなのはに返事をする、心の底から嬉しいとでも言いたげに満面の笑みを浮かべたのはは、話を続行する。

高町なのはと遭遇してから、数分の間、彼女はシュテルに対して色々なことを話続けた。シュテルの撤退のタイミングを奪うかのように矢継ぎ早に放たれる少女の声に、シュテルは圧倒されながらも表情を崩すことは無い。これも、経験の成せる技。つい数分前まで、お家帰りたいと泣いていたとは思えない豹変振りに、レイジングハートからも賛美が送られた。

なのはの話の内容を要約すると、「私、頑張ったよ。褒めて、褒めて」のようなモノであった。実態が良く掴めない理由は、なのが軽度の興奮状態を維持したまま語りかけてくるので、既に何度か同じことを繰り返しているからである。恐らく、尻尾があつたら千切れるくらいには振られていることだろう。

此方の様子を窺っているのか、上目遣いでちらちらと視線を合わせてくるのが、可愛らしい。視線が合う度に、本当に嬉しそうな無邪気な笑みで「にはは」と照れる少女が、自分と同一人物だと、シュテルには思えなかった。

レイジングハートからの『騙されています。新手の精神攻撃です』との忠告に「はっ」と正気を取り戻すと、シュテルは襲撃直後のことを振り返った。

「……あのっ！」

「……なんですか？」

「うっん、その、えっと……」

勢い良く声を掛けてきた高町なのはであったが、その後は勢いが続かず、暫くの間、奇妙な沈黙が続いた。切り込もうとしては、もじもじと恥かしがる様子を見せ、声が段々と小さくなっていった。最後には振り出しに戻る。この間も、シュテルはお家に帰りたいと心中で涙を流しながら、最近姉に似てきたのか、悪い笑みを浮かべ

る脳内すずかに助けを求めていた。相手は、少女の皮を被った悪魔か魔王。下手な手を打てば、思わぬ痛手を負うことになる。主に、メンタルに。

と言うか、先程から考えていたのだが、ユーノはどうしたのだから。

砲撃の射角から推測すると、建物の屋上から撃ったことは想像に難くない。当然、エリアサーチも同様の位置で行われたと思われる。しかし、砲撃による封印から然程時間を置かずになのははシュテルの元へ飛来した。即ち、ユーノは屋上で待機、若しくは考え無しに素っ飛んで来たのはに置いていかれたのだから。魔力切れで飛ぶことも出来ない小動物を、そんな所に。滲み出る子供特有の天然な残酷さを感じ取り、シュテルに戦慄が走った。

何はともあれ、今は無難な受け答えを続けて、逃げるタイミングを窺う。それがベスト。

レイジングハートとの脳内会議にそう結論付けると、その頃にはなのはの表情は覚悟を決めたかのように真剣なモノになっていた。寧ろ、違うものをキメてしまったのか、頭からは湯気が上がっており、目が据わっている。正直言って、身の危険を感じた。自制心を置き忘れたすずかの眼と似ている。

レイジングハートと第二次脳内会議を始めるよりも僅かに早く、なのはが口を開いた。

「わ、私の名前は、高町なのはって言います！ 家は喫茶店で、お父さんとお母さん、お兄ちゃんとお姉ちゃんと私とユーノ君の六人家族です！ 趣味は特にありません！」

「……ええ、知っています」

「シュテルちゃんは！？」

「は？ え、えっと、シュテル、です」

「うんっ！ よろしくねっ！」

何、この子、恐い。

シュテルの返答に、やりきったと言わんばかりに満足げな笑みを浮かべて応えるのはを見て、シュテルはそう思った。理解の範疇を優に超えるなのは行動に、シュテルは思わず空中で器用に後退って見せる。勝手に自己紹介を始めて自己完結したなのはが、無駄に澄んだ瞳でシュテルを見る度に、シュテルの心はささくれ立っていく。

一度、切欠を与えてしまったのが拙かったのだろう。其処からは一方的な口撃が始まってしまった。砲撃魔法撃てたけど、シュテルちゃんみたいにくる撃てなかった、だとか、封印したジュエルシードの数の話であったり、飛行魔法の上達振りについてであったり、あちらへ飛んでは、こちらに戻ってくる、そんな不安定な会話であった。しかし、その全てに置いて共通していることは、顔の火照りを隠す気もないのはが、シュテルに何かを期待するような視線を送っていることだ。

試しに手を持ち上げてみると、なのはの物欲しげな視線が集中した。そのまま持ち上げていって、なのはの目線まで持ち上がると、なのはの口元が緩み始める。数秒間その様子を眺めた後、何事もなかったとばかりに平然と自らの髪を撫で付けると、露骨に落胆を含んだ表情へと変化した。ここまでしなくとも、何を期待しているのか見当は付いていたが、シュテルの心の癒しの為には必要な行動であった。

これは、非常に楽しい。

「……こっちに、来てください」

「ふえっ!?! う、うんっ!」

一度見ただけで高度な魔法を覚えたり、非日常の怪物と対峙しても物怖じしない、完全無欠な魔法少女とは思えない、期待と不安が緋い交ぜになつた表情で、シュテルに言われるままに近付いてくる

なのはは、年相応の少女に見えた。年齢のことなど自分が言えたことではないが、と自嘲したシュテルは、泣かされていたことも忘れて堅い表情を崩す。どんなに性格が、能力が、容姿が違っても、根本的になのはもシュテルも『高町なのは』の括りから大きく外れることはないのだろう。考えていることも、何となく理解できてしまう。

シュテルが再び手を持ち上げると、なのはは視線で即座に追い掛け、何かに気付いた様子で首を振って、俯いたまま黙ってしまった。鞭を与え過ぎてしまったのか、シュテルに遊ばれていることを感じ取ったなのはは、己の行動を浅ましいいとも言いたげに押さえ込む。それでも諦めきれないのか、数秒毎にちらちらとシュテルの様子を窺うことは止めない。

こうして見ると、やっぱり可愛い。

自分とは似ても似つかないなのはの仕草に微笑んだシュテルは、二つの白いリボンの間にあるなのはの頭に、手のひらを乗せた。戦闘を終えても汗一つ掻いていないのか、さらさらと指触りの良い髪を、優しく、丁寧に梳いていく。お気に入りで良く使っていた実家のシャンプーの香りが、懐かしく感じる。自分でも匂いに気付いたのか、なのはの体も一層強張った。俯いたままなのでなのはの表情を見て取ることは出来ないが、「んっ……あっ……んっ……」と漏れる気持ち良さそうな声と、真っ赤に染まった耳を見る限り、期待には応えられたのだろう。

撫でる手をそのままに、レイジングハートを握る手で、なのはの肩を抱いて引き寄せる。驚いて顔を上げたなのはの表情は、シュテルとは別の意味で瞳が潤み、熱を帯びた頬と乱れた呼吸と相まって、何処か色っぽい雰囲気醸し出している。多分、母親に似たのだろう。己と同じ顔が淫靡に歪み、そうさせているのが自分であるという現実から目を背けると、シュテルは現実逃避気味に思考を逸らした。

身体が触れ合う程に近くまで抱き寄せると、なのはの赤い耳へと

口元を寄せる。どうしてそうしたのか、シュテル自身にも良く分からないが、焦らすようにゆっくりと、ゆっくりと近付けると、煩く感じる程になのはの呼吸が荒くなっていく。そこまで信用されていた覚えはないのだが、なのはがそれを望むなら、応えてあげたかった。良い子で在り続けたい、その所為で家族と仲良くしていても、経験がないので甘え方が分からない。甘え下手で、不器用で、寂しがりな少女が、可愛らしくて、仕方がない。

自分自身なのに、そう、思う。

同時に、自分自身だからこそ、愛おしくて仕方がない。

今だけだから、と自分に言い訳をすると、なのはの体を優しく抱き締める。最早、煩いのが、どちらの心臓の音か分からない。どちらの体が熱を発しているのか、分からない。髪を撫でていた手をなのはの後頭部に回すと、動かないように押さえ込んだ。「ひゃんっ」と可愛らしい悲鳴を上げたのはだったが、驚いたのも口だけなのか、その手はシュテルの腰に回されている。始めは恐る恐るシュテルに触れていた手が、次第に強く抱き締められていくのを、シュテルは心地良く感じてしまう。欠けていた心が、満たされた気がした。

「……頑張ったね」

「しゅ、てる、ちゃん……？」

「見たから、分かるよ。頑張ったね、偉い、偉い」

「……んっ、あっ……あう……うん……」

偉い、偉いと繰り返しながら、何度も何度も髪の毛を梳いてあげると、その度になのはの身体が小さく跳ねる。自分の耳元から、自分と同じ声が喘ぐのをむず痒く感じながらも、シュテルはなのはが満足するまでやめるつもりはなかった。シュテルほど眼に見える形ではないのだろうが、なのはも家族に対して接し方を量りかねていたのだろうか。少なくとも、疲労を抱えた体で強がりながら封印を

行っていたのはが、甘えさせて欲しいと自ら強請るようには見えなかった。他に相手がないのなら、こんな胸で良ければ、幾らでも貸そう。

腰に抱き付いていた筈なのは腕が、ずり下がって恥かしい位置に触れているのも気にせず、シュテルは囁き続けた。

「しゅてる、ちゃ……ん……わたし、んっ……」

「……なに？」

「わたし、しゅて、るちゃん……みたいに……なり、たい」

「……そう、なんだ」

口調こそ平静を保っていたが、シュテルの内面は得体の知れない感情に掻き回されていた。

シュテルは、高町なのはの成れの果て、失敗した未来の姿、星の数程居るであろう高町なのはの可能性の中でも、落ち零れに分類されるのだろう。それに比べて、シュテルの腕の中で幸せそうに身を委ねている少女は、正に原石。今でこそ荒削りで、才能はあれども経験の無さに苦しめられることもあるかも知れない。しかし、何れはその弱点も無くなる。この子の前に、敵は居なくなり、何処までも高く、際限知らずに自らの選んだ道を昇っていくことだろう。

一週間近くなのはの戦いを見ていたシュテルだからこそ分かることは、シュテルと違って、なのはは戦うことを恐れていないと言うこと。それ以外に方法が無いのなら、なのはは撃つことを躊躇いなどしない。強大な力を、不屈の意志で律して、瞬く間に成長していく。その時点で、シュテルとはスタートラインが違う。

シュテルのようになる必要なんて、何処にもない。

「……嬉しい」

「しゅて、る……ちゃん……？」

「嬉しいよ……ありがとう」

「うんっ、うんっ……わたし、がんばるから、あっ、しめてちゃっ、あうっ……ん……」

意志とは正反対に、言葉が漏れていた。

そんな風に誰かに言われたのは、初めてだった。管理局では、冷徹な執務官の振りをして、周りに人を寄せ付けることなどなかったし、フェイトのように華のある戦い方をする訳でもない。はやてのように人を従える能力も高くはないし、年の近い魔導師の子供に会っても遠巻きにこそそそと見られるだけで、話し掛けられることもなかった。誰かの目標になんて、成れる筈もない。成れたからといって、何も変わらないだろうと、そう思っていた。

だと言うのに、気が付けば、なのはの体を強く抱いている。

結局、人恋しかつたのは、お互い様だったのかも知れない。なのはは、規格外の存在だ。コンプレックスを感じていないと言えば、嘘になる。泣かされたことも、何度かある。それでも、この世界で唯一お互いの内面を知る『高町なのは』同士、憎からず思うのは、きつと仕方のないことなのだろう。段々と落ち着いてきたのか、シユテルの頬を自らの頬で擦りながら、ぼんやりと抱く力を抜いていくのはを撫でながら、考える。

高町なのはは、妹が欲しかった。

幼い頃に父親が怪我で入院し、それ以来、家の中で、ずっと独り夜になって帰ってくる家族は疲れきっていて、なのはと二、三言葉を交わしては休む生活。誰かを憎くは思わなかった。子供ながらに自分の相手をしている暇はないのだと理解していた。誰かと話す訳でもなくじっとしていたなのはが、暇を持て余して考えたことの一つが、それだった。

妹が居たら、自分のような想いをさせないのに。

自分だって、こんな想いをしなくていいのに。

兄や姉は、両親の手伝いが出来てしまうから、自分と同じ立場の妹が居れば、一緒に居られるのに。取り留めのない考えで、所詮は

幼い頃の暇潰しでしかなかったが、何故だか、唐突に思い出した。

思考をシュテルに切り替えると、体を離そうと力を込める。しかし、臀部に纏わり付いたなのは腕が、それを許してはくれない。緩みきった表情とは裏腹に、細腕からは想像できない程の力を感じる。シュテルもヴィータとの訓練で、それなりに運動音痴を克服したつもりで居たが、なのはの秘める能力は矢張り規格外なのだろうか。父、兄、姉の血を濃く受け継いでいるのなら、もしかしたら将来、魔力刃も素手で止めるようになるかも知れない。

「もう、すこし……」

「……はいはい」

自分の冗談染みた考えを、まさかと一笑に付すと、シュテルは子供のように駄々を捏ねるなのはの髪を撫で付けた。頼りない自分を、こうして頼りにしてくれている。レイジングハートが撫で始めたあたりからずっと『上げて落とす作戦です』と警告を発しているが、今は、無視してもいいだろう。

もう少しだけ、見守ってみようかな。

微笑んだシュテルは、まだ日も高い、遠くの空を見詰めながら思う。旅行の出発は、少し遅れてしまっただろう。忍も侍女二人も、街の騒ぎを聞けば納得はしてくれる。何より、騒ぎが起きる可能性が高かったので、少々遅れてもいいように忍が予定を組んでくれた。大きな部分での問題は、特には見当たらない。問題は、残りの一名が、どう思うかである。

お家、帰りたくないなあ。

なのはをあやすシュテルは、儘ならない世の中を憂いて溜め息を吐くのであった。

八話（後書き）

なのはからいやらしさを感じた人、貴方は騙されています。

次回はすずかさんパートです。今、いやらしいことを考えた人、
貴方は正常です。

誤字脱字修正早めに頑張ります。

体調崩して更新遅れてしまい、本当申し訳ないです。不定期更新
なので平にご容赦を、とこぞとばかりに主張してみたりします。

九話

ここは湯のまち、海鳴温泉。

シュテルと合流した月村家一行は、海鳴市街を離れ、山間に在る旅館山の宿を訪れていた。本来であれば、二週間後の連休に、高町家と月村家一行にアリサを加えた面子で訪れる予定の旅館である。しかし、シュテルは諸般の事情によって、高町家の面々とは顔を合わせることは出来ない。管理局に入る前は、家族と何度か宿泊した場所でもある為、特に目新しさも感じない。連休の間、シュテルは月村家でお留守番をしているつもりでいた。

それを善しとしなかった月村姉妹の手によって、シュテルはあれよれよと言う間に赤い暖簾を潜らされ、ノエルとファリンに裸に引ん剥かれ、湯船に肩を浸けられてしまったのであった。行き先を聞いて、二度手間になるから、一度来たら新鮮味が、と最後まで渋っていたシュテルだったが、「下見よ、下見」と言い張る忍に手を引かれて連行され、今は諦めてしまったのか膝を抱えたまま湯船の隅の方で小さくなっている。

遅れてしまったことを気にしているのか、時折すずかに対して脅え混じり視線を送っているが、すずかが満面の笑みで応じると、ほっとした表情で強張る体から力を抜いた。すずかは元より、シュテルを除いた月村家一行も、街での事件は聞き及んでいた。何より、月村邸からでも肉眼で確認できる程大きな樹の出現に、一目散に飛び出して行くところとするすずかを取り押さえるのでそれどころではなかったのだが、シュテルが無傷で、尚且つ、平然とした様子で帰ってきたので、こうして出掛けることになったのだった。いつものように見て触って確認を終えた後、好きに着せ替えて冷静さを取り戻したすずかは、旅館までの道中、シュテルと手を繋いで、一緒に温泉だとはしゃいでいた。

喜びこそすれど、怒る理由なんて何一つない。

「……………かぶつ……………あ、む……………ん……………」

一緒に入浴するだけなら、毎日同じ湯船に浸かって、お互いに背中を流し合っている。

最近、さすがの自制心が緩くなってきていると言っても、その程度のことでは衝動を抑えられなくなったりはしない。前はシュテルを心配するあまり、ノエルの力を借りて無理矢理吸ってしまったが、起床して隣に寝ていたシュテルを見た時の罪悪感、今でも忘れられない。弄ぶ目的で首筋に刻んだ一際目立つ吸血痕、手首や肩には力づくで押さえた際の痕、力無く閉じられた目元の下には涙の伝った跡。ベッドの周りに散らばった衣服の中には、破り取られた物まであった。

今度こそ間違いなく乱暴されたシュテルに、自らも肌蹴していることも忘れて立ち尽くし、悲壮な表情で硬直していたはずだったが、部屋の前で待機していたノエルに助けられ、気が付けば新しい寝巻きに身を包み、シュテルと二人、ベッドに転がされていたのだった。ノエルは珍しく薄く頬を染めていて、シュテルの惨状を目の当たりにしては、謝罪を繰り返しながら服を着せていた。夢だったのでは、思考を放棄しようとする自分を叱責すると、さすがは決意したのだった。

二度と、こんなことをしてはならないと。

「……………おいしい……………ん……………」

最初は、普段と変わらずに、背中を流していただけだった。

シュテルの真っ白な背中を傷付けないように、慎重に、慎重にと心中で繰り返し返しながら、背中を擦っていると、突然、さすがの嗅覚が反応した。シュテルが帰ってきて、服を着せ替えた時は焦るあまり気付くことが出来なかったが、シュテルの髪や頬から薄らと、別

な誰かの匂いがした。シュテルの匂いに似ていて、すずかも普段から馴染みのある、親友の匂い。懐にでも潜り込まなければ、そんな場所に匂いを付けることは出来ないだろう。

別に、遅れてきたことは、いい。

シュテルが無事に帰って来てくれるなら、楽しみにしていた旅行だって、別の日になるうが、中止になるうが、どうだっていい。例え、心配して待っていたのに、何処となく嬉しそうな表情で帰宅したことだって、怒ったりなんて、しない。折角、毎日付けている痕をチョーカーで隠していることも、我慢する。

すずかは暗い笑みを浮かべ、顔を俯かせると、背後からシュテルに問い掛けた。

「……シュテルちゃん、変なこと聞いていい？」

「……変なこと？」

「なのはちゃんのこと、えっとね、だ、だっこ、したり、した……？」

背中に手を当てていたから、分かる。シュテルの身体が、ほんの僅かに震えたのを感じ取った。

この時点で疑惑は灰色を通り越して、真っ黒に限りなく近い何かであったが、すずかは普段と変わらぬ笑みでシュテルの返答を待つ。何故か、湯船に浸かっていた筈の姉とファリンが、さり気なく立ち上がり、態とらしい背伸びをしながら好奇の視線を送ってくる。唯一ノエルだけが隠すものも隠さずに、慌てた様子で脱衣所の方へと駆けて行った。のぼせたのだろうか、とすずかが首を傾げている間に、平然とした様子で脱衣所から戻ったノエルがファリンに何かを託すと、無言のまま湯船に浸かった。

思い返せば、皆で一つの浴槽に浸かるのは久し振りだ。皆もテンションの一つや二つ上がっているのだろうと考え、すずかは興味を眼前の真っ白な背中へと移した。

数秒の沈黙を経て、シュテルはすずかにゆっくりと振り向いて、口を開いた。

「……して、ないよ」

嘔吐き。

すずかは心中でそう言い放つと、シュテルの細い肩に両手を掛けた。他のことなら、幾らでも我慢できる。外出して嬉しそうな顔をしていたって、なのはと仲良くなったって、すずかはシュテルと一つ屋根の下。起きる時も、寝る時も、ずっと一緒。大抵のことは許容範囲内、寛大な心で受け止めるつもりで居た。

でも、これだけは我慢出来ない。

ここは、私の大好きな場所だから。

シュテルの懐は、すずかの縄張りも同じ。例え親友でも、人の縄張りに土足で踏み入られて正気で居られるほど、すずかは大人に成り切れない。シュテルの頬に自らの頬を寄せると、匂いを書き取るかのように、ゆっくりと優しく擦り付ける。普段は髪の毛が邪魔で、頬の感触を堪能することは難しいが、入浴に当たって後ろで束ねていたのが幸いした。あつたかい、それに、柔らかい。「くう……ん……」と堪える声を漏らしながら、既に覚悟を決めたのかシュテルは抵抗もせず体を強張らせる。すずかは普段とは違い、背中から首筋に狙いを定めると、柔らかな肌に自らの牙を突き立てた。

「あつ……」

「……なのはちゃんと、だっこ、し、したよね？」

「してないっ、んんっ、して……ないもん」

「また、嘔吐いた……っ！ いいよ、わ、私は、シュテルちゃんのこと、抱っこするから」

怒りに頬を膨らませると、気恥ずかしさを誤魔化すように、首筋

に舌を這わせ、溢れる血液を舐め取った。

正気を失うことなど、あつてはならない。絶対に、乱暴になどしたくはない。すずかはシュテルの胸元に両手を回すと、成長芳しくない膨らみに手のひらを当て、その小さな体を包み込んだ。幼心からの嫉妬心だと理解はしていても、苛立ちを抑える方法が、これ以外には見付からない。柔らかな胸の感触と、舌先に感じる甘美な蜜を楽しみながら、すずかは溜飲を下げていく。

穿った傷を舌先で適度に刺激しつつ、口元を両手で覆い、声を殺すシュテルを見て、数日前のことを思い出す。

すずかは吸血によつて、満足感を得ることが出来る。でもそれは、一方的な搾取でしかない。シュテルは血を吸われて、痛い思いを、それでお終いなんで、あまりにも報われない気がした。血を貰うことは、すずかにとつては特別な行為だ。それでも、シュテルの負担になるのなら、血液なんて要らない。感情の赴くままに乱暴してしまつた日、焦燥に駆られたすずかは、そのことを姉に相談した。

シュテルが家に来るまでは、月村家において、体質の話題は所謂タブーの類であつた。すずかが自らの体質に嫌悪感を持つていたこともあり、飲まなければ具合が悪くなるので仕方なく飲んでいたに過ぎない。まるで薬のようであり、それを飲まなければならぬ自分分は病気なんだと考えていた節すらある。忍も、すずかの感情を理解していたのだろう。体質のことについては、すずかが聞かない限りは、詳細を濁してくれていた。

だからだろうか、その道では遙かにすずかの先に行く姉に相談すると、嬉しそうに自らの膝を叩いて出迎えてくれた。なのはの兄、恭也と、恋仲であることは知っている。恋人同士でどんなことをするのかは良く知らないが、血を吸つたりもするのだろう。すずかが悩みを打ち明けると、忍は困つたような、それで居て、どこか期待したような微笑を浮かべ、すずかに一つの事実を教えてくれた。

吸われる方も、慣れれば、気持ち良いのよ、と。

「……シユテルちゃん、気持ち良い？」

「すず、か、だめ……だめ、です……やめて、そこ、んっ、だめ……」

「もつと、駄目になって……ね」

「やだ……や……んっ……んっ……！」

血の珠が浮いた傷口を、指の腹で優しく撫でてみると、普段とは違った反応が返ってくる。

連日、少量の吸血を繰り返したことは、無駄にはなっていない。正気を保った状態で、すずかは吸血されるシユテルの表情を観察し続けた。痛がっている様子、辛そうな様子、我慢している様子、痛みを感じていない様子、そして、それら以外の様子。徹底的に反応を記憶し、無理をさせない吸い方を研究し続けた結果、すずかは遂にそれを習得したのだった。

習得したと言え、大げさに聞こえるかも知れない。強弱を付けて吸い付いたり、息継ぎのタイミングであったり、噛む際に痛くない場所であったりと練習の成果は様々ではあるが、所詮は素人の付け焼刃。舌を這わせる度に甘い声を漏らして、顕著に反応してくれたシユテルでなければ、そう簡単にはいかなかった。他の誰に対しても効果があるのかと聞かれれば、首を横に振らざるを得ないだろう。それでも、すずかの心は満ち足りていた。

シユテルに対して、効果がある。

その一点以外に、いったい何の価値があるのだろうか。他の誰かなど、考える必要はない。シユテルの癒しになればこそ、覚えた価値があるというもの。ギブアンドテイク、持ちつ持たれつな関係、それが何より大事。

「あう……うん……」と小さく呻りながら、自らの体を抱いて何かを我慢し続けているシユテルを、安心させるように抱き直す。シユテルの呼吸は荒く乱れ、体も十分に熱を帯びてきた。準備が整ったことを確認すると、すずかは痛みを伴う寸前の力で、舌尖を穿た

れた穴に押し込んだ。

「はっ……うっ……っ！」

声にならない悲鳴を上げながら、シュテルは酸素を求め空中を食む。シュテルの身体が一際大きく震えるのを感じると、すずかも応えるようにシュテルの体を抱き締めた。

すっかり脱力してしまったシュテルを抱えながら、何物にも代え難い満足感に浸っていたすずかは、ふと考える。

気持ち良いって、どんな気持ち良いんだろうと。

気持ち良いと一言で言っても、色々ある。こうして入浴していても気持ち良いし、温かいシュテルと触れているだけでも気持ち良い。言うまでもないことであるが、すずかは吸われた経験が無いので、シュテルがどう感じているのか、実際には分からない。結果として喜んでくれているのだからと、今日まで深く考えたことなどなかった。

やっぱり、姉の言う通り、マッサージに近い感覚なのだろうか。

「しのぶ、ねえさっ、たすけ、んっ、くださいっ、しのぶねえ……」

「心配ないわ。誰か来ても、ファリンが見張ってるから大丈夫よ」

「はいっ！ しっかり見張ってまーす！」

いつの間にか復活していたシュテルは、こちらもいつの間にか隣で体を洗っていた忍に助けを求めて手を伸ばす。救援要請を受けた忍は、無駄に凜々しい表情で、現在女湯に身内以外が居ないことをシュテルに伝えると、ファリンが居る方を指差した。一縷の望みに縋り付くつもりで伸ばした手も、何も見ていなかったと言わんばかりに素知らぬ顔で、「すべすべねえ」と数度握り返されて終わってしまう。

続けて縋り付いた先では、レンズの付いた何かでこちらを見張っ

ているファリン。神も仏もないと諦めきつた表情で、虚空を見詰めるシュテルをすずかは可哀想に思う。それでも、吸うのをやめると言う選択肢は、すずかの頭の中に存在しない。近付いてくる吐息を感じ取ったのか、脅えた表情で、シュテルは何処に居るのかも分からない最後の人物に向って、声を張り上げる。

「の、えるっ！ あっ！ あっ！ やめさせて……」

「……すずかお嬢様、お背中流しますね」

「あ、うん、ありがとう、ノエル」

思いの他近くに居たノエルの手のひらを背中に感じ、すずかは思わず礼を言くと、大人しく背中を洗って貰うことにした。

すずかの主観でしかないが、シュテルとノエルは、割と仲が良い。お互い、あまり多くを喋る性質ではないが、趣味が合うと言うか、馬が合うと言うか、月村家では二人並んでいる姿を頻繁に目撃する。一緒に厨房に立ってお菓子を作っていることもあれば、ノエルが忙しい時には代わりに炊事洗濯をしていることも多い。終始無言で居ることが殆どだが、お嬢様と呼びながらも、仕事を手伝って貰っていることを考えると、お互い満更でもないのだろう。

シュテルにとっては、ある意味ではすずか以上に信頼度は高かったのだが、それも先日的事件で大幅に落ち込んでしまった。それでも最後の砦に持って来るのだから、今尚、シュテルの中でノエルは確固たる立ち位置を保ち続けていることが窺える。

そんなノエルが、特等席に着いて自分の悶える様を観察していることを知ると、シュテルの瞳から色が消え去った。

「のえるの、ばかつ、むつつりつ、へんたいっ」

「シュテルお嬢様のお体も……洗いますね」

「あっ、ん、んっ！」

さすががシュテルの首に口付けると同時に、背後から伸びた泡塗れの手が、すずかごとシュテルの体を這っていく。

何処となく嬉しそうにシュテルを弄ぶノエルを見て、やっぱり仲が良いなあ、とすずかは微笑んだ。そこで、ふと、思う。なのはのことも、ノエルのことも、すずかは好ましく思っている。両者に対するそれは一致している筈なのに、なのはにだけ感じる焦りは、いったい何なのだろう。

なのはのことは、好きだ。アリサとなのはは、すずかの数少ない親友、大好きと言っても過言ではない。その気持ちは、今も変わらない。もしも、シュテルとなのはが並んで寝転んでいたら、理性を保てるかどうか自信がないくらいには、好き。

なら、この嫌な気持ちは何なのだろう。

すずかの思考が、答えを導き出すことはなかった。答えの分からないことを、いつまでも考えるより、今は家族との時間を大事にしたい。逃げるように思考を切り替えると、すずかはノエルの手により隅々まで綺麗にされた虚ろな瞳のシュテルを抱き上げると、脱衣所に向うのであった。

月村家の敷地内、新緑に包まれた木々の間を、すずかは独り寂しく歩いていく。

時折漏れる溜め息同様に、足取りは重く、とても気晴らしの散策と言った風には見えない。旅行から帰ってからと言うもの、時折一人になって悩んでいるすずかを見れば、旅が上手くいかなかったのではと考えるのが自然だろう。それに反して、旅を振り返ると、すずかの表情は穏やかなものへと変わっていく。

シュテルの再起動が済んでから、何があった訳でもなく、家に居ると同じように、のんびりとした時間を過ごした。周囲を散歩したり、特に意味もなく手を繋いでぼんやりしたりと、普段とあまり

変わらない。温泉に来て温泉に入ったのだから、目的の大半は達成したことになるのだから、好きにさせて欲しい。なのはやアリサと来ることを考えると、正反対なのだろうなと可笑しく思いながら、日が暮れるまで新鮮な景色を楽しんだ。

全員一緒の部屋で、しかも浴衣で、更に布団で寝る。就寝に際し無駄にテンションを高くしたさすがの記憶は、何故かそこで途切れてしまっているが、本当に楽しかったことは覚えている。忍も、ノエルもファリンも満足げであったし、シュテルは偶に膨れ面だったものの、概ね悪くないと言った表情だった。

つまりは、非の打ち所がない程、温泉を満喫して帰宅したと言うことである。

「……帰っちゃうの、かな」

ならば、何を悩んでいるのか。

楽しいことを経験すればする程、失う恐怖が膨れ上がる。さすがが無意識に漏らした声が、全てを物語っていた。言葉の意味を自分で理解すると、足取りが覚束無くなって、比較的大きな木を探して背を預ける。泣きそうな気分になるのを、我慢して、どんよりと曇った空を見上げると、涙が引き返すのをじっと待った。

シュテルは、元の世界に帰りたがっている。

今更言うまでもないことであるが、帰宅してからと言うもの、普段通りに時間が空くとジュエルシードを調べる少女の姿に不安を覚えてしまう。帰れないのかも知れない、とは思っている。けれども、もし、全部シュテルの思うがままに上手くいってしまったら。その時、すずかは喜んであげることが、出来るだろうか。

シュテルにも、本当の家族がいる。詳細は濁すものの、大事な友達もいるのだろう。帰りたいに決まっている。

「執務官のお仕事って、大変なのかな」

出逢った頃のシュテルは、酷く疲れた顔をしていた。

お腹に穴を空けられたこと、知らない世界に来てしまったことなど、精神的な負担が原因の多くを占めている。しかし、それが全てでないことも確かだった。管理局で働いていた時のことはあまり多くは語らなかつたが、執務官になるには難しい試験に合格する必要があつたり、幅広く魔法が使えなくてはならなかつたりと、誰でも成れるものではないらしい。

才能があつたから、大して努力しなくて済んだ。

冗談めかして言ったシュテルの言葉を、真に受けたりなどしない。自信過剰とは対極にいるような、本当は臆病で、心配性で、寂しがりな少女だとすずかは知っている。

語る言葉の端々から、目的の為の手段としか思っていないことが読み取れた。嫌々と言う訳でもなく、好きでやっている訳でもない。それが良いことなのか、すずかには分からないけれど、少なくとも語るシュテルの表情は明るいと言ひ難かった。

友達と、約束したから。

何の為に、と聞いたすずかに、シュテルは初めて微笑みを浮かべて応えた。

聞いた頃は、そうなんだとしか思えなかつた。今では、思い返すだけですずかの心を、嫌な感情が満たしていく。その友達の為なら、本当は好きじゃない執務官の仕事も続けられるのだろうか。その友達の為に、元の世界に帰りたと思うのだろうか。シュテルとって、そんなに大事な友達なのだろうか。苛立ちが募る。嫉妬しているのだろうか、それとも、焦っているのだろうか。比べられることを。

シュテルは、友達のことを隠している。すずかは、シュテルが隠していることを、無理に聞き出したりなどしない。したくない。けれども、すずかにも知っていることはある。

シュテルは、未だ眠りが浅い時には魔されている。その時に手を握って宥めるのはすずかの役割で、例えどれだけ眠気を感じていても、苦に思ったことなどない。すずかの声に安堵の表情を浮かべて再び眠りに着くシュテルを見てみると、頼られているような気がして、守ってあげられているような気がして、幸せだった。何度か繰り返した、その過程で、一度だけ、シュテルが口にした名前がある。フェイトと、はやて。

まるで助けを求めるように、二人の名前を呼んだ。前者の名前に聞き覚えはなかったが、後者の名前は、すずかにも覚えがある。シュテルが住み着いて直ぐに出会った、車椅子の女の子。あの娘を、シュテルははやてと呼んでいた。異常な動揺を示したシュテルの様子から察するに、将来の大事な友達だったのだろう。家族の名前も漏らしたことはないシュテルが、無意識の内に頼りにしている、信賴している少女の名前は、すずかの心を深く傷つけた。

その娘たちと、天秤に掛けられたら、負けるしかない。

「……私と、何が違うんだろう」

シュテルからなのは匂いを感じた時も、そう思った。

一つ屋根の下にいても、すずかの不安は拭えない。すずかがシュテルを大事に想っている気持ち、伝わっているのか分からない。血を吸っている時は、繋がっている気がして、忘れてしまっている本心。結局、魔法の素質を持たないすずかは、シュテルの心の支えには、成れないのではないだろうか。姉に言われた、すずかにだけ出来ることでは、その距離を埋めきれない。シュテルをもっと笑顔にしてあげたいのに、すずかには決定的な何かが足りない。このままでは、シュテルのことを、守ってあげられない。

「あれ……なんだろう？」

思考の坩堝に落ちていたすずかの視界の端で、何かが光った気がした。

気分と同様に重くなっている体に力を込めて、光を探して木々の間を抜けていく。気に留める程、強い光でもなかった。気の所為だと切り捨てて、帰宅しても良かった。けれども今は、何かに興味を移して、さっきまでの考えを忘れてしまいたかった。

「あうっ！」

体がバランスを崩し、倒れ込むのを感じ、すずかは声を漏らす。

上の空で駆けていたのが災いしたのだろう。足元の注意が疎かだったすずかは、草か何かに脚を取られて転倒してしまう。ひんやりとした地面の感触を衣服越しに感じると、何だか酷く惨めな気持ちになってしまい、どうにも立ち上がる気が起きない。痛みも特に感じなかったのでうつ伏せのまま脱力していると、受身を取ろうとして着いた手のひらに、不思議な熱を感じた。

手繰り寄せた手が、薄っすらと怪しげな光を放っている。何も考えずに放り投げてしまえば良かったのだろうが、何故か、すずかにはそれが出来なかった。青白い光を見ると、さっきまでの嫌な気持ち吸われていくようで、何だか気分が良い。霧が掛かったはつきりしない思考で、指を一本一本伸ばしていく。

ゆっくりと開かれた手のひらの上には、小さなひし形の宝石が乗せられていた。

「じゅっ……よん……？　これって、しゅてるちゃんが、いったた……」

すずかの言葉が、最後まで続けられることはなかった。

青い光の奔流は、渦状に帯を広げると、瞬く間にすずかを繭の如く包み込んでいく。為す術も、為す気力も持たないすずかの意識は、

薄気味悪くも、何処か居心地の良い光の中へと埋没していくのであった。

シュテルが焦点の定まらない瞳で窓の外を眺めると、真っ白い霧だけが視界に映り込んだ。

出された紅茶の味も良く分からず、ティーカップを持つ手は震えて覚束無い。危なっかしいシュテルの様子を心配したノエルが傍に駆け寄り、シュテルの手に自らの手を重ねるも、力無く「ごめんなさい」と小さく声を発するのが精一杯だった。テレビに映るニュースキャスターが海鳴市全域に濃霧が発生していることを告げると、シュテルは顔色を更に悪くし、体の震えを押さえるために自らの肩を抱き込んで爪を立てた。

痛みで、冷静さを取り戻せると思ったのに、存外効果は無い。それでも、いい。誰でもいいから、罰を与えて欲しかった。こうなる可能性を知っていて、私利私欲の為に可能性を放置し続けた自分自身を、痛めつけてやりたかった。困惑するノエルを横目に、血が滲む程爪を食い込ませ、更に強い力で抉ろうとしたシュテルを、誰かが背後から包み込んだ。

「こら、やめなさい。ノエルも見てないで、ほら、代わって」

忍の声に、シュテルは一度体を強張らせると、促されるままノエルに自らの手のひらを預ける。

シュテルの抵抗が無いことを確認した忍は、ゆったりとした動作でシュテルの対面に座ると、自らの分の紅茶に口を付けた。その立ち振る舞いは、何処までも普段通りで、現在の状況を正しく理解しているのか不安を覚えてしまう。霧の発生と共に忍の部屋に通されたシュテルは、今にも家を飛び出して行きかねない様子であった。

ノエルとファリンの二人掛りで前後から押さえ込み、拘束には成功したものの、顔色は依然優れず、表情からは決死の覚悟すら見取れる。その遣り取りを見て尚、忍は「いつもと逆ね」と苦笑するだけであった。

本日の昼過ぎを境に海鳴市に発生した広域の濃霧は、臃げな輪郭故に発生原因が掴めず、前回の大樹の異常発生同様、怪現象とされている。視界が霧で覆われ、実態を把握することは大変困難であるものの、正体不明の霧は月村邸に近付けば近付くほど濃くなっていた。シュテルのリンカーコアが第六感染みた正確さで、屋敷の周囲を高速で飛び回るジュエルシードの気配を教えてくれる。原因が、ジュエルシードであることは間違いない。暴走したジュエルシードが霧の原因ならば、封印すれば済む話。問題は、二つある。

これだけの規模の暴走を引き起こすには、人間が核である可能性が高いこと。

さすがが、庭に行った切り、帰って来ていないこと。

全部、自分の所為だ。

「……さすがが、心配ではないのですか？」

「心配よ。妹だもの、当たり前でしょう？」

「この霧も、さすがも、全部、私の所為です。行かせてください」

「お茶の一杯くらい飲んでからでも、遅くはないわ。少し、落ち着きなさい」

立ち上がるうとする体をノエルが抱き締め、力尽くで突破を試みるシュテルを全身で受け止めた。

シュテルが諦めるまで続けると、すっかり冷めてしまった紅茶をファリンが淹れ換えた。ポットをテーブルに置くと、小走りで扉の前まで下がり、ファリンは両手を広げる。宛ら「通しませんよー！」とでも言いたげに立つファリンだが、完全に腰が引けている上に、表情は泣く寸前である。申し訳ないやら、情けないやらで、シュテ

ルは力無く頂垂れて着席すると、忍の言う通りに紅茶を喉に流し込んだ。矢張り、何の味も感じない。

焦り、恐怖、不満、そして自己嫌悪。負に偏った感情に顔を顰めるシュテルの頭を、忍は「良く出来ました」と撫でる。実の妹が危機に晒されているのに、いったい何を考えているのか、シュテルにはまるで分からなかった。ふと、窓の外から視線を感じ、シュテルが視線を向ける。

白い霧の中で、真っ赤な瞳がこちらの様子を窺っていた。

見覚えのある瞳の人物は、シュテルと眼を合わせると、口元をにたりと笑みに歪める。思わずシュテルが眼を逸らすと、窓に何かが張り付くような音がして、穴が開くほどに強い視線を感じた。立て続けに、弱い力で窓を叩く音、聞き覚えのある声が、何度も、何度も窓を叩いてシュテルの名前を呼ぶ。恐怖のあまり、眼を瞑り、耳を塞いで、震えることしか出来ない。

状況を理解していないのは、自分の方だった。

耳を塞いでいても、魔力を帯びた霧を介して強制的にシュテルの頭の中に声を伝えてくる。恐くて、聞きたくなくて、認めたくなくて、泣きながら頭を振るっている。とノエルが庇うようにシュテルを掻き抱いた。思わず縋り付き、恥も外聞も無く声を上げて泣いていると、窓の外からの声が止んだ。同時に刺さるような視線も消え去り、窓を蹴るような音と風切り音を最後に、ジュエルシードの気配も離れて行った。

「ジュエルシードは願いを叶える宝石、だったかしら。何かしらね、あの娘の願いつて」

忍の声に、はっと意識を取り戻すと、周囲を見渡す。

平然と紅茶に口を付ける忍は兎も角、ノエルもファリンも、居た

堪れない表情でシュテルを見ていた。初めから、全部知っていたのだろうか。監視カメラは屋敷の敷地内の要所要所に配置されている。忍の方が、或いは足止めを食らっていたシュテルよりも先に外の人物を認識していた可能性は高い。何にせよ、何の心構えもなしに外に出ていたら、戦うどころか、何も出来ずにやられていたことだろう。

ゆっくりと深呼吸して心を落ち着かせると、安堵からか、全身の力抜けてノエルに寄り掛かってしまった。落ち着かせるように背中を叩かれて、姿勢を正す気力もなくなり、そのままの姿勢で忍に尋ねた。

「……知って、ましたね？」

「シュテルちゃんよりも先に、外に飛び出しただけよ。そしたら空から降りてきて、出ちゃ駄目、ですって」

取り込まれて尚、意識がある程度残っているのか、それともあれが正しく願いを叶えた姿なのか、シュテルには判断出来ない。何を想っているのか、何がしたいのか、ちょっとくらいは分かっている気であったのに、本当に、何一つ分からない。戦えるのかと聞かれれば、自信なんてある訳が無い。きっと、撃てないだろう。無様にやられるだけかも知れない。なのはの到着を待つて、全て任せてしまった方が、善い結果になる。

それでも、私がやらないと。

なのはが、暴走している人物の姿を見る前に。

フェイトが、この場所に辿り着く前に。

お茶会の日までは大丈夫と油断していたことが、現在の結果を作り上げた。他の誰であろうと、彼女に指一本触れさせる訳にはいかない。そう考えたシュテルは、時間が無いことに気が付くと、ノエルの胸元から顔を離して、忍に向き直る。

「……終わってから、煮るなり焼くなり好きにして貰って構いません。お願いします、行かせてください」

「そうね。二人共無事に帰ってくるなら、私は何でも良いわ。あとはさすがが決めるから、そのつもりで、ね？」

「……ありがとうございます。必ず、すずかを連れて帰ってきてます」

命に代えても。

言葉には出さず、静かに覚悟を決めたシュテルは、深く腰を折って礼をすると、背を向けて歩き出す。レイジングハートも主を心配してか、胸元で桜色の点滅を繰り返している。死ぬつもりは、ないけれども、必要ならそうするつもりで腹を括った。嘔吐き呼ばわりされたって良い。すずかは、何も悪いことなどしていないのに、巻き込まれた。それもこれも、高町なのはとフェイト・テスタロッサの出会いを邪魔したくないという、シュテルの身勝手な願望の所為で。例え魔力が枯渇しようが、満身創痕の果てに朽ちたとしても、やらねばならないことがある。

何があっても、すずかだけは、護ってみせる。

服の胸元を引き千切らなばかりの勢いで掴むと、小さく低い声で「Set up」と告げた。音も無く戦闘服に身を包んだシュテルは、まるで見回りでもしているように、霧の中を縦横無尽に飛び回る人物を捕捉すると、窓を開け放ち足を掛ける。一寸先も見えない霧は、不安な未来を暗示しているように思えてならない。弱気になっっている自分を叱責し、頬を数度張ると、シュテルは吸血鬼のテリトリーへと切り込んだのであった。

九話（後書き）

<猫のシュテルちゃんが悪戯して

<猫のシュテルちゃんが悪戯して

<猫のシュテルちゃんが悪戯して

いえ、別に、何も。ああ、猫ってそう言う……。

すずか回を期待していた方、本当に申し訳ないです。別な意味でしたね。

何処までやっていいのか分からなくて自没したりして、結構抑え目にしました。色々。九話はもしかしたら加筆したりするかもです。

誤字脱字はいつも通りです。どうかご容赦ください。

十話

シュテルが開け放った窓から、濃密な霧が室内に流れ込んでくる。湿り気を帯びている訳でもなく、煙のように息が詰まる訳でもない。視界を妨げる意味しか持たないだろうそれに包まれると、何処からかご機嫌な様子の鼻歌が聞こえてきた。シュテルが念話と説明してくれた魔導師達の通信方法を、魔力を持たない忍は体感出来なかったが、この霧は、擬似的にそれを可能にしているのかも知れない。意識の表層を吸い取られる感覚が忍を襲い、取られて無くなつた分を、妹の意識が埋め尽くしていく。

どうやら、最高に良い気分らしい。

シュテルと同じ条件で遊べるのが、楽しくて仕方がないのか。或いは、シュテルやなのはを捕らえた後のことを考えて悦に浸っているのか。正解は両方なのだろうが、擬似的に繋がった意識が後者の想いの方が強いことを教えてくれる。突如発生した霧に慌てて家を飛び出した時には、このような感覚を覚えることは無かった。恐らくではあるが、シュテルが家から出てくるのを待っていたのだろう。どうにも、性質の悪い罠のような気がしてならない。

「早まったかしら。搦め手なんて、あの子らしくもない……」

宛ら、蜘蛛の巣。

気付かぬ内に雁字搦めにされていなければ良いが、とシュテルが飛び立って行った窓の外を眺める。街全体を霧が包んでいると言うことは、即ち、何処へ逃げてみずかの手のひらの上。空や海上はその限りではないと考えられるが、みずかは決して自分に有利な場所から出て戦ったりはしないと断言できる。何故ならば、霧の中で待っていれば、シュテルとなのはは必ず飛び込んでくると分かっているのだから。視界を塞いだり、動き回っているのは大樹の時に月

村邸で見た、光線による狙撃を警戒してだろうか。徹底していると言うか、気合いが入っているとと言うか、抜け目ない戦法を仕掛けてくるものだ。

どちらかと言えば忍好みのやり方に、似てないと思っていたけれどやっぱり姉妹だな、と暢気に笑みが零れた。淑女然として佇む忍の様子からは、家族が命の危機に晒されていることなど一切読み取れはしない。冷たい印象すら感じる普段通りの彼女だが、その余裕は裏打ちされたものがあればこそである。

シュテルと魔法関係の情報については、今日まで綿密な遣り取りを行ってきた。ジュエルシードが単体でも、全威力の何万分の1の発動で小規模次元震と呼ばれる次元災害を引き起こすことも勿論知っている。しかし、それは内包されたエネルギーを、意図的に無差別開放でもしない限り起こりはしないことも知っている。魔力の捌け口を無くして爆発させるのが次元震なら、暴走はそれに出口を作ってやるのに等しい。

感情を持つ生物や思念を取り込んで暴走した場合、例えそれが人間でも、願いを叶えようとして魔力を消費し続ける以上は、何れは魔力を吐き出し尽し弱るしかない。それにジュエルシードが単体であれば、シュテルやなのはレベルの魔力を持つ魔導師にとつては封印は難しくない。現在海鳴には、封印できる人間が二人いる。

もし万が一、シュテルがすずかと戦えなくても、なのはならば出来るだろう。シュテルが母親似だとすれば、なのはの内面は土郎や恭也、美由希に似ている。シュテルの話や、普段の様子を見る限りではあるが、なのはは、間違いなく、やる。

「……あの子達の、ガス抜きになれば良いのだけれど」
「ガス抜きで、済めば良いのですが」

シュテルを向わせたのが不満なのか、矢鱈と棘のあるノエルの言葉を聞き流しながら、忍は苦笑する。

心を許し合いながらも、何処か張り詰めた雰囲気のあったずすとシユテル。今回の件が無ければ無いで、何れは何とかなつたのだろうが、こうなつてしまつたものは仕方がない。すずかの思いの丈を、シユテルに全力で受け止めて貰うとしよう。これが悪感情ならばもつと心配しなければならぬのだから、純粋な好意の塊で動いているのだから、きつと悪いようにはならない。霧の影響下にある忍には、すずかの気持ちが無くなつたが分かる。祈るべきは怪我無く帰つてくることばかりだ。

横に立つノエルの視線の痛みに耐えながら、忍はカップの取っ手を持ち、淹れ直して貰つた紅茶に口を付けた。

「はれ……？」

間の抜けた声と共に、するりとカップが手元から抜け落ち、中身をテーブルにぶち撒けた。

まだ高い温度を保つたままの紅茶を避ける為に立ち上がると、フアリンが拭く物を取りに部屋の外へと駆けて行く。避け損ねて服に掛かつてしまつた部分をノエルが処理しているのを見て、やつてしまつたと額に手を当てた。忍自身、何が起きたのか分からず、溢してしまつた紅茶をぼんやりと見詰めていると、体が大きく傾き、倒れ込みそうになる。

咄嗟にノエルに抱き抱えられて体勢を立て直したものの、どうにも体の調子がおかしい。先程までは何ともなかったと言つのに、急激な疲労が襲い、立っていることさえ儘ならない。手を開いては閉じ、二、三度繰り返してみても力が入らず、回復の様子がなかったこともあり忍は手近なソファアへと寝かされた。虚脱感に包まれながらも、吐き気や気持ち悪いなどの症状もなく、思考ははつきりとしている。何故急に、と考えた所で、窓から立ち込める霧が忍の視界に入った。

出ちや駄目って、言ったのに。

まるで吸い取られるように力を失った忍の耳に、誰かの声が聞こえた気がした。

拗ねた様子で告げられた言葉に、出たら駄目と言っ言葉が、忍だけでなくシュテルを含めた月村家住民に対しての警告だったことに気が付く。シュテルを煽ったペナルティなのか、そもそもノエルとファリンに対しては効果がないのか、困惑する忍の様子に疑問符を浮かべている二人に、窓を閉めるように指示を出すと、忍は急に重くなつた瞼を閉じた。

任意の対象に体力、気力の吸収効果まであるとは。

「……意外とえげつないわね、すずか」

蜘蛛の巣なんて、生易しい物ではない。

長期戦になればなるほど、こちらの勢いは削がれ、状況はすずかの有利に味方していく。シュテルに任せるべきでは、なかったのかも知れない。すずかの目的はシュテルとなのはの無力化ではあるが、二人で結託されては、例えどれだけの力を引き出していたとしても、すずかにはどうすることも出来ない。だからこそ、忍の手でもう少しの間シュテルを屋敷に足止めし、なのはの相手を優先させるつもりが、順序が狂ってしまったのだらう。最初から全力でシュテルを捕らえるつもりのものである。

本気で勝利を狙うすずかに戦慄しながら、忍はただシュテルの身を案じて無事を祈るのだった。

全方位が白色の霧で覆われ、方角さえも定まらない。

ジュエルシードの反応を追い駆けて霧に飛び込んだは良いが、屋

敷の輪郭すら見えなくなつた途端、反応が捕捉出来ないほど微弱なものへと変わった。魔導師は基本的に視覚とデバイスに搭載されたセンサー類、リンカーコアが感じ取る第六感で敵を捕捉するしかない。月村邸周辺を覆う濃い霧は視界を塞ぎ、霧全体が帯びている微弱な魔力で感覚を潰しているようだった。

追い詰める側だった筈が、いつの間にもやら追い詰められる側になつてしまつている。時折僅かに反応する感覚を信じて、移動を繰り返しているが、すずかから仕掛けてくる様子がない。一定の距離を保つたまま、遠巻きにシュテルを観察し続けている。嫌な予感がする。シュテルの人生において、嫌な予感が外れたことなど滅多にない。不可視の追跡者から距離を取ろうと高く飛翔すると、複数の球体がそれを阻むかの如く前に回りこんだ。

「……馬鹿にして」

その正体は、蝙蝠。

真ん丸にデフォルメされた三匹の蝙蝠が、シュテルの前を遮っていた。足は無く、背中には申し訳程度に小さな羽の付いていて、赤くて大きな瞳が不思議そうにシュテルを見詰めている。まるでアニメか何かのキャラクターを思わせる可愛らしさを持った物体に、シュテルは思わず悪態を吐く。避けて通ろうと加速すると、シュテルの動作に反応して追尾を始める。今度は接触してくるつもりのものであった。

執拗に追い縋る蝙蝠を迎撃しようと、同数のシューターを展開する。あれが何であろうと壊してしまえば、そう考えたシュテルがシューターを放つと、蝙蝠の回避動作よりも速く、狙い通り三匹の蝙蝠に命中した。

「っ……なに、あれ……」

蝙蝠の残骸に目を遣り、シュテルは怖気を含んだ声を漏らした。飛散した蝙蝠の死骸は、宛ら鳥糞を彷彿をさせる粘性で広がると、伸びきった状態で空間に固定されていた。黒い表面は体液か何かで、てらてらと不気味な光沢を保ち、飛散して尚、水溜りを掻き回すような音を立てながら蠢いている。再び一塊になるうとしていいのか、小さな破片も空中を芋虫のように這いずって、大きな塊に近付いていく。

恐らく対象を拘束することが目的なのだろうが、可愛らしい蝙蝠の姿からこの落差は、悪趣味極まりない。もし被弾していたら、そう考えて、シュテルの背筋に悪寒が走った。兎に角、これで障害の排除は完了した。一度霧から出ようと飛行を試みるシュテルだったが、ふと、腰の辺りに何かが触れているのを感じて振り返る。

真つ赤な瞳。

普段と変わらない様子で空中に佇んで、額に宝石を張り付けた月村すずかがシュテルの服の裾を引いていた。暗闇色のドレスに身を包んだ少女の姿は、他の暴走体とは違い外見の殆どに大きな変化は見られない。背中の、翼以外は。

接近されていたことに驚愕している間に、背中から生えた大きな蝙蝠の翼がシュテルを包み込み、動けないように拘束する。生暖かく、弾力を持つそれは、少女の貧弱な力では振り解けそうにない。自然とすずかの胸に抱かれる形となってしまったシュテルは、気丈な眼ですずかを睨むと、すずかは対照的に柔和な笑みでシュテルに微笑んだ。

「えへへ、捕まえた」

「……まだ、です」

シュテルの声と共に光弾が展開され、すずかとシュテルを囲んだ。

動きを封じられたからと言って、手も足も出ない訳ではない。さすがが相手である以上、魔力が尽きるまで戦い続ける覚悟は出来ている。しかし、シュテルの気持ちとは裏腹に、臨戦態勢を保ったままの射撃魔法は、すずかに向って放たれることはない。臆した様子も見せず、すずかは始めから分かっていたとばかりに、悔しげに表情を歪めるシュテルの髪を撫でた。

「やっぱり、優しいね。撃たない……ううん、撃てないの？」

「離して、ください。触らないで……」

「うん、いいよ。シュテルちゃんと喧嘩したくないもん。だからお願い、お家で待ってて。すぐに……」

なのはちゃんも連れて行くから。

すずかの言葉の意味を理解した瞬間、待機を続けていたシューターがすずかに向けて放たれていた。非殺傷と言っても、痛いものは痛い。撃ちたくなんてなかった。それ以上に、今のすずかの姿をなほに見せる訳にはいかなかった。吸血鬼であることを隠さない今の姿が、願望なのかも知れない。けれども、自分で打ち明けないければ、きつと今まで悩んできた意味が無くなってしまふ。

これが終わったら、幾らでも吸ってくれて構わない。殴られたつて、どんなに乱暴にされたつて、すずかが元に戻るなら、どんな行為でも甘んじて受けるつもりでいる。だから、今だけは。

「なのはちゃんのこと、そんなに好き？」

決意も空しく、シュテルの放った弾丸を身を翻して回避したすずかは、周囲の霧を集めて蝙蝠を作り出すと、弧を描いてすずかを追尾する光弾へと叩き付けた。拘束された状態からは脱したものの、身体能力、動体視力ではすずかに分がある以上、油断は出来ない。名前も知らない魔導師が相手なら、どれ程楽だったろうと心の中で

悪態を吐くとシュテルはさすがに応える。

「高町なのはは、今は関係ありません。貴女は、私が封印します」
「嘘。本当は、なのはちゃんのこと考えてる。本当は、封印する自信がないって、分かるよ。お姉ちゃんみたいに、簡単には読み取れないけど、少しなら分かる」

「……私には、さすがが何を考えているのか、分かりません」

蝙蝠の動きにしる、すずかの動きにしる、避けるタイミングが速過ぎる。素の身体能力の差もあるのだろうが、未知の魔法戦闘に対して即座に順応したと言うには違和感が残る。表層思考を読まれて
いる可能性は視野に入れていた。

それがジュエルシードによって身に付けた物にしる、詳しくは知らないが、夜の一族が持つ能力の延長にしる、並列思考の訓練を積んだシュテルには効果が弱いのだろう。お互いに積極的な攻撃が来ずに、相対したまま膠着状態に陥った二人であったが、なのはを
気にして余裕のないシュテルとは裏腹に、すずかは微笑みを湛えたまま空中に佇んでいる。

シュテルの疑問に、若干興奮した様子で薄く頬を染めたすずかが口を開いた。

「シュテルちゃん、私のこと、心配？」

「当たり前です。意識があるのなら、もうやめましょう、こんなこと……」

「私も、同じだよ。シュテルちゃんと、同じこと考えてる」

気が付けば、両手を広げたすずかが眼前に迫っていた。

避けようと体に力を込めるも反応が鈍く、いとも容易く再びすずかの胸の中に捕らえられてしまう。愛しい恋人との抱擁を楽しむかの如く、ぐったりとしたシュテルの両頬を手のひらで固定し、潤ん

だ瞳を交わらせる。意識は在れども、正気ではなのだろう。その表情からは愉悦以外にも、自分でもどうしたいのか分からないと言いたげな困惑の感情が見て取れた。

唇から僅かに顔を出した犬歯を舌先で舐めると、すずかは恥かしげにシュテルの頬に自らの頬を寄せる。噛まれると思身が強張らせたシュテルであつたが、待てども刺激は襲つては来なかつた。背に回された両手しつかりとシュテルを掻き抱くと、我慢しているのか動きを止め、荒い呼吸音と熱い吐息が片方の耳を犯していく。

身を震わせながら固まつてしまったすずかを他所に、シュテルは思考を廻らせる。集中を欠いていた訳ではない。会話の最中でも、シュテルの意識はすずかの一挙手一投足を見逃すまいと監視を続けていた。ならば、何故。疑問に対しての解答を見出せないまま、時間だけが過ぎていく。思考の最中、ふとした拍子に力が抜け、船を漕ぐようにシュテルの頭がすずかの柔らかい髪に埋もれた。思えば、先程から体の反応が鈍い。疲労にも似た感覚が、シュテルの全身を包み込んでいることが分かる。

「いたつ……」

まさか、とシュテルの意識が霧に向いた瞬間、背に張り付いていたすずかの両手が、シュテルの肩を驚掴みにした。痛みすら感じる強い力で掴まれ、驚いてすずかの顔を見ると、先程までの不安定に緩んだ表情は消え、凜々しさすら感じる真剣な表情でシュテルを見詰めていた。普段のすずかからは滅多に見ることの出来ない表情に、驚いたのだろう。

何故だか知らないが、頬が熱を持つのを感じた。

「私ね、シュテルちゃんのこと守りたい」

どうせ、支離滅裂な言葉を掛けられるのだろう。

そう高を括っていたシュテルは、すずかの予想外の言葉に凍り付いた。浮付いた様子の一切無い真摯な告白に、状況も弁えずに赤らむ頬を手のひらで隠した。すずかの言葉を脳内で繰り返し返してみても、その意味が変わることはない。どうやら、聞き間違いではないらしい。自覚した瞬間、視線を合わせていることが辛くなり、明後日の方に目を向ける。

何をとち狂ったことをと心中で呟きながら、恥かしげもなく言い放ったすずかを横目で盗み見ると、微動だにしないすずかの視線がシュテルの瞳を打ち抜いた。悔しいが、その表情を見る限り、正気を失っているとはとても思えなかった。

「うっ、えっ……なっ、なっ、なにをいきなり」

「ジュエルシードも、全部私がかする。なのはちゃんも、代わりに私が守るから。だから、もう戦わないで。お願いだから、私を、頼ってよ」

「ちよっ、ちよっと待って、えっと、待って、ください」

これは、何だか良く分からないが、不味い。兎に角不味い。

想像していたのと、何か違う。普段から溜まりに溜まった鬱憤が爆発したとか、夜の一族であることを秘密にしているのに耐え切れずとか、そう言う感情をジュエルシードに利用されているのだとばかり思っていた。畳み掛けるように想いの丈を吐き出し続けるすずかに、シュテルはしどろもどろになって応えるのがやっとである。一度火が着いて歯止めが利かなくなったのか、凜々しさ八割増しな表情をそのままに、すずかの勢いは止まらない。相変らず熱を帯びたシュテル同様、すずかの顔も火照り、瞳は淫靡に潤んでいく。

あまりの衝撃に、最早、何をしに来たのかさえ忘れかけていた。すずかは元々主張することが少ないが、守りたいなんて言われるとは、思ってもみなかった。何にせよ、ジュエルシードを放置したことも、すずかの想いも、全て自分の責任であることだけは理解して

いる。

シユテルはただ、まな板の上の鯉の如くされるがまま、すずかの精神的な辱めに耐え続けた。

「シユテルちゃんのこと、もっと知りたい。もっと、欲しいよ。ずっと、一緒に居ようよ。元の世界になんて、帰らないでよ、シユテルちゃんっ!」

「そ、そんな、こと……その、急に、い、言われ……まして、も……」

「フェイトつて子にも、はやてつて子にも、負けたくない! シユテルちゃんの一番になりたいの!」

「ど、どこでそれ……いえ、それよりも、い、一番とか、言われても……」

「シユテルちゃん! シユテルちゃん! シユテルちゃん! あうっ、んっ、あっ!」

すずかの波状攻撃の前に、シユテルの精神力は限界を迎えようとしていた。

何一つ、すずかの気持ちを分かっていたいなかったんだ。と感傷に浸る間すら与えられずに、すずかの精神的な陵辱を耐え続けたシユテルの瞳には、薄らと涙すら浮かんでいる。言うまでもなく、恥かしさからくる涙である。シユテルとは対照的に、感極まった様子でシユテルの名を連呼していたすずかだったが、突然シユテルの肩を突き飛ばしたかと思えば、自らの体を掻き抱いて何かを堪え始めた。

拘束を逃れ自由の身となったシユテルであったが、相変わらず体の反応が鈍く、思うように飛ぶことが出来ない。原因が霧であることは見当が付いていた。しかし、すずかが姿を現さずにシユテルを追跡していたことから考えても、すずかの周囲を取り巻く高濃度の霧にしか吸収効果はないのだろう。先程の辱めを受けていた身としては、あの状態のすずかを放置することは本意ではないが、一度霧か

ら出てて体勢を整える必要がある。

ふらふらと、すずかに気が付かれないように慎重な動作でその場を離れたシュテルであったが、目の前を黒い何かに遮られた。また蝙蝠かと周囲に目を配れば、今度は三匹や四匹ではない。無数の蝙蝠がシュテルとすずかを遠巻きに囲み、まるで檻のように逃げ道を塞いでいた。

「逃がさない、シュテルちゃん……しゅてる、ちゃん……」
「すず、か……？」

恐る恐る振り返ると、再び愉悦と興奮に表情を歪めたすずかがシュテルを見据えていた。

霧の中で爛々と輝く紅い瞳が、大きく広がった蝙蝠の翼が、すずかが戦闘準備を終えたことを知らせてくれる。柔和な笑みでシュテルとの距離を詰め始めたすずかと、背に小さくもグロテスクな蝙蝠の気配を感じながら後退るシュテル。勝利を確信しているのか、すずかは一度翼を仕舞うと、興奮冷めやらぬ真っ赤に染め上がった表情で口を開く。

「大好き。ずっと、一緒だよ」

すずかの最後通告を合図に、蝙蝠の群れが、シュテルへと襲い掛かった。

海鳴市の平和を守る魔法少女、高町なのはは絶賛迷子中であった。突如霧の中に沈んだ街に、誰よりも早く空へと飛び立ったのはであったが、現在は位置すら分からずに似たような場所を彷徨い続けていた。翠屋周辺、市街地に掛けての範囲では比較的霧が薄く、

飛行するのに大した問題はなかったのだが、ジュエルシードの気配を追って濃霧の中へと飛び込んだ途端、反応が消えてしまったのである。一直線に進んで、速攻で封印して霧を晴らす心積もりでいたなのは、道標を無くして途方に暮れる他なかった。

「ゆ、ユーノ君、ど、どつちから来たか覚えてる？」

「う、うーん……ごめん、なのは」

「ううん、良いの。この霧だもん、誰だって迷うよ」

「いつもなら勘で方角は分かるんだけど、おかしいな……あつ、そうだ。一度真上に飛んで霧から出てみたら……」

ユーノと相談していると、なのはの視界の端を何かが掠めていった。

最近、シュテルを真似て魔力弾の制御訓練に余念のないなのは、飛躍的に上昇している動体視力で高速移動する対象を捉えていた。明らかに自然の生き物とは一線を画する、デフォルメされた蝙蝠が二匹。始めはジュエルシードの産物かと臨戦態勢を取ったのはであつたが、くりくりとした愛らしい瞳で「いじめる？ いじめる？」と無言の圧力を放つ二匹を凝視して、警戒しながらも矛先を下ろした。

二匹は何をしてくる訳でもなく、一定の距離を保つたままのを見詰めている。高速移動していた時の様子から、何かを探している途中でなのはを見つけたのだろう。まるで首を傾げているかのように体を傾かせ、なのはに追従する姿に、何一つ感じないと言えは嘘になる。なのはとて未だ小学校に通う、真正正銘の女の子。人並みに可愛いものを好む上に、それが無害そうなら触ってみたくもなる。

勝手に伸びた右手を慌てて引つ込めながら、頭の中にもっと可愛いものを思い浮かべて衝動を打ち消した。具体的に言えば、憧れの、可愛い魔法少女の姿を思い浮かべる。姿だけでなく、声も、匂いも、

感触も記憶に新しい。無駄に鮮明に再生された少女の姿に、数日前の出来事を生々しく思い出してしまい、別な衝動に飲まれたなのは身をくねらせた。

撫でられて、褒められて、ぎゅってして貰った。

考え得る最高の幸せが、そこにはあった。シュテルの抱擁に比べたら、眼前の蝙蝠などクレーンゲームの景品と同レベルに思えてくる。思えば、なのはがこうしている間にも、シュテルはジュエルシードの暴走体と交戦しているのかも知れない。こんな所で、足を止めている時間が惜しい。間に合ったら、きつと一緒に戦ったり出来るだろう。

また、褒めて貰えるかな。

勝手に口元が緩むのを感じ、誰に見られている訳でもないのに俯いて表情を隠した。

「……のはっ、なのはってばっ！ ま、周りを見て、何か変だよ！」
「へ、へんじゃないのっ！ って、え、えっ！」

ユーノの声に頭を振って前を見ると、蝙蝠の数が増えていた。

二匹だった筈が、四匹に。ふと、気配を感じて振り返ると、後ろにも四匹。妄想に浸っている間に、どうやら囲まれていたらしい。しかし、高町なのはとて、それなりの修羅場は潜り抜けてきた。焦る様子を見せはしたものの、敵は可愛い蝙蝠八匹。必殺の砲撃魔法の前に立ち塞がるには、あまりにも脆く儂い存在でしかない。

無害な存在かどうかは兎も角として、邪魔をするなら。

強行突破すべく環状魔法を展開したなのはの前で、突如小さな蝙蝠達が体を振るわせ始めた。何をするつもりだろうと凝視していたのはの視界に映る全ての蝙蝠が、一斉に口を大きく広くと、その体が内側から捲れ上がった。

「にゃっ！？」

「うわぁ……」

下手をすれば夢に出る光景を目の当たりにし、なのはとユーノは思わず声を漏らす。

汚泥のように黒ずんだ肉塊を内側から押し広げるように膨張すると、なのはを捕らえるべく触手を伸ばし始めた。咄嗟に防御魔法で防いだものの、勢い良く盾に衝突した触手は尚も防御魔法に張り付いたまま表面を覆っていく。本来なら弾き飛ばす効果を持つ筈のシールドに喰らい付かれ、神社での戦いを思い出したなのはは、防御魔法を破棄すると回避の為にフライアーフィンに魔力を込める。急上昇したなのはの動作を追いきれなかったのだろう。最早八匹とは数えることの出来ない粘土の怪物は、緩慢な動作でなのはを見上げていた。

「びつくりしたけど、これで、おしまいっ！」
『Divine Buster』

杖の先端から打ち出される、桜色の砲撃魔法。

威力も速度も、前回の比ではない。吸い込まれるように異形の怪物に命中した極光は、離脱しようとは広がる怪物を根元から焼き払っていく。瞬く間に体積を磨り減らして消滅した怪物を見て、なのはは小さくガツポーズを取った。まだまだ見よう見まねの域を出ないものの、それでも一歩、また一歩と理想に近付いている。確かな手応えを胸に、次は本体をと意気込んだのはだったが、強い力で足を引かれて体勢を崩した。

慌てて俯くと、僅かに取り零した蝙蝠の破片が、なのはの足に絡み付いている。空中に縫い止められる形となってしまうたなのはだったが、冷静に思考を働かせれば別段窮地に立たされている訳でもないことが分かる。見たところ、蝙蝠は拘束魔法と似た性質を持っているようであり、苦手ながらも、なのはでも時間を掛ければ解除

は出来る。仲間の蝙蝠はやつつけたんだから、と胸を撫で下ろした。なのはの視界を黒い影が遮った。

何もない筈の空間から、蝙蝠が次々と生み出されていた。蝙蝠が作られる度に霧が薄くなることから考えるに、霧がある限り無尽蔵に現れるのだろう。無数に輝く紅くて大きな瞳が、ぎよろりと音を立てて、一斉になのはに向けられた。

「ちょっと、不味い……かな？」
「かなり、の間違いでしょう？」

少女の声は、なのはの下方から聞こえた。

音もなく飛翔してきたシュテルは、なのはの脚を縫い止める拘束に杖を一閃すると、なのはの胴を抱いた。また助けられた羞恥と、やっぱり助けに来てくれた安堵に節操もなく顔を赤らめたなのはを他所に、シュテルはなのはを抱えたまま、上空を目指して飛行を続ける。

後方から追い掛ける蝙蝠を見て、なのはは違和感を感じ取った。いつものシュテルは、もつと速く飛ぶ。それこそ、高町なのはよりもずっと熟練した飛行魔法を展開していて、後方から迫る蝙蝠など追い付いてこれる筈がない。手良く見れば、シュテルのバリアジャケットは所々破れ、布に覆われた口元から聞こえる呼吸は荒く、額には汗が浮かんでいる。

「一度、撤退します。良ければ、貴女も、飛んで、くだ、さい」
「わ、わかった！ でも、シュテルちゃんこそ掴まって、私が引く張るから！」

「……すみません。少しの間、お願いします」
「……うん、まかせてっ！」

酷く疲弊したシュテルの様子に、なのはは内心で息を呑んだ。

シュテルがこれ程までに追い詰められる暴走体を、封印することが出来るのだろうか。そう考えてしまった弱気な自分を頭の中から追い出すと、息も絶え絶えになのはに縊るシュテルを強く抱いた。どんな敵が相手でも、負けてしまえば何も守れない。高町なのはが自分で決めて、自分で選んだ魔法少女の道。全部、守ってみせる。

この街も、家族も、友達も……シュテルちゃんも。

胸に掛かる弱弱い吐息に顔を赤くしながら、なのはは決意を新たに空を目指した。高鳴る鼓動はこの先の戦いに対しての期待と不安によるもので、敗れた服の合間から見える肌にどぎまぎしたなどと言う理由では断じてない。無意識にシュテルの髪を梳きながらの葛藤は、なのはが霧を抜けるまでの間続くのであった。

まだ肌寒い季節だと言うのに、二人と一匹は砂浜に座り込んでいた。

街を覆う霧は大量の蝙蝠を作り出したことで若干薄れはしたものの、未だ健在である。霧の手の届かない空の上を経由して、同様に霧に侵されていない海沿いを通った結果、休めそうな場所が見付かず、砂浜での休息となった。漸く霧の中から脱出出来たことへの安堵から脱力していた魔導師の面々であったが、その内の一人、なのはの憧れの魔法少女、シュテルは特に疲労の色が濃い。聞いた話によると、暴走体に近付くと周囲の霧から思考を読まれ、体力を吸われてしまうのだとか。

シュテルが呼吸を整えるまでの間、効果があるかも分からずに背中を擦っていたなのはだったが、勝手に動く手とは違い、思考は正常に働いていた。ジュエルシードを人が発動させたからと言って、先日の大樹を見る限り、なのはやシュテルの魔力量を持つてすれば対処出来ない相手ではない。なのはとて、今日まで何も考えずに戦ってきた訳ではない。感覚的にはあるものの、ジュエルシードに

出来ることの限界を掴み掛けていた。どれ程上手く魔力を引き出すことが出来たとしても、ジュエルシードは砲撃魔法の一発でも命中すれば封印可能な物でしかない。

満身創痍のシュテルの姿に、強大な敵を想像してしまったが、霧を脱した今なら分かる。今回暴走しているジュエルシードは、一つだけ。経験の浅いなのはならまだしも、シュテルほど戦闘能力に長けた魔導師が苦戦する相手でないことは、なのはの眼にも明らかであった。ならば何故、シュテルは疲弊するまで追い込まれ、撤退にまで踏み切ったのだろうか。

能力は語っても、暴走体の容姿には口を濁すシュテル。時折恥かしげに霧の中を眺める様子から、なのはには検討が付いていた。

ジュエルシードの核になった人を、守ろうとしているのだと。高町なのはではきつと守ることができない、その人にとっての『大切』を、守ろうとしているのだろう。それが何かなど、なのはには分かりはしない。けれども、それをシュテルが身を挺して守ろうとしていることくらい、なのはには理解できた。

「図々しいお願いだと言う事は、承知しています。今回のジュエルシードには、手を出さないで貰いたいのです」

「……あなたが強い魔導師だと言うことは、知っています。何度もなのはを助けてくれたことも。けれど、ジュエルシードは、あなたが思っているよりもずっと……」

「わかっています。封印したジュエルシードは必ずお返しします。

何もしないで頂ければ……手持ちの21番も差し上げます」

「シュテルちゃんっ!? で、でも、それって大事な物なんじゃ……」

シュテルとユーノの会話に、居ても立ってもいられずに割って入る。

シュテルと出逢った時に封印した、もう一つの21番。あれから

ユーノと何度か話し合った結果、矢張りジュエルシードに番号の重複は存在せず、シユテルが持つそれは似て非なる物。例えジュエルシードだったとしても、ユーノが発掘した物ではないこと確かだった。存在すら曖昧だったそれを目当てに現れたシユテルが持ち主だと考えるほど、単純な話ではないのだろうが、ユーノが発掘した21個のジュエルシードよりもシユテルはもう一つの21番に価値を見出していた。

簡単には手放すことが出来ないくらい、大事な物なのだろうとなのはは考えていた。

だと言うのに、差し出すと言ったシユテルの表情からは欠片の後悔も感じられない。なのはの驚愕の声を聞いて、シユテルは何処か諦めを含んだ表情で一息吐くと、なのはに向き直って口を開く。

「必要な物でしたが、もう、良いんです。叶わない夢を見るのは、やめました。」

「シユテルちゃんの、夢……?」

「ええ、まあ。そんなことより、私に出来ることなら何でもします。どうか、お願いします」

そう言っつて、シユテルは深々と頭を下げた。

土下座せんばかりに下がっていくシユテルの上半身を必死で抱き起こすと、なのははシユテルの顔を見詰めた。平然とした無表情か、照れて赤くなっている表情、極稀に見せてくれる優しげな微笑。なのはの知っているどのシユテルとも違う、追い詰められて焦っている表情が見て取れた。夢も、自分も捨ててまで、守りたい何かがあるのだろう。しかも、時間にも制限があるように思える。どうしたら良いのか分からずに判断を仰ぐとユーノを見ると、ユーノも眉尻を下げてなのはを見ている。直後の念話で、戦う力を持たない以上、なのはの決定に従う旨が告げられた。

シユテルに任せれば、勞せずジュエルシードが二つ手に入り、こ

れからはシュテルと協力して封印を行える可能性もある。シュテルの事情だつて聞くことが出来るかも知れない。逆に断れば、なのはとユーノを打ち倒してでも単身霧の中へと飛び込んでいく。それだけの悲壮な覚悟が、シュテルの表情から見て取れた。

高町なのはは、海鳴を守る魔法少女だ。

流されるまま、逃げるまま、良い子で居ようとして魔法少女になったが、今は違う。どうしたら良いのか、どうすることが正しいのか。そればかりを考えていた高町なのはから、シュテルと出逢つて変わることが出来た。形には残らないが、高町なのははシュテルから確かに大事な物を受け取った。自分が信じて導き出した答えが、例え誰かにとつての不正解だったとしても。考えて、迷つて、悩んで出した答えは、絶対に間違いなんかじゃない。

大事なのは、高町なのはがどうしたいのか。

「……………要らないよ」

「え…………？」

「ジュエルシードなんか、要らない。シュテルちゃんにして欲しいことも、ないよ」

本気で敵意を向けられたのは、生まれて初めてだった。

即座に立ち上がり杖を構えたシュテルの動作を、なのはは目で追うことすら出来ない。いつもと変わらぬ鉄面皮を被ったシュテルを見て、やっぱり格好良いなあと考えてしまつたのは、もう駄目なのかも知れない。なのはは場違いの笑みを浮かべると、一瞬怪訝そうな顔をしたシュテルに向つて一歩踏み出した。

撃たれたつて、構わない。ずっと独りで戦っている少女に並んで立つことが、高町なのはの夢だから、撃たれても、打たれてもこんな所で止まらない。なのはの行動に困惑しているのだろう。一歩後退るシュテルを逃がすまいと、杖を握る手を上から両手で包み込む手のひらを伝わる感触から、痛いくらい握り締めていることがわか

る。脅えているようにすら思えるシュテルを見据えて、なのは言葉の続きを口にした。

「何もしないなんて、出来ないよ。シュテルちゃんが困ってるのに、見るだけなんて、絶対にしたくない。シュテルちゃんの、力になりたいよ」

他の誰でもない、自分の意志で強くそう思う。

見返りなんて、要らない。そんな風に事情を聞いて仲良くなっても、きつと自分は納得できない。シュテルにとって大切なジユエルシードも、きつと受け取れないと思うから。何もしないなんて出来ない、なのは言った。シュテルの邪魔はしたくはないけれども、自分に出来ることが何かある筈だ。これで何もないと言われたのなら、黙ってそれに従おう。なのはの言葉を聞いて尚、シュテルの表情は凜々しさを保ったまま変わらない。疲労の所為か心成しか頬が赤いものの、シュテルはなのはの言葉の続きを、俯きながら待っている。

なのはの理想の魔法少女は、いつだって見習い魔法少女を助けてくれた。

偶には、逆の展開があっても、良いのではないだろうか。

「教えて、私は、何をすれば良いの」

シュテルの答えを待つ間、なのはの心臓は煩いほどに音を立てていた。

頼って欲しくて外には漏らすまいと勤めていたが、なのはの心を見通すシュテル相手に何処まで通用するだろうか。俯いたままのシュテルを凝視していたなのはがそんなことを考えていると、耳まで赤くなつたシュテルが顔を上げた。

蚊の鳴くような声で「……ばか」と聞こえてきたのは、それから

数秒後のことであつた。

十話（後書き）

すずか回とは名ばかりのシユテルさん回。

もっとあつさり終わる筈がこの様ですよ。誤字脱字は一先ず勘弁してください。正気の際に読み直してやります。

十一話

市街地に放ったサーチャーからの反応が、途絶えた。

ビンゴだ。そう考え、薄らと笑みを浮かべると高町なのはは移動を開始する。市街地からジュエルシードの反応がある地点を結ぶ直線に対して、防衛線の如く直角に端末を配置していた。濃霧の中までは無理でも、比較的霧の薄い市街地周辺ならば、端末から送信される視覚情報で十分に探索が行える。それに何よりも、今回は大樹の暴走体の時とは違い、探し回る必要はない。高町なのはは、待つだけで良い。敵は暴走体とは違い、頭を使う人間だ。他の魔導師、敵が操るサーチャーを、無視して素通りすることなど絶対に有り得ないのだから。

反応が途絶えた地点を埋めるように、周囲のサーチャーを操作して回り込むも次々と撃墜されていく。焦る必要はない。これも全て予定通りだと心の中で反芻すると、落とされた端末から敵の進行方向と速度を予測する。予め上空で待機していたのは、何処から現れるか分からない相手に対して先回りするため。速度を上げながらも、なのはは残存する端末を通して敵を視認した。

なのはと同じくらいの年齢で、黒い防護服と杖、金髪に赤い瞳。全て、シユテルから与えられた条件に合致する。ならば、間違いない。なのはの仮想視覚に映る少女こそ、ジュエルシードを狙う第三の魔法少女。

「……足止めを、お願いしたいのです」

シユテルの力になりたい。

そう告げた後、照れて真っ赤になってしまったシユテルは、おずおずと申し訳なさそうに話を切り出した。なのはとシユテル以外の魔導師の存在、目的はジュエルシードの奪取、いつ動き始めてもお

かしくないとのこと。暴走体との戦いの間だけ、その魔導師を食い止めて欲しい。それが、シュテルの頼みの内容であった。管理外世界の地球で、しかもジュエルシードが海鳴に撒かれたのは不慮の事故。シュテルの話を聞いても、ユーノは半信半疑な様子を隠し切れずにいた。

シュテルもその反応を予想していたのだろう。俯き気味に、話を聞いている間ずっと繋がれていたなのは手を解いて、黙って立ち去ろうとした。阻止したのは、他でもない。解くことが出来ないほどに強く握られた、なのは小さな手。驚いてなのは見るシュテルの手を引き、胸に抱いた。羞恥とは確かに違う何かが、胸を高鳴らせている。炉に火が焼べられていくのを感じる。それをシュテルに知って欲しくて、抱いた手を強く胸に押し付けると、話の最中閉ざしていた口を開いた。

「誰も、シュテルちゃんの所まで通さない。まかせて」

言葉少なく承諾すると、困惑するシュテルの目を見て頷いた。

それからの行動は早かった。顔を両手で覆い隠しながら「なんでこんなのが……」と小さな声でよく分からないことを呟くシュテルを、いつもとは逆に安心させようとして抱き締めると、レイジングハートを握り締めて飛び立った。心の何処を探しても、疑う気持ちなど有りはしない。味方をすると決めた、その瞬間から、一本道しか見えていない。

市街地方面から現れるだろうと言う情報を元に、ユーノと共に作戦を立て、サーチャーの網を張り、シュテルの言葉通りに魔導師は現れた。後は、なのはが託された役割を果たすだけだ。通過予測地点に降り立ち、近場のビルの屋上にユーノを降ろすと、なのはは意識を仮想視覚に集中した。

鎌のようなデバイスで端末を切り裂き、時に射撃を交えて飛行する姿は、明らかになのはよりも戦い慣れた魔導師であることを窺わ

せる。全てがシュテルの情報通りなのだとなれば、相手は射撃と近接魔法を得意とする高機動型の魔導師。なのはの得意とする射撃と砲撃魔法ではレンジが噛み合わず、距離を詰められれば簡単に撃墜されることは目に見えている。唯一弱点である防御力の薄さも、当てられなければどうすることも出来ない。勝ち目など始める前から殆どない、だからこそ『足止め』なのだろ。一分一秒でも長く戦って、シュテルの指示通り、危なくなったら直ぐに離脱すればいい。ジュエルシードの封印が最優先であり、新米魔導師であるのはが、第三の魔導師を倒すことなど、誰も期待していない。

それでも、諦めたくなかった。

視覚情報から得た魔導師の動きを食い入るように見詰め、来るべき戦闘に向けて意志を固めていく。魔法の特性や動きの癖を覚えるだとか、そんな難しいことなど出来はしない。しかし、どんな攻撃が来るのかを予め覚悟していれば、少なくとも動揺しないで済む。魔法の実力では、万に一つも勝ち目がない。唯一勝るものがあるとなれば、一撃必殺の砲撃魔法。勝つためには、これを命中させるしかない。

高町なのはは、シュテルに誰も通さないと約束したから。

「……絶対に、逃げたりしない」

『It approaches at a high speed』

レイジングハートが魔導師の接近を知らせると、なのはは白く不透明な空へと狙いを定めた。

シュテルは相手の魔導師について、詳細に教えてくれた。戦い方や、使用してくる魔法、なのはやシュテルと同程度の高い魔力を持つこと。話すことが出来ない事情があるのだろ。シュテルは時折言葉を濁しながらも、なのはを心配してか、距離を詰められないようにと何度も念を押してくれた。謎の多いシュテルであるが、姿すら見せていない魔導師の能力を、何故こうも詳しく知っているのだ

るうか。ユーノが警戒心を抱くのも無理はない。シユテルには、秘密が多すぎる。そこまで理解していながらも、高町なのはは止まらない。

シユテルに確かな好意を持っている。友達になりたいと強く思う。困っているなら、力になりたい。独りで戦っているのなら、頼れる人が居ないのなら、私が味方になる。

難しい理屈なんかより、今は、この胸の高鳴りを信じていたい。

「大丈夫。私なら、できる！ レイジングハート！」

『I can be shot』

例えそれが、敵を作ることになったとしても、既に覚悟は出来ている。

シユテルは何度もなのはを助けてくれたのに、なのははまだ、何も返してあげられていない。練習を積んではいるものの、並び立つ日は未だ遠い。杖を取り巻く環状魔法の輝きも、なのはが満足するまでには至らない。未熟な力しか持たないことは、自覚している。

それこそ、悔しいほどに。だからと言って、引き下がっていい理由には成りはしない。ここで逃げたら、ここで妥協したら、二度と前を向いて進めない。誰も期待していないからこそ、負ける訳にはいかない。

高町なのはにも、意地がある。

シユテルに惹かれる気持ちと、直感の赴くままに、高町なのはは杖を構えたまま、右足で地面を一度踏む鳴らす。視線の先に、少女のシルエットが確認できた。杖を握る手に力が入り、苛立ちが視線に混じるのを感じて、なのはは苦笑する。きっと、自分はその娘に嫉妬しているのだろう。シユテルは、あの娘が勝つと信じている。

あの娘の方が強いのだと、信じて疑わない。それが、どうしようもなくなのはを苛立たせていた。威嚇射撃ならぬ威嚇砲撃のつもりで準備をしていたのに、気が付けば先制攻撃を行うべく照準を合わせ

ている。

血が上った頭を振って、照準を戻す。不意打ちで勝利しても、何の意味もない。情報を与えられている時点で正々堂々とは言い難いのだろうが、経験が不足している分のハンデだと考えて気持ちを落ち着かせた。少女の姿を視界に収め、冴えた頭で考える。

名前も、事情も知らないけれど、この瞬間、この場において、あの娘は私の好敵手だ。

「レイジングハート、お願い」

『All right . Divine Buster』

撃ち出された砲撃魔法は、申し分ない威力と速度を維持しながら霧の中を突き進む。

その間、なのはの視線は少女の動きを観察し続けていた。想像よりもずっと反応が速い。回避動作を取るどころか、飛行速度を維持したまま、射角から位置を逆算してなのはの方へと迫ってくる。その表情に、動揺した様子はない。力量を測っていたのは、お互い様と言っことなのか。端末を落とされながらもなのはが少女を観察していたように、少女も端末を操るなのはの能力を見極めていたことが想像出来る。

余裕のつもりか、否、正しくなのはの相手など余裕なのだろう。金髪の少女は、端末越しに見た魔力刃も展開せずに、なのはの前へと降り立った。自然体で佇み、涼しげな表情と冷たい瞳でなのはを見据える少女の姿は、何処かシュテルに似ているような気がして、何故だか分からないが苛立ちが募る。ふと、シュテルが少女のことを話す時、気の所為か柔らかな表情をしていたことを思い出す。自らの居場所を、奪われるかも知れない。そのことに危機感を覚えているのだとしたら、滑稽な話だとなのはは思う。

まだ幼い自分を自覚しながら、なのはは少女の言葉を待つ。少女はなのはの格好や表情を数秒の間観察した後、硬い表情のまま口を

開いた。

「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か」

「それは、こっちの台詞。どうしてジュエルシールドが必要なのです？」

「話しても、多分、意味がない。申し訳ないけど、頂いていきます」

「むっ……勝つてから言うんだよ。そう言うことは」

眼中に無いとばかりに、ジュエルシールドの反応があるなのはその後方へと、少女は視線を向けた。

シュテルに似ていると少しでも思ってしまった、数秒前の自分が恥かしい。なのは頬を僅かに膨らませながら応えると、魔力刃を構築した少女から距離を取るべく、フライアーフィンに魔力を込めて加速した。追撃してくる少女を妨害するために、付け焼刃で覚えた誘導制御型の射撃魔法をばら撒きつつ飛翔する。

負けたくない。生まれて初めての感じる強い想いに戸惑いながら、なのはは少女との戦端を開くのであった。

再び濃霧の中に飛び込んだは良いものの、シュテルの気持ちは憂鬱だった。

すずかに体力を吸い取られたことは言わずもがな、濃霧の影響下ではすずかが此方を見付けることはあれども、此方からすずかを見付けることは難しい。月村邸周辺に居ることは間違いないのであるが、肝心な月村邸の位置どこか、現在位置すら上手く掴めない。高度を下げて建物を目印にしようと思いつきはしたものの、気付かぬ内に空から蝙蝠に包囲されたりでもすれば、今度こそ逃げ切ることは難しい。出来るだけ早く発見してくれることを期待し、当てもなく彷徨いながら、シュテルはなののすることを考える。

あの娘は、本当に『高町なのは』なのだろうか。

身分も明かさず、知りえる筈のない敵の情報を持ち、素顔を隠す。不審人物でしかないシュテルの頼みを、見返りも求めずに、何も聞かずに、なのはは快諾してくれた。シュテルよりも高い素質を持ち、精神的にも敵に対して動揺しない強さを備え、何より、純粹で綺麗な心を胸に秘めている。完全無欠な魔法少女が居るとすれば、即ちそれは彼女のことを指すのだろう。密かに妹分のように想っていたシュテルとしては、嬉しさ半分、悲しさも半分。自らの矮小さを浮き彫りにされたようで、少々気落ちしてしまった。

星の数程の可能性があつて、他の『高町なのは』はきつと各々が一番星の如く輝き続けている。その星々の端っこの方で、誰の目にも留まらずに淡い光を放つだけの小さな星。シュテルとは、きつとその程度の存在でしかないのだろう。大切な友達一人守れずに、今も何処とも知れぬ場所を漂い、時間を浪費している。フェイトに乱入される前に封印を終える筈の予定が狂い、情けなくも撤退に追い込まれ、なのはに助けられながら這々の体で逃げ出した。頭の中には、常に後悔しかない。自分がフェイトを足止めし、なのはにすずかを任せた方が良いのではと、最低な考えが頭を離れない。

「馬鹿は、私の方です」

『そうですね。マスターは、馬鹿なこと考え過ぎです』

「……うっさいです」

人が感傷に浸っていれば調子に乗って。

悪態を吐きながらも、シュテルは小さく微笑んで、じゃれ付くように杖のコア部へと額を擦り付けた。それでも長い付き合いになるのだから、レイジングハートなりに励まそうとされていることなど、声に出さずとも理解している。ずっと、ずっとそうだった。杖を取ったその時から、何度も倒れ、直ぐに落ち込むシュテルを何とかして笑わせようとしてくれた。誰かのデバイスを真似て、フェイトの声をサンプルに取り、日本語で会話しようとしたり、シュテルが心

を許す友人に預けて欲しいと強請ってみたり。

過去に良く似た異界に流れ着いても、レイジングハートは変わらない。こんな所まで付き合せて、思えば沢山苦勞を掛けてしまった。可愛い奴めとかいぐりかいぐりしていると、何だか気持ちが悪くなつて来る。『布越しだと満足できつ、ひつ、あん、や、やだ……これはこれで……』と訳の分からないことを言い始めたレイジングハートを、もう用は無いとばかりに意識の外へ追い出すと、シユテルは前方へと意識を向けた。

所詮シユテルは誰の目にも留まらない、小さな星かも知れない。それでもすずかは、正気を失つて尚、シユテルを守りたいと言ってくれた。なのはは、シユテルのようになりたいと言ってくれた。死ぬほど恥かしい思いをしたけれど、嬉しく思う気持ちがない訳もなく、自然と笑みが零れてしまう。期待してくれる人がいるのなら、まだ戦える。大事な人を守る為なら、何だってする。手元に残ってしまった21番のジュエルシードを取り出し浮かべると、決意の宿った瞳に焼き付けて再び仕舞った。もう二度と逢えないかも知れないけれど、もう少しだけ、足掻いてみようと思う。

可愛い妹分が頑張っているのに、諦めてなんかいられない。

「……嬉しい。戻ってきてくれたんだ」

「すずか……待ってて、今助けるから」

「もう、待てない。もう、我慢できないよ。シユテルちゃんが欲しい。ねえ、頂戴？」

「い、良い子にしててくれたら……あ、あげないこともない、です」

霧の中から現れたすずかは、シユテルを視界に収めると歓喜に頬を染めた。

今一締まらない会話の最中に周囲を見渡しても、戦う気がないのか、シユテルが戦えないと高を括っているのか、周囲に蝙蝠の姿は無い。翼を広げると一度大きく羽ばたき、無防備な姿を晒したまま

シユテルへと近寄ってくる。すずかの言葉を聞くまでもなく、我慢の限界なのだろう。手を伸ばせば届く距離まで迫り、シユテルの声に笑みを深めると、口の端から鋭く伸びた犬歯を舐め上げた。距離を詰められたことが有利となるか不利となるかは、シユテル自身判断が付かなかったのだが、潤んだ瞳で自身を求めずすかの気迫に、若干の後悔を覚えてしまう。

誰がどう見ても、捕食者と獲物の関係にしか見えない。

「恐がらなくても、良いよ。痛いのは、最初だけ。いっぱい頑張つて、気持ち良く、するね……泣いても、やめ、ないんだ、から」

酷く興奮した様子で語り掛けるすずかの周囲がぼやけたかと思うと、半固形状態の蝙蝠が姿を現し始める。

荒げた呼吸の所為か、すずかの言葉が途切れ途切れに聞こえる。次々と際限無く現れる蝙蝠達は、擦れ広がり、互いに体を絡ませ合うと不定形の怪物へと姿を変えていく。相変わらず、その表面は不気味な光沢にぬめり、獲物を捕らえて女王に献上しようと意気込んでいるか、蠢きながら触腕の数を増やしていく。すずかの挙動に反応して動作する怪物を見る限り、あれに自我はなく、すずかの手足の延長でしかないのだろう。非常に認めたくない話ではあるが。

『変態ですね。二つの意味で』

「鏡を見てから言ってください」

正直な感想を述べたレイジングハートにでこぴんをして嗜めると、シユテルは空を目指して舞い上がった。

並走する形で追尾してくるすずかを横目で確認した後、後方を見遣ると、蝙蝠だったものの群れが網の如く広がっていくのが見えた。体力が抜けていく感覚に焦る気持ちを抑えると、短期決戦に挑むべく杖をすずかに向ける。きよんとした表情のすずかに罪悪感を覚

えながら、シユテルは連続して魔法の構築を終えていく。恐らく、チャンスは一度だけ。万全の状態ならいざ知らず、今のシユテルが長い時間戦闘を行うことは難しい。すずかが油断した瞬間に、一撃で仕留めるしか方法はない。

一度目の交戦は、戸惑い故に遅れを取った。思考の一部を読まれていようと、体力が削られていようと、痛みを伴う魔法を命中させていれば、容易く封印することが出来た。同じ過ちを、二度繰り返すつもりはない。すずかを助ける気持ちだが、本当にシユテルの中に在るのなら、積極的に攻撃できなくとも、封印することが出来る筈だ。敢えて触手に逃げ道を塞がせながら、無意味に逃げ回っていた訳ではない。

既に、準備は終えている。

「あの娘みたいに、華はありませんが」

『チエックメイトつてやつですね。Restrict Lock!』
「ひゃんっ!？」

すずかの悲鳴と共に、霧の中を蠢く全ての物体が動きを止めた。

大樹の根を拘束するのにも使用した、集束系の上位魔法。設定した指定区域内の物体を捕獲輪で拘束し、移動や動作を封じることが出来るそれは、シユテルにとってはある意味砲撃魔法よりも使い慣れたもの。枝分かれしてシユテルを取り囲もうとしていた触手には、一定感覚ごとに桜色の拘束輪が取り付けられ、薄暗い霧の中が一瞬の間に幻想的な照明によって照らされていく。

動きを封じられたのは、不定形の怪物だけではない。シユテルを付かず離れずの距離で追跡していたすずかが、広範囲に効果を及ぼす拘束魔法から逃れられる訳もない。「こんなはずのいっ!」と叫びながら繋がれた輪を忌々しげに睨むと、力任せに引き千切ろうと僅かに動く翼を羽ばたかせている。興奮冷めやらぬのか、苛立ちに血が上っているのか、火照った顔を屈辱に歪め、礫にされながら

ももがく様は、普段とのギャップもある所為か扇情的に見えなくもない。

少しでも手を緩めれば部屋に閉じ込められて、とても口では言えない目に遭わされる。だから、手を抜くことは許されない。許されないのに、何故だろう、とても、悪いことをしているような気がする。

『ズルくありません。これがマスターの全力全開です』
「誤解を招く言い方はやめてください。ほら、さっさと変形する」

渋々と言った様子を隠すことなく、気だるげに光の羽根を展開したレイジングハートを見て、シユテルはこっそりと胸を撫で下ろす。本来であれば、一度目の交戦で使用すべきだった。無力化の為の魔法とは言え、拘束と名の付く魔法である以上、ある程度は対象を締め上げる効果はある。すずかに取り憑いた暴走体が、拘束した状態で暴れでもすればと躊躇う気持ちだが、使用を躊躇わせた。執務官の職務では使い勝手の良いフープバインドや、拘束力の高いチェインバインドを主に使用していたが、どちらを選んでも手荒な拘束になることは間違いない。魔法生物や強化魔法を施された相手に有効な魔法として、習得難度の割りに使い道がないことで有名なストラグルバインドがあるが、昔クロノに習って使ってた際に感じた、あまりのしつくり来なさにレイジングハートのメモリから消去していた。まさかこんな所で裏目に出るとは、と考えながら、可能な限り封印の衝撃を和らげようと魔力量を調節していた時のことだった。何処からか、金属に亀裂の入るような音がした。

「……びつくりした。思ったよりも堅いんだもん」

「すず、か……？ ひあっ！？」

『ま、ますたーっ！？』

発生源を特定しようと、一瞬、周囲に感覚を向けたシュテルの耳に、すずかの声が届いた。

自由になった右手の感触を確認するすずかに目を向けると、引き千切られた拘束輪が目に入る。桜色の淡い光を放っていたそれは黒く変色し、まるで蝙蝠擬きの表面のように見えた。幾らなんでも、拘束を解く時間が早過ぎる。思えば、すずかには拘束魔法や射撃魔法の一部を見せる機会があった。蝙蝠擬きの性能も、拘束魔法に似ている部分がある。魔法を知る者が発動させると、こうまで厄介になるのだろうか。それとも高町なのは含め、この世界の海鳴には出鱈目な子しか居ないのか。幾ら心中で悪態を吐いていても、何にもならない。

すずかの拘束が解かれたことに動揺したシュテルの両足首に、生暖かい何かが巻き付くと、思わず悲鳴を上げた。足元に目を向けると、生肉を思い出させる質感の不定形生物がシュテルの足に取り付いていた。ぐねぐねと揉み解すように蠢くその感触に怖気を感じながらも、握る杖の感触に冷静さを取り戻す。封印魔法の展開準備は、既に出来ているのだから、命中させれば。

そう考えたシュテルの照準の先に、既にすずかの姿は消えてなくなっていた。代わりに、背中にかが張り付いている感触を感じる。次の瞬間には逆にシュテルの両手が黒い翼によって拘束されていた。すずかは背後からシュテルを抱き込むと、自由になった両手をシュテルのお腹に添える。冷たい指先を服の裾に潜り込ませ、地に直接手のひらを這わせると、ゆっくりと撫で回し始めた。

体と体の間に欠片の隙間も無くなる程強く抱き締められると、肩に乗せられた頭から荒い吐息が耳に掛かる。否応無しに弄ばれながらも、シュテルはこれ以上声を上げるまいと下唇を噛んで陵辱に耐え続けた。段々と上へ、上へと上り始めた手の感触に、恥かしさに涙を浮かべて弱弱しく首を振ると、手の感触が段々と下がっていく。宛ら、猫が捕らえた獲物を甚振るかの如く、すずかはシュテルの足掻く様を楽しんでいるのだろう。両手を開く形で身動きを封じられ

たシュテルは、二度も良いようにしてやられたことへの羞恥に顔を赤らめ、せめてもの抵抗に表情の変化を見られまいと瞼を閉じた。

「もう、ずるいよ、シュテルちゃ……うわ、シュテルちゃんの体、あったかい。ここも、すごくやわらかい……何だか、久し振りに抱っこした気がするね?」

「ずるは、どつちですか?!? で、でたらめ、ばつかりしてひっ、あっ、やめ、て、やめて、おねがい、んっ、ああっ!」

「んうっ……お外だと、恥かしい? 本当はお家に帰ってからだったのに……シュテルちゃんがいけないんだから」

顔を覆っていた布を剥ぎ取ると、すずかは迷うことなくシュテルの首筋に牙を突き立てた。

我慢に我慢を重ねたすずか自身も限界だったのか、一心不乱に首筋に喰らい付くと、シュテルの血液を舐め取っていく。最早言葉を話す余裕もないのか、すずかは口を付けたまま浮き出てくる血の球を待ち、その間は眠るように瞳を閉じてやわやわと腕の中のシュテルの感触を楽しんでいた。心底幸せそうな様子のすずかとは対照的に、シュテルは息も絶え絶えで体力の温存に努めるしかない。

すずかとして状況を理解せずに、こうしている訳ではないのだろう。遠くで大きな魔力同士が衝突しているのをシュテルは元より、霧の主であるすずかは知っているはずだ。誰と誰がなどと知る術は流石に無いのだろうが、片方がなのはであることは想像に難くない。なのはが来ないことは、即ちシュテルに救いが現れないことを意味している。味見するくらいの時間は、あると言ふことなのだろう。

思考こそまだ正常運転してはいるものの、血を吸われ始めてから急激に体力が低下していくのをシュテルは感じていた。すずかの想像通り、なのはではフェイトに勝利することは難しい。来るとしたらフェイトだろうが、その時は、すずかが痛い思いをすることになるのだろう。どんなに辱めを受けようと、すずかがジュエルシード

と接触したことはシュテルに原因がある
すずかが傷付くことを、シュテルは絶対に許容できない。

「くう……あう……もっ……で、す」

「ん、どうしたの？ ご、ごめんね、痛かった？」

「いちか、ばちかです……れいじんぐ……はーと」

『Transporter!』

シュテルの声を合図に、レイジングハートが魔方陣を展開した。

シュテルの足元に描かれた小型の魔方陣は、檻のようにシュテルとすずかのみを包み込むと発光を始める。シュテルが発動した魔法に、危機を感じはしたのだろう。すずかの優れた反射神経は瞬時に翼を広げて離脱を試みたが、無意識にシュテルを強く抱き込んだ両手だけは、決して離そうとはしなかった。

閃光と共に二人の姿が飲み込まれると、後には僅かに光を帯びた桜色の粒子だけが残っていた。

魔力量だけが取り柄の、素人魔導師。

フェイト・テストロツサは、眼前の白い魔導師をそう評価した。

初撃として放った砲撃魔法こそ脅威足り得るのだろうが、戦闘の基本どころか、飛行魔法すら満足に扱えていない。飛行速度を維持したまま急な方向転換を加えると、魔導師の少女は忽ちフェイトの姿を見失い、周囲を必死の形相で見渡している。この時点でフェイトは少女がロストロギア、ジュエルシードの探索者、正確に言えば元々のジュエルシードを発掘した人物ではないと感付いていた。フェイトとて管理世界で長く生活していた訳ではないが、フェイトの魔法に一々大げさな反応を示す少女が、管理世界の間人であるとは思えない。だとすれば、目の前の少女は発掘者に味方する現地協力者、

この世界、第97管理外世界の人間。砲撃魔法を含め、フェイトと
同じ年くらいの少女が短期間の内にこれだけ魔法を覚えたとすれば
驚愕に値するが、所詮、それだけの話。

フェイトから見れば、まるでよちよち歩きの赤子のようだ。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃」

『Photon Lancer・Full Auto Fire』

「……っ、撃ち落として、レイジングハート！」

『Divine Shooter』

突き出した手のひらの先に、雷光迸る発射体を作り出す。

複数展開することも可能だが、白い少女相手に行うにはあまりに
過剰な攻撃に思えた。発射体から連続で撃ち出される魔力弾を目に
した少女は、誘導制御型の射撃魔法で迎撃を試みるが、手数が足り
ない。最大で五発。これまでの戦闘で、少女に制御可能な魔力弾の
数は知れていた。付け加えるのであれば、五発動かすことは出来て
も、その挙動は覚束無い。数発撃ち落した段階で不利を悟ったのだ
ろう。少女は杖を正眼に構えると、防御魔法に切り替えてフェイト
の魔法を凌ぎ切った。

始めから防げばいいのにと、心中で疑問符を浮かべた。何故か少
女はフェイトに対して同系統の魔法で対抗してくる。実力の差は明
らかだと言うのに、どうしてそのようなことをするのか、フェイト
には理解できなかった。劣る部分は、得意な部分でカバーするしか
ない。それが分らないくらい、少女の頭が悪いなら当の昔に勝負は
着いている。

大切な母からの頼みとは言え、それを優先してまともな戦った経
験も無い少女を惨たらしく撃墜することは、流石に躊躇われた。せ
めて、怪我を負わせないように。フェイトは近接戦に持込み意識を
奪おうと考え、少女の集中力が切れるのを待ち続ける。練習量の差、
実戦経験の差はあまりに大きい。撃墜するだけなら、汗一つ掻かず

にやっつてのける自信がある。絶対的な優勢を保ちながらも、フェイトは少女を攻め倦んでいた。

防御魔法と射撃魔法の衝突によって視界を塞がれた少女に対して、フェイトは加速を付けて背後に回りこむ。少女は、無防備な背中を晒したまま微動だにしない。後は、鎌の刃を押し当てるだけで良い。フェイトの位置に今頃気が付いたのだろう。少女が、緩慢な動作で振り向く。

驚愕に染まっっているはずの少女の顔には、薄らと笑みが浮かんでいた。

「捕まえた！ もう、一回っ！」

『Divine Shooter』

「バルディッシュュ！」

『Defensor』

危機感を感じて後方へと飛び退くも、逃げ遅れたフェイトの足が拘束輪に縫い止められる。

瞬時に防御魔法を展開すると、立て続けに三発の魔力弾がフェイトの盾を揺らした。即席で展開したであろう拘束魔法の開放処理をしつつ、フェイトは内心の動揺を唾液と共に飲み込んだ。フェイトは高機動に重きを置いた魔導師。防御力の薄さは、フェイトの唯一の弱点と言える。撃ち込まれた魔力弾が十分な構成によるものであれば、致命的とは言えずとも、大きく体勢を崩されていた。

先程から感じていた、違和感。フェイトが、少女を追い詰め切れない理由。

有り得ない話であるが、初見であるフェイトの動きを、ある程度予測して動いている。距離を詰められないように常に威嚇用の魔力弾がフェイトを牽制し、まるで一撃入れることで状況が変わるのを知っているかの如く、少女は時に捨て身で、時に罠を張り、フェイトの動きに対応してくる。才能と直感と魔力量を頼りに戦う典型か

と思えば、思い出したかのように頭脳戦染みた真似もする。第三者の入れ知恵も考えたが、フェイトのことを知る人物は限られている。可能性は低い。

気の所為でなければ、少女の眼は徐々にフェイトの動きに慣れ始めていた。霧の原因であるジュエルシードを封印しても、目の前の少女とは何度も戦うことになる。これ以上、時間を掛けることは、敵に塩を送ることに成りかねない。

一気に、決める。今までとは逆に加速して距離を取ると、フェイトは足を止め、少女へと杖を向けた。魔力刃を収めた杖の先で雷電が音を立てて始めると、少女は無言で杖を構える。

まただ。砲撃魔法は、誰でも使える魔法ではない。幾ら使うことが出来るからと言って、否、使うことが出来るからこそ、敵対する魔導師が使用するのに対して動揺しないはずがない。違和感が、増していく。経験が浅いことは、間違いない。それでも、行き成り大砲で狙われて、逆に狙い返すことが出来る人間がどれ程存在するだろうか。

『Thunder Smasher, Get Set
Divine Buster, Stand By』

準備が整ったことを互いのデバイスが伝えたと、フェイトは躊躇わずに引き金を引いた。

恐らく、砲撃魔法では決められない。奇妙な確信があつたからこそ、「ごめんね」の言葉は言わずに口の中に留めた。押し勝つにしろ、押し負けるにしろ、勝負は砲撃魔法の後にどう動くかで決まる。交わる視線を合図に、互いの閃光が解き放たれた。

『Fire』

『デバイス……バスターッ!』

『Divine Buster』

極光と極光が衝突し、目を焼かんばかりの閃光が辺りの霧を打ち消していく。

余波だけで、この威力。当たれば一溜まりもないだろうなと、フェイトは人事のように考えながら、杖を通して魔力を注ぎ込む。フェイトの放った砲撃魔法と、少女の放った砲撃魔法は、決して拮抗することはない。押しでは引いてを繰り返す奔流の激突を眺め、フェイトは一度眉を顰めた。一見拮抗しているようには見えるものの、フェイトが砲撃を維持できる限界が迫っているのに対し、少女の表情にはまだまだ余裕が窺える。悔しいが、先程のバインドと言い、砲撃と言い、集束の適正では少女に分があるのだろう。

底無しか。小さく悪態を吐くと、完全に押され始めた砲撃魔法を破棄し、フェイトは少女に向って身を翻した。瞬時にデバイスから魔力刃を展開すると、少女の砲撃魔法に沿う形で加速を続ける。砲撃と砲撃の衝突により、互いの魔力光が飛散し視界が悪い。嬉しい誤算は、晴れてしまった部分を埋めようと、互いの間に濃い霧が流れ込んできていること。後数秒で切り込める位置になって、少女の砲撃が止んだ。

時既に遅く、フェイトの大鎌が少女に向って振り下ろされた。

「……ごめんね」

『Scythe Slash』

「っ!? 馬鹿にしないでっ!」

『Protection』

防がれるかどうかは、フェイトにとっては別段問題ではなかった。近接戦闘に特化したサイズフォーム。その魔力刃にはバリア貫通の能力が付加されている。組み付けた時点で、勝負は殆ど決したも同然。新たな防御魔法を重ねて守りを固めても、フェイトの鎌が防御を破る速度の方が、ずっと早い。漸く決着が着くと安堵しながら

も、フェイトの表情は変わらない。

不測の事態はあったものの、問題は母であるプレシアの求めるジュエルシールドを封印することの方である。暴走しているジュエルシールドの方角へ向わせまいと、我武者羅にフェイトに向ってきた少女の様子から察するに、既に封印に向った別の魔導師がいるのだろう。恐らく、フェイトの目の前で防御魔法の殻を被ったまま、俯いてしまった少女よりも、強い魔導師が。アルフの到着を待つべきだったかと思案しつつも、フェイトの鎌は確実に少女の防御を切り崩していく。

「……やんは、もつと速かった」

このまま押し切れると確信したフェイトの耳に、少女の声が届いた。何を言われたのかは分らなかったが、少女の様子は相変わらず俯いたまま、抵抗する気力も既に無いように思える。魔力量だけが取り柄だと考えていた最初の認識は、既にフェイトの頭の中にはない。研ぎ澄まされた技術こそ未だ持ち得ていないものの、反応速度や咄嗟の判断は目を見張るものがあった。原石とは、彼女のような人物を指すのだろう。封印に向った魔導師と二人掛りでは、フェイトの勝算も薄いかも知れない。

そう、フェイトと少女は、お互いジュエルシールドを目的とする敵同士。可哀想だとは思えど、既に言葉は不要。語り掛けた少女の言葉を無視して、フェイトはバルディッシュに力を込めた。

「シュテルちゃんは、もつと強かった！」

「……？」

突然声を張り上げた少女の声に、フェイトは誰の名だろうと首を傾げた。

俯いていた少女が顔を上げ、フェイトを鋭い眼光で睨み付けると、

デバイスを持たない右手を横に振り抜く。来るべき斬撃に脅えていないのか、為す術も無く放心しているのかのどちらかだと考えていたフェイトは、少女の気迫に少しだけ驚いた。だからと言って、状況が少女の味方してくれる訳もなく、状況は何も変化しない。フェイトは少女の動作を気に留めることなく、最後の防御魔法を切り裂こうと鎌の先端を殻の中へと押し込んだ。

同時に、少女は振りぬいた右手の人差し指を立てると、口から大きく息を吸い込む。フェイトには、何故かその呼吸音が、とても大きく聞こえた。

「あなたに負けてたら、一生あの娘に追い付くことなんてできないっ！ 誰も通さないって、約束したからっ！ だからっ！ だから

……」

『Barrier Burst』

ごめんね。

聞こえた少女の声と共に、人差し指がバリアの内側を撫でた。

何をされたのか、何が起きたのか、フェイトには理解出来ない。強い閃光と衝撃に襲われ、自分の身体が宙を舞っているのだと気が付くまでの数秒の間、フェイトは意識を失っていた。意識を取り戻したフェイトは、動かない体を一時放置し、思考を走らせる。

少女のデバイスが唱えた魔法には、聞き覚えがあった。バリアの表面に魔力を集め、爆発させることで相手を攻撃し、距離を取る魔法。フェイトの魔法の師であるリニスから教わったその魔法は、フェイトの戦闘スタイルとは真逆を行く。その上、習得難度の高さから、覚えようとしても相手だけでなく使用者自身も巻き込んで吹き飛ばしてしまうことが殆どだそうだ。そのことを思い出して、フェイトは意識を完全に覚醒させる。フェイトよりも未熟な魔導師である少女が、完全にバリアバーストを使用できる可能性は低い。追い詰められて自爆したにしては、直前の様子が噛み合わない。

休息を求める体に鞭を打ち、少女の居た方向に目を向けると、霧の中、フェイトを見据える少女と目が合った。

防護服の白い上着は何処かに吹き飛び、黒いインナーが剥き出しになってはいるものの、フェイトと違い、傷を負った様子もなければ、大きく疲弊した様子もない。最初からダメージを覚悟していた少女と、不意を突かれたフェイトでは、同じ衝撃を受けても復帰するまでの時間が違う。フェイトは未だ呼吸も整えていないのに対し、少女は霧の中、不動の構えでフェイトが復帰する様を見詰めていた。最初から、交戦し始めた時から、どんなに工夫してもフェイトに斬り込まれることを読んでいたのだろう。

その証拠に、既に少女の杖が此方に向けて構えられている。

リボンが解けたことで髪が乱れ、少女はそれを鬱陶しげに右手で掻き上げる。少女の杖には四つの環状魔法陣が取り巻き始めていた。崩れた体勢を整えながら、引き伸ばされた時間の中でフェイトは思う。最早、回避も防御も、撃ち返す時間もない。準備を終えたのだろう。少女が大きく息を吸い込むのが見えた。一度目のそれよりも、充填速度が大分速い。フェイトの油断を誘うために、手を抜いたとしても言うのだろうか。

飛行魔法に魔力を込める間もなく、少女の声がフェイトに届いた。

「これが、わたしの、全力全開っ！」

『Divine Buster』

最後にフェイトが見たものは、砲撃の撃ち合いの時よりも数倍の出力で撃ち出された砲撃の、桜色の光であった。「……母さん」と小さく声を漏らすと、フェイトは悲鳴を上げることもしゃさねずに光の奔流に呑み込まれ、再び意識を失った。

ドーム状に海鳴市を覆う霧を空から眺め、シュテルは深く溜め息を吐いた。

すずかと戦っている間、シュテルはずっと疑問に感じていたことがあった。幾らジュエルシードを上手く扱えたとしても、どれだけ魔力を引き出すことが出来たとしても、すずかの能力は出鱈目が過ぎるのではないかと。思考の読み取り、体力吸収、蝙蝠、肉体の強化、そして、霧。ジュエルシード単体で何処まで出来るのか知らないが、すずかの能力は幅広い。才能だとか、相性だとか、とか言われてしまえばそれまでだが、自慢の拘束魔法を破られた時にシュテルは思考は一つの方向に集束した。

本当に何か、ずるしているのではないかと。

「しゅ、しゅてるちゃん、おちないよね？ は、はなしたら、やだよ……？」

「すこし、すずかに、してて、くだ、さい」

すずかを背負ったシュテルは、疲労困憊の体を気力で支えながら、海岸を目指して高度を下げていく。

半分落下しているような速度で降下するシュテルの背後で、あまりの高さに脅えるすずかがシュテルの後ろ髪に顔を埋めていた。その背には既に蝙蝠の翼はなく、額に張り付いたジュエルシードを除けば、普段のすずかと何ら変わりはない。固く眼を瞑って縋り付くすずかの締め上げる力が強くなるのを感じながら、シュテルは意識が途切れる前に着陸しなければと考え、降下速度を上げた。

二度目の敗北を確信したシュテルは、すずかを巻き添えに転移魔法を使用し、海鳴市上空へと転移した。

何も逃げる為に使用した訳ではなく、すずかの蝙蝠の攻撃にしろ、霧による吸収攻撃にしろ、霧の影響下だからこそ強い効果を発揮する。あわよくば弱体化を狙えるのではと考え、空へと場所を移したシュテルの目の前で、すずかの蝙蝠の翼が文字通り霧散した。悲鳴

を上げながら落下したすずかを死ぬ気で引き上げて、今に至る。思えば、海鳴を覆い隠す霧は、最初から範囲を拡大することもなく檻のように一定の大きさを保ったままである。広げれば広げるだけことが有利に運ぶ筈なのに、すずかはそれをしなかった。正しくは、出来なかつたのだらうとシュテルは考える。

この霧は一種の結界魔法のような物。

すずかの意志に関係なく、発動場所を中心に展開し続ける、すずかにとって快適な空間。シュテルとなのはが離脱した時、すずかは追撃を掛けて来てもおかしくはなかった。優位性を失っても、精神的に追い詰められたシュテルを捕らえて霧の中へと戻ることは、すずかなら難しくはなかつただらう。それなのに、すずかは霧の中で待ち続けた。その理由は、現在シュテルの背中で半泣きになっているすずかを見れば理解できる。

この霧を操る能力は強力だが、範囲が限定されている。

「ねえ、お家に戻ろう？ い、今からでも遅くないよ」

「往生際が、悪い、ですよ。飛べる、ものなら、飛んでみる、です」

「……………いじわる……………あむっ」

「あつ、ちよつ、ちよつと、やめて、んっ、やめ、今は、洒落になりませんっ、から……………」

じゃれ付いて甘噛みしてくるすずかを説得しながら、シュテルは全速力で陸地を目指した。

首に触れる牙の感触も、随分と短くなってしまった。すずかの額のジュエルシードの中身の大半は、霧として放出されてしまったのだらう。霧の中でなら自由な命令権を持つすずかも今では非力、でもないが、疲弊したシュテルでも対処できる力しか有していない。霧の檻は未だ健在であるものの、後は、すずかに張り付いたジュエルシードを封印すれば全てが終わる。ふと、霧の中から、桁外れの魔力同士がぶつかり合うのを感じた。どうやら、あちらの戦闘も架

橋に指しかかっただけ。急がなければと考え、シユテルはずかの悲鳴も無視して重力に身を任せた。

幾らこの世界の高町なのはが規格外の存在だとしても、フェイトに勝利することは不可能だ。

この世界のフェイト・テスタロッサを直に確認した訳ではないので、シユテルの記憶とは異なる部分もあるだろう。しかし、ジュエルシードを求めて現れたと言うことは、本筋に大きな変化は少ないと考えていた。フェイトは大魔導師プレシア・テスタロッサの使い魔、リニスによって基礎から応用に至るまで魔法の訓練を受けた本物の天才魔導師だ。ミッド式では珍しい近接戦闘用の魔法を好んで使ってはいたが、幅広い魔法を身に付けたフェイトに死角などない。なのはがどれ程急激に成長したからと言って、戦いの最中に進化と呼べるほど成長できる人間など物語の登場人物くらいであろう。シユテルの世界のフェイトは戦う度に進化していたが、あの子はその分頭が非常にあれなので、丁度釣り合いが取れているのだと思う。

話を戻す。追い詰められていたこともあってか、なのはの気迫に思わず足止めを頼んでしまったが、シユテルは正直心配で仕方がなかった。フェイトとなのはの邂逅のこともある。シユテルが原因で潰れてしまうよりは、こうしてジュエルシードを求めて戦い、理解し合う機会が生まれることの方が良いに決まっている。それでも、なのはが無残にも倒れ、傷付くことはシユテルも望んではいない。聞かれるままにフェイトの戦闘方法や弱点を教えるは見たいものの、付け焼刃のアドバイスで勝てるなら苦労はしない。主に、過去のシユテルが。

現在も戦闘が続いているのなら、それはなのはの奮闘あつてのことだと理解している。シユテルと違い、才気に溢れ、鋼の精神力と慈愛を併せ持つ本物の魔法少女だと言うことも重々承知している。それでも、フェイトは訓練を受けた本物の魔導師だ。偶然やビギナーズラックで勝てるほど、甘い相手で決してない。ユーノも付いているし、大丈夫だと思うが、意地になって逃げずに戦っているのな

ら。そう考えて、シユテルの顔色は益々酷くなった。

何度ものには泣かされたとは言え、なのはが涙を流す必要はない。なのはは今、シユテルの為に戦っているのだから、シユテルにはなのはを守る義務がある。そうでなくとも、あの娘のことは憎からず思っている。

早く、助けに行かなくては。

すずかを砂浜に下ろすと、シユテルは瞬時に杖の先をすずかに向ける。

シユテルの捕獲を諦め切れない様子から、霧を指して全力疾走くらいするのではと考えていたのだが、シユテルの予想とは反対に、すずかは脅えた様子もなく、きよとんと首を傾げてシユテルを見ていた。疑いたくはないが、何度も不意を突かれ用心深くなっているシユテルは、無言のまま光の羽根を展開すると、封印すべく魔力を杖に流し込む。

「ま、待って！　お願い、ちょっとだけ待って、シユテルちゃん！」

「……待ちません。忍義姉さんも心配しています。大人しく封印されてください」

「封印は、もう良いの。で、でも、これだけは聞いて！　嘘じゃないよ！　シユテルちゃんを守りたいことも、一緒に居たいってことも、全部、本当だよ！」

涙を浮かべて、懇願するかのようにならずかは声を張り上げた。

へたり込んで俯くすずかを見て、シユテルは下唇を小さく噛むと、光の羽根ですずかの周囲を包み込んだ。本当にどいつもこいつも、と心中で照れ隠しに悪態を吐くと、シユテルは熱を持った頬を人差し指で掻きながら、封印処理を中断し明後日の方向に顔を逸らす。

「ずっと、ずっと言いたかった。普段は、絶対言えないから。帰ったら嫌だなんて言ったら、シユテルちゃん、困らせちゃうから。こ

んな格好だと、信じて、貰えないかも、知れないけど……だいき、だよ」

俯きながら言葉を続けたすずかは、尻すぼみになりながらも伝えるべきことを伝え終え、覚悟したように眼を瞑った。ドレスの裾を握り締め、恥かしそうに耳まで赤くしたすずかであったが、言われたシュテルの方は、その数倍の被害を被っていた。

なのはにしろ、すずかにしろ、どうしてこうまで自分を追い詰めるのかと、世の理不尽さを嘆く。誰かに好意を向けられることなど、シュテルの短い人生の中で多くはなかった。大好きなんて言葉も、家族以外では言われたことなど、逢う度ににへらと顔を緩めながら「えへへー、なのは大好きー」と甘えてくる天然娘以外には心当たりがない。本当に頭の弱い子だったと、懐かしさから涙が浮かぶ。あれは何も考えないで言っているので、シュテルも何も考えずに甘やかしていたが、恐らく誰にでも同じことを言っているのだと思う。痛いくらいに火照った頬を袖で隠し、思わず舌打ちしたシュテルであったが、思うように舌が動かさず不発に終わった。やり場のない感情を押し込めると、シュテルは封印すべく杖をすずかへと向けた。大事にされていることは、一緒に暮らしていれば自然と分かった。問題は、その大きさを見誤ったこと。

目を瞑り、封印の衝撃に備えるすずかへ向けて、シュテルは口を開いた。

「……私も」

「……？ なに、シュテルちゃん？」

「私も、その……だい……すき、です、よ」

『Seal Sealing! Seal Sealing!』

搾り出したようなシュテルの言葉に、すずかが表情を綻ばせた次の瞬間、暴発した封印魔法の光がすずかを包み込んだ。数秒の後、

閃光が晴れると、倒れ込んだはずかの姿と、その隣に転がっている青い宝石が残るだけであった。

『危ないところでした』と言いながら、もしも顔が付いていたらやり切った表情をしているであろうレイジングハートのコアを驚掴みにする。折角、勇気を出して言ったのに。恥かしさで死ねたら、きつとシュテルは数回は死んでいる。それくらい、シュテルにとつては難易度が高いことだったのに。

無言のまま両手でコアを掴むと、シュテルははやて直伝の頭突きをレイジングハートにぶち込むのであった。

十一話（後書き）

フェイトさんが、フェイトさんがいったい何をしたって言うんだ。近接誘って自爆 リアクターパージ 砲撃。決める時に決めるのがなのはさん。シュテルさんは、お察しください。

十二話

高町なのはは、強固な防御魔法を展開すると雷光を纏う射撃魔法を防ぎ切った。

直ぐに、追撃が来る。そう確信したなのはは、敵の姿も確認しないまま牽制の射撃魔法を撃ち返す。なのはの眼では追えぬほどに速い機動、突如襲撃してきた少女の躊躇いのない攻撃から、経験の違いを即座に読み取ると、守りの戦闘では勝てないと見切りを付けた。周囲にサーチャーをばら撒き、拙い動きで自身を取り囲むように配置して、擬似的に死角を潰す。

数を用意するのも、手足のように動かすことも満足に出来ないが、配置して置く分には負担は少ない。後は、擬似視界から送られてくる映像を処理するだけで良い。射撃魔法を防がれた直後、森の中へと姿を消した相手を見付けるべく神経を研ぎ澄ませる。敵がどれほど強大でも、やるしかない。手持ちの魔法で切り抜けるしか、ないんだ。

言い聞かせるように心の中で反芻すると、震える両手でレイジングハートを握り締めた。静寂に包まれた戦場で、自分の心臓の音だけが煩く耳を打つ。数秒待っただろうか。数分待っただろうか。敵は姿を現さない。それでもなのはは、敵が木々の合間を抜けて高速で接近してくることを感覚として捉えていた。心の準備が出来ていないのは常のことではあるが、仕掛けてくると確信してしまっただけは冷汗が止まらない。正確な位置を特定できない、中途半端な魔法の才能を恨めしく思う。

どんなに己を鼓舞しても、怖いものは怖い。誰だって鎌を持った人間に追い掛け回されれば、怖いに決まっている。本当は、痛い思いなんてしたくない。今直ぐにでも逃げ出したい。どうして、こんなことになったのだろう。

膨らんでいく最悪の想像に涙を浮かべながら、なのはは現状に至

った経緯を振り返る。

「一匹くらい、あたしに懐いてくれたっていいと思わない？」

「どの子が連れて来てあげたいけど、なのはちゃんが相手だと、私でも手に負えないかな」

「……良いから、ちよつと助けて」

月村邸はすずかの部屋で、なのはは膝の上のみならず、全身に猫を纏わり付かせて倒れ込んでいた。

本日は月村邸でのお茶会。本日は魔法の練習もジュエルシード探索もお休みにして、友達との会話を楽しんで、何事もなく帰宅して体を休めるつもりでいた。昔から何故か、なのはは猫に好かれる。敢えて言い換えるのであれば、猫にしか好かれなとも言おう。どうやってかは知らないが、ノエルやすずかによつてきちんと躡けられている筈の猫達から手荒い歓迎を受けるなのはを見て、いつものことだとばかりに談笑しながら受け流す友人二人。なのはは不貞腐れた口調で助けを求めながらも、目に付いた一匹の背を撫でて笑みを浮かべる。アリサの家での殺伐とした雰囲気とは違い、月村家は慣れない魔法の行使で草臥れたなのはの心と体を癒してくれる。

最近元氣のないなのはを心配してか、アリサもすずかも、普段から大人しいなのはを気に掛けてくれているのだろう。「新参が舐めた真似し腐って」と言いたげな態度を隠すことのない猫の軍勢によつて死地に追い込まれたユーノを寸での所で抱きあげると、アリサとすずかは倒れ込んだなのはの両脇を埋めるように寝転がった。元々目的など在于てないようなもの、アリサは壊してもいい玩具を与えられた赤子のようにユーノを捏ね繰り回し、猫の群れに纏わり付かれたなのはは昼下がりの陽気もあつてうとうとと船を漕ぎ、すずかはそんな二人を微笑ましげに眺めていた。

ジュエルシールドが発動したのは、その時のことであった。

「隙ありっ！」

「……見えてるよ」

『Divine Shooter』

森を抜け、背後から飛び掛かって来た黒い魔導師を、予め準備しておいた魔力弾で迎撃する。

予想だにしていなかったのだろう。焦った表情で身を翻した少女は「な、なんでっ!?」と叫びながら、失速するように急降下して魔力弾を回避した。誘導して追撃することも出来たが、少女は既になのはに切り込むことが可能な距離に迫っている。足を止めることは避けた方が無難だと考え、後退りながら、体勢を整えて安堵の息を吐いた底抜けに明るい少女に目を向ける。

少女もなのはの射撃を警戒してか、杖の中へと魔力刃の鎌を収めると、中距離戦へと移行すべくじりじりと距離を取っていた。怒ってますと言いたげな分り易い表情でなのはを睨むと、指を指しながら大きく口を開く。

「ぼ、僕よりずっと遅いくせに……正々堂々近接戦で勝負しろっ！」

「最初に不意打ちしておいて、何を今更」

「あ、あれは演出って言うか、格好良く登場したくてやっただけでほんとに中てる気なんかなかったし……と、兎に角、君には、もう僕の影すら踏ませないッ！行くぞお！」

掛け声と共に高速移動を始めた少女は、一定の距離を保ったまま射撃魔法の発射体を設置していく。雷電進む球体に内心脅えながら

も、端末に意識を集中させて迎撃のタイミングを計る。此方から仕掛けることは、実力差、経験差から見ても難しい。眼で追うことは出来ても、身体が付いていかない。

なのは出来ることは、明確な隙を見付けるまで、防ぎ耐え続ける。それだけだ。

ジュエルシードの反応を追って月村家の庭へと飛び出したなのは見たものは、大きく成長を遂げた子猫の姿であった。思えば、白毛に黒の縞の模様が特徴的な子猫には見覚えがある。屋敷を訪れる度になのは争奪戦が行われ、その度に部屋の端で遠巻きに寂しそうな視線を送っていた子猫。不覚にも自宅での自分自身の姿と重ねてしまい、見付け次第構うようにしていた。優しくすればするほど懐いてくれて、他の子の名前は覚えられなかったが、その子だけはメイと名前で呼んで可愛がっていたのだが、今日は姿を見せてくれなかった。

愛想を尽かされたのだろう、と考えていた矢先、メイは大きくなって帰って来てくれた。

確かに二人きりの時には「はやく大きくなるんだよ」と言いながら撫で回していた。言いはしたが、何か違う。大人になったと言うより、まるで拡大表示にされたような違和感を感じる。ご機嫌な様子で「なあお」と人鳴きすると、なのはに擦り寄ってくるメイに、なのはは放心しながらも全身に感じるもふもふとした柔らかい感触を楽しんでいた。

「ロストロギアの探索者っ！ 覚悟っっ！」

叫び声と共に、突如雷光が二人の周りに降り注ぎ、訳の分らぬまま戦闘へと移行し、現在に至る。分っていることは、少女がジュエ

ルシードを狙う魔導師であること、なのはよりも実力のある魔導師であること、そして何より、会話の端々から、何も考えていないことが読み取れた。

現に戦闘の最中、目的を忘れたであろう少女に放置されたメイが、ユーノを玩具のように転がしながらがじと甘噛みしている。ぱつちいから吐き出しなさいと眼で訴えても、無垢な眼差しで首を傾げられると何も言えなくなってしまふ。ぐったりとして振り回されている様子からして、意識が残っていることは期待できない。相変らず、今回も自分だけが頼りだ。

一斉発射の準備を終えたのか、いつの間にか腰に手を当て仁王立ちした少女が、不敵な笑みを浮かべていた。ここで負ければ、高町なのはは再び無価値な少女へと成り下がる。ジュエルシードは、渡せない。街を守らなければ、守れなければ、誰にも必要として貰えない。自然に浮かぶ涙を悟られまいと俯きながら、なのはの杖を握る手にも力が入った。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃っ！」

『Photon Lancer・Multishot』

「え？ ちよつ、ちよつと、もっつ！ 偶には僕の言うこと聞いてよ！」

少女とデバイスの気の抜けた遣り取りも、今のなのはの耳には入らない。

端末から送られてくる視覚情報を元に、槍のような形状をした魔力弾をどう処理するかを考える。馬鹿の一つ覚えに練習した甲斐もあり、即座に展開できた射撃魔法は五発。時間がないと見切りを付け、投げ付けるように左翼の発射台を狙って撃ち出した。せめて撃ち込まれる最大数を減らせば、耐え凌ぐことが出来ると考えたからである。破壊できたかどうか、確認するよりも先に今は身を守らなければ。レイジングハートを抱き締めて防御魔法を展開すると、有

りつ丈の魔力を流し続けた。

「……………」

なのはの予想に反して強烈な衝撃はなく、連続した鈍い衝撃が盾の表面をノックするに留まった。失敗か。そう疑ったなのはは希望的な観測を切り捨てて固く瞑っていた目を開くと、眼前が、粉塵によって覆われていた。おかしい。これまでの戦闘で何度か少女の射撃魔法を防いだが、先程の一斉発射に限って炸裂した範囲が広過ぎる。慌てて飛び出した所を鴨撃ちにするつもりかと警戒して足を止めたが、なのはの中で警鐘が鳴り止まない。迷った拳句、防御を固める選択肢を選んだなのはは、粉塵が晴れるまで数秒の間だと信じて、辛抱強く待ち続ける。

願いは空しく、風切り音と共に、バリアの表面を誰かが蹴る音がした。

「君は、強いね。うん、楽しかったよ」

『Scythe Slash』

なのはの防御魔法を足場に宙返りすると、少女は閃光を放つ鎌を振り被った。

鎌の刃先が防御魔法を突き抜けて来るのを、なのははぼんやりと眺めていた。時間の流れがとても緩やかに感じられる。なのはの眼前に、確かな敗北が迫っていた。今日という日を迎えるまで、泥臭いながらも何とか勝利を収めて来れたと言うのに、ここで全部が終わってしまうのか。辛いことも、沢山あった。人知れず涙を流したことも一度や二度ではない。家族にも友達にも心配を掛けて、それでも戦って来れたのは、この街で唯一高町なのはだけが、ジュエルシードを封印する才能を持っていたからだ。

魔法の才能だけが、性格も暗く、何の特技も取り柄もない、抜け

殻だったなのはの存在意義。

嬉しかった。どんなに頑張っても、どんなに怖い思いをして街を守っても、家族にすら褒めて貰えないけれど、なのはは満足していた。自分の力で、誰かを守ることができた。その実感だけで、なのはにとっては十分以上。まだ、戦える。まだ、笑っていられる。欲を掻き過ぎれば、破滅する。

小学生のなのはですら知っている、単純な話。なのはは、決して多くを求めたりはしなかった。胸に秘めたささやか想いだけは、失いたくない。その一心で、戦い続けてきたのに、そんな小さな満足感ですら、なのはには分不相応だと言っのだろうか。始めから分っていたけれど、ずっと気付かない振りをしていた。

本当は、魔法少女になんて、なれるはずがないって。

心の奥底で、何かが、切れる音がした。何も考えずにレイジングハートを握る左手を振り上げると、視界の外で金属同士がぶつかり合う音がして、迫る刃が動きを止めた。少女が両手で放った斬撃を、左腕一本で受け止めたのだ。当然のように痛みと痺れが伝ってくる。

「私が……」

「そ……そんな、どうやって……」

「私が、皆を、守るんだっ！」

『Flash Impact』

勝利を確信した少女の表情が、脅え混じりのものへと変わった。

なのはは左手を軽く引くと、再度力任せに打ち上げる。万歳するかの如く、両手を空へと掲げた少女の姿は、酷く滑稽に見えた。笑みを浮かべる余裕などある訳もなく、高町なのはは泣きながら声にならない叫びを上げ、杖を両手に持ち直す。流れるような動作で杖を振り被ると、隙としか思えない少女のお腹目掛けて渾身の力で振り抜いた。桜色の圧縮魔力が炸裂し、少女は「かひっ」と口から空気を吐き出して、なのはの前方へと錐揉みしながら落下していく。

なのは自身、精神の高揚に身体が付いていかず、荒い呼吸を整えながら少女の姿を見送っていた。何とか、なったのだろうか。追撃を掛けるべきか、逃亡すべきか。少女がなのはの力を舐めて掛かってくれていたからこそ、全力の一撃を入れることができた。なのはの中の冷静な部分が二度目はない、今直ぐに逃げると警鐘を鳴らしている。

言われなくとも、そう考えたなのはの視線が、落下する少女のそれと重なった。

「……撃つて、早く撃つて！　お願い、レイジング、ハートっ！」
『All right, my master. Divine Buster, Stand by』

見たこともない四つの環状魔法陣が、レイジングハートを取り巻いていく。

魔法陣の種類など詳しく知りはないが、桁違いの魔力を注ぎ込められることだけは感覚として理解できる。確かな手応えを感じていると、視線の先で体勢を起こした少女の姿に焦り、歯ががちがちと音を立てて鳴り始めた。痛みを感じていないのか、信じられないと言った様子でお腹を数度撫でると、機敏な動作でなのはの方へと向き直る。

その表情は、何故か歓喜に染まっていた。

「……すごい。君、本当にすごいよー！」
「それは、どうもー！」
『Divine Buster』

はしゃいで足を止めた少女に向って、なのはは溜めに溜めた魔法を解き放った。

レイジングハートから受け取った完成イメージとは大分違う、不

恰好にも放射状に広がった砲撃魔法。しかし、この場、この瞬間だけはそれが幸いした。一撃入れられたことで所謂ハイな状態になっていた少女は、環状魔法陣の存在に気が付いていなかったのだろう。閃光を眼にした瞬間には回避行動を取っていたが、時既に遅く、桜色の奔流の中へと呑み込まれて行く。炸裂効果を付加した覚えはないが、桜の花弁も宛らに舞い散る桜色の魔力粒子に視界が塞がれると、なのはは酸欠一步手前の肺をゆっくりと平常状態へと休ませ始めた。

確かな手応えを感じ、今度こそ終わつたんだと、なのはは安堵の溜め息を吐く。レイジングハートを握る手は白くなるほど握り締められ、未だに震えが収まらない。俗に戦闘狂と呼ばれる人物を見る機会など無い方がよいのだろうが、生憎と家族の大半が強者との闘いに心躍らせる変態ばかりだった所為か、少女が昂揚した理由も何となく理解出来てしまった。窮鼠猫を噛むとは言うが、追い詰められた鼠を甚振ることを楽しむ猫も居れば、予想外の反撃を受けて喜ぶ奇特的な猫も世の中には存在する。そもそも、戦闘能力で言えばなのはの数段上に行く少女の様子からして、まともに戦闘に耐え得る相手に出逢つたことがなかったのではと予想していた。

頑丈さと魔力量しか取り柄はないが、何とか勝ちを拾うことが出来たのだから、自分にしては上出来だろう。本当なら少女の姿を確認したかったが、初めて人を撃つたことで喉元に酸っぱいものが入り上げてきている。当然、気分も最悪だ。向こうから仕掛けてきたのだからと分つてはいるものの、説得するとか、他に幾らでもやり方はあったのではと納得できない自分が居る。兎にも角にも、後悔は嫌でも後からすることになるのだ。今は、ジュエルシードを封印しなげば。

最初こそなのはと少女の戦闘を混ぜて欲しそうな目で眺めていたメイであったが、疲れてしまったのか、精根尽き果てたユーノを抱っこしたまま寝てしまっていた。痛くしないようにと心の中で数度反芻すると、なのははメイへと杖を向ける。

「まだあつ、まだ、だあーっ！」
「ひっ……」

背後から聞こえた雄叫びに、なのはは小さく悲鳴を漏らしながら振り返る。

既に少女が、雷光の如き速度でなのはに迫っていた。バリアジャケットの大半は破れ、剥がれ落ちていけると言うのに、闘志の宿った瞳は欠片も揺らいではない。眼前まで辿り着いた少女の姿に、なのは息を飲むと、失った戦意と共に瞼を閉じる。二度目は無いと、確信していた。一撃で撃墜できなかったなのはは、最早詰んでいることに他ならない。

衝撃と電気による痺れを感じ、なのはは意識を手放した。最後に聞こえた「あつ……ごっつ、ごっつ、ごめんっ、つい、あつ、まつ、待つてー!？」と慌てる少女の声と、誰かに抱き止められる感覚に、ほんの少しだけ安堵しながら。

風が頬を撫でるのを感じて、高町なのはは微睡みながらも瞼を開いた。

木々に囲まれた森の中、眩しいほどに青い空が視界に映る。何をしていたのか思い出せずに、ぼんやりと流れる雲を眺めていると、胸に痛みを感じて眉を顰めた。我慢できないくらいの痛みではなく、一瞬疼いたかと思うと、次の瞬間には消えてなくなってしまう。その程度の痛みが、今のなのはには涙が流れるほど痛く感じる。ふと思い出した。勝ちを確信して、詰めを誤って、最後には再び立ち上がった少女に、負けてしまったんだ。否、言い訳をするのはやめよう。詰めを誤らなかつたとしても、あの少女には敵わなかつただろう。

込み上げる嗚咽を抑え切れずに、服の袖で涙を拭っていると、唐突になのはの視界が影に覆われた。

「あつ、起きた？　つてあれ……もしかして泣いてるの！？　どこか痛い！？　あ、ちがつ、そのつ、えーと、ご、ごめんなさい！」
「なあーお」

なのはの上に現れたのは、先程まで戦っていた少女の顔と、普段通りの普通の子猫の姿に戻ったメイであった。思えば、後頭部に柔らかいものが当たっている。どうやら、敗れたなのはを介抱してくれていたらしい。少女は膝枕していたなのはの顔を覗き込んで、泣いていることに気が付くと、自身も泣きそうな表情でなのはに謝罪をしてきた。驚いて涙は引っ込んでしまったが、泣いてしまった所為で頭が上手く働かない。状況が飲み込めないのはは、涙目で頭を下げ続ける少女の頬に手を添えると、「いいよ、ありがとう」と言って小さく首を振った。

なのはの声が耳に届いたのだろう。ぶつかり兼ねない距離まで迫った少女の顔が、満面の笑みに染まる。その表情からは、砲撃を撃ち込まれたことへの蟠りも、怒りも、悪感情は何一つ読み取ることが出来ない。本当に、天真爛漫な子なのだろう。ありがとうの言葉に照れたように頬を掻くと、緩んだ表情でメイを片手で抱え、何の前触れもなくなのはの胸に手を当てた。胸を触られて悲鳴を上げられるほど、なのはは可愛らしい性格をしていない。何かを確認するように一心不乱に胸を撫でる少女を、気だるげに眺めていると、少女が口を開いた。

「僕、あの、考えるの苦手で、それで、その、ほんとにごめんね。君、同じ年くらいなのにごく強いから、うれしくなっちゃって…」

「気にしないで。私も撃ったから、お相子。傷も、手当してもらっ

たし」

「あー、うん。でも僕は頼んだだけで、回復魔法使ったのは、君と一緒に居た、あれ、何て言うんだっけ。細長いやつ……いたち？」

「ユーノが……？」

少女の指差す方向に顔を向けると、首から尻尾にかけて黄色の拘束輪に締め上げられて転がされているユーノの姿があった。

微弱に帯電しているのか、意識の有る無しに関係なく小動物の身体が時折跳ね上がる。無残な姿を晒しているユーノだが、放っておけばその内回復することは経験上分っている。そんなことよりも、顔を横に向けたことで頬が少女の剥き出しの太股に触れてしまい、気恥ずかしくなって直ぐに元の位置へと頭を戻してしまった。少女は気にしている様子もなく、「どしたの？」と首を傾げてなのはを見下ろしている。

今更なことかも知れないが、この子はなんて格好をしているのだろうか。絵に描いたような美少女である目の前の存在であれば、何を着ても許されるのだろうか。なのはとて母親似であることもあり、容姿にはそれなりに自信があるつもりだが、外見も中身も真っ白な少女と違い、中身がこれでは比較する以前の問題だ。

特に恨みがましくもない疑問符の付いたなのはの視線を、後ろめたさもあってそうは受け取らなかつたのだろう。少女は慌てた様子で、取り繕うようにメイを抱いたまま手をばたつかせると、なのはに顔の前にメイを突き出した。

「ち、違うよ！ この子っ！ この子のジュエルシードを封印して君を休ませようと思って下に降りて！ そしたらあいつが居て！ 回復魔法使ってくれたけど、教えないって言ってるのに難しいことばっかり聞いてくるから、えっと、こう……ばちって……」

「……そっか」

当たり障りのない返事をしながら、なのはは少女の人差し指の間で雷電が迸るのを凝視していた。

魔力変換資質。魔力を容易に直接的な物理エネルギーに変換することが出来る能力。そう呼ばれる資質があると言うことは、ユーノから聞いていた。少女から感じる魔力量は、なのはのそれと同等以上で、なのはよりもずっと上手に魔法が使えて、それ以外にも、少女は特別を持っていて。始めから、勝ち目などなかったのだ。そう思うと、自分が惨めに思えて、情けなくて、一秒でも早くこの場を立ち去りたい気持ちが強くなる。

情けを受けた恩は感じていても、今は、独りになりたかった。気持ちの整理が付くまで、涙が枯れるまで、泣いてしまいたい。起き上がるうと体に力を込めると、なのはの体を痺れのような感覚が遅い、再び少女の膝に後頭部を下ろした。

「あうっ……」

「まだ起きたら駄目だよ。ちょっと痺れてると思うから、寝てて」

「……何で、私なんかに構うの？ 封印したなら、もう、行きなよ。敵同士で、こんなことしても、意味ないんだから」

「あつ、あるよ！ 意味なくないよ！ そ、そうだ、話！ お話しよう！ ねえ、名前！ 君の名前教えて！」

気不味い雰囲気を感じ取ったのだろう。慌てた少女は取り繕うように、なのはへと話を切り出した。

何が少女の興味を引いたのかは分らない。身体が動かないのであれば、どうせ泣くに泣けない状況からは抜け出せない。それに何より、息の掛かる距離まで顔を寄せた少女をどうにかしないと、色々な意味で危ない気がする。純粋な瞳を見詰めることが辛くて、なのははふいっと視線を逸らす。不貞腐れながらほんの僅かに口を開くと、至近距離でもなければ聞こえない音量で、声を絞り出した。

「……高町、なのは」
「うん！ 僕の名前はフェイト・テストロッサ、よろしくね、高町！」
「……別に、それでも良いんだけど、勘違いしてると思うから念のため言うよ……なのはが、名前だからね」
「え……し、知ってたよ、それくらい。な、なのははどうしてジュエルシードを集めてるの？」
「どうして……？」

フェイトの言葉に、なのはは明確な答えを返すことが出来なかった。

ユーノに頼まれたから、高町なのはにしか出来ないと言われたら、家族を、友達を、この街を守りたかったから。思い付く理由は沢山あれども、結局のところ、なのはがジュエルシードを封印している最たる理由は己の才能を認めて欲しい、誰かに必要として貰いたいという願望を満たすため。家に居ても空気のようになその場に居るだけ、友達二人は頭が良くして運動も出来て、なのはと違って可愛い。何処に居ても、何をしても、なのはは独りぼっちだった頃から何一つ変わらない。何の役にも立たない自分は、誰も求めてくれない。今は良くて、いつかきつと。そう、思ってしまう。

魔法使いとしてジュエルシードを封印することは、なのはにとって都合が良かったからに過ぎない。才能があるんだ、誰かを守れるんだと実感していれば、不安を掻き消すことが出来るから。情けないとは自覚していても、高町なのはは魔法少女として戦うこと自体を目的として封印を行っている。人の感情なんて曖昧なものだけでも、今はその想いが強い。

少なくとも、フェイトはこんな答えを期待して訊ねたのではないのだろう。どうせ動けないのだから、重苦しい雰囲気にすることは本意ではない。なのはは無難な答えを吟味すると、フェイトから視線を逸らして声を発した。

「困ってる人が居て、私には助けがあげられる力があつたから。それだけだよ」

「それだけって、凄いことだと思うよ。僕は知らない人のためには戦えないし。なのはは良い子なんだね」

「っ……………あなたは……………」

「フェイト！」

「はあ……………フェイトは、どうして？」

顔を近付け頬を膨らませながら抗議してくるフェイトに、なのはは溜め息を吐くと改めて訊ねた。

知らない人のためには戦えないと言つたフェイトの表情は相変わらず無邪気で、それ故に冷たさを含んでいるように感じられた。誰にだつて、聞かれたくない事情がある。本当ならなのははと踏み込みたくはなかつたが、フェイトが話題を振ってきた以上、なのはが聞かなくとも自分から話し始めるのだろう。どちらにせよ同じことだ。なのはに名前を呼ばれ、何がそんなに嬉しいのか、フェイトはにやにやと笑みを浮かべるとなのははの髪を梳き始めた。「良い子良い子」と撫で回されて、なのはは馬鹿にするなど言いたかつたが、心底嬉しそうにしているフェイトを見ると、とてもではないがそんなこと言える気持ちにはなれなかつた。自分が我慢すれば済む話だと考え、甘んじてフェイトの行為を耐え続ける。

「えへへー、なのはー、って違う！僕は、えっと、母さんに頼まれたから」

「母さん？」

「うん。ここにジュエルシードっていうロストログアがあるから、封印して持ってきて欲しいって言われたんだ」

「……………ふーん、そうなんだ。それって、私に話して良いことなの？」

「あ……………だ、大丈夫、アルフにばねなければ、怒られない、と思う。」

内緒にしてね、なのは」

何でもないことのようにフェイトは言っているが、なのははフェイトの母親なる人物が全ての元凶である黒幕に思えて仕方がなかった。

藪を突いて蛇を出すとも言つ諺もあるように、疑って掛かってフェイトの反感を買うことは、戦闘不能な現状を省みても好ましくない。何より、フェイトはジュエルシードがあること以外は何も知らないし、考えてもいないだろう。ユーノやなのはのことも、競争相手くらいにしか考えていない節がある。聞かなかつたことにしてこの場は乗り切る。それが最善の手だと考え、なのは素知らぬ顔で「母さんはすごく優しいんだ」と自慢しながら朗らかに笑うフェイトに適当な返事を返し続けた。

そこからは魔法云々は関係なく、お互いの身の上話が続いた。アルフと言う使い魔と一緒に暮らしていることや、母の使い魔のリニスから魔法を教わつたこと、多忙な母とは暫く会えていないこと。なのはも詳細は避けつつも自らのことを話したが、魔法を覚えて一ヶ月経っていないことを伝えると、酷く驚かれた。頬を染めて興奮し、すごいすごいと連呼しながら尊敬するような眼差しを向けてくるフェイトを直視することが出来ない。いい加減髪を梳く手も止めて欲しいと死んだ眼で訴えても、天然の入つたフェイトは気付きもしない。

褒められ慣れていないのはにとつてはある意味拷問に近いものがあつたが、話を逸らした先でも「なのはの母さんはどんな人？」と聞かれ返答に困ってしまう。地雷が多過ぎる自らの話題を避けて情報収集を兼ねてフェイトのこと聞いていると、いつの間にか身体から痺れは抜けていた。

「……………そろそろ、帰るね」

「え……………あ、うん……………」

「次は、負けないから」
「う、うん……敵、だもんね……なのとは……」

思い出したように呟くと、別れを惜しむフェイト同様に、なのはも後ろ髪を引かれる奇妙な感覚を覚えながらも背を向けた。

見て分るくらい悪い人物であつたならば、怖くは思えども戦う分には気が楽だつたのに。なのははそう考えて溜め息を吐いた。フェイトは、母親の望みを叶えようとしている。笑顔にしたいという一心でジュエルシードを集めているに過ぎない。唯でさえ実力差があるのに、そう考えると気が重くなる。次は負けないと言つたものの勝ち目がある筈もなく、肩に引つ掛けてある煤けたフェレットが頼りかと思うと不安で仕方がない。いつから封時結界が解除されたかは知らないが、すずかとアリスが探し回っている可能性がある。兎に角、今は急いで戻ることだけ考えよう。

「なのはっ!」

駆け出そうとしたなのはは、背後からの声に思わず振り向いた。同時に飛んで来た何かを覚束無い動きで受け止めると、握り締めた手を開く。なのはの手の中には、XIVの刻印が刻まれた青い石が収まっていた。情けを掛けるつもりかと苛立ちながら、顔を上げてフェイトを見たなのはは、無意識に一步引き下がる。意図するところは分からないが、フェイトなりに精一杯考えて投げたのだろう。投球フォームのまま固まったフェイトは、湯気が出るほど顔を赤くして、なのはを見る目は据わっていた。

話し掛けるべきか、置いてこの場を立ち去るべきか悩んでいると、フェイトは勢い良く駆け寄り、なのはの両手を握り締め、躊躇いながら口を開いた。

「それ、僕のだから!」

「……うん、知ってる、けど」
「なのはに預ける！　いつか返して貰うから、それまで、えっと、持っててよ！　全部のジュエルシードの封印が終わっても、必ず取りに行くから、その、また話したり、しよう……？」

尻すぼみになっていくフェイトの言葉が可笑しくて、なのはは口元隠して笑った。

初めてなのはが微笑むのを見たフェイトは、ぼかんとして疑問符を浮かべていたが「変なの」となのはが声に漏らした瞬間、笑われていることに気が付いたのだろう。顔を更に高潮させると「笑うなーっ！」と叫びながら、なのはにじゃれ付いてくる。

やっぱり、この子には敵いそうにない。

そう考えて、なのははフェイトに押し倒される形でその場に倒れ込んだ。もう少し、帰りが遅くなるのもいいかも知れない。なのはを組み敷いてしまったことに動揺して、「ご、ごめ、ごめん、僕、その、そんな、つもりじゃ、なくて」と繰り返すフェイトを嫌いになれそうになかった。その日は結局、アリサとすずかに見付けられ、フェイトがその場を離れるまで会話に花を咲かせた。

後に親友となる二人が別れを向かえる、数年前の出来事である。

十二話（後書き）

自分で書いてて何だか気持ちが悪くなっちゃいました。

フェイトがあれなので楽しく明るい過去回、と思っていましたが、明るく書けば書くほど……こう、くるものがあります。

誤字脱字は気合いで何とかします。皆様の感想お待ちしております。す。

十三話

すずかを月村邸に送り届けたシュテルは、なのはの身を案じながら森の中を駆けていた。

直ぐにでも飛び立ちたかったが、近隣住民が何の前触れもなく晴れた霧に驚いて空を見上げている。月村邸へと帰る際には、通行人一人見掛けなかったと言うのに。シュテルは無表情のまま小さく舌打ちすると走る速度を上げた。時間を掛け過ぎたのか、今では中継のヘリコプターすら街の上空を飛び回っている。姿を誤魔化す手段など幾らでもあるのだが、すずかを負ぶつての飛行すら覚束無い今の状態では、万が一失敗した時のことを考えると、どうしても不安が残った。

フェイトがシュテルの知っているフェイトであれば、最悪の事態など起こり得ない。けれども、高町なのはや八神はやての前例があるように、フェイト・テストロッサがフェイト・テストロッサである保障など何処にもない。それにもし仮に同じだったとしても、三度の飯より近接戦大好きなあの娘が、過去のシュテルより強者であるのには対し、果たして手加減をしてくれるだろうか。

足を止めて俯き、数秒間考えたシュテルは、地面を軽く蹴ると宙に浮かび上がった。既に、戦闘による魔力の余波も感じ取れない。迷彩の魔法は集中力が必要な上、適正が無いこともあり地味に燃費が悪い。到達するまで維持できるかどうかは分の悪い賭けではあるが、背に腹はかえられない。

「しゅーてーるーちゃんっ！」

フライアーフィンに魔力を充填し終え、いざ飛び立とうとしたシュテルの前方から、聞き覚えのある声があった。

林に隠れて姿は確認出来ないが、元気そうなのはの声に思わず

安堵の息を吐くと、シュテルは地に足を着けた。冷静になつて感覚を働かせると、自らの魔力に良く似たなのはの魔力を感じる。大方、撤退した先で霧が晴れ、見物人から身を隠そうとして近くに降り立ったのだろう。シュテルが居ることに気が付いて、一直線に此方に向つてくるのはの様子にシュテルは微笑を浮かべた。

自信満々に引き受けては見たものの、やはり心細かつたのだろうか。どんなに才能が在つたしても、なのははシュテルよりも三歳年下。原因不明の怪現象により幼くなつてしまったシュテルと外見こそ同年代であるが、なのはとて怖いものは怖いし、唐突に不安を覚えることもあれば、寂しいと感じる気持ちもある。きつとある。そう思いたい。なのはを安心させようと一歩踏み出したところで、シュテルは足を止め、はたと首を傾げて考え込んだ。

リンカーコアの第六感的な感覚が、周囲の魔導師の位置を教えてください。くれることはあるけれども、ここまで明確に誰かの魔力を感じ取れたことは、初めてだった。世界こそ違えども、同じ両親から生まれた高町なのは同士。詳しくは知らないし、調べようとも思わないが魔力光然り、砲撃や誘導射撃などの魔法適正然り、遺伝子的な要素は限りなく同一に近いはずである。フェイトと戦っていた時に限らず、数日前に夕飯準備中にも公園の方から微弱な魔力を感じ、なのはが練習していると分かったことがあった。雑多な他人の魔力に比べれば、身体に馴染んだ『高町なのは』の魔力の方が、格段に見付け易いのも理解は出来る。

距離が大きく離れていなければ、何となくお互いの位置が分かる。これは利点でもあり、シュテルにとっては、大きな欠点でもある。才気溢れる魔法少女であるなのはならば、シュテルよりも先にこの感覚に気付いてもおかしくはない。万が一に備え、ジュエルシードの封印を遠目に見守つていたことも、言わなくても或いは気が付いていたのではないだろうか。シュテルは額に浮かんだ冷や汗を拭くと、赤らんだ顔で、今後は月村邸での不用意な魔力使用は控えようと心に決めた。

がさがさと草の擦れる音に、シユテルは意識を前方へと向ける。何にせよ、なのはが無事で帰って来てくれて、本当に良かった。改めて安心し気が抜けたのか、体勢を崩して傾いた体を木の幹に預け、逸る気持ち落ち着かせようと深呼吸をする。意識は前に進もうとしているのに、足が思い通りに動いてくれない。

近くの木々を伝ってふらふらと移動するものの、辛くなって再び木に寄り掛かる。完全に緊張の糸が切れてしまったらしい。大して効果がないことは分かっているが、しないよりはと考え回復魔法を構築していると、レイジングハートが諫めるように一際大きく点滅した。

『待っていれば、勝手に近付いてきますよ。それまで一休みしててください』

「でも、私が頼んだから……」

『慌てて出迎えるよりも、そうしての方が格好良いです。マスターはあの子の憧れなんですから、夢を壊さないように気を付けてあげてくださいね？』

「……ちよつと以外、かな。あんまり好きじゃないと思ってた」

『こ、子供には優しく、です！　そもそもあの子がマスターを泣かすから気に入らなかつただけであって、私自身、別に好きとも嫌いとも思っていないません！　ええ、思っていないません！　マスターがあの子を甘やかすから好きになれそうにないとか、そのようなことはこれっぽつちも……』

照れ隠しにコアを数度点滅させると、レイジングハートは声の音量を落として行き、最後はごにごによと呟きながらフェードアウトしていった。

自分に似てしまったのか、褒められたりとか、この人と決めた人物以外に対して好意を向けることを苦手としている節がある。親馬鹿ならぬ主馬鹿なのかも知れないが、そんなレイジングハートが愛

おしく思えて仕方がない。重力に抗うことも億劫になり、崩れ落ちるようにその場に座り込むと、柄から手を離してレイジングハートのコアを抱き締めた。無機質で冷たい赤い宝石に、じんわりと熱が伝わり、奪われていく。その感覚が、今のシュテルにはとても心地良く感じる。

いつもならふざけて嬌声の一つでもあげるはずのレイジングハートから、『ま、マスター……？』と不安げな声が聞こえてくる。主の唐突な行動に戸惑っているのだろっけけれども、好きなものは好きなのだから、どうしようもない。「なんとなくこうしたくなっただけ」と素っ気無く応えようと、再度レイジングハートを抱き直し、意味も無く熱を与えていた。何故か分からないが、近付いてくるなのは移動速度は緩やかだ。姿を見せるまでは、こうしていることにしよう。

『ううう……なにしてるんですか、ますたー……はずかしいからやめてくださいよ』との抗議と羞恥の声をスルーしながら、シュテルはなのはを待ち続けた。

「あつ、シュテルちゃん、やっと見つけた！ 霧、晴れたね！」

「……はい、お蔭さまで。貴女は、怪我はありませんか？」

「うんっ！ 全然平気っ！」

シュテルの魔力を感じ取ってから、一直線に向って来たのだろう。正面に見える茂みの中から頭を突き出したなのはは、シュテルを視界に収めると喜色満面に声を張り上げた。

宛ら親を見付けた迷子の子供、若しくは飼い主を見付けた子犬のように喜ぶなのはの顔を見て、座り込んだままのシュテルも安堵の笑みを浮かべる。尻尾があれば千切れんばかり振られているだろうなのはの様子に、思わず親友の一人を思い浮かべてしまう。考えて

みれば底抜けに明るいとこりや、時折見せる強引さ、理不尽に高い戦闘能力など、フェイトに似ているところが多々ある。防護服の端を木の枝に引つ掛けたのか、どうしようどうしようとあたふたする様も、何だか見覚えがある気がする。本当に、同じ高町なのはとは思えないくらい、素直で純粋な子。

ああいう娘に、自分は弱いのだろうか。

手の掛かる子ほど可愛いとは良く言うが、シュテルはその典型的な例であると言える。頼られたり、甘えられたりすると、どうしても手を出してしまう。何かで両手が塞がっているのか、「助けて、お願い」と視線で訴えてくるのはに、苦笑を浮かべながらシュテルは立ち上がった。はやてにはそのことで良く叱られたが、フェイトは一人では髪も満足に乾かせないのだから、あの娘に関しては見逃して欲しい。

思えば、フェイトは突然姿を消した自分をどう思っているのだろうか。

機械兵器と交戦したあの日までの数ヶ月、多忙を理由に三人で遊ぶことすら儘ならなかった。二人に置いて行かれる不安から、シュテル自身が二人との合うことを避けていたと言う理由もある。しかし、事実三人が三人とも別々の道に走り出したばかりで、時間にも気持ちにも余裕がなかった。別れも言えずに消えた自分を、二人は恨んでいるだろうな。そう考え、憂鬱になった気持ちを溜め息と共に吐き出すと、シュテルは意識をなのはへと切り替えた。

自分自身の気持ちよりも、シュテルの為に戦ってくれたなのはを優先しなければ、すずかの二の舞になってしまう。お礼は要らないと言っていたが、矢張り出来ることなら何でもしてあげたい。比較的柔らかい表情のままなのはに歩み寄ったシュテルは、困った笑みを浮かべた少女の背後に誰かがいるのに気が付いた。遠目には茂みに隠れて見えなかったが、どうやらなのはに負ぶさっている様子で、意識が無いのかだらりとぶら下がった足はびくりとも動かない。

海鳴を覆った霧の濃度は、一寸先も見えないほどに深い。現実離

れた異常気象故に、すずかを探して飛び回っていた間は、車は疎か歩行者一人見当たらなかった。すずかを休ませる為に月村邸に戻った際、ノエルに聞いた話では、短時間だったこともあり怪我人も事故も発生せずに済んだらしいが、見落としがあったのかも知れない。

シュテルが慌てて駆け寄ると、なのはは何故か照れたように頬を掻いて表情を緩めていた。

「その子は……怪我人ですか？ 回復魔法なら使えますけど……」
「あ、うん、その、ね。シュテルちゃん、えつとね、足止めのことなんだけど……」

私、勝ったよ。

何を言われたのか、一瞬の間理解出来なかった。

誰だろうと回り込んだシュテルの視界に、二房に束ねられた金髪が映り込むと、握られていた筈のレイジングハートが音もなく地面へ零れ落ちる。両手で口元を覆い隠すと「え？ え、何ですか？ 何がどうなって……」と小さな声で自分自身に疑問を投げ掛けた。当然、答えが返ってくる訳もなく、あまりにも現実味の無い光景に、シュテルは暫しの間呆然と立ち尽くして、なのはが少女、フェイトを背中から降ろして手近な木に寄り掛からせるのを眺めていた。

『マスター、お気を確かに。気取られては厄介なことになります』

『そんなこと言われなくても！ ……っ、ごめん、わかってる。ありがとう』

『いいえ、構いません。私は貴女の為に存在するのですから』

レイジングハートからの忠告に血の気の引いた顔を数度軽く張ると、シュテルは杖を拾い上げ、何事も無かったかのように動揺に歪んだ表情を消した。何処か誇らしげにはにかむなのはを視界に収め

つつ、静かに寝息を立てるフェイトの様子を窺う。

砲撃の直撃を受けたらどうバリアジャケットは破れ、唯でさえ露出の多い格好だと言うのに、それに輪を掛けてあられない姿で瞼を閉じている。本当に、フェイト・テスタロッサが、高町なのはに破れたと言うのだろうか。どう足掻いたところで、勝ち目なんてなかった筈なのに。有り得ない筈の結果が今日の前に存在する。シュテルはフェイトの戦闘能力に絶対の信頼を置いていた。それこそ、妄信と言っても過言ではないほどである。偶然に偶然が重なったくらいで勝てる相手ではないことなど、初めて戦ったあの日から理解している。それに、少なくともシュテルの知るなのは、偶然だけで掴み取った勝利を誇るような子ではない。認めたくなどないが、シュテルとて認めざるを得ない。

アドバイスの効果がどれだけあったのかは分からないが、事実高町なのははフェイトに勝利した。そして、フェイトが敗れた責任の一端は、シュテルにあると言うことを。

自然と零れた涙を悟られまいと、顔を逸らしながら袖で拭う。なのはの前でなければ、フェイトの名前を叫んで縋り付きたかった。例え中身が全く違う相手だったとしても、親友と同じ姿、同じ顔の少女を目の前にして、素知らぬ顔では居られない。

黙ったままバリアジャケットの上着を脱ぐと、肌の大きく露出したフェイトに被せ、体を覆い隠す。シュテルの黒いインナーが外気に晒されると、何故かなのはが恥かしそうに顔を背けた。なのは自身、フェイトとの戦闘によるものか、バリアジャケットの上着部分は消失し、非常に不本意ながら揃いのインナーも所々破損している。俯いてもじもじしつつも、時折此方を覗き見るなのはの様子から、とてもフェイトを撃墜できる才能の持ち主だと感じ取ることは出来ない。

恥かしいのは此方の方だと薄く頬を染めると、シュテルはフィジカルヒールを構築し、フェイトの体の表面を撫でるように手のひらに灯った桜色の光を当てていく。非殺傷設定とは言え、大きな外傷

を避けられるだけで、衝撃や痛みのは素通りしてしまう。少しでも負担が軽くなるようにと思いつながら、頭天边から足の先まで、丁寧に魔力を流し続けた。

「この子、怪我してるの……？」

「気を失っているだけです。放つて置いても、遅かれ早かれ目を覚まします。貴女が、気にすることではありません」

「気にするよ。だって、シュテルちゃん悲しそうな顔してるから、私、余計なことまでしちゃったのかなって……」

「っ……すみません。貴女は、何も悪くないんです。私が頼んだことなのに、こんな、見つともない……」

「そんなことないよ！ 私だって自分勝手に戦って、シュテルちゃんに言われた通りにしなかつたから……」

気取られるなど言われた傍から、この様。

シュテルは慌てて表情を引き締めたが時既に遅く、なのは沈んだ声色でシュテルを庇うように自分を引き合いに出し始めた。このままでは、恐らく良くないことになる。後ろ向きの方角へと思考を働かせたのはを見て、シュテルは漠然とそう思った。似ていないとあれだけ思っていたのに、高町なのはは結局の所、高町なのはではないのか。シュテル自身、一度落ち込み始めると、自分自身では歯止めが利かず、泣いたり自己嫌悪しながら落ちる所まで落ち続けるしかない。普段こそ明るく元気に振舞っているのはであるが、神社で見せた涙の意味を考えるに、シュテルと同様の気持ちを僅かにでも持っていることは想像に難くない。

すっかり気落ちしてしまったなのはの様子に、シュテルの胸が強く締め付けられる。

一生懸命にシュテルとの約束を守ろうとして戦ったのだらう。喜んで貰おうとして、バリアジャケットがこんなになるまで捨て身に勝利を求めたのだと思うと、先程の行為が如何になのはの心を踏み

躡るものであったかが理解できる。何かしらの見返りがあつて然るべきだ。そうでなければ、あまりにも報われない。

かと言つて、シュテル以上に一度決めたら梃子でも動かない頑固さを持つたのはのこと。シュテルが封印したジュールシードは意地でも受け取らないだろうし、弱みに付込んで自らシュテルに何かを願ひ出ることとも恐らく無い。シュテルが、高町なのはと過ぎた時間あまりに短い。根を同じとする人間だからこそ、お互いの考えていることや、何を好むか、何を嫌うかなどは何となくは分かる。それでも直接言葉を交わした回数は少ないからか、なのはの突飛な行動は予測することは出来ない。

なのはを笑顔にさせるには、どうすれば良いのか。シュテルにとっては、非常に難しい問題であつた。

「高町なのは……ちよつと、こつちに」

「にやつ!? しゅ、シュテルちゃん……きゅ、急に、そんなの……う、うん、いいよ……わかつた」

どうしたものかと考えながらフェイトの治療を終えると、シュテルはなのはの手を引いてフェイトから距離を取つた。話を逸らす上で、なのはの視界にフェイトが映れば気に留めてしまつと考えたからだ。

突然手を握られて驚いたのか、背筋をびんつと伸ばして直立してしまつたなのはにシュテルは首を傾げた。何故か妙に緊張した面持ちで硬直しつつも、視線は相変わらず恥かしげに明後日の方向へと向けている。心做しか、頬が赤らんでいるような気がするし、時折ちらちらと何かを期待している視線がシュテルを射抜いていた。悲しんだり、恥らつたりと世話しなく表情を変えるのはを見て、表情の変化が乏しい自分とは正反対に素直な娘だなと苦笑する。

改めてなのはの格好を良く見れば、撃墜されたフェイトは当然としても、平気だと応えたなのはもダメージを全く負つていないとは

思えない。シュテルはフィジカルヒールを構築すると、手始めなのはの肩へと手のひらを添えた。

「ひゃっ……ん……っ！」

驚いて声を上げたなのはに、自分もなれない頃はこうだったなあと思いを振り返る。

生温かいとも言えいいのか、回復魔法独特の熱を持つ感覚がシュテルは苦手だった。他の人間の魔力を身体に流されると、こう、何と言うか、包み隠さず言うのであれば、気持ちが悪い。防護服を頑強に設定していたお蔭で、怪我を負うこと自体は少なくて済んだが、偶にはシャマルらの手を借りることもあった。個人的に彼女が苦手というのもあるが、自分で回復魔法を覚えた理由の一つがこの独特の不快感を避けるためだ。

しかし、他人に聞いてみても特にそう言った話は聞かないので、単にシュテルに潔癖症の気があるだけだという可能性もある。取り留めの無い思考を廻らせながら、なのはのバリアジャケットが破損している部分を重点的に手のひらを滑らせていく。

「直ぐに終わります。気持ち悪いかも知れませんが、少しの間だけ我慢してください」

「き、気持ち悪くは、ないんだけど……ちょっと、変な感じが……」

擦ったそうに身を擦るなのはの身体を片方の手で押さえ、シュテルは治療を続けていく。

同じ高町なのはであればこの感覚も共感できるのかと思ったのだが、治療の最中はげんなりと顔色を悪くしていたシュテルに対し、なのはは言葉通りに気持ち悪いと言った様子ではない。瞳を固く閉じて、何かを我慢するように服の端を握っているなのはに申し訳なく思いつつも、シュテルは心を冷たく律して機械的に処置を進める。

顔や体型、目の色、髪の色。何もかもが似ている筈なのに、どうしてこうも反応が違うのか。何をしても一々可愛らしいのを、羨ましく思う感情が全く無いと言えは嘘になる。飾り気のないシュテルとて、年齢的には未だ少女の域を脱してはいない。自分なののように振舞うことは無理だとしても、妹のように思っているのはがこうして可愛らしい仕草を見せてくれるのは、素直に喜ばしい。

今は、フェイトの敗北を悲しむ気持ちを押し殺してでも、なのはが捨て身で掴み取った勝利に報いてあげたい。

「しゅてるちゃん、ありがとう……んっ、でも、わたしは、だいじよぶだから、あっ、もう、しなくても……にやっ、ううう……」

「……私は、貴女に何かをしてあげたい」

「しゅてる、ちゃ……?」

「でも、どうしたら貴女が喜んでくれるのか、分からないんです。助けて貰ってばかりで、私は貴女に何も返していない」

遠慮して逃げ出そうとするなのはの手を押さえ、なのはの潤んだ瞳を見詰めると、シュテルは自らの想いを正直に告げた。

執務官としての経験上、利で動く相手の行動はある程度なら読むことが出来る。しかし、シュテルの知るフェイトと同様に、なのはの行動は常に予想の斜め上をいく。良い子でいなくてはならないと必死で戦っていた頃のなのはならば未だしも、最近のなのははシュテルに何を期待して、どうして欲しくて動いているのか、理解が出来なかった。見返りを求めずに戦う人間など存在しない。何かしらなのはにもシュテルに対して求めるものがある筈だと確信していた。困っている人を放って置けない優しい娘、そんなことは改めて確認するまでもなく分かっている。なのははある意味で、シュテルの理想とする存在。性格も、才能も、仕草も、本当は全てが羨ましくて仕方がない。理想的な正義のヒロイン。シュテルから見たなのは

の姿、立ち振る舞いは、今までの人生で出会った誰よりもその称号に相応しい。けれども同時に、幾ら純粹なのはとは言え、数度助けられただけのシュテルの為に、何の見返りもなく命懸けの戦いを挑むとは思えない。否、正確には思いたくはなかった。

シュテルは、フェイトの為ならば、この命尽きるまで戦える。

はやての為に死ぬと言うのであれば、喜んでそれに従うだろう。しかし、例え自分がそうであったとしても、二人の親友に、目の前の高町なのはに、そう想って欲しくはなかった。シュテルは、自分が正常だとは欠片も考えてはいない。志半ばで機械兵器に敗北する前から、ずっと、壊れたまま走り続けてきたのだから、欠落している部分があることは自覚していた。

なのはの気持ちは、嬉しく思う。シュテルの考え過ぎなら、それでも構わない。

純粹で、素直な娘だと知っているからこそ、大して親しくも無い誰かの為に無理な戦いをして欲しくない。シュテルを助けた見返りを求めて欲しい。

「いらないつ、んつ、あ、なんにもいらな、よ」

「それでは、私の気持ちが収まりません。何でもします。お願いです」

「うう……でも……」

「何でも構いません。貴女のために、何かしてあげたいんです」

もう、一押しだ。

シュテルのインナーの袖をきゅっと握り締め、葛藤するように顔を逸らしたなのはを見て、シュテルはそう思った。逃げ出すことを諦め抵抗を止めたなのはの手を離すと、顔を逸らしたなのはの頬に手を添えて、正面へと向き直らせる。予想だにしていなかったのだろう。シュテルの強引な行動に驚いたなのはは、「にゃ……」と消え入るような声で一鳴きすると、熱を帯びた瞳で再びシュテルへ視

線を合わせた。黙って向かい合うこと数秒、恥かしがっているのか、手のひらを通してなのは頬が高い熱を発しているのが伝わってくる。

なのはの半分でも良いから、可愛らしく生まれて来たかった。

なのはの返事を待つ間、ぼんやりとそんなことを考えていると、頬に添えられたシュテルの手に何か覆い被さるのを感じた。見れば、なのはが自らの手でシュテルの手のひらを押さえている。潤みを通り越して、薄らと涙まで浮かんでいるなのはの瞳に疑問を抱きつつも、シュテルは微笑んで言葉を促した。紅葉の如く赤く染まつたなのはの頬と、なのはの柔らかく温かな手のひらに挟まれた片手で安心させるために頬を軽く撫でると、なのはは恐る恐ると言った様子で口を開いた。

「ほんとに……なんでも、いいの？」

「はい。何でも言ってください」

この時、シュテルは確かに勝利を確信した。

なのはの望みが例えフェイトを筆頭とした戦闘狂宜しくシュテルと一戦交えることだったとしても、この先起こる出来事を含んだシュテルについての情報だったとしても、精一杯応えるつもりでいた。流石に後者の場合であれば、誤魔化さなければならぬ部分が出てくるだろうが、自分が未来の高町なのはであること以外は、喋っても良いのではないかと、そんな気持ちさえ持っていた。フェイトに勝利した地力を持つてすれば、最良の未来を描き続けることが出来るかも知れない。そう信じさせる魅力が、眼前のなのはには存在した。

勿論、予想の斜め上どころか、無邪気に粉碎していく常識プレイヤーの少女のこと。予想通りの応えが返ってくるとは考えていない。それでも理解の二段、三段先に行くのはに、どんな無自覚な無理難題を突き付けられようと、シュテルは恩を返すことを既に覚悟し

ている。伊達にフエイトの親友を自称していない。そういう類の娘を相手にすることが得意とまでは言わないが、最低限慣れてはいる。「なんでもって、そんなのだめだよ……で、でも、わたし、にゃああ、しゅてるちゃん、わ、わたしは、どうしたら」と思考が駄々漏れになっっているなのは、珍しく挑戦的な眼差しを向けると、シユテルは腹を括った。表面上は涼しげな表情を保ちながら、自由になつた手のひらで鳴り響く心臓を自然に見えるように押さえ込むとなのはが声を発するのを待ち続ける。

「……んっ」

数分の葛藤の末、迷いに迷つたなのは両手を大きく広げると、シユテルに向つて一度だけ小さく鳴いた。

シユテルの思い違いでなければ、この仕草に応じる方法を一つしか知らない。不安で一杯です。現在進行形で後悔してます。と言わんばかりに俯き気味にふるふるすると震えだしたなのは、何故だか知らないが心の底から愛おしい。自己嫌悪はあつても、自己愛の気など有り得ない。今でもそう感じているし、矛盾した感情だと言つことは自覚している。それでも、シユテルの心は、一つの歪んだ方向へ集束を続けていた。

シユテルには受け入れ難い事実ではあるが、目の前の存在は天使か、天使の皮を被つてシユテルを墮落させようと企む悪魔のどちらかだ。

「……えっと、や、やっぱり、だめ、だよね。にゃはは、へんなこと言っちゃって、ごめんね、シユテルちゃん」

「駄目なんて、いつ言いました？」

「あっ！ ……う、うん、あり、がと……」

思っていたよりも、この娘はずっと分かり易いのかも知れない。

シュテルはなのはを抱き締める手に力を込めると、いつかと同じように、安堵して瞳を閉じたなのはの髪を梳いてやる。肩の辺りに顔を埋め、寝息のように静かな呼吸音を繰り返すのはが、シュテルには何処かフェイトに重なって見えていた。

良いのだろうか、こんなに幸せな思いをしてしまつて。

シュテルに包み込まれたなのはは脱力した身体を預けると、撫でられる頭へと感覚を集中した。こうして抱き合うのは二度目であるが、前回と違つて、密着するシュテルとなのはの間隔は大凡布二枚分程少ない。通常であれば誤差の範囲で済む話だが、現にこうしてシュテルと抱き合うのはとしては、大きな差だ。インナー同士での抱擁とあつて、体温がダイレクトに伝わってくる。親しい友達であるはずかとアリサが相手でも、ここまで過度なスキンシップを取ることはない。

大樹の群れを封印した際は、シュテルから抱き締めてくれたので、なのはは身を任せるだけで良かったが、今回は違う。なのはが望みなのはが頼んだから、こうしてシュテルに甘える権利が与えられた。一時はどうなることかと思つたが、このご褒美だけで頑張つた甲斐があつたと言うもの。折角の機会だから全力で甘えよう。そう考えてシュテルの背中に手を回したなのはだったが、胸に触れた慎ましくも柔らかな感触に「ひうつ」と声をあげて身体を硬直させると、何もできないまま手をだらりと下ろした。鼻孔を擽るシュテルの良いい匂いに、顔を赤らめながら肩へと強めに顔を埋めた。

回りくどい言い方を正すのであれば、なのはにとってシュテルの体は刺激が強かつた。

「にゃ、あつ、あつ、ああ……………」

「……………どうか、しましたか？」

「ううう、な、なんでもないの……」

もっと、ぎゅってしたいのに、もどかしいよ。

直接言えるのなら、黙って抱き締め返す方がまだ気が楽だ。砲撃魔法を撃ち込まれた時も、大鎌の魔力刃で斬り込まれた時も、ここまで緊張することはなかったのに。今シュテルを抱き締めなかったら、腕が二本付いてる意味なんてない。再チャレンジを試みるも、シュテルの吐息が耳に掛かったことに動揺して硬直し、「くっ、あ、うっ」と悔しげな声を漏らしながら泣く泣く手を引っ込める。自分がここまで意気地なしだったなんて、生まれてこの方知らなかった。欲張ると元も子もなくす。自分に必死でそう言い聞かせると、なのは与えられる安心感に身を任せながら、シュテルと合流した時のことを振り返った。

なのはが少女を背負ってシュテルの前に現れた時、ほんの少しだけ、少女を置いて来れば良かったと後悔した。

最後の砲撃を終えた直後に霧が薄れ始め、いつの間にか最初の戦闘場所から大分移動していたことに気が付いたなのは、少女を回収すると近くの森林へと身を隠した。すぐさまバリアジャケットを解除すれば群衆に紛れることが出来たのに、半裸の少女を放って置けないと後ろ髪を引かれ、気が付けば少女を背負ったままシュテルの魔力反応を目指して歩いていた。その結果、少女の身を案じるシュテルを悲しませてしまったのでは、なのはとて気落ちの一つや二つくらい、すると言うもの。

シュテルと少女がどういう関係なのかは、非常に気になる。色々なことを知っているシュテルは兎も角として、少女の方はシュテルの存在を知っているような素振りを見せていない。似ているかと思われれば大分見劣りはするのだろうが、防護服の形状や魔力光、髪の色や背格好では割と似てるのではと、人の視線を憚って密かににやにやしているのはを見ても、少女は何の反応も示さなかった。とは言え、焦った様子のシュテルの態度は、見ず知らずの他人に対

するものとは程遠い。治療の間も、慈しむような視線で少女の顔をずっと気にしていた。

胸の内に湧き上がる苛々を意志の力で抑え込むと、なのはは冷静さを保つように努める。

行き成り出てきたジュエルシードを狙う少女が、シユテルの中ではなのはよりも大きい存在なのだろうか。そう考えると、どうしても子供染みた嫉妬を覚えてしまう。だからだろうか、欲が出てしまったのは。抱擁を強請るつもりなんてなかったに、自分の居場所を奪われた気がして、幼い子供のような我が儘を言った。シユテルのように格好良くなりたくて、「何も要らない」なんて言って置きながら、これでは結局のところ褒めて貰いたくて、甘えたくて戦ったようなものだ。後悔に頭を悩ませながら、なのははシユテルの甘い匂いを肺一杯に吸い込むと火照った頬をシユテルの身体に摺り寄せた。

馬鹿、私の馬鹿。

「これでお礼になるとは思っていませんけど、貴女が喜ぶのなら…

…」

「……ん、え…… あ、ううん…… うれしい…… しゅてるちゃん……」

「他にしたいことがあるれば、遠慮なく言ってください。私なんかで良ければ、ですけど……」

「……しゅてるちゃんじゃなきゃ、意味ないよ」

「え、う、あ、あの、ありがとう、ございます……?」

疑問符の付いたシユテルの言葉と共に後ろ髪を撫で付けられるとなのはは小さく身体を震わせて悶えた。

あれだけ躊躇したのに、無意識にシユテルの背に回した手で縋り付くと、崩れ落ちそうになる膝に力を込めた。悩んだ拳句、抱擁を対価に求めた数分前の自分を、今は褒めてあげたい気分だ。照れて赤くなったシユテルの頬に、自らの頬を寄せると、力の入らない両

腕で精一杯抱き付く。なのはよりも小柄なのではないかと錯覚するほどに、か細く柔らかい体の感触を確かめっていると、その度にシュテルが「んっ……」と小さく声を漏らして恥かしがる。

困らせたくないけれど、もう少しだけ甘えていたい。

母親にだつてここまで子供らしく抱き付いて我が儘を言ったことなどないのに、シュテルにならば、こうしていても許して貰える。勘でしかないけれど、そんな確信がなのはにはあった。合わせ鏡のように、自らの頭を撫でる手の動きを真似て、シュテルの髪に触れると、密着している体が小さく跳ねた。お返しになどと考える余裕もないくらいに蕩けきつた頭で、無意識に髪の毛を梳いていると、触れ合うシュテルの頬が熱を帯びていくのを感じる。なのはの目に映るシュテルはいつも癖のように髪に触れているので、嫌がられるかもと不安であったが、特に不快を示す仕草は見られない。「にやはは」と笑うと、なのはは眼を瞑りシュテルの動作を真似ることに意識を集中する。

ずるいくらいに可愛い、そう思いながら、なのはは後何分続くのかも分からない幸せを甘受していた。

「……はれ？」

ふと、なのはは何か頬を濡らしているのを感じて、僅かにシュテルの肩から顔を離れた。

髪を梳く手を引つ込め、自らの頬に指を這わせると、少量ではあるものの血液が付着している。何処かにぶつけただろうか、傷む部分を探しても該当する箇所は見付からない。寝惚けたようにとろんとした瞳で、先程まで摺り寄せていたシュテルの肩に視線を向けると、バリアジャケットが小さく破れている箇所があるのが分かった。再び顔を寄せ間近で観察してみると、首筋に蝙蝠か何か、物語の吸血鬼にでも噛まれたような噛み痕がある。暴走体との戦闘中に負った傷が、なのはが触れることで瘡蓋が剥がれてしまったのだろ

う。深い傷ではないように見えるが、矢鱈と生々しい傷痕からは、ぷくりとした血の玉が膨れ上がっている。

シュテルが痛みを訴えないことから、大騒ぎするほどのことではないのだろう。それこそ、少女やなのはに使った回復魔法を使用すれば済む話である。問題は、回復魔法を使い忘れたことで放置された傷を、高町なのはがどう処置するのが最善かだ。シュテルに指摘すれば、それがきっかけにこの時間が終わってしまう可能性がある。かと言って仮にも出血しているのを放置するのは忍びない。なのはの葛藤も何処吹く風と、気付かずに髪に指を絡めてくるシュテルのお蔭で、なのはの思考は霧が掛かったままである。

どうしようかなと考えながら、固まっついていく血をじっと見ていたなのはだったが、傷の大きさを改めて確認すると、シュテルの首筋へと顔を寄せた。

「……んっ」

「ひあっ、んっ!？」

この時の出来事を、その後の高町なのはは死ぬほど後悔することになるのだが、何をしても許される状態に浸り続けたこの時のなのはは正しい行動を選択することができなかった。

何でもないことのように、舌を這わせて血を舐め取ったなのはは、邪魔者が拭い取れた結果に満足する筈であった。それも、耳元から発せられた、シュテルの甘い嬌声を聞くまでの話である。苦悶の悲鳴とは程遠い、シュテルの可愛らしい悲鳴に、なのはの脳は強い刺激を受け、むくむくと未知への好奇心が首をもたげ始める。目の前で再び浮き上がった血の玉に目を向け、欲望の赴くまま舌を這わせると、「ひゃんっ!」ともう一度シュテルから声が上がった。何度も、何度も繰り返ししていると、許容できなくなつたシュテルがなのはを引き剥がそうと試みるが、力が抜けているのか弱弱しくなのはの肩を掴むに終わる。

普段のシユテルからは想像も付かないほど、女の子の子した嬌声に、なのはの意識は奪われ始めていた。

「な、なにを、あつ、んっ！ あ、貴女まで、やめっ、やめて、んっ！」

「しゅてるちゃん、かわいいよ、しゅてるちゃん……っ！」

「き、聞いて、くだ、あつ、うっ、くう……っ！」

へたり込んでしまったシユテルに覆い被されると、呼吸を荒げ、潤んだ瞳が視界に飛び込んできた。

もしかしたら、気持ち良いのだろうか。口調に反して表情は蕩け、なのはを軽く睨む視線が強がっているようで可愛らしい。アリサが調理実習で指を傷つけて、なのはが口に含む。今の行っている行為は、それと何ら変わらない。自己弁護を織り交ぜつつ、なのはは温かなその頬に手を添えると、逃げ出そうとするシユテルの脚の間に自ら脚を着き、身動きを封じる。脅えた表情でなのはを見詰めるシユテルを数秒の間、座った眼で観察した後、なのはは脈打つ傷口へと吸い付いた。

フェイト・テストロツサの使い魔、アルフは主を探して奔走していた。

拠点の確保の為に新居の手続きや荷解きをしていたのだが、探索初日からジュエルシードが発動し、街が霧に覆われてしまったのである。独りで余裕だと言ってフェイトが赴くこととなり、変身魔法の使えるアルフが新居に関する諸々の処理を行っていたのだが、霧が晴れてもフェイトが戻ってくることはなかった。念話で呼び掛けでも通じず、不安に駆られて家を飛び出したものの、不慣れな土地故に何処を探せば良いのか分からない。取り合えず発動地点を目指

して駆けていたのだが、この国では大型犬の一人歩きは許されな
らしく、心無い人間達に追われ近くの森林へと身を隠したのであ
った。

こんなことなら、多少遅くとも人間形体で向えば良かった。自分
を鬼の形相で追い掛け回した保健所の連中にぶつくさ文句を垂れな
がら歩いていると、近くにフェイトの魔力の反応があることに気が
付いた。思わぬ僥倖に歓喜したアルフであったが、同時に、反応が
動かないことへの不安が募る。現地である海鳴市で、既にジュエル
シードの発掘者が封印作業に当たっていることは、鬼婆、元いフェ
イトの母親、プレシア・テストロツサからの情報で把握していた。
Aランク相当の結界魔導師が一人だけと聞いているが、だとすれば
フェイトに敗北は有り得ない。勿論、現地協力者がいる可能性もな
くはないが、ジュエルシードが飛来して一ヶ月未満。どれ程才能が
あったとしても、フェイトを超える時間には足り得ない。

有り得るとすれば、ジュエルシードが複数発動してしまったとか、
不測の事態によるものだ。フェイトの指示に逆らっても付いて行
くべきだったと後悔しても、現状を変える役には立たない。自らの
体が傷付くことも省みず、藪を突っ切り、フェイトの下へと一直線
に向うアルフだったが、フェイトの近くに二つの大きな魔力を感じ
て急ブレーキを掛けた。天然の迷彩に阻まれ、視界にこそ映らない
が、十数メートル先に居るであろうフェイトに匹敵する魔力量に警
戒して息を潜める。

「話が違っじゃないか……あの女」

小声で鬼婆を罵ると、葉の擦れる音を立てないように慎重に距離
を詰めていく。

状況を、状況をまずは確認する必要がある。不味い、不味いよと
呟きながら心中で鳴り響く警鐘を抑え込む。例え相手の二人が魔力
量だけが取り柄の魔導師だったとしても、フェイトを救い出して離

脱することは難しいだろう。だからと言って、尻尾を巻いて帰る訳にはいかない。現地協力者だと思われる二人の魔導師がどんな人間かは分からないが、自分以上に喧嘩っ早いと言うか、合理主義と言うか、そんなフェイトのこと、好意を持たれる可能性は低い。敗北した今、どんな目に遭わされているのか。かちかちと音を立て始めた牙を噛み締めて押さえると、アルフは藪からゆつくりと顔を突き出していく。

命に代えても、ご主人様は救い出す。

悲壮な決意と共に覚悟を決めたアルフは、五感の全てを使い周囲を警戒しながら、愛しの主人の姿を探した。周りを樹に囲まれた、ほんの少しだけ開けた空間。辺りを見渡すまでもなく、フェイトの姿は顔を突き出したアルフの直ぐ近くにあった。樹の幹に背中を預け、すうすうと寝息を立てるフェイトに、アルフは胸を撫で下ろす。よく見れば、フェイトの黒いバリアジャケットこそ戦闘によつて大きく損傷しているが、顔や確認できる露出した部分に怪我を負っている様子はない。それどころか、晒すことの憚られる部分を隠すように、誰かの黒い防護服の上着が掛けられている。甘ちゃんだけかも知れないが、小さな心配りを見せてくれた敵に、アルフは少しだけ感謝した。

「フェイト、ふえーいーとっ、起きておくれよ」

近くまで這い寄って呼び掛けて見るも、目が覚める様子はない。

揺すって起こすことも考えたが、無理に起こして混乱したフェイトが、再びジュエルシードを奪いに掛かる可能性も有り得る。今は離脱を優先すべきだ。頭を使うのは苦手なんだよなあ、と心中で愚痴りながら、アルフはフェイトから離れ、敵の姿を探しに向かう。逃げるにしろ、アルフの接近がばれていないのなら、まず敵の位置は確認して置きたいし、可愛いご主人をこんな目に遭わせてくれた相手の、顔の一つや二つ覚えて帰りたい。

匍匐前進のように体を低くし、鼻を利かせることで、藪一つ挟んだ向こう側に魔導師がいることを嗅ぎ取ったアルフは、再び息を潜めると音を立てずに藪の中へと潜り込んだ。本当なら怒りに任せて殴り掛かるところだが、フェイトが無事であったのに、これ以上は望めない。随分似た匂いだなと首を捻りつつ、潜行を続けるアルフだったが、双子か何かだろうと考えさして気には留めなかった。

「……………ん……………ん……………う……………あ……………」
「にははは、しゅてるちゃん、しゅてるちゃん……………んくつ、んつ」

あれは、いったい何をしているのだろう。

そろそろかと身を低くし、藪の下から敵の姿を確認したアルフは思わず己の目を疑った。

フェイトと同じように樹の幹に背中を預けた虚ろな目をした黒い覆面少女と、その子に覆い被さって首筋に顔を埋めるリボンを付けた白い少女。どちらも防護服の上着を脱ぎ捨てており、白い防護服の少女は、時折もがくように身を振る黒い防護服の少女の両手を押しさえ、無理矢理に何かをしているようであった。白い子はまるで鬼けふんけふん、プレシアのようなサディステイックな表情で見下ろしながら、一定感覚ごとに黒い子の首筋に顔を埋め、それに合わせ黒い子は消え入るような呻き声を上げている。

髪の色や顔立ちが似通っていることから、姉妹か何かだと思われるが、味方同士ではないのだろうか。防護服のデザインから予測するに、フェイトに上着を掛けてくれたのは黒い子の方だと考える。出来ることなら助けてあげたいが、アルフには己のご主人を背負って逃げ出すのが精一杯。死んだような瞳で虚空を見上げる少女を哀れに思うが、どうしようもない。そもそも、本当にあれは何をしているのだろうか。生まれてこの方二年のアルフには理解しかねる行為であるが、愉悦に歪んだ表情の白い子と、涙を浮かべながらも時折緩んだ表情を見せ、頭を振って正す黒い子は、気持ち良さそうに

見えなくもない。特に黒い子からは、白い子にはない妙な色気を感じる。

アルフとて好奇心旺盛で健康な二歳児使い魔である。状況が状況とは言え、全く興味が無いと言えば嘘になる。フェイトとの後学の為に時間の許す限り目に焼き付けておこうと、地べたに伏せ、一方的な蹂躪戦を観戦することにした。「うわっ、あの白い奴、なんてこと、あ、うわあ、おお……」と行為に耽っている二人が気付きもしないのを良いことに独り呟いていたアルフであったが、密かに黒い子を追い詰める白い子のえげつない手付き足付きに戦慄が走る。数分の間、二人の行為を観察していたアルフだったが、その間も白い子は飽きることなく黒い子もがくたびに力尽くで拘束しては、抵抗する気力を削いでいく。可哀想に、口を一字に固く結んで声を殺す少女が、苦し紛れの抵抗を試みようとする周囲を見渡した時のことであった。

藪の下に隠れるアルフと、もう駄目だと俯いた黒い子の視線が、これ以上ない程しっかりと噛み合った。

『あ、あの、あたしは、違うんだよ。そう、通りすがりで……』

『……フェイトを連れて、んっ！ はあ……逃げてください』

『何であんたがフェイトのことを……あー、いや、それより、あんたはそのままが良いのかい？』

『……もう、諦めました。あっ、やだ、やめてよっ、ん……はやく、この娘に見付かるっ、前に』

何か、色々苦労してるんだろうな。

念話を繋げたことで、直接アルフの頭に悶える声が響き渡り、会話の最中も、黒い子は活力を取り戻した瞳でアルフに逃げると訴えてきた。何と言えば良いのか、不憫な話だがこういう状況に慣れているのだろう。『私に注意が向いている内に』と訴える姿が、アルフの涙を誘った。

それにしても、この子は何者なのだろう。頑固なフェイトのことだ、尋問されても素性は明かさなないことは、使い魔であるアルフが一番良く知っている。黒い子が何故フェイトのことを知っているのかは分からないが、言葉の端々や表情から察するに敵視しているようにはとても思えない。何にせよ、「この娘」と言うのが黒い子に貪り付いている白い奴を指すのであれば、大魔力の片割れである白いのはフェイトの離脱を許容できない立場なのだろう。戦闘になれば、アルフ一人で相手をするのは難しいことくらい、頭の残念なアルフでも理解できる。

もしかしたらプレシアが用意した助っ人が何かかと予測しながら、黒い子に逃げる胸を伝える為に念話を繋げた。

『そうするよ、あんたも、その、頑張つてね』

『お気遣い、どうも。また、近い内に、く、う…………』

『無理して返事しなくても……………律儀な子だね』

アルフの視線の先で、白い子の死角からぱたと小さく手を振った少女に苦笑すると、ゆっくりと慎重に後退りを始める。

素性を探ることは後からでもできるが、例え敵だったとしても、あの子は本気で殴れそうにない。大人しそうな雰囲気や、寂しげな瞳が、主人であるフェイトに似ているように思えたからだ。白い子についてはどういう人間かは全く分からなかったが、黒い子がフェイトを撃墜してのでなければ、フェイトが何か掴んでいることだろう。何にせよ、安全な場所で体を休ませて、改めて仕切りなす。それが最優先だと考え、アルフは後退する速度を上げる。

どういう意図があるのか、白い子に手のひらで目隠しをされた黒い子を見守りつつ、そろそろ反転して逃げ出そうと身を捻った時のことだった。

『次も、私が勝つよ』

黒い子に良く似た冷たい声が、アルフの頭の中に響き渡った。

慌てて振り向いてみれば、白い魔導師が闘志の灯った眼差しでアルフを睨み付けていた。即座に臨戦態勢へと切り替えたアルフを薄らと笑みを浮かべて一瞥すると、興味をなくしてしまったのか。甘えるように黒い子に抱き付いて、瞼を閉じる。アルフは思い出したように、止めていた足を後退させ、音が立つのも憚らずにフェイトの下へと駆け出した。

なんなんだ、あいつは、いったい。

言い知れぬ不安が、アルフの感情を掻き乱す。フェイトが二度も敗北するなど、決して有り得ない。けれども、あの白い魔導師の瞳に宿る執念は、主人を信じる気持ち一色のアルフの心に、一点の小さな染みを落としていった。主人を背負ったの帰路の途中も、アルフは先の雲行きを案じずには居られなかった。

十三話（後書き）

はい。ご想像の通り、前回の反動でこうなりました。

例に漏れず何処まで書くか迷った結果、自没した箇所もあります
が、全部なのはさんが悪いんです。私は悪くありません。

誤字脱字はいつも通りです。皆様の感想を心よりお待ちしております
ます。こんな作品ですから、割と方向性間違っていないか不安なので
す。

十四話

ここは湯のまち、海鳴温泉。

高町家と月村家の旅行に誘われたアリサ・バニングスは、湯船に浸かり、鼻歌を歌いながら、桶で作った即席ミニ湯船にユーノを浮かべた。理由は良く分からないが、すずかによって目隠しをされたユーノは脱衣所での緊張も幾分解れたのか、ぬるま湯の中でのんびりと脱力している。見た目こそ小さなフェレットであるが、ユーノはこれでかなり頭が良い。女性しか居ない女湯だということに気が付き、少し前までは「僕、男の子だよ。それでもいいの?」と言いたげに戸惑っていたが、目隠しをされてからは大分ほっとした様子である。根本的に何も解決していないような気がするが、主人同様に天然が入っているようで、湯に浸かる姿は今までに見たことがないくらいに寛いでいる。賢い賢くない以前の問題として、アリサはこの子の将来が不安になった。

自他共に認める犬好きなアリサであるが、それ故に臭いを警戒した猫を含む小動物には距離を取られることが多い。特に月村邸の猫軍団とは、半ば冷戦状態に突入してしまっている。高町家で飼われることとなったユーノは、アリサにとっては小動物分を補給する絶好の獲物であった。実際はアリサのアグレッシブなスキンシップに小さな動物が耐えられないだけなのであるが、その点ユーノは頑強さに定評があるので、アリサの玩具としてはこれ以上の適材は居ない。

撥ったそうにアリサの手から逃れようとするユーノを鷲掴み、シャンプーで洗ったことで触り心地の良くなった毛皮を撫でる。ふと、水音と共に、湯面に小さな波紋が伝わってきた。何かと振り返ると、タオルで身体を隠したすずかが立ち上がり、アリサの方へと手を振っている。

「アリサちゃん！ 私たち、そろそろあがるよー！」

「んー、あたしはもうちよつとー！ ねえ、すずか！ ちよつと聞きたいんだけどー！」

「なあにーっ？」

「何であんたたちそんなに遠いのよっ！？」

湯を両手で引っ叩いて立ち上がると、アリサはすずかを含む月村一家を指差して叫び声をあげた。

街で不可解な怪現象が多発していることもあり、今年は観光客も少ないのか、浴場にアリサ達以外に客の姿はない。大声を出しても問題はないのだが、何故こうも距離を離して湯船に浸かる必要があるのかアリサには分からなかった。アリサとなのはが浸かる湯船の端、その向かい側に見える端に月村姉妹とエーアリヒカイト姉妹が一塊となつて湯船に浸かっている。それぞれが体にタオルを巻いており、不自然に発生した湯煙によって姿が臙げにしか確認できない。「確認してないから少年かどうかは分からない、なんて急に言うんだもの。式を控える身としては……ねえ？」などと、困ったような表情で良く分からないことを口走り始めた忍。その口を、無表情のノエルが即座に塞ぎ、慌てたファリンと共に担ぎ上げると、脱衣所の方へと消えていった。天才と何とかは、と良く聞くが、忍にもアリサの理解の範疇を超える理由が何かあるのだろう。両親との付き合いで覚えた完璧な愛想笑いで忍たちを見送ると、アリサは残された親友の一人に疑惑の視線を送る。

アリサの苛立った眼光も気にしていないのか、すずかは無邪気な笑みで「何となくーっ！」と応えると、火照った体を冷ますように自然な動作で浴槽の縁へと腰掛けた。頬を朱に染め目を細め、鼻歌交じりに立ち上がる湯気を見上げる姿は、同学年とは思えない色気が感じられる。時折何かを思い出してはにへらと表情を緩め、「駄目だよ、私ったら、お家じゃないのにこんなことして……ああ、でも、いいかも……」と頭を振りながら幸せそうに独りごちていなか

れば、さぞ絵になつただらう。

親友とは言え、距離の取り方を考え直す必要があるかも知れない。そういう意味では、現在のすずかとの距離は適切であると言える。唐突に他の客が入ってきたとしても、生来の勘の良さで気が付くだろうから、放つて置いても問題ない。アリサはすずかからまともな返事が返つてこないことを悟り、波を立てる勢いで湯船に浸かると、両手足を伸ばして脱力した。

あの娘、何だか最近、強かになつたな。

物理的な意味ではなく、勿論精神的な意味ですずかが変わった原因については、アリサにも心当たりがある。

学校でも暇を見付けては、隠れて誰かに電話やメールをしているすずか。相手は恐らく月村家で預かっている親戚の娘だと、アリサとなのはの間では専ら噂されている。先日お茶会に招かれた時も「フアリンとお出掛けしてる」の一点張りで、姿どころか部屋すら発見することが出来なかった。

秘蔵つ子のように扱われ、忍を筆頭にした月村一家に大事に大事に護られている親戚の娘。どうしても一目見たいと、お手洗いに行く振りをして単独で探索を試みたが、ノエルが案内に付き、断念せざるを得なかった。表情こそ微笑んでいたが、アリサに張り付いていたノエルの眼は笑っていない。見られては困る場所があるのか、或いは始めから出掛けてなどいないのか。談笑の最中、陶器の割れる音と女性の謝罪の声が聞こえたので、確実に後者だと思うが、その際にもすずかは動揺もせず紅茶を啜っていた。「古いお屋敷だから……」と意味深に俯くことで、怖がりなのはを釣り上げて話を逸らしたすずかに、誤魔化されるものかと食って掛かったアリサだったが、すずか得意の怪談話に敢え無く返り討ちにされてしまう。秘蔵つ子の護りはあまりに強固で、アリサ程度の力では尻尾すら掴めない。

庭で遊んでいた時に、すずかならば決して着ないような中性的な衣装が干されていたのが矢鱈と目に付いたが、掴めたのはそれだけ。

あまりじろじろ見るのもあれなので良くは見なかったが、他にはさすがの制服や忍が付けるのか、黒いチョーカーなどが干されているだけであった。

いつか正体を暴いてやると内心意気込みながら、アリサはさすが達との遣り取りの間も黙ったままだった、もう一人の親友に手を伸ばす。ひよつとしたらほせているのではと不安になるほど、なのは体育座りのまま微動だにしない。俯いてぶくぶくとお湯に泡を立てているなのはの肩にそっと触れ、アリサは揺すりながら声を掛けた。

「なのははどうする？ もうあがる？」

「……絶対嫌われた……どうしよう、アリサちゃん……」

「まだ気にしてるの、それ？ ちょっと失敗したくらい気にしないの。相手の娘だって許してくれたんでしょ？」

「うっ、そ、そうだけど……にやああ……私ってなんで、あそこで我慢が……」

「もっつ、いい加減にしないとのぼせるわよ？ ほら、良いから上がりなさいっ！」

「ん？ そう言えば我慢がどうか、何処かで聞いた気が……」
と首を捻りつつ、アリサはなのはの額をでこぴんで弾いた。

異常発生した霧が晴れ、次の日のお茶会で集まった時から、なのははずっとこの調子だ。同年代の親戚の娘が遊びに来た際、密かに憧れていたその娘に誤って抱き付いてしまい、その上、ちょっと恥かしいこともしってしまったらしい。口を割るくらいなら頭をぶつけて気絶する覚悟のなのはに、それ以上の追及を諦めたアリサだったが、心配性なのはのこと、ちょっとした恥かしい失敗談を気に留めてしまっているのだろう。そんなところも可愛いなあと微笑みながら、「元気だしなさいよ」となのは背をあやすように軽く叩いてやる。

そんななのはとは対照的に、すずかはまるで恋に悩む年頃の娘を、生温かく守る母親のような眼差しでなのはを見守っている。お茶会の数日前くらいまでは、喧嘩したのかと思うほど黒い笑みでなのはに接していたが、次の日に何かをやり遂げた表情で登校してきて、それからずっとこの調子だ。微笑ましいものを見るようになるのはを眺め、表情を緩めては何処か遠くに想いを馳せている。なのはのように「ど、どうしよう、アリサちゃん!?」と縋り付いて来ていた頃が懐かしい。

きつと気の所為だと思うが、最近のすずかからは勝者の余裕のようなものを感じられた。だがしかし、人間、そう簡単には変わるものでもないで、アリサはその内鍍金が剥がれると予想している。「……ちゃんと同じ……綺麗……触ってみたい」と断片的に聞こえてくる不穏な囁き声を受け流しつつ、アリサはすっかりリラックスして伸びきっているユーノを肩に引っ掛けると、なのはの両脇から手を通し、羽交い絞めのような体勢で引っ張り上げる。

「ほら、すずかも。あがるって自分で言ったくせに、いつまでそうしてんの。置いてくわよ?」

「あ、うん、今行くね」

「……はあ……まあ、悩んでるとかじゃなさそうだし、良いんだけど。最近ぼーっとしてること多いんだから、ちょっとは気を付けなさい」

「うっ、う、ごめんなさい。やっぱり、一緒に来れば良かったなっつて、思っつて」

皆まで言わずとも、月村家に残してきた秘蔵っ子のことを言っているのだとアリサには分かった。

人見知りだと言うことは何度も聞かされているが、偶々旅行の日 realism に実家に呼び戻されるのは、言い訳にしては何処か不自然な気がしてならなかった。寝る時もずっと一緒、と楽しげに話していたすず

か。猫可愛がりしていると聞いた忍及びエーアリヒカイト姉妹。言葉の上では一緒に来れなくて残念だと語っているが、全力で寛ぎ、楽しんでる忍を含め、その娘が同行出来ないことに関しての執着が薄いように思える。アリサの気にし過ぎかも知れないが、少なくとも、人見知りだけが姿を隠す理由ではないのだろう。

すずかからは少女と何処に出掛けた、何を買った、何を食べたという話が頻繁ではないにしろ偶に聞かされている。誰にも見られてはならないのではなく、誰かに見られてはならないのだと思う。旅行に参加する面々が、正にそれに当て嵌まる。月村家と、高町家と、アリサと関わりのある者。接触を拒んでいる理由が何かは分からないが、拒む人物の条件はそれくらいしか思い当たらない。

アリサはなのはに肩を貸し、脱衣所を指して歩きながら思考を働かせた。他人、と言いたくないのだが、親友とは言え、人の家庭事情に不躰に首を突っ込むのは健全とは言いがたい。人にされたくないことは、絶対にしてはならない。絶対に守られるべきだとアリサの正義感が疼いている。心情を曲げるほどにアリサが引掛かっているのは、絶対に隠さなくてはならない筈の少女の情報を、すずかが小出しにしていることだ。すずかの様子から打算計算を行っているとは考えられないので、大方忍の入れ知恵だろうとアリサは当たりを付けていた。そして、その行動には何かしらの意味があるのだと思っている。

例えば、そう、いざ正体が割れた時に、受け入れ易くする為とか。

「アリサちゃん」

「っ……な、何よ？」

「眉間に皺、寄ってるよ。難しいこと考えてるでしょ？」

動揺を押し殺すと、アリサは平常心を保つことに努めながら、照れた振りして頬を掻いて見せた。

流石の観察力とでも評価すればいいのか。「えへへー、当たった

「？」と可愛らしく微笑むすずかからは、警戒されている様子はない。「自分のことは棚に上げて、よく言うわね。あたしだって偶には考えごとくらい……」とお茶を濁し、アリサは月村家についての思考を中断させた。悪い癖だと自覚はしているけれども、走り出した好奇心は止まらないとでも言うべきか、矛盾した表現になるが、色々考えているようでその実、アリサは何も考えずに思考だけを働かせてしまうことが多い。勉強以外では役に立たない頭脳に、暇潰しを与えているのだと思っている。アリサが気に留めること事態少ないのでこうなることは滅多にないが、最近月村家の謎の居候少女以外にも、アリサの興味を擽る出来事が存在した。

海鳴の平和を守る魔法少女。

一号と二号が居るらしいことしか分かっていないが、一人は例のなのはに瓜二つの少女だ。思えば大樹騒動に続いて起こった、原因不明の濃霧も魔法絡みだとアリサは考えている。近所かどうかは兎も角、市街地からそう遠くない範囲に住んでいることは予想が付いているので、送迎の社車内では窓の外に眼を光らせているのだが、結果は芳しくない。内緒にする約束なので、家族は元より、なのはにもすずかにもあの日のことは話していないし、恐らく正直に話したとしても病院に連れて行かれるのが落ちだろう。助けて貰った恩があるし、話して分かったが、なのはとはまた違った愛嬌があり、個人的にも嫌いな娘ではない。

もしも礼が言えるのなら、面と向って直接言いたいものだ。

「どこで何やってんのかしらね、あいつ」

二人と一匹に聞こえないように呟くと、思考の大半を占めていた魔法少女の澄まし顔を振り払った。

なのはの柔らかな肌の感触を堪能し、自然とにやける表情に渴を入れると、アリサは脱衣所の戸を開け放つ。既に引き上げたのか、忍達の姿はない。完全にのぼせてしまっているなのはをすずかに預

けると、アリサはドライヤーを微風に切り替えて主人と同じくのぼせ気味に脱力しているユーノを乾かしてやる。

そう言えば、名前、結局聞けなかったな。

脱衣所の死角になのはを連れ込み、慣れた手付きで下着を穿かせているすずかから眼を逸らすと、アリサは小さく溜め息を吐くのだった。

卓球で汗を流したアリサは、二度目の風呂を済ませて中庭の見える休憩所の長椅子に腰掛けていた。

結果は見事にすずかの独壇場で終わったが、アリサ・バニングスにも意地がある。喰らい付いて一度は勝利したものの、冷静になって考えれば大人顔負けの運動神経を持つすずかに勝てる訳もないので、恐らくは手を抜いてくれたのだろう。体育の成績ではなのはよりも上だが、実際はアリサが積極的に前に出ているだけで、素の実力で言えばなのはと同等かそれ以下でしかない。

習い事は屋内ばかり、走れば直ぐ息切れするし、なのはをおんぶすれば三步進むことすら困難だ。考えるまでもなく、勝算なんてなかった。悔しいやら、糠喜びした自分が恥かしいやらで悶絶しながら、アリサはお手洗いに向った二人を待つ。ついでに大人組にこれからの予定を聞いてくるこのことで、戻ってくるまでもう暫く掛かるだろう。

ユーノも連れて行かれたので、大人しく綺麗な景色でも眺めていようと横になっていた時のことであった。横たわるアリサの頭に影が差し、お手洗いに走って行った筈の友の声が聞こえた。

「こんにちは、アリサ。こんなところでどうしました。ぼっちにされたんですか。不貞寝ですか？」

「笑つか心配するか、どっちかにしなさい……ちょっと燃料切れた

だけよ」

「丁度良くコーヒー牛乳を持っています。アリサもどうぞ」

「……色々言いたいこともあるけど、ま、まあ、貰っついてあげるわ」

アリサは体を起こすと、唐突に現れた魔法少女から牛乳瓶を受け取る。

何処で何をと考えはしたが、まさか同じ旅館に居たとはアリサの頭脳を持ってしても考え付かなかった。浴衣に身を包みアリサの隣に腰掛けた少女の姿は、先程までそこに座っていたなのは姿と寸分違わない。湯飲みでも持つかの如く両手で瓶を持ち、澄ました表情でちびちびと口を付けている仕草は似ても似つかないが、外見は高町なのは以外の何者でもない。見た目以外にも魔法のこともある。追求したい気持ちはあつたが、聞いても答ええないということは、答えられない、答えたくない理由があるのだろう。助けて貰った手前、質問攻めにするのも無粋だなと考え、アリサは手渡された瓶に口を付けた。苦いコーヒーを渡されるよりは、甘つたるいくらいに感じるこちらのほうが、アリサにとっては飲み易くて好ましい。

アリサの反応を窺っているのか、目を細めて涼みながら横目で此方を観察する少女に向かってアリサは一言「ありがとう」と告げた。安心して和らいだ表情に、直球ど真ん中なのはとはまた違った、奥ゆかしい可愛らしさを感じる。きゅんきゅんと胸を締め付ける衝動を抑え込み、アリサは急拵えの気だるげな表情を貼り付けると少女に問い掛けた。

「それで、あんたはどうしてここに居るわけ？ また家族で旅行？」

「今日は一人で来ました」

「ぼっちはあんたの方じゃないのっ！」

勢い良く少女に突っ込みを入れたアリサは、どいつもこいつもと

眩きながらコーヒー牛乳で喉を潤した。

どうして自分の周りには天然しか居ないのか。いや、存外腹黒い
すずかの場合、狙ってやっている部分も。そう考えて、こいつの場
合はからかうために態とやっているんだったと思いついた。口元を
手のひらで隠しやすくすと笑う少女に、アリサは顔を赤くして辺り
に他の客が居ないかと思渡す。相性が悪いとまでは言わないが、普
段は先陣を切って友達を引っ張っていくアリサにして見れば、自分
がこうして振り回される感覚は新鮮で戸惑いを覚えてしまう。

誰も居ないこと確認したものの、恥かしい目には遭いたくないア
リサは声の音量を下げ、シュテルに向って「どうなのよ？」と曖昧
に尋ねる。幾らなんでも、山道を通った先にあるこの旅館まで一人
で来るのは無理がある気がした。詳しく知りはないが、距離は魔
法とやらで何かなったとしても、少女の話聞く限り、少女には家
族が居る。小学生が一泊するとなれば、サプライズで家族旅行に連
れて行くくらい愛している娘の泊まり先には一報入れるのが普通だ
と思う。現に、アリサの母はどんなに忙しくともすずかやなのはの
家に連絡を入れてくる。古来より伝わるサブカルチャーのセオリー
通り、家族には秘密だったとしても、誤魔化すことは難しいのでは
ないだろうか。

アリサの問い掛けにきょとんとした少女は、数秒の間遠くを見詰
めると、躊躇いがちに自らの後ろ髪に触れ、ゆっくりと撫で付け始
めた。逡巡するようなその表情は、髪に指を絡める度に安らいでい
く。アリサの眉間然り、考える時の癖なのか、少女は指の動きをそ
のままに躊躇い気味に口を開く。

「遠出していて、今日は誰も家には帰りません。留守を預かる予定
でしたが、私にも色々事情がありますので……」

「あ……悪いわね、答え辛いこと聞いちゃって……ん？ 事情って、
魔法少女関係のこと？」

「私は魔法少女とは違いますが、概ねその通りです」

「……前の樹とか、霧みたいのが、また起きるってこと？　ここでも？」
「絶対には言い切れませんが、可能性はあります。念のために、今夜は出歩かないでください」

がつくりと肩を落としたアリサは、「わかった。忠告ありがとね」と憂鬱な気持ちで応えた。

折角の温泉旅行だと言うのに、思わぬ方向から懸念が生じてしまった。アリサ自身、ファンタジックな現象を体験するのは二度目とあって幾分気が楽であるが、何も知らない友人二人にはどう注意を促したら良いものか。額に手を当てて頭を悩ませるアリサを見かねたのか、少女は瓶の中身を一気に呷ると、空いた手でアリサの肩に手を置いた。大浴場とは反対方向から現れたので、湯上がりと言う訳ではないのだろうが、少女の手は柔らかくて温かいかい。常のアリサであれば慌てて取り乱すところだが、今のアリサには動揺する余裕もなく、沈んだ瞳で少女を見遣ることしか出来なかった。

少女の表情は無表情でもなく、かと言って微笑んでいる訳でもなく、敢えて形容するのであれば真剣味を帯びた表情でアリサを見詰めている。「な、なによ」と苦し紛れに言葉を発したアリサの手を少女が握った。

「万が一が起きないように、私はここに居ます。貴女も、連れの方達も、私が必ず守ります」

「……その、い、一応期待はしてあげるけど……ねえ、どうしてあたしに教えてくれたの？」

「魔法を見せた責任もありますし、何より、貴女が一番出歩く可能性が高かったのよ」

「あたし？　何であたしなのよ？」

アリサの疑問を受け、口元で人差し指を立て「それは秘密です」

と応えた少女に、アリサは呆れて溜め息を吐いた。

「こういう巻き込まれ体質は、どちらかと言えばなのはの方ではないのかと考えながらも、現役魔法少女言つのならそうなのだろうと納得しかけてしまう自分も居る。現に一度目はカフェで茶を啜っていて巻き込まれたのだから、有り得ないとは言いつてもいい。心霊現象のように、理解不能な現象に晒されて何も出来ないのならアリサとて泣き出しかねないが、良く良く考えれば、目の前には心強いと思われる味方がいる。少女の話通りなら、他にも捻くれ気味の少女とは違う正統派魔法少女も存在するのだろう。」

心持気の軽くなったアリサを見て、微笑んでいるのか目を細めた少女は、空になった牛乳瓶を手に取り、立ち上がった。何処に行くのよ、と視線で訴えたアリサの気持ち伝わったのか、少女は「二度目のお風呂です」と短く答え、歩き始める。アリサと少女は知り合い以上、友達未満な関係ではないので、去り行く少女を引き止める理由は思い付かない。例え在ったとしても、高町家の面々に引き合わせてリアクションを楽しむことくらいしか思い付かない。後ろ髪を引かれつつ、その内また会えるだろうと前向きに考え再び横になったアリサは、ふと、伝え忘れたことを思い出して跳ね起きる。

「……………あのおさ」

「……………?」

「この間、助けてくれて……………あ、ありがとうね」

「助けられたから助けただけです。お気になさらず」

「くっ……………あんたって、ほんとに可愛くないわね!」

襲い掛かる羞恥を振り切って、やっとのこと礼を言えたアリサに對して、少女の反応は淡白なものであった。

別に可愛らしく照れてくれるなどとは思っていないが、せめて「どういたしまして」の一言で済ませる素直さを持っていて欲しかった。矢張りなのはの方が、ずっと可愛い。アリサの心の中の女神と

して、本人の知らぬ間に不動の地位を築き上げているなのはに想いを馳せていると、少女が怪訝そうにアリサを眺めていた。なのはの方が可愛らしいのは確かだが、凜々しさ、格好良さで考えれば、悔しいが少女の方が上だろう。助けられたこともあり、どうしても鼻屑目に見てしまうのは仕方が無い。浴衣の端から覗く白い肌は透き通るように綺麗で、否応なしに大浴場でのすずかを髣髴とさせてくれる。

少しくらい、愛想良くすればいいのに。

齒噛みして少女を睨んでいたアリサだったが、少女の体の一部分を凝視して「ん？」と疑問符の付いた声を漏らした。首を捻って見詰めてくるアリサを、気味悪げに見詰め返す少女。腹は立つものの、少女の肌の白さ故に、その部分が一際目立ち、どうしても気に掛かる。いい加減呆れて離れていきそうな少女に焦り、アリサは少女に疑問を發した。

「その首のやつ、どうしたの？」

「……？ 何かついていきますか？」

「ううん、何か瘧みたいになってるから。どつかぶつけたのかなあ、なんて、思、って……？」

始めは虫刺されかとも思いはしたが、どうにも違うように思える。指摘しなくても良かったのに、何故か興味を惹かれて尋ねてしまった。一箇所かなと目で追ってみれば、その隣にも薄らと痕が残っているように見える。特別変なことを聞く訳でもないのだからと軽い気持ちで声に出したアリサだったが、対する少女の反応は劇的であった。

今までの会話の最中、殆ど表情に変化の無かったと言っのに、気だるげだった目は驚愕に見開き、顔は見る見る羞恥の色に染まっていく。ああなると目立たないなあと人事のように考えていたアリサは、少女の急激な変化に頭が負い付けずにいた。「……私……いつ

から……あの娘……ばか……」と何やらもごもご独り呟いている少女に、何か悪いことでもしてしまったんだろうかとおろおろするアリサ。

数十秒の間そうしていただろうか。少女は思い出したかのように素早い動作で己の首元に手を当てて痣を隠すと、涙を溜めた瞳でアリサをきつ、と睨み付けた。鬼気迫る勢いにアリサは若干脅えて、一歩後ろへと引き下がる。

「アリサ・バニングス！」

「ひっ、はっ、はいっ！」

「忘れてください。貴女は何も見っていません。いいですね？」

「う、うん、あ、はいっ！ あ、あたしは何も見ってないです！」

「宜しい。それでは、さらばです」

ぱたぱたと慌しくスリッパを鳴らして賭けて行った少女を、アリサはただただ呆然と見送っていた。

何が何だか良く分からなかったが、きっと少女にとっては恥かしいことを指摘してしまったのだろう。クール振ってはいても、アリサと同年代の女の子。考え無しに体のことを尋ねるのは良くなかったと反省しつつも、アリサは「可愛いところあるじゃない」と勝手ににやにやと緩む頬を抑え切れずにいた。少女には忘れろと言われたが、同じ過ちを繰り返さないためにも、誰かに今のことを聞いてみる必要がある。

こう言う相談に強そうで、口が堅く、博識さに定評のあるすずかあたりが適任か。

アリサはそう考えながら、いつまでも戻らない二人を捜し、客間の方へと脚を向けるのであった。

広い湯船を一人占めにしたフェイト・テスタロッサは、温まり過ぎた身体を冷ます為に浴槽に腰掛けた。

今まで暮らしていた場所にもお風呂はあったものの、ここまで大きなお風呂に浸かる機会は無かった。先程までは割と賑やかなお客さんが入っていたらしく、廊下にまで聞こえる声量に怖気づいたフェイトは時間を置いて訪れたのだが、今ではお客さんが一人、二人しか居ない。初の温泉とあって無作法をするかも知れないし、更には人見知りするフェイトには丁度良いくらいの環境が整っていた。暖簾を潜るのを躊躇い、脱衣所の使い方を暫しの間思索し、やつのことで湯船の前に辿り着いたフェイトは、立ち込める湯気の量に脅えて体を硬直させていた。

プールと見紛うばかりに広くお湯の張られた湯船の前で、立ち尽くすこと数分。傍から見れば外国人の美少女が、入浴の仕方も分からずに困っているようにしか見えない。心配して声を掛けてくれたお姉さんに「だ、大丈夫です！ 頑張ります！」と返事をして、恐る恐る足先を入れてみると、普段入浴する温度よりも大分水温が高く感じられた。

頑張れないかも知れない。

早くも折れ掛けてた心を繋ぎ止めて周りを見ると、お姉さんと湯船の端の方で目を瞑っているお婆さんも平然とした様子で湯に浸かっているのが視界に映った。意を決して肩まで体を沈め、激しく肌を刺激する温度を「かあさん……かあさん……」と連呼しながら耐えること数十秒。思いの他簡単に温度に慣れてしまったフェイトは、子供が居るとは思えないくらい若いお姉さん、元い、お母さんに話し掛けられつつ、つい長湯をしてしまったのであった。子煩悩なのか、娘と同じくらいの年齢のフェイトが気に掛かっていたいたらしく「何処から来たの？」「好きなお菓子は何？」と立て続けに尋ねられ、フェイトを大いに戸惑わせた。先に入浴していたこともあり、女性とお婆さんも上がり、浴場には既にフェイトが一人残るのみである。

お湯から体を出し、フェイトは幾分冷めてきた頭で此処に至る経緯を振り返った。

「……はあ、どうしたらいいのかな……母さん……」

暗い表情を隠すことなく溜め息を吐くと、陰鬱になっていく気持ち振り払うために頭を振るう。

フェイトがこのような状態になっているのは、言うまでもなく、数日前のジュエルシード争奪戦において、白い魔導師に敗北したことが今尚尾を引いるのである。あの日、アルフに背負われて帰ったフェイトは、現実味のない一日を振り返っては、体育座りのまま日が暮れるまで呆然と窓の外を眺め続けた。アルフが買って来てくれた夕食も、一口、二口と口を付けると、気分が悪くなって戻してしまい、寝付けたかと思えば、全身を焼く砲撃魔法の痛みを思い出して目が覚めてしまう。結局、アルフに抱かれて何とか睡眠は取ったものの、あの日からふとした拍子に桜色の閃光がフラッシュバックし、フェイトを苦しめていた。

痛みだけなら、幾らでも耐えられる。大事な母の為なら、腕の二本や三本失う覚悟は出来ている。フェイトの心を苦しめているのは、他ならぬ、これから封印を行うことに対する漠然とした不安であった。今後、ジュエルシードが発動する度に戦うことになる、あの白い魔導師に、再び敗北するかも知れない。これから先もジュエルシードを一つも封印出来ず、アルフの手を借りて逃げ帰ることしか出来ないのかも知れない。そのことが、フェイトには耐え難い重圧となって押し掛かっていた。

自分が負ければ、母の望みはどうなる。

結果を何一つ出せない自分に、母は失望するだろうか。

そんなことを一度でも考えてしまうと、フェイト自身にはどうすることも出来ない。悪い方向に、悪い方向に思考が繰り返され、最近では気が付けば体育座りで部屋の端に居ることが多い。元々少な

い食事量だと言うのに、食べようと思っても喉を通っていかずに、時間だけが過ぎてしまう。寝ても覚めても溜め息ばかりのフェイトを見兼ねたアルフが、ジュエルシードの探索がてらに気分転換だと言つて旅館山の宿へと連れて来たのだが、この様である。

初めての温泉に新鮮さを感じることは出来たが、それで不安が拭える筈もない。「フェイトが休んでる間は、あたしが代わりに頑張るよ」と送り出してくれたアルフの気持ちは嬉しいが、信頼できるアルフが傍に居ないことでフェイトの気分は急降下していく。自らの造り出した使い魔であるアルフは、フェイトにとって体の一部と同じ。過度に気に掛けることはないが、逆に言えば傍に居ることが当たり前過ぎて、離れた時には改めて自分が独りであることを思い知らされる。

『フェイト、気分はどうだい？ 困ったこととか、変な奴に絡まれたりとかしてない？』

「……うん、大丈夫。心配してくれてありがとう、アルフ。ちょっと休んだら、いつもの私に戻るから……もうちょっとだけ、迷惑掛けてもいい？」

『何だい、改まって。愛しのご主人様の為なら、あたしは何だつてするよ。急がなくていいから、フェイトはゆっくり休んでなつて』
「ごめん、私ばかり……」

『あはは、真面目だねえ。ま、あたしももう少し探して見付からなかつたらそつちに合流するから、気にしないで待つておくれよ』

そう言い残して途切れた念話に名残惜しさを感じながら、フェイトは再び湯船に体を沈めた。

熱せられていく頭に浮かぶのは、フェイトを地に墜したあの白い魔導師の姿。魔力量だけが取り柄の、素人魔導師。そう評価した自分の眼を、フェイトは今でも信じている。あの娘自身の反応速度や躊躇の無さには驚かされたものの、砲撃魔法以外の完成度から見て

も、魔力に不慣れであることは明らかだった。重厚なバリアジャケット故に、飛行速度はフェイトよりも圧倒的に遅く、使える魔法の種類も、フェイトの方が上回っている。現地で封印を行っているのは、魔力量Aランク相当のスクライアの少年魔導師だと聞いていたが、少女の姿はそれに当て嵌まらない。母からの情報に依れば、スクライアからの援軍も期待できなければ、管理局の到着もまだまだ先の話。

ならば、現地協力者だと考えるのが順当だが、魔法の魔の字も存在しないこの世界で、即戦力として耐え得る素質を持つ者がどれだけ居るだろうか。ジュエルシードが飛来してからの短期間の間に、どれだけ足掻いたところで、フェイトの積み上げてきた訓練時間を上回ることなど、絶対に在り得ない。フェイト・テストロッサは、大魔導師と称されたプレシア・テストロッサの娘で、母と同じ希少な魔力変換資質を持っている。勝てる自信があった。どんなに想定外の攻撃を受けたところで、自分の敗北する姿など想像も出来なかった。慢心ではなく、事実フェイトにはそれだけの实力がある。砲撃魔法の撃ち合いで負けた時も、斬り込めば勝利できると確信していた。全てはフェイトの思い描いた通りに、帯電した魔力刃は防御魔法を貫き、少女の体を尻ぎ張っていたと言うのに。

何故か、気が付けばフェイト・テストロッサは敗北していた。

「……怖いよ」

あの娘が、怖い。

撃墜されたことで、フェイトの心の奥底に初めて刻まれた恐怖の感情。ジュエルシードによって生み出される異形の怪物とは違う。同じ年頃、同じ人間だと言うのに、自爆攻撃によって弾き飛ばされ、霧の中で見た少女の瞳からは、得体の知れない異様な気迫が感じられた。今思い出しただけでも、体が萎縮してしまう。実力の上ではフェイトの方が有利な筈なのに、負けられないという気持ちの差で

全てが覆された。

そもそも、あの少女は異常だ。実戦経験とは名ばかりの模擬戦闘を数多くこなしたフェイトでも、強い痛みには怯むし、来ると分かっただけならば身構える。それは生物として当然のように備わっている本能であり、一朝一夕で克服できるものではない。戦闘行為とは殆ど無縁と聞いている第97管理外世界、地球の日本ならば、尚更それが顕著でなければおかしいと思うのは当然の帰結である。フェイトはあの戦闘でバリアバーストに巻き込まれ、一時の間意識を失った。それほど痛みと衝撃を与える爆発を一瞬の間に用意することと、自らが巻き込まれないように精密な範囲調節が同時に出来るとは考えられない。少なくとも、ある程度魔法に習熟したフェイト・テスタロッサでも不可能だ。

即ち、あの少女は、バリアバーストを発動した瞬間、フェイトと同程度の衝撃を受けていたことになる。

自分で行使した魔法だ。どれくらいの威力を持っているかは感覚的に理解できる。それなのに、あの娘はバリアを撫でる時も身構えるどころか眉一つ動かさず、衝撃の最中も悲鳴すら上げることなく耐え切った。覚悟を決めていたとか、痩せ我慢だとか、そんな薄っぺらな言葉で片付けられるような単純なことではない。撃墜された経験が少ないフェイトでさえ、あの瞬間は何をされたのか分からず、唯々恐怖した。だと言うのに、あの娘は、次の瞬間には体勢を立て直し、フェイトに狙いを定めていた。いったいあの少女の何処に、勝敗を覆すほどの力があると言うのだろうか。

フェイトは、母の為なら何でも出来る。アルフがそうであるように、フェイトもまた、母の体から生まれ出た存在。笑顔にしてあげたいと想う気持ちに、一点の曇りも無い。今までだって、これから先も、何があっても変わることのない不変の感情。母を大事に想うこの感情は、誰にも負けたりしない。

ずっと、そう思って生きてきた。

「……私は、気持ちで負けたんだ」

開いた手のひらに溜まったお湯を、ゆっくりと握り締める。当然、拳から零れていった水滴を目で追い、フェイトは俯きながらぼやけていく視界を閉じた。

もう、あの娘とは戦いたくない。

底が見えないくらい強い想いを秘めた瞳も、桜色の魔力光も、もう、見たくない。

次に負けてしまったら、フェイトの母に対する想いはその程度だったのだと、嫌でも思い知らされることになる。母への信頼を完全に否定されてしまったら、フェイトにはきつと、何も残らない。それが分かっているから、出来ることなら、発動前のジュエルシードを手に入れて、あの娘が来る前に逃げ出してしまいたかった。広域探索の魔法では、ジュエルシードの大まかな位置は分かっても、後は端末を使用するなどして、地道に目視で確認していくしかない。魔力流を発生される魔法は体力、魔力共に消耗し過ぎる上に、遠くない位置にいる魔導師ならば眠っていても気付くほど派手な魔法だ。出来ることなら使用は避けたい。

虱潰しに探して、後は運が味方してくれるように祈る他ない。

「駄目だ。これ以上、アルフに心配掛けられない」

短く自分自身を鼓舞すると、フェイトは両頬を手で軽く叩いて、勢い良く湯船から立ち上がった。

休んでばかり居られない。一人で頑張ってくれたアルフの代わりに、今度は自分が頑張るんだ。やれること、やらなければならぬことが、フェイトにはまだ沢山ある。そう己を励ますと、気分が僅かに高揚していくのが分かった。心做しか火照りを訴える体にも、何だか不確かな手応えを感じる。冷めていることを自覚している自分でも、やれば出来るものだと感心しながら、脱衣所への一步を踏

み出した時だった。

地に着いた右足の膝が、フェイトの意志とは無関係に崩れ落ちた。

「え、あ、嘘……」

慌てて蹈鞴を踏んで堪えたが、真っ直ぐ立っていることすら儘ならない。

ふらふらと右へ左へぐら付く体を必死に保持し、臃げに見える脱衣所を指して千鳥足で進んでいく。大浴場に立ち込める湯気が、苦しく感じて仕方がない。靄が掛かった頭を何とか前に向け、あそこまで行けば何とかなると、灯りが差し込む硝子戸を指していたが、遂には両方の膝が崩れ、地面に座り込んでしまう。

あ、これは、ちょっと耐えられないかも。そう自覚しながら、フェイトはひんやりと冷たい床へと倒れ込んだ。

「……フェイト？ 何をして……っ！？ ちょっと、しっかりしてください！ フェイト！ フェイトッ！」

薄れていく意識の中で、聞き覚えのある声の少女が泣き出しそうになりながら自分の名前を呼んでいる気がした。

十四話（後書き）

露骨に美味しいところばかりを掠め取っていくすずかさん、穢れの少なさに定評のあるアリサちゃん。

相変わらず不憚なオーラを発し続けるシュテルさんとフェイトさんが、作者は大好きです。なのはさんが自重しておりますが、次回で爆発するとか、そんなことないので期待しないでお待ちください。

シュテルさん世界のユーノが少年とは限らない。そんな夢を見ました。こんなに可愛いユーノが（ry

誤字脱字はいつも通りです。寛大な心でお待ち頂けたら幸いです。皆様の感想を心よりお待ちしております。

十五話

首にひんやりとした何かが当たるのを感じて、フェイト・テストロツサは目を覚ました。

何をしていたのか、今は何時なのか、何処だったのか。ぼんやりと思い出しながら目を開くと、視界の先は歪んでおり、右へ左へと回転を繰り返していた。アルフが予約してくれた客間と同じ壁が見えた気がしたが、如何せん何であろうと直視していることが辛い。気持ちが悪くなって再び瞼を下ろすと、フェイトが起きたことに気が付いていないのか、誰かの手が自分の頭を撫でているを感じた。思わず肩をぴくりと動かし体をすくめたが、それ以上何かをしてくる訳でもなく、眠っている赤子をあやすように、時折顔に掛かるフェイトの髪を払いながら同じことを繰り返している。

どうやら、自分は横向きに寝かされているらしい。

左の頬に、柔らかな枕の感触があるのが分かる。首に触れているのは、濡れタオルだろうか。苦しいほどに火照った体が、首を中心にじわじわと冷やされ気分が楽になっていく。蒸し暑い体の不快感に、フェイトはふと、自分が湯に浸かって倒れたのだと思い出した。これから先の戦いに悩むあまり、湯に浸かったまま、時間も忘れて没頭してしまっただよう。自分が頑張ると意気込んだ結果がこれでは、アルフに合わせる顔がない。気を失う前に誰かに名前を呼ばれたことは覚えているが、相手の声は聞き覚えはあれども、少なくともアルフの声ではなかった。恐らくは、現在、頭に触れる手の主が助けてくれたのだと思う。そう考えたフェイトは、お礼だけでもと思いい口を開いたが、渴いた喉からは掠れた呼吸音が出るだけであった。

寝苦しくて呻き声を上げたと思ったのだろう。ぱたぱたという音と共に、フェイトの頬に向ってそよ風が送られ始めた。フェイトの想像している通りであれば、空いた方で扇いでくれているらしい。

これではお礼どころか、まるで催促したようなものではなだるうか。フェイトが申し訳なさに内心あわわしている間も、髪を梳いてくれる誰かの手は、フェイト以上に慣れた手付きで、無駄に長い髪の毛を絡ませることなく撫で付けていた。罪悪感に心を蝕まれながらも、気持ちの悪さを訴える頭と体はフェイトの意志では動いてくれない。ならば、せめて出来るだけ早く気分を落ち着かせようと、体から力を抜いて心地良い感覚に体を委ねた。

ずっと昔に、こうして貰ったことがあるような気がする。

いつのことだったかと己の過去を振り返って見るが、幼い頃の記憶故か、虫食いのように穴だらけで中々答えに辿り着くことが出来ない。数分の時間を費やしてフェイトが思い出したのは、幼い自分を寝かせる際に、母が本を読んでくれた記憶だった。昼寝を拒むフェイトの頭を膝に乗せ、宙に浮かせた絵本に生まれ持つ大魔力を惜しみなく使用してエフェクトを付けてくれた母。迫力に脅えて眼が冴え、眠れなかったことは良く覚えている。興奮した反動で眠気に襲われたフェイトが眠るまで、恐らくは眠った後も、こうして頭を撫でてくれていた。最近は研究に忙しい母とは、中々会うことが出来ていないけれど、バルディッシュも片手で扱えるくらい大きくなってしまうた今となつては、こうして撫でてくれる機会も、もう、ないのかも知れない。

何だか、母さんに撫でられてみたい。

しみみりとしてしまった気持ちを誤魔化すように、そんなことを考えてフェイトはくすりと笑った。顔も知らない相手だと言うのに、可笑しな話だ。不思議な感覚だが、それこそリニスやアルフのように、この人からは何だか何年も一緒に過ごしたような安堵感を感じる。触れてくる手にも躊躇いがないし、偶に安心させるように頬や頬に触れて手を止めてくれたり、むず痒く感じる箇所を先回りして搔いてくれたりと、一々フェイトの琴線に触れて仕方がない。本当に母にあやして貰っているような気がして、唯でさえ起き抜けではつきりしない頭が、再び夢の中へと引き擦り込まれていくのを感じ

じた。此の所、心配事や探索に時間を費やすあまり、休息を十分に取れているとは言いがたい生活が続いている。心身共に疲れ切ったフェイトは、無意識の内に温泉以上の癒しを与えてくれるこの手のひらを、気に入ってしまったのだろうか

うとうとと眠気に誘われるままに身を振り、人肌ほどに温かくなっている枕へと頬を擦り付けた。

「んっ……」

頭の上の方から、フェイトの多いとは言えない語彙では言い表せないような、耳当りの良い呻き声が聞こえた。

自分が急に動いた所為で驚かせてしまったのだろうか、フェイトは微睡んだままの思考を働かせる。声質から察するに助けてくれた人物は若い女性、と言うよりも自分と同じくらいの少女なのだろうとフェイトは推測した。食事を摂取する量は少ないが、戦闘訓練を積み、それなりに力持ちなフェイトの体を、同年代の女の子が移動させることは容易でないことくらいフェイトにも理解出来る。一刻も早く起き上がり礼を言わなくてはと思いつつも、意思に反してフェイトの体は、頭を撫でる手のひらから離れようとはしなかった。頭の痛みや吐き気は大分楽になったけれど、まだまだ、体に力が入りそうにないらしい。きつと、多分、恐らく、入らないと思う。そう、思いたい。

片手で枕を抱き、解れた緊張を吐き出すように、はふうーと大きく息を吐くと、気の所為か枕がびくびくと震えた気がした。撫でる手にも何処か力が籠り、フェイトを動かすまいと押さえているようにも思える。温かな枕を手放したくなくて、ぎゅつと力を込めて抱き寄せると、「ふえ、と……あうっ、んう……んんっ……」と微かに誰かの声が聞こえてきた。傍に居てくれるんだと安堵しながら、フェイトはすうすうと呼吸を小さくしていく。

「……………あ、ぬるく、なってる……………ごめん、ね……………すぐ、かえるから……………」

首に掛かるように乗せられていたタオルが取り除かれると、少女の声と共に背中の方で水の音がした。

今まで冷えていた分、首の火照りが顕著に感じられる。それ以上に、フェイトは絶えず撫でてくれていた少女の手が離れてしまったことに寂しさを覚えてしまう。フェイトが身動きしてしまう理由を、寝苦しいからだと考えた少女は、再び冷たさを取り戻したタオルをフェイトが驚かないように、そうつと乗せ直してくれた。火照りが引いていく心地の良さに脱力すると、少女もそれを見て取ったのか、態々水気を拭き取った手でフェイトの頬に手のひらを添えてくれる。求めていた温もりが戻ったことが嬉しくて、フェイトは無意識の内に、その手を自らの手を重ねた。

こんなに甲斐甲斐しく世話を焼いて貰うことなど、滅多にない。弱音を吐いたり、我が儘を言っては母を困らせてしまうと考えて、リニスの訓練に没頭した結果、フェイトの体は多少の無理が利くようになってしまった。例え少食であろうと、魔法を使うのに支障が出るほど体調を崩すこともなければ、怪我をした経験もない。そう、盛大に撃墜された、あの日を迎えるまでは。

アルフとて世話を焼こうと頑張ってはくれているが、あれで自分よりも幼いアルフにはそこまでの包容力はない。フェイトの使い魔であることは元より、姉と言うよりは大きな妹だと思って接しているアルフに世話になるのは少しばかり気恥ずかしいし、魔力で繋がっているのです、どうしても自らの一部である感覚が抜け切らなかつた。思えば、具合が悪くなって甘えたのは、リニスが最後かも知れない。

唐突な孤独感に苛まれたフェイトは、人肌の熱を求めて自らの手と頬に挟まれた、少女の小さな手へと擦り寄った。

「……甘えんぼさん……やっぱり、似てるんだね」
「ん……」

自覚はしていても、いざ甘えている様を言葉に出されるのは恥かしい。

少女の独り言に、態と声を漏らして眠っていますと主張したフェイトは、少女に気が付かれないように恐る恐る重ねた手を引いていく。誰と比べて似ているのか、フェイトには分かり兼ねるけれど、似ていると言った少女の声からは、その誰かに対しての確かな愛情と信頼を感じ取れた。少女はフェイトの長い髪を一度先端の方まで梳いて整えると、恥かしさに赤らんだ頬を指で軽く突く。柔らかな頬の感触を楽しむように、指を前後させながらフェイトの頬を刺激する少女。うっとりした様子で吐息を漏らし、消え入りそうな声で「かわいい……」と呟くと、突いていた部分を労わるように指のお腹で擦ってくる。反対の手は相変わらず頭の上に置かれ、幼い子供を寝かしつけるようにゆったりとした動作でフェイトに独特の心地良さを与えてくれていた。

先程までとは違い、悪戯交じりの手付きも加わった波状攻撃に、フェイトは堪らず寝返りを打つと、逃げるように枕へと顔を押し当てた。擦りたいことは当たり前としても、あんな声色で可愛いと言われた経験のないフェイトには、素面で寝た振りを保てる自信がない。丁度顔が収まる位置を見付け、そこに顔を埋めたフェイトは落ち着こうと考えて大きく深呼吸をする。息苦しくなるのも構わず、枕越しに呼吸を繰り返していると、石鹸の良い香りがしてくるのに気が付いた。「やつ、だ、だめっ、ふえっ……あっ！」と焦った様子で、フェイトの後頭部を指先で弱弱しく掻く少女の様子が気に掛かったが、少女が引つ張っているのか、矢鱈と暴れる枕を押さえることを優先する。肺一杯に石鹸の香りを吸い込んで、吐き出す。段々と温かくなってきた枕に、フェイトは炬燵に群がる猫のような無自覚な貪欲さで喰らい付いていると、弱弱しく動いていた少女の指

が完全に動きを止め、「くう……ん……」と声にならない声でフェイトに制止を訴えるのみとなる。

少女の声を聞いていると、まるで頭の内側を爪でかりかりと引っ掻かれているような、未知の気持ち良さを感じる。背筋を走るぞくぞくとした刺激を抑え切れずに、立場も状況も忘れて、無駄に鍛え上げられた力で枕を抱くと、フェイトはそのままの体勢で石のように固まってしまふ。暫しの間そうしていると、枕は一度大きく跳ねた後に暴れるのを止め、完全に沈黙した。

静けさに包まれた部屋の中で、少女の熱っぽくも荒い呼吸音だけがフェイトの耳を打つ。少女の手のひらを待ちながら、再びうとうととしていたフェイトに声が掛かったのは、最早必然以外の何物でもなかった。

「フェイト……起き、てる？」

「……っ！」

名前を呼ばれたことに慌てて瞼を開くと、フェイトは視界も確保できないまま後ろへと跳ね起きた。

フェイトの名前を知っていることに警戒したと言つのもあるが、それ以上に起きていたことに気が付かれ、怒られると思ってしまう部分が多い。倒れてしまった自分を助けてくれた相手だと言うのに、厚意に甘えてしまっていた。叱られる。そう直感的に確信したフェイトは、急に跳ね起きたことで悪化したらしく、ぐるぐると回り続ける視界に少女のシルエツトを捉えた。

フェイトと同じ浴衣に身を包んだ少女は思った通り同年代程らしく、正座と呼ばれる日本古来より伝わる屈膝座法の姿勢のまま佇んでいる。試したけれど一分も持たなかったなあ、と地球の下調べをしていた頃の思い出を振り返りながら、フェイトは未だばやけて見える少女の顔に焦点を合わせていく。少女は着崩れた浴衣を整えているのか、肌蹴た太股を隠そうとして裾を引っ張っている。未だ艶

のある吐息を漏らしている少女の妖艶さに、暫し呆然と眺めていたフェイトであったが、原因が自分であること思い出して頬を軽く張った。

そう言えば、フェイトを寝かせてくれていた枕もない。ま、まさか先程まで好き勝手に弄んでいたのは……、と戦慄いたフェイトは少女と同じように膝を揃えて座ると、畳に額を擦り付ける勢いで頭を下げた。

「ご、ごめんなさいっ！ しっ、知らなくて、態とじゃないんで……す……？ ひっ！ あっ……」
「そ、そんなに驚かなくても……」

少女の顔を見上げたフェイトは、弁解も半端に打ち切ると悲鳴を上げて尻餅をついた。

文字通り、夢にまで見た恐怖の対象、白い魔導師の顔がそこにはあった。温泉からあがる時に気持ちを新たにし、出会えば戦う覚悟を決めていたフェイトだったが、こんな不意打ちみたいな真似をされるなんて予想すらしていない。体を弄り、バルディッシュを探して見るも見付からず、深い絶望がフェイトの体を凍りつかせていく。ずるい、こんなやり方はフェアじゃない。そう嘆いても、心が折れているのに体が動く訳がない。母親のような慈愛を持って自分を介抱してくれていた少女を信頼していただけに、突如視界に映った白い魔導師の顔はフェイトの動揺を加速させる。一方的に裏切られたような気持ちに感情が許容量を越え、意志とは無関係に目の端から液体が伝うのを気にする余裕もなく、腰の抜けたフェイトは両手を頼りに後退った。

眉尻を下げ、憐憫を含んだ眼差しで寂しげにフェイトに手を伸ばす少女に疑問を抱きながら、後退を壁に阻まれたフェイトは懇願するように潤んだ瞳を少女に向ける。今にも泣き出しそうな表情でフェイトに詰め寄る少女に、現在進行形で泣き崩れているフェイトは

拒絶するように頭を振った。

「う、撃たないで……」

「……気持ちには、良く分かります。怖がらないで、しっかりと私を見てください」

恐怖に瞼を瞑ったフェイトの頬に、温かな指先がそっと触れた。

万事休すかと萎縮したフェイトの頬を、柔らかな手のひらが優しく撫でると、先程までとは違い堅い口調少女の声が聞こえてくる。恐る恐る目を開くと、ぎこちなく微笑んだ少女の顔が目の前にあった。フェイトを安心させようとして、無理矢理笑おうとしているのだろう。悲しげに潤む少女の瞳を見て、金槌で頭を打たれたような衝撃を受けたフェイトは、呆けたように少女の外見をまじまじと観察する。良く見れば、フェイトを撃墜した魔導師の娘に似ているけれど、髪の毛は短く、纏う雰囲気も何処か柔らかいような気がした。ふと、アルフに救い出された際に、白い魔導師とは別に、似たような格好をした黒い魔導師がいたと聞かされたのを思い出す。

本当に、別人なのだろうか。

まだ疑う気持ちが晴れずに、小さく震え続けるフェイトを少女は黙って抱き締めた。まるで本当の母さんのように、困惑するフェイトの背を数度叩いてあやすと、少女は耳元で一度だけ「ごめんなさい」と言葉を発した。毎晩アルフにそうして貰っているからこそ分かることであるが、人肌の温かさは恐怖に駆られた感情を静めてくれる。少女の体温が高いのか、アルフよりも熱を帯びた体の感触に段々と体の力が抜けていく。心音が伝わってくるのが恥かしくてフェイトが身を振り始めた頃、少女は無言のまま体を離すと、乱れたフェイトの髪に指を通して整えてくれた。

「あ、あの……」と声を掛けたは良いものの、何を話して良いやら分からずに困惑するフェイト。それを見た少女は、分かっただけですとばかりに一度頷くと、元の場所に戻り腰を下ろした。

「まだ本調子ではないのでしょうか？ 良ければ、どうぞ」

ほんぽんと自らの膝を叩き、フェイトを手招きする少女からは、まるで年上のような落ち着きを感じた。

本調子と言う少女の言葉に反応して、思い出したかの如く痛みを訴え始める頭を押さえる。急に飛び起きた所為もあり、立ち上がるうとした足の力も、再び覚束無いものへと戻り始めていた。先程まで寝転がっていた時の安心感を思い出すと、少女の誘いが魅力的に思えて仕方がない。こんな状態では出て行つたとしても、ジュエルシードの封印を行うには休息が必要になつてしまう。どうせ何処かに身を隠して休まなければならぬなら、そう考えて、フェイトは灯りに誘われる蝶のように、少女に一步步み寄つた。

恥らうように頬を染め、こくりと小さく頷くと、フェイトは屈託のない笑顔を浮かべた少女の膝へと頭を下ろすのであった。

「白い魔導師の娘に貴女の戦い方を教えたのは、私です」

少女の膝に頭を乗せ、日頃の疲れから微睡んでいたフェイトに、少女はそう打ち明けた。

シユテルと名乗つた少女は、身動きの取れないフェイトに対して、素性を探ってくるような真似はしなかった。アルフから聞いた話では、フェイトやアルフの名前も何故か知っていたらしいので、何処までかは分からないがある程度の事情は把握しているのだろう。フェイトとしても、自分しか頼れない孤独感に辟易していたこともあり、黙したまま自分を受け入れてくれるシユテルは都合が良かったと言える。負けたことに悩むフェイトの心を見透かしたように、「何かあるのですしたら、話を聞きますよ」と声を掛けたシユテルに、

気が付けばフェイトは心の内を吐き出していた。

勿論、母のことを話す訳にもいかず、所々はぼかして話したけれど、少女はその部分でさえも全て知っているかのように、時々相槌を打ってフェイトの話聞いてくれた。大事な人の笑顔の為にジューエルシードを集めていること、ずっとその為に訓練を積んできたこと、そして、それが撃ち砕かれたこと。思い出したフェイトの表情が悲しげに歪むと、それを見たシュテルも悲しげな表情でフェイトの頬を撫でてくれた。不思議な感覚だった。上辺だけでなく心の底から共感してくれているのだと、何故だか分からないけれど理解できてしまう。まるで何年も一緒に居たように、不安に脅えるフェイトに合わせて髪や頬に触れてくるシュテルが、敵だとしても思えなかった。

だからだろうか、口が滑りすぎてしまったのは。

負けたこと事態は、どうだっていい。母を想うこの気持ちも否定されるのが、怖い。そう、漏らしてしまった。初対面の相手に、ましてや正体も知れない魔導師に。冷静さを取り戻したフェイトが、失言に気が付いて口を覆った時も、シュテルは全部を肯定してくれるような柔和な眼差しでフェイトを見詰め、安堵させる為に頬に手を添えてくれた。このままでは駄目だと、フェイトの中の冷徹な部分が警鐘を発しているにも関わらず、一度折れたフェイトの心は、白い魔導師に撃ち抜かれた心の穴を埋めるように、シュテルの優しさに触れて絆されていく。

「貴女が覚えていて欲しくないのなら、全てを忘れます」と告げた少女の言葉を、遂にフェイトは信じてしまった。

誰かに聞いて欲しかった。ずっと怖かったこと、もう戦いたくないこと、母に拒絶されたくないこと。涙ながらに話すフェイトの言葉を、シュテルは一字一句漏らすことなく聞き入れてくれていた。うだった。壊れ物を扱うようにフェイトの涙を拭くと、シュテルは唯一言だけ「頑張ったね」と褒めてフェイトの頭を抱えてくれた。聞いてくれるだけで、良かったはずなのに、少しだけその行為に心

が満たされる。気の所為だとは思いつけれども、シュテルはフェイトの求めるものを与えようと、必死なようだった。包み隠さずに好意を向けられて、不快な気持ちになる人間は少ない。理由など知る由もないことであるが、名前しか知らない少女の無条件な好意に、フェイトの心は戸惑い、惹き付けられ始めていた。

話を終え、夢でも見ているような気分であつらつらとしてたフェイトに掛けられたシュテルの言葉は、宛ら冷水のような鋭さを持つてフェイトの心を貫いた。

「……あの娘は、魔法に触れて一ヶ月の見習いです。貴女との戦いで、怪我をして欲しくありませんでした」

「君は、あの白い魔導師の……味方？」

「私は、誰の味方にもなれません。あの娘の味方にも、貴女の味方にも、きつと……」

「なら、どうして……そんなこと……？」

「貴女が勝つと確信していました。あの娘に貴女の足止めを頼んだのも、勝てないと踏んでのことです。ジュエルシードに興味はありませんが、暴走体に取り込まれた友人を、私は無傷で助けてあげたかった」

だから、悪いのは全て私なんです。

フェイトから視線を逸らして、そう言ったシュテルの表情は、後悔の色に染まっていた。

確かに、白い魔導師が戦闘中、フェイトの手の内を読んでいるような挙動を見せることはあった。けれども、それが勝敗の決定的な差を分けたとは、フェイト自身思っていない。油断があったことは事実であり、何より、白い魔導師の勝利への執念がフェイトの実力の上回ったに他ならない。事情を聞くまでは、シュテルの顔を見た時以上の絶望感に包まれていたフェイトだったが、友達を助けるために、そう告げたシュテルの言葉に、萎縮していた体の力が抜け

て行くのを感じた。

アルフから聞いていたこともあり、フェイトは黒い魔導師、シュテルが完全に敵対する勢力だとは考えていなかった。勿論、必要があれば戦うつつもりで覚悟してはいたけれども、白い魔導師に敗北した今、同程度の魔力量を持つシュテルと白い魔導師の二人掛りで来られれば勝算がないことも理解している。事実、白い魔導師の味方ではないと言うシュテルの言葉に、フェイトは心中で胸を撫で下ろしていた。

ジュエルシードに興味が無いと言うシュテルの言葉を鵜呑みにする訳ではないが、互いに邪魔でしかない競争相手を助ける理由が、フェイトには考え付かない。例えどれだけ甘い考えの持ち主だったとしても、自分と同程度の魔力を持つ敵の魔導師にデバイスをあっさり返したり、態々下着まで着せて介抱するとは思えない。そうするだけのメリットが、フェイト自身にあるとは考えられなかった。悪いのは自分だと何度も繰り返すシュテルは、まるで白い魔導師の子を庇っているようにも思える。けれども、実際にフェイトはこうしてシュテルによって倒れていた所を救われている。

悲しげに視線を背け続けるシュテルの顔に手を伸ばしながら、フェイトは眠気で尚もはつきりしない頭に浮かんだ疑問を口にした。

「どうして、助けてくれたの？」

「……あなたは私を知らないでしょうが、私は貴方を良く知っています」

「母さんの、知り合い？」

「いいえ……フェイトのことを一方的に知っている、それだけです」

頬に触れた指先は、冷たく濡れていた。

フェイトには、同年代の知り合いなどいない。それ以前に、母を経由しない人間関係など、フェイトには存在すらしていない。解消されない疑問にもやもやとした想いを抱えていると、シュテルはフ

エイトが半分寝惚けて伸ばした手を優しく掴み、胸の上へとそつと戻してくれる。それ以上語るつもりはないのか、シュテルは口を噤むと、流れ落ちる涙を袖で拭い、瞳を閉じて押し黙った。綺麗だなと、場違いな思考を振り払い、フェイトは閉じかけた瞼を気合いで開き続ける。

フェイトは生来、難しいことを考えることがあまり得意ではない。プレシアの娘である以上、頭が悪いという訳ではないが、母の言う通りにする気持ちが常に思考の基盤にあったので、難しく物事を考える必要がなかったのである。シュテルが何者なのか、何を目的としているのか、フェイトには見当も付かない。一つだけ理解できることは、シュテルが白い魔導師と、フェイト・テスタロッサの両方を心配しているということ。

敵か味方かなんて確証は何処にもないけれど、シュテルは湯あたりで倒れていた自分を助けてくれた。そして、今現在シュテルが泣いている理由は、間違いなくフェイトに起因するのだろう。少なくとも、シュテルはフェイトが勝利することで誰も傷付くことなく丸く収まるのだと信じていた。

私が、負けていなければ。

激しい眠気に襲われ微睡んだ思考の中で、フェイトは改めて強い後悔に苛まれていた。

「もっと、強くなるから……」

「……？」

「……泣かないで」

再びシュテルの頬まで伸ばした手は、寸前のところで置へと落ち、届きはしなかった。

限界を迎えた意識が電源を落とす直前、頭にシュテルの柔らかな手のひらの感触を感じながら、フェイトは穏やかな表情で眠りに就いたのであった。

似ていないけれど、何処か似ている。

シュテルがフェイト・テスタロツサに感じた印象は、その一言に尽きた。アリサと別れ大浴場へと向ったシュテルであったが、待ち受けていた全裸のフェイトに、慌てふためきながら下着を穿かせ浴衣を着せて、従業員に事情を話して部屋を貸して貰ったのが凡そ一時間ほど前。元々客間が埋まっていなかったこともあり、夕方まで休憩する場所は確保することはできたけれど、シュテル自身、この状況をどうすれば良いのか考えてなどいなかった。

すつすつと静かに寝息を立てるフェイトをかいぐりかいかいぐりしながら打開策を思案するも、なのはに敗れて心に傷を負ったフェイトをそのままにしては置けず、時間ばかりが過ぎていく。悩みを打ち明けてくれたフェイトに申し訳なくて、事情を話したシュテルであったが、フェイトは拒絶することなく膝の上で眠気を耐えているようだった。天然なのか、自罰的なのか、或いはその両方か。恨みの感情の向け方を知らないかのように、フェイトは己の弱さを気にし続けている。予想外の出来事が重なったのは事実だけれど、その発端が自分にあることはシュテル自身重々承知していた。接触を避けるつもりでいたフェイトを助けたのも、心の中に強い負い目があったからに他ならない。

尤も、全てが上手く回ったからと言って、フェイトを見捨てることなど出来ないだろうが。

そう自嘲すると、シュテルはフェイトの長い金色の髪へと指を絡め、久方振りの心地良い指触りに意識を集中した。違うフェイトだと言うことは、他でもないシュテルが良く理解している。それでも、親友と同じ姿、同じ声をした目の前の存在を愛おしく感じてしまう。辛い想いを沢山して、他人を気遣う余裕など無いだろうに、フェイトはシュテルに「泣かないで」と気を掛けてくれた。幾分凜々しさ

が増しているものの、ちょっと間が抜けてたり、自覚なしに恥かしいことをしてくるところも、フェイトに良く似ている。愛おしく感じない方が、無理というものだ。逢えない寂しさが余計にその気持ちを助長させているのか、フェイトが眠ったことで鉄面皮を脱ぎ捨てたシユテルは、フェイトの頬に指を這わすと、今一度柔らかな感触に思考を埋没させた。

指を動かす度に「ん……ん……」と微かに反応するフェイトが可愛らしくて、十分ばかりそれを続けていると、頭の中が確かな幸せで満たされていくのを感じた。

「……フェイト、可愛いよ、フェイト。私の……フェイト」

『ま、マスター！ お気を確かに！』

「私は、正気だよ、レイジングハート。はあ……ふえいと……やわらかい……」

『わ、私が不甲斐無いばかりに、マスターが、マスターが……』

主人を貶める発言を繰り返すレイジングハートを思考の外に放り出すと、シユテルは熱っぽい吐息と共にかいぐりを再開する。

例え違つフェイトだとしても、フェイトはフェイトだから可愛い。それはどうしようもないことで、シユテルはその気持ちに抗うことは出来なかった。頭の中までフェイト一色に染まったシユテルは時間が経つのも忘れ、堪えようのない愛おしさに身を委ねる。とは言え、欲求の赴くままに行動してフェイトを起こすのは本意ではない。フェイトがむずがる一歩手前で頬に触れる指を離すと、ご機嫌を取るかのように後ろ辺りの髪をちょこちょこ指先で撥った。気持ち良さそうに穏やかな表情を浮かべたフェイトを確認し、反対の手で小さくガッツポーズを取るとシユテルはフェイト分の補給を続行する。

昔と言えるほど昔ではないが、甘えてくるフェイトにこうしてあげると、いつもとろんとした表情になり、シユテルに続きを強請っ

てきた。同様のやり方で通用するか不安ではあったものの、結果は見ての通り。三年間の間に培った、対フェイト用の甘やかし能力は伊達ではない。フェイトの体に関しては、アルフよりも隅から隅まで熟知している自信があった。

湯あたりによって体に籠った熱が煩わしいのか、フェイトの額に浮かんだ汗を、繊細な動作で丁寧に拭う。寝苦しそうに「ん」と小さく呻いたフェイトの声を耳聴く聞き留めると、シュテルは予め傍に用意しておいた団扇を手にとった。

「フェイト、暑いのか？ うん、扇いであげるね」

「あの、マスター……？」

「おでこも、冷やそっか。ん、平熱よりも高いし、そうしようね」

「それで、マスターが癒されるなら、いえ、で、でも……わ、私は、どうしたら……」

旦那の看病をする新妻のように甲斐甲斐しく世話を焼くシュテルは、久方振りの充実感に満たされていた。

一人では生活できないフェイトの世話をしていた時が、シュテルにとって一番幸せな日々だったと言える。管理局に正式に入局してからは離れ離れになり、シュテルが手を貸す場面も少なくなってしまうていたけれど、物足りない想いがずっと心の中に残っていた。懐かしさに浸りながら、幸せだった日々を想いを馳せるシュテルを見守るレイジングハートは、断腸の想いで口を噤んでいる。シュテルの邪魔をする者は、この場には誰一人として存在しない。

手際良く汗を拭い、冷やすべき部分を冷やし、時に扇ぐ合間合間にフェイト分を受け取りながら、シュテルは下半身を揺らさないように世話しなく両手を動かしていた。

「……はあ」

『その……満足いきましたか？』
「……うん」

一通りの出来ることを終えたシュテルは、満ち足りた表情で一息吐くと、上の空気にレイジングハートに返答した。

見る限り、フェイトの顔色も大分良くなったように思える。冷静さを取り戻したシュテルは、改めてフェイトの現状について思考を働かせた。真つ先に思い浮かんだ懸念事項は、無論、フェイトとなのはの力関係についてである。シュテルは今後の方針として、さすが再び巻き込まれるような事態にならない限り、どちらにも味方しないと決めていた。今後は管理局の介入が本格的に始まる上に、プレシアも黙って見ているとは思えない。最早ジュエルシードは脅威の対象ではなくなり、フェイトは元より、なのはにとってもゲームの景品と大して変わらない位置へと評価を下げるだろう。

安定してジュエルシードを封印できる戦力が、なのはとフェイト、実質前線に出られないリンディとプレシアを除けばクロノの三人しか居ない以上、シュテルがなのはに味方することは、即ちフェイトが一つもジュエルシードを封印できない可能性も当然のように発生するということである。それを善しとしないプレシアが、何をすべきなのか分からない。加えて言えば、元より居ない人間と言う負い目もある。

プレシアを刺激しない意味でも、シュテルはこれから先、裏方に徹することが最善と考えていた。

「フェイトは、強いよ」

シュテルの知るフェイト同様、長い時間訓練を積んだのだろう。

所々硬さのあるフェイトの手のひらを労わるように撫でながら、思い出の中のフェイトの手のひらと照らし合わせた。随分と真面目

で心配性な性格のようではあるが、その分、もしかすると目の前のフェイトの方が魔法の習熟に関して上手なのかも知れない。裏方に徹するもう一つの理由として、シュテルはフェイト敗北を聞いて尚、フェイトの実力の高さを信じ続けていたことが上げられる。間近で確認して、その想いはより一層強くなった。

もう一度戦えば、なのはが勝利することは難しいと予想はしていたが、何度も予想外の結果を見せられては不安も簡単には拭えない。直に接触する機会を求めていたシュテルにとって、海鳴温泉での出会いは渡りに船だったと言える。少なくとも、この世界のフェイトはシュテルの知るフェイトと同等に渡り合える力を持ち、密かに憂いていたフェイトが極端に弱い可能性は払拭できた。

唯一残った懸念は、フェイトが敗北を引き摺ってしまっていることだろう。

この世界のフェイトは、どちらかと言えば自分と似通っている部分が多い。不安を内側に溜め込んで、外見だけ取り繕って戦い続ける性格の典型だとシュテルは考えている。言葉で自信を付けさせたり、励ましたりするには、相当骨が折れることになるだろう。親しい人物あれば話は別だが、プレシアは論外であり、弱ったフェイトに付け入る形で慰めただけのシュテルでは、深い信頼関係を築いているだけの時間はない。シュテルは思考が突き当たりに差し掛かったことを感じ取り、一端脳内会議を締め括った。

どんな夢を見ているのか、にやけた表情で眠るフェイトの手から零れ落ちたバルディッシュを握らせてあげると、男性の電子音声で『Thank you, Miss』と声が聞こえてくる。こちらも相変わらず、主人想いな良い子のように安心した。シュテルは柔らかな笑みを浮かべながら「どういたしまして」とバルディッシュに返答し、『私のマスターに色目使ってんじゃねえです、この旧式デバイス』と対抗意識剥き出しの駄デバイスにでこぴんを打ち込んだ。

八方塞りのようにも思えるが、シュテルに近い思考回路を持つフェイトの性格と、不安を訴えたフェイトの言葉を信じるのであれば、

手っ取り早い手段がない訳でもない。

「レイジングハート、出して」

『Put out』

シュテルの胸元で光を放つレイジングハートよりも、一回り大きい青い寶石。

眼前で浮遊するその宝石には、ローマ数字で14番と文字が刻まれている。これはなのはの手を借りて手に入れたジュエルシードであり、押し倒されて辱めを受けた後、しっかりと受け取って貰おうと渡したのだが、なのはは頑なにそれを拒んだ。「シュテルちゃんが封印したんだから、シュテルちゃんの好きにして」とは言われたものの、未だもう一つの21番の解析にも進展がないシュテルにとって、この14番は非常に価値が薄い物でしかなかった。簡単に処理出来る物でもない上、唯でさえ21番の存在を隠す必要があるのに、14番まで持っていればきつと管理局があればこれと煩いに違いない。クロノとか、リンディとか、特にクロノとかが。

なのはの隙を見て、こっそりとユーノに渡す心積もりであったけれど、フェイトの現状を思えば、これも悪くない使い道なのかも知れない。シュテルとて、フェイトが負け続けるとは思っていないけれど、もし万が一敗北が続けば、フェイトは一つのジュエルシードも持たずに母親の前に戻ることになる。

『え、えへへ、ちょっと、転んじやった』

そう笑って、無理矢理元氣そうに振舞っていたフェイトを、今でも時々思い出す。

シュテルこと高町なのはは、フェイトと出会うまでの人生において特定の誰かを憎く思ったり、心の底から嫌ったりすることはなかった。嫌いになれるほど誰かに近付くこともなく、自分の中にそこ

まで激しい感情があると思つてすらいなかつたからである。普段と違い、ぎこちない仕草でシュテルの前に立つたフェイトに疑問を抱き、シュテルはあれよあれよと言う間に根掘り葉掘り事情を聞きだした。鞭で打たれた傷を癒しながら、シュテルはフェイトに気取られないように、静かに憎悪の感情を燃やし続けていた。

一度消えたはずのその炎は、この世界に来て再び、小さな埋け火となつてシュテルの胸に宿っている。結果を出せないフェイトを許し、二度目の機会を与えるほどプレシア・テスタロッサは我慢強い女ではない。シュテルとしては、目の前で穏やかに寝息を立てる少女が傷付く姿を見たくはなかつた。しかし同時に、フェイトに保険としてジュエルシードを与えることは、封印協力してくれたなのはの気持ちを踏み躪ることになりはしないだろうか、シュテルは悩む。

シュテルが手の中でジュエルシードを転がしながら数分の間思索していると、淡い桜色の光が点滅し、シュテルの視界を照らした。

『良いのではないですか。あの娘、六つも持ってますし』

「レイジング、ハート……？」

『私には、悩んでいる貴女の背を押すことくらいしか出来ません。それに、フェイトの身を案じているのは、私も同じです』

「……仲、良かったもんね」

良くシュテルに隠れて何かをこそそこそと遣り取りしていたレイジングハートとフェイトを思い出し、シュテルは自嘲するように力無く笑った。

シュテルはフェイトのことを心配していて、ジュエルシードを渡すことで危険を避けられるかも知れない。そこまで分かっている、今更渡さずに引込めることが出来ないのを、レイジングハートは主人よりも早く理解していたのだろう。きっと渡さなければ、後悔することになる。例えば結果がどうなつたとしても、シュテルはフェ

イトを助けられない選択肢を選ぶ訳にはいかない。

問題は、なのはがそれをどう思うかである。止むを得ない事情があるとは言え、なのはには詳細を話すことは出来ない。仮にも敵対する者同士、まじまじとジュエルシードの番号を見せ合う機会はないとは思っけれど、小さな可能性も考慮する必要がある。なのはとフェイトには、嘗ての自分とフェイトのように仲良くなって貰いたい。シュテルの所為でフェイトが折れてしまうことは、絶対に回避しなければ。

なのははそれこそ才能があることを除けば、基本的には健気な良い子である。これまでだって、見ず知らずのシュテルを助けようとして戦ってくれた、自分と同じとは思えないほど心の優しい娘だ。例えば事情が話せなくても、根気良く説得すれば、きっと分かってくれる。そう、思いたい。

レイジングハートが賛同してくれたこともあり、幾分迷いを残しながらも、シュテルは眠っているフェイトの手の中に、ジュエルシードをそっと握らせた。

「フェイトに、預けます。いつか、返してくださいね……なんて……」

感傷に浸りながら独りごちて、シュテルは水っぽくなってしまった目を袖で拭った。

小さく音を立てて重なり合ったバルディッシュが、「本当に良いのですか？」と言いたげに黄色い光を放ち、点滅している。「ええ」と短く肯定を返したシュテルは、緩んだ表情のまま夢の中から戻らないフェイトの頭を軽く持ち上げると、自らの膝と手近な座布団を入れ替えた。

名残惜しいが、すずかの時のようなことが起こらないとは限らない。フェイトが封印するにしろ、なのはが封印するにしろ、シュテルがやるべきことは不測の事態に備えること。旅館近くに落下した

ジュエルシードの発動はもう少し先だろうけど、先回りして見張っている必要がある。

逸る気持ちに最後だからと告げると、気の所為か、寂しげにやや眉尻を下げたフェイトの髪に指を通した。

「……貴女は、誰にも負けたりしないんです。ずっと、強い貴女のままです。……」

「ん……」

応えるように小さく身を振ったフェイトに苦笑すると、シュテルは眠るフェイトへと顔を寄せた。

結局、自己満足でしかない。目の前のフェイトに幾ら好意を向けたところで、シュテルの大切な親友の下には届かない。だから、この行為は唯の現実逃避でしかないのだろう。寝る前には良くこうして欲しいと強請られたな、と懐かしい思い出を振り返りながら、フェイトの額のタオルを脇へと除ける。「友達同士これくらい普通」と押し切られてしていたけれど、改めてしると言われると、矢張り躊躇してしまう。顔全体が熱を持っていくのを感じながら、シュテルは覚悟を決めて瞼を瞑った。

触れるか触れないか、秒針が動くか動かないか、一瞬の間の出来事であった。

「私は……何を……っ」

フェイトの額に口付けたシュテルは、恥かしさを誤魔化すように勢い良く立ち上がり、逃げ去るように襖を開けて部屋を飛び出した。何を思っただんなことを、と自問自答するシュテルは、もたつきながらスリッパを履くと長い廊下を一直線に駆け抜けていく。

明らかに正気を失っていた自分に渴を入れながら、「あーっ!? ずるっこだーっ! えこひいきだーっ! き、記録しましたから

ね！ 報告しますよ！ すぐに……』と喧しいレイジングハートを両手で握りこんで黙らせる。擦れ違ふ客の目を惹くほど赤く火照ったシュテルの顔は、玄関を抜けても尚収まることはなかった。

私は、今、何をされたんだろう。

ぱたぱたと世話もなく駆け出していったシュテルを薄目を開いて見送りながら、フェイト・テストロツサは体を起こした。額に残る柔らかな感触の余韻が嘘でないのなら、つまりはそういうことなのだと思う。夢でも見ていたのかも知れないと考えても、手の中に残るバルディツシュとジュエルシードが先程の出来事が現実であったことを教えてくれる。

フェイトは赤らんだ顔を濡れタオルで冷やししながら、違和感の残る自らの額に、そつと指先を近付けた。

「なんで、あんなこと……あ、う……」

フェイトが起きていたのは、シュテルとそのデバイスが話している途中だったので、何がどうしてこうなったのかは分からない。

混乱した頭で考えては見たものの、矢張り分からないものは分からない。「預ける」と言ったシュテルの言葉を真に受けるのであれば、手のひらの上に転がっているジュエルシードは、一時的にしろ間違いなくフェイトに譲渡された物なのだろう。どうしてこれほどまで好意を向けられているのかは、フェイトの与り知らぬ処ではあるけれど、シュテルの行為からは無償の信頼と愛情が感じられた。幼い頃にフェイトと共に居た母と、魔法を覚えてくれたリニス、使い魔のアルフを除けば、フェイトは誰かにこれほどまでに好意を向けられた経験など覚えがない。

誰なんだろう、どうして親切にしてくれるんだろう。

幾ら考えても、覚えがない人物を思い出せる訳もなく、頭痛の残る頭を抱えて、フェイトは温もりの抜けた味気ない枕へと寝転がる。「貴女は、誰にも負けたりしない」と、シュテルは言った。フェイトが知らない誰かとともに戦闘を行ったのは、白い魔導師が最初で、プレシアの娘として触れ回っている訳でもないのです。シュテルの言葉には矛盾が生じる。白い魔導師に教えたというフェイトの戦い方だつて、本来であれば誰も知っている筈がない情報なのに。

そこまで考えて、フェイトは意味のないことだと思いを打ち切った。考えても仕方がない。今は、額に深く刻み込まれた熱源をどうにかするのが先決だと、畳の上でごろごろと悶える作業に没頭する。別に嫌だったとか、気持ち悪いとか言うつもりではないけれど、センチメンタルに陥って弱みを見せた相手から、まるで赤子を安心させる為にするような口付けをされては、恥かしさも一入だ。況してや、迫り来る気配を感じ取り、先んじて眼を開けたフェイトは、瞳を閉じ、赤らんだ表情で唇を落としたシュテルを間近で見えている。

恥らう表情が可愛かったな、とその瞬間を思い出してしまい、フェイトは隠れるように座布団へと顔を埋めた。

「Are you all right, sir?」
「……だいじょぶじゃ、ないよ……バルディツシュ」

心配してくれるバルディツシュを指先で弄びながら、フェイトは自分の後頭部にタオルを乗せて沈黙した。

兎に角、今は体を休めよう。シュテルが向った先も気になるけれど、周辺のジュエルシードを探しに言ったとしても、冷静かつ濃厚そうなシュテルが即座にアルフと戦闘を始めるとは思えない。そう言えば、合流すると言っていたのに、アルフの帰りが随分と遅いよな気がする。先程時計を確認した時には、随分と時間が経過していた。もしかしたら、シュテルの魔力が近くになるのを警戒して様

子を窺っていたのか、或いは、もう一人の魔導師を見付けて、若しくは見付かってしまったのか。交戦は避けるように言っているし、戦闘が避けられなければ念話で知らせる手筈になっているので、心配はしていないけれど、今はアルフに傍にて欲しい気分だった。

大方、温泉にでも浸かっているか、道草でも食っているのだろうと当たりを付けると、フェイトは傍に置いてあった水差しを呷り、一息吐く。

ずっと、強い貴女のまままでいてください。

ふとした拍子に、シュテルの言葉が思い出される。何を知っているのか、ジュエルシードをフェイトに渡して、フェイトに何をして欲しいのか。フェイトには検討も付かないけれど、一つだけ明らかなのは、謎の魔導師、シュテルはフェイト・テスタロッツサの実力を高く評価し、信頼してくれていると言うことだ。

負け犬のように気落ちして、自らの力に不安を抱いていたフェイトにとって、その気持ちが嬉しくないと言えば嘘になる。

「……頑張ろう」

手の中にあるジュエルシードを握り締め、フェイトは久し振りに前向きな気持ちで呟いた。

恥かしげに額を指先で突きながら、何処か晴れやかな表情のフェイトは、今後に備えるべくアルフに念話を飛ばすのであった。

十五話（後書き）

皆さんの頭の中に、有り得ないとは思いますが、もし万が一ヤンデレ言う言葉が浮かんでいても、シユテルさんの為に生温かい気持ちで飲み込んであげてください。

なのは回だと思っていた皆さん、騙して悪いがフェイト回です。「デイバインバスターは簡単に習得できる技じゃないよ」の時に先の展開を読んでおられました勘の良い皆さんであれば、ある意味なのは回だと分かって貰えるかも知れません。レイ八さんは恐らく分かかってやっています。

誤字脱字はいつもの通りですが、寛大な心で修正されるのをお待ちください。皆様の感想を心よりお待ちしております。それでは、ちよっとフロムソフトウェアまで、心折られに行つて来ます。

十六話

三人分の布団が敷かれた客間の一室に、何の前触れもなく二人分の舌打ちが響き渡った。

なのはは己の意思に反して動いた口を手で覆いながら、「にやっ、な、なんで……」と困惑する。周囲を見渡してみれば、すずかもなのはと同様に口元を覆い隠し、きよとんとした表情で首を傾げていた。ぼんやりしていて無意識に何かしていたと言っならまだしも、誰かと一緒にと言っのは中々ない気がする。一人だつたら心細かつたけど、と考えたなのははほつと胸を撫で下ろす。お互いに顔を見合わせて、「不思議だね」、「ねー」と苦笑していると、舌打ちと同時に部屋の隅まで飛び退っていたアリサが恐る恐る近付いてくるのに気が付いた。

ユーノを守るように胸に抱き、脅えた視線を此方に向けるアリサに、なのはとすずかは疑問符を浮かべる。見れば抱かれているユーノも若干震えながらアリサの腕にしがみ付いていた。なのはとしてはくしゃみと同じくらいに考えていたけれど、周囲はそうは受け取らなかつたらしい。慌ててアリサに近寄ると、布団の上で縮こまっているアリサに弁解すべく顔を寄せる。

アリサは訝しげな眼差しで二人の顔を見比べると、酷く混乱した様子で普段通りのなのはに安堵して、手に縋り付いてきた。

「な、なのは……すずかも、何か嫌なことでもあった？ あ、あたしなの？ あたしが何かしたの？」

「ち、違っの、アリサちゃん！ な、なんて言ったら良いかわかんないけど……ね、すずかちゃん？」

「う、うん……ちよつと、嫌な予感がしただけだよ」

「ほ、ほんと？ 仲間はずれにされてない？ あたしがユーノとばつかり遊んでたから……」

落ち込むアリサを二人で慰めながら、的確になのはのもやもやとした感情を表現したすずかに共感を覚える。何処かに強大な敵が現れたような、楽しみにしていた好物を泥棒猫に搔つ攫われたような、そんな奇妙な感覚がした。

大人組と合流し、夕食を終えたなのは、すずか、アリサの三人娘は就寝を前にした穏やかな雰囲気の中、はしやぎ疲れてやや重くなつた体を休めていた。凜々しさ五割増しの表情で「決着をつけてくるわ」と言い残して忍が消えてから、何故かフアリンとノエルが部屋の前でなのは達の出入りを封じている。兄の姿も見えないけれど、あらあらうふふと照れ照れしている母や、憂いを含んだ暗い表情で遠い眼をしている父を見る限り、喧嘩かなとはらはらしていたなのはの心配は杞憂で終わりそうだった。

卓球後に休憩を取ったアリサはまだ余裕があるのか、ぐったりとしているユーノで遊んでおり、なのはとすずかは他愛もない話題で談笑していた。それだけだったのに、虫の知らせか、突如身の凍るような感覚を覚え、思わず舌打ちしたなのはとすずかによって穏やかな空気は引き裂かれ、アリサはすっかり萎縮してしまっている。

無意識とはいえ何てことをしてしまつたんだろう、と慌てふためくなのはとは対照的に、布団の上で力なく体育座りしているアリサを見て、すずかは千載一遇のチャンスでも見出したように怪しく瞳を輝かせていた。

「二人に見捨てられたら、あたし、あたし……」と弱弱しく涙声で懇願し続けるアリサに気取られないように背後へ回り込み、脇の間から両手を通すと、アリサの体を抱き抱えるように優しく包み込んだ。「きゃっ」と小さく声を上げたアリサを他所に、すずかの手はするするとアリサの抵抗を潜り抜けて背中を押し付ける。

尚も身を擦るアリサを理不尽なまでの身体能力で押え込むと、耳元に口を寄せて吐息でも吹きかけるようにゆっくりと囁いた。

「仲間はずれになんかしてないよ。アリサちゃんのこと、大好きだもん」

「す、すずか、ちよつと、いきなり何してんのよ!？」

「んー？ お詫びのだったこ、かな。ねー、なのはちゃん？」

「な、なのはまで焚き付けないで……あつ、こら、どこ触って、んっ！ ほ、ほんとに、あたし撥られるのとか駄目だから、あ、んっ、もっつ！ だめだつて言つて……」

アリサの体を掻き抱いて脇腹をこちよこちよと擦るすずかと、笑つていると言つよりは悶えながら艶やかな声を漏らすアリサを、なのはは赤らんだ顔で見詰めていた。

なのはと同じ引つ込み思案仲間だった筈のすずかが、最近では積極的にスキンシップを取るようになってきている。勿論仲間内以外では言わずもがな、相変らずの状態ではあるけれど、それでもシユテルにどんな顔をして逢えば良いのか悩み続けているなのはには純粹に羨ましい。「助けて……なのは、は……たすけ……」と息も絶え絶えに手を伸ばすアリサに慌て、「ゆ、ユーノくん、ど、どうしよう?』と念話でユーノに意見を求めると、既にユーノは握り締められたアリサの手のひらの中で泡を吹いていた。あんな状態になつても次の日には回復しているのだから、改めて魔法の力の凄まじさが思い知らされる。学者型に見えて、遺跡発掘にも携わつていると言うユーノが単純に頑丈なだけかも知れないけれど。

そこまで考えて、なのはは現実逃避をやめ、手招きするすずかに誘われてアリサにふらふらと近付いていく。シユテルに抱き付くのととは違い、お互いのことを良く知る親友同士であれば、触れ合ったところで変に緊張したりはしない。思い返してみれば、最近シユエルシードの探索に放課後を使つてしまい、アリサやすずかと遊ぶ機会は少なくなつていた。すずかが積極的になつた理由も、きつとなのはの抜けてしまった寂しさを埋めようとして、無理にそうしているのかも知れない。

ぐつと拳を握り込むと、「わ、私だつて」と言い放ち、アリサの胸の中へと飛び込んだ。

「にやはは、なのはも交せてね」

「な、なのはっ!？ あ、あんたまでくっ付いてどうす……」

「アリサちゃん、お顔、にやにやしてる。ねえ、嬉しい？ もつとぎゅってした方がいい？」

「だ、だめに決まってるでしょ！ 別に、う、嬉しくなんかないんだから……」

なのはとすずかに挟まれたアリサは、表情こそ羞恥に赤く染まっているものの、両手はしつかりとなのはの腰に回されていた。

恥かしがりではないけれど、肌が触れ合うことに対しては不慣れからか、人一倍身構えてしまうアリサとこうしてスキンシップを取るチャンスは限られている。連日のジュエルシード探索のお蔭で一緒に居られなかった時間を埋めるように、なのははアリサごとすずかを抱き締めると、その慎ましやか胸に顔を埋めた。アリサから触れてくる分には問題なくても、此方からは手を握るだけでも身を強張らせて逃げてしまうアリサ。折角旅行中は探索も魔法の練習もお休みと自分で決めたのだから、普通の小学生に戻ってアリサとすずかとのんびりするのが一番良いに決まっている。

アリサの両頬になのはとすずかのそれぞれが顔を寄せ、「アリサちゃん大好き」と囁いていると、頭から上がる湯気と共に抵抗する力が抜けていく。「……覚えてなさいよ、ばか」と短く告げたのを最後に、アリサは何かを耐えるようになのはに縋り付いたまま口を噤んだ。なのはの位置からは良く見えないが、もしかしたらすずかがまだ攪りを続けているのだろうか。

なのはの肩に口元を押し当て、熱っぽい吐息を漏らしているアリサに頬擦りすると、なのははアリサを抱いたまま布団へと寝転がる。じゃれ合う猫のように三人で一塊になって丸まっていると、普段の

非日常的な出来事が全部夢だったように思え、なのはは浴衣越しにレイジングハートへとそつと手を添えて存在を確かめた。こうして友と一緒に過ごす毎日が、一日でも長く続くように、なのはは戦い続けなければならぬ。休んでいる暇なんて、と焦燥に駆られはするものの、戦士にも、魔法少女にも休息は必要だ。

シュテルにも窘められたことを思い出して昂ぶる気持ちを落ち着けていると、余計なことまで思い出してしまい、なのはは切なそうに己の口元を手で隠した。欲望に支配された自分を恥じると同時に記憶に鮮明に刻み込まれたシュテルの甘い喘ぎが耳を刺激して止まない。口元が唾液でべたべたになるまで夢中で吸い付いていたなのはが我に返った時、シュテルは虚ろな瞳のままなのはの頭を抱いてくれていた。体は青褪めて慌てていたけれど、心の中では、好きで好きで仕方がない気持ちに満たされていて、それは、とても甘美で充実した時間だった。

シュテルちゃんは、今頃何をしているんだろう。

もっといっぱいお話したいのに、もっと仲良くなりたいたいの、近付き過ぎて今の距離が壊れてしまうのが、怖い。

早く、また逢いたいな。

窓の外から覗き込む綺麗な月を眺めながら、なのはは心中の大半を占める強い欲求を抑え込んだ。

温泉に来て良かったと、心の底からそう思う。

川の字に並べられた布団の真ん中に陣取り、両手に花を体現しているすずかは満足げに「はふう」と吐息を漏らした。既に日も暮れ、大きな声を出さないように配慮して、囁き声で話しに花を咲かせるアリサとなのは。間に挟まれたすずかは、二人の吐息を直に感じながら、耳をさわさわと撫でられるような心地の良い撥ったさに頭を蕩けさせる。普段三人で並ぶ時は、大人しいなのはとすずかを引

張っていく為にアリサが真ん中に居るか、習い事などで一緒に居ることが多いアリサとすずかが、なのはとより多く一緒に居られるように、なのはを中央に据えることが殆どである。引っ込み思案と言ふよりは、姉のような立ち居地で二人を見守るすずかが中央に来ることは滅多のない。

寝相が悪いから、と辞退したアリサを好機と見たすずかは、なのはの同意を得ると透かさずそこに滑り込んだのであった。二人の手をそれぞれ握りながら、すずかは幸せ過ぎて緩みきった心中を悟られまいと、微笑を湛えたまま的確に相槌を打っていく。

「朝に三人で、もう一回お風呂入ろう。今日は失敗しちゃったけど、明日は二人の背中流してあげるね」

「うん、ありがとう、なのはちゃん」

「張り切るのは良いけど、なのは、またのぼせるんじゃないでしょうね？」

「こ、今度は大丈夫だよ。考えごと、しないようにするから……」

そう、全ては温泉の賜物である。

今日一日の出来事を振り返り、すずかは臉を落とし、温泉に対する感謝の念を送った。久し振りにアリサとなのはの三人揃ったの旅行とあって、表面上は普段と変わらない様子のすずかであったが、内心では大いにはしゃいでいた。三人でお風呂に浸かり、大浴場ではのぼせたなのはに浴衣を着せてあげて、先程までは直ぐに照れ隠しで怒ってしまうアリサをなのはと一緒に抱き締めていたのである。これ以上ない戦果だと自画自賛して微笑むと、すずかは唐突に上がりがりっぱなしだったテンションを急降下させた。部屋の灯りは桃子に促されたフェリンによって消され、暗闇が包む室内で、二人がすずかの変化に気が付いた様子はない。肺から溢れ出そうになる溜め息をぐつと堪え、呑み込むと、耐え難い寂しさからか、静かに零れた涙をそつと指で拭いた。

私立聖祥大学付属小学校三年生の間でも、すずか達はそれなりに有名な仲良し三人組。一緒に旅行となれば嬉しくない訳もなく、すずかも昨夜から準備に余念が無かった。準備は万端、内容にも一切不満など無い。すずかは両手に感じる温もりと、確固たる信頼関係で結ばれた二人の存在に、これ以上ない程満足感を抱いていた。その筈なのに、この状況には、すずかにとって最も大切な要因が抜け落ちている。

やっぱり、独り残してくるのではなかった。

改めて自分の本当の気持ちを知ると、すずかは気が緩んだこととで目から零れた液体を、布団に顔を押し付けてることで拭い取る。こんなに満たされると言うのに、寂しい。心の底から、何て虚勢を張っても、楔のようにすずかの心に打ち込まれた後悔は、常に自宅に残して来た少女の存在を脳裏に思い浮かべてしまう。すずかがこうして笑って過ごしている間、

シュテルがどんな表情で、どんな気持ちで一人待ち続けているのか。そのことを考えるだけで、すずかの胸は強く締め付けられる。

すずかが暴走した一件以来、シュテルの不安定さは鳴りを潜めてはいるものの、いつまた魘されて泣いてしまうとも限らないのだ。

傍に、居てあげたい

この手で、守ってあげたい。

シュテルとは逆に、鳴りを潜めるところか、すずかの気持ちは日増しに強さを増して行った。

「……………ちゃん」

我慢出来なくて、口の中で名前を呼ぶと、朝から今に至るまで声すら聞いていない事実が付き、愕然とさせられる。

旅行の間、自分のことは忘れて楽しんで来て欲しいと言われ、泣く泣く封印した携帯電話に伸ばした右手を、寸での所で左手が押さえ付けた。指切りして約束した以上、電話もメールもしてはいけな

い。シュテルと連絡を取ることは、シュテルの信頼を裏切ることになってしまう。付け加えて言えば、さすがが携帯を封印する代わりに、シュテルは一人で居る間、お家から出ないで良い子にしていると約束してくれた。寂しさに負けてしまうことだけは、絶対に避けなければならない。

つい先日のこと、病み上がりとまでは言わないけれど、初めて魔力に因る強い干渉を受けたさすがは、普段と比べて心と体が少しだけ弱っていた。ジュエルシードに取り込まれた時の記憶は、今でもずかの中に鮮明な状態で残されている。霧と蝙蝠でシュテルを追い詰め、苦しめたこと。帰って欲しくないなどと、シュテルに我が儘を言ってしまったこと。一番になりたいとか、おまけに暴走していたとは言え、面と向って大好きとか言ってしまったこと。

今思い出しても、顔から火が吹き出るくらい恥かしいのに、その時のさすがはシュテルを傷付けた罪悪感から沈んでいく気持ちを抑えられなかった。詫びて許されるようなことではない。さすががジュエルシードで好き勝手した所為で、シュテルは大いに責任を感じ、その身を省みずに戦い続けた。さすがが感じている罪悪感以上の重圧を、他ならぬさすが自身が植え付けてしまったのである。

更に追い討ちを掛けるように、なのはを助けに行った筈のシュテルの服装は乱暴されたように乱れ、首筋からはさすがも良く知る親友の甘い匂いがした。

死にたい。

震えながら姉の腕の中で待っていたさすがの気持ちは、シュテルを見た瞬間、その四文字で埋め尽くされた。さすがだけの場所が、シュテルとの大切な繋がりが、大事な親友の無垢な所業によって土足で踏み躪られたのだ。とても正気では居られずに、さすがはシュテルが困ることも考えずにぼろぼろと泣き出してしまった。

これまでとは逆に、シュテルがいつも傍に居てくれて、献身的に尽くしてくれたこともあり、数日で立ち直ることが出来たさすがではあるもの、矢張りシュテルの温もり無しに床に着くのは不安で仕

方がない。かと言って連れて来れば高町家の面々と顔を合わせるこ
とになり、アリサやなのはにも隠している秘密が明るみに出てしま
う。

今の関係が崩れてしまうことを考えれば、と自らを律し、すずか
は暗くなってしまった気持ちを切り替えてなのはとアリサの手を握
り直した。

「そう言えばさ、なのはのそっくりさんって居たじゃない？」

「……？ お姉ちゃんと二人が前に見たって言ってた子のこと？」

びつくうつ、と体が硬直するのを感じた。

アリサが何気なく切り出した話題に、「ひうっ！」と何処から出
たのか分からない声を漏らすと、すずかはけほけほと咳き込んで激
しい動揺を誤魔化した。「どうしたの？」と心配する二人に「何で
もないよ、ちよつと咽ちゃった」と応えると、ばくばくと煩く鳴り
続ける心臓を隠すように、胸にそつと手を当てる。

何故このタイミングでと勘繰りはしたけれど、天井をぼんやりと
見詰めるアリサの様子を見ても、鎌を掛けているようにはとても思
えない。シュテルと同居し始めてから、アリサ達を数度家に招く機
会はあつたけれど、月村邸に住む親戚とシュテルを結び付ける物は
何一つ残していなかった。屋敷での二人の行動はノエルが制限して
いたし、シュテルにはファリンが、高町恭也には姉がそれぞれ張り
付いて万が一の事態に備えていた。アリサが例えなのはのそっくり
さんと月村家の関係を疑っていたとしても、確証を得ることは出来
ない。絶対だ。

慌てるのはまだ早い。

そつ心の中で呟き、気持ちを落ち着かせたすずかは、恐る恐る二
人の会話の中へと歩みを進めていく。

「そんなに私と似てたの？」

「似てたつてもんじゃないわよ。顔も声もなのはそのまま、って感じで……あ、でも髪の毛は短かったわ。ね、すずか？」

「うっ……うん、一ヶ月くらい前のことだから、あんまり自信ないけど……多分」

「え……あ、そっか、それもそうよね」

アリサは納得した様子で頷くと、興味を持って尋ねるのはに「あと足が速い」と追走劇のことを語り始めた。

未だにアリサの意図が掴めないすずかには、魔導師として顔を隠したシュテルを知るなのは、余計な情報が渡らないように祈ることしか出来ない。否、意図など始めからないのかも知れない。学校以外で長らく語らう時間が取れていなかったことに不満を持ったアリサが、積極的に話題を振っているだけでも考えられる。

しかし、凡そ一ヶ月前、シュテルと出逢った直後にも同様の会話は行われている。アリサにとっても、その際に一言二言、言葉を交わした相手でしかない筈なのに、どうして今になってと思わなくもない。何か、思い至った切欠がある筈だ。

悶々と悪い方向へ想像を膨らませていたすずかは、疑心暗鬼に陥っている自分にはつとし、我に返ると音を抑えて大きく深呼吸をした。考え過ぎだと自分に言い聞かせながら、すずかはアリサとなのはの会話に耳を傾ける。冷静になって聞いていれば、談笑しながら話す二人が腹に黒い物を隠しているとは到底思えない。掻き乱されてしまった心の中で、アルバムのように脳裏に刻んだ愛くるしいシュテルを思い浮かべて癒しを取っていると、アリサの話に一区切りが付いたのか、なのはがおずおずと口を開いた。

「ふうん、私も一度会ってみたいな」

「あー、そうね、まあ、その内見掛けるんじゃない？ あ、あたしだって、何回か会ったんだし……」

ちよつと待つて。

聞き捨てならない言葉に、すずかは妄想を打ち切るとアリサの声に意識を集中した。

もしかしくなくても、今、アリサは、会ったと言ったのだろうか。誰と、自問自答すると、すずかの頭の中には拗ねてしまった猫のように、つんつと澄ました余所行きの表情をしたシュテルが浮かび上がる。何時、何処で、と喰らい付きたい気持ちを必死で抑えると、すずかは若干血走った眼を隠す為に瞼を閉じた。

畏ではない。夜目が利くすずかには、何処まで話したのかと思案しながら、躊躇い気味に話すアリサの顔が良く見えていた。姉の忍とシュテルの間でも、何かを追求されても知らぬ存ぜぬで通し、不利なら忍に連絡すると決めている。情報の漏洩があったとはすずかも思っていない。

そんなことよりも、シュテルがアリサと会っていたことを黙っていたことが気に入らない。

「なのはの家と張り合ってる喫茶店あるでしょ？　ほら、街の方の

……」

「お父さん達はあんまり気にしてないんだけど……うん」

「あそこでコーヒー飲んでた。散歩だって言ってたし、近所に住んでるんだと思う」

布団の中で、シュテルとの唯一の連絡手段である携帯電話を握り締めた。

アリサは良い。アリサにとってはシュテルは友達のそっくりさんでしかない。執念深く追跡していたなら兎も角、偶々会って二、三会話しただけの少女のことを即座に報告するのも可笑しな話だ。話題が尽き掛けていた今になってこの話題が出るのは、自然ではないにしろ、特別違和感も感じない。アリサには、少しばかり潔癖症の気がある。肉体的にはなく、精神的に、正々堂々としていなければ

ば気が済まないのが彼女の良いところであり、悪いところでもあるとすずかは考えている。

言っていることが一から十まで真実ならば問題のない話。しかし、何か隠していることがあるとすれば、心を許している友達にそれを黙っていられず、部分的にでも話そうと思ってしまうたのだろう。本来であれば気の所為だと現実から目を背けるところであるが、すずかはアリサが何かを知ってしまったっていると確信していた。

「……話した、だけ？」

「え……う、うん。急いでるみたいだったし」

やっぱり、嘘は吐いてないけど、隠していることがある。

今度は注意深く観察みたけれど、普段歯に衣着せぬアリサが、言葉を選ぶように少しだけ視線を彷徨わせていた。アリサが話したくないことがあったとして、すずかにはそれをどうこうする権利もなければ、する気もない。親しき仲とは言え、その内容にシュテルが絡んでいようと、人間である以上隠し事があって当然である。寧ろ、アリサにもそういう面があると確認できて安心した。腑に落ちないのは、シュテルがすずかに黙っていたという一点に尽きる。

シュテルは律儀な子であることは、普段の行動から見えている通りであるけれど、外でアリサに出会うことは、即ち素顔を見られている可能性が高い。月村家ではシュテルの詳細を伏せているので、大事にはなっていないけれど、これだけ大切なことを黙っていたのは違和感が残る。一人で出掛けた時は、何処で何をして来たとすずかに話してくれるシュテルが、隠し事。

それに、シュテルと暮らし始めてから今日に至るまでの間、一人で外出した日はあまり多くない。最後に喫茶店の話を聞いたのは、街で大樹の事件が起こった日である。一緒に温泉に行ったので、良く覚えていた。

あの頃は、すずかが魔法に関わらないように練習している様子を

見せてくれなかったり、なのはを心配して見守るあまり、お家で待つて居てくれなかったりでフラストレーションが溜まって、色々とやってしまった。暫くの間は外出を自粛して、反省の意を表していたシュテルに、すずかの怒りの感情が持続する筈もない。「良い子にしてたでしょう？　ねえ？　ねえ？」と視線で訴えるシュテルと、忍の口添えもあつて外出許可に同意したものの、アリサの様子を見ても結果は限りなく灰色だったようだ。今思えば、大樹の事件が起こることを知っていて外出を強請ったのだと考えられる。

魔法に関係する何かが、ばれてしまったのだろう。

誰にだつて、失敗することはある。シュテルとて万能でないのだから、今更すずかが何を言つても余計な重圧を掛けることになってしまう。明るみになってしまったことは、仕方がない。後は忍やすずか、ノエルとファリンが頑張つて隠蔽を続ければ済む話である。それは分かつていても、話してくれなかった事實は、すずかの心に冷たい雨を降らせていた。信用されていることも、好意故にそうしてくれていることも分かっているけれど、どうしても心の中にもやもやとしたものが残ってしまう。

「あれ……？」

朝に分かれたシュテルを思い出し、ふと、すずかは既視感を覚えた。

そう言えば、何だか昨日からやけに素直な様子で、借りてきた猫のように大人しくしていた印象がある。連絡しないように念を押して来たのも、今考えてみればシュテルにしては積極的と言うか、珍しいと言うか。今までなのはとアリサと出掛けた機会はあつたけれど、特別そういう心配をされた覚えがない。一泊してくるからかと思つたけれど、殆ど丸二日家を離れるのだから、逆に連絡を取らないと言うのはおかしい気がする。

唐突にシュテルのことを話題にあげたアリサに、不自然な行動を

取っているシユテル。

これは、もしかしたら、もしかするのも知れない。

「……アリサちゃん？」

「んー、なあにー？」

「今日、その子のこと、見掛けたりしなかった？」

薄暗がりでは分らないと思ったのか、アリサが目を見開くのはつきりと確認できた。

「そんなどこにでもないわよ」と動揺も声色に出さず応えたアリサであったが、相手がずかでは分が悪い。喋りすぎたかと後悔している様子が、ずかには手に取るように分かっていった。「そうだよね」と短く応えると、何のことかときよんとしていたなのはユーノの話題を振ってお茶を濁す。アリサもほっとした様子で話に加わると、三人で穏やかな会話を再開させる。

今はまだ、行動する時間じゃない。

本当なら、今直ぐに部屋を飛び出して行きたい。けれども、お手洗いだ何だと理由を付けたところで、アリサとなのは何かしら勘繰られることは火を見るよりも明らかだ。シユテルの為にも、もう少し時間が経つてからか、寝静まるのを待って動かなければならない。

襖越しに、三人の会話を聞いていたのだろう。隣の部屋で待機していたノエルが、ファリンをその場を任せて立ち上がった音が聞こえた。ずかか意を汲んでという気持ちもあれば、ノエル自身もシユテルの身を案じているのだろう。楚々として廊下へと出て行った従者にエールを送りながら、ずかか逸る気持ちを抑えて意識を会話へと集中させる。

微笑みを浮かべて言葉を交わすずかの携帯電話が、少しだけ、軋むような音を立てた。

絶え間なく鳴り響く携帯の着信音をBGMに、シュテルは探索魔法の操作を続けていた。

草原に腰を下ろし、レイジングハートを肩に掛けて佇む姿は涼しげで、シュテルを中心に展開された桜色に発光する幾何学模様の魔法陣も相まって、辺りは幻想的な雰囲気に包まれている。しかしその実、携帯電話のディスプレイに目を向けるシュテルの背は冷や汗に濡れ、瞳は僅かに水気を帯びていた。月村家侵入者対策に張り巡らされた最先端防犯装置は、シュテルを閉じ込める檻へと姿を変えていたが、魔法科学の生み出した異端児、レイジングハートの力で騙くらかしている。こっそりと衣服に付けられていた発信機も、予備がないことを確認して自室に置いて来た。シュテルの脱走は誰にも知られることなく、封印を見届けたら再び自室へと忍び込み、素知らぬ顔で帰って来た月村家の面々を迎え入れるだけで良かった筈なのに、どうしてこうなった。

ノエル、ノエル、ノエルと連なっていた着信履歴に、すずかの文字が追加された瞬間、大きくその身を震わせたシュテルは、目を逸らしながら着信の音量を下げると、そっと携帯を畳んでポケットに仕舞った。アリサに声を掛けたのが不味かったのか、フェイトを運ぶ姿が目立っていて目撃されたのか、或いはシュテルも知り得ない超科学の産物か。何れにせよ、今は言い訳している場合ではない。首に残る痣を撫でながら「また、増えちゃうのかな……」と羞恥と憂鬱が入り混じった表情で呟くと、虚ろな瞳を空へと向けた。

小さく光る星々と、闇夜を照らす月に隠れて、無数の桜色の流星が周辺空域を哨戒するように飛来している。円を描いて飛行しているものもあれば、木々の間を縫って警戒しているものと、星の一つ一つが独立した意志を持っているかの如く、動きは様々だ。

「……見事なもんだねえ」

「唯の下手の横好きです。煽っても、何も出ませんよ?」
「うっ、やっぱり、分かっちゃう? 使えるには使えるんだけど、
範囲が広がってき。どこら辺探してるのかなあ、と思って」

前回出会った大型犬の姿ではなく、妙齡の女性の姿で現れたアルフは、特に警戒した様子もなく歩み寄ると、シュテルの隣に腰を下ろして胡坐をかいた。

探索に行き詰っているのか、表情からは不安と疲労の色が読み取れる。フェイトが体調を崩していた間、単独で探索を行っていたであろうアルフを労うように、シュテルは「良ければ」と声を掛け、殆ど中身の減っていない緑茶のペットボトルを差し出した。突っ撥ねられるかな、と内心不安なシュテルであったが、嬉々として受け取り「出来た子だね」と頭を撫でてくるアルフに、ほっと胸を撫で下ろす。

一気に飲み干して一息吐くと、そのまま仰向けに倒れ込んでぼんやりと空を眺めているアルフ。見れば髪の毛から飛び出した犬耳はしゅんとしており、フェイトに良い報告が出来ず、それを気にして落ち込んでいる様子だった。豊満な体付きをしているのに、アルフはまるで子供のように振る舞って見せている。子供っぽいと言っようも、これで二歳なのだから大人びてると評価した方が正解なのだろう。

シュテルは端末の操作に意識を裂きながら、悩んでいるのか、きゆううと甲高い呻り声を上げているアルフに声を掛けた。

「ジュエルシードの位置なら特定済みです」

「本当かいっ!？」

「場所は教えませんが、そう遠くない距離です。もう直ぐ発動します」

「……待ってろってことね。ああ、ごめんよ、フェイト」

シュテルの言葉に勢い良く起き上がって見せたアルフは、続いた言葉によよと泣き崩れると再び倒れ込んだ。

フェイトに関しても言えることだが、考えないことと頭が悪いことは別の話である。フェイトを打ち破った目下の脅威、高町なのはとの戦闘を控える現在、魔力の温存を選択したアルフもまた優れた訓練積んでいることが理解できる。無論、苦手な探索魔法を行使して、限られた魔力を磨り減らしてでもジュエルシードを見付け、なのはとの戦闘を避けることが最善なのだろうけれど、残念そうな表情を見せるアルフの瞳には爛々と闘志の炎が燃え盛っていた。

フェイトに楽をさせたいと思う気持ちとは別に、何処かでフェイトがなのはと再戦し、勝利することを望んでいるのかも知れない。微笑ましく思い、硬い表情を緩めたシュテルを好意的と受け取ったのか、アルフは寝転んだままシュテルの袖を引くと、空を指差して尋ねた。

「シュテル、って言ったっけ。フェイトから聞いたけど、あんた、ジュエルシードには興味ないんだよね？」

「ええ、そう考えて貰って結構です。大災害や次元振が起これば、話はまた違ってくるんですけど……」

「で、この辺りにあるジュエルシードも見付けてあるんだろ？」

「ええ、その通りです」

「あんなにサーチャー飛ばして、何探してんだい？」

不測の事態に備えています。

などと言える訳もなく、シュテルは「訓練です」と短く答えて沈黙した。二度同じ過ちは繰り返せない。他にもジュエルシードが紛れ込んでいるかも知れないし、一般人が偶然発動に巻き込まれないとも限らない。矢鱈と広範囲を探索する端末に疑問を持ちつつも、座り込んだまま動かないシュテルの様子に考えることをやめたのか、アルフは「ふうん」と含みのある相槌を打って袖を離した。

前の世界でもそうだったけれど、分からない時はそうしておくと誰かに教わったのか、アルフがあやつて妖艶振る時は、後々まで尾を引かないことをシュテルは知っている。ジュエルシードの発動を待つ間、それ以上の会話こそなかったが、アルフは何やら落ち着きなくシュテルの方を横目で眺めていた。

「一応、礼を言っておくよ」

「……？」

「あんたが居ること伝えたら、フェイトが言っておいてっさ。あたしからもだけど、倒れたフェイトの面倒見てくれて、ありがとね。あの子、来た時よりも元気になってたよ」

「……それは……その……良かったです」

偶に見掛けたら、仲良くしてやって欲しい。

朗らかにそう告げたアルフの言葉を、シュテルは複雑な気持ちで受け止めていた。

普段の大型犬形体や言動から直情的に噛み付いて回る印象を受けるアルフであるが、フェイトが好意を抱いている人物に対しては警戒を解くのが早く、甘く接する傾向がある。争奪戦に参加せず、ジュエルシードを渡してしまったことで敵のカテゴリーから外されたのか、笑顔を浮かべながら少し乱暴に頭を撫で回してくるアルフに、シュテルは困惑していた。

フェイトの性格が若干大人しいことを考えれば、シュテルの知るフェイトのように、なのはへと好意を抱くことはないのかも知れない。けれど、例え仲良くなる方法が違ったとしても、どちらも素直で良い子なんだから仲良くなれない筈がない。その、筈である。

裏目裏目にことが進んでいる気がして不安になっていると、『大丈夫です。何とでもなります』とのレイジングハートからの念話が、更にシュテルの不安を煽った。

「……はあ、それしても、ジュエルシードねえ」

「どうか、しましたか？」

「んー？ ああ、まだ見たことないんだけどさ。願いを叶える石、
って言われてるんだよね？」

「……まあ、大抵暴走しますけど、そうですね」

「そんな眉唾物の石、何に使うんだろうって思ってた。プレシアの
ことも知ってるらしいから言うけど、あたしだって、別にそんな物
に興味ないよ。フェイトが無事ならそれで良いのにさ」

愚痴るように呟いたアルフの言葉に、シュテルが思案していると、
前方の闇夜を青白い光が引き裂いていった。

小川に引つかかっていたジュエルシードが、発動したのだろう。
待ってましたとばかりに立ち上がったアルフに合わせて立ち上がった
シュテルであったが、特別何もすることがないことに気が付くと、
アルフを追う足を止め、探索魔法の維持に努めた。二人と二匹が怪
我をしないように見守ることが、今の自分の役割。そう言い聞かせ
ると、雷光の如き速度で飛来するフェイトと、遅れて旅館を飛び出
したなのはを見張るように端末を操作していく。

片手間で事足りる作業の間、シュテルはアルフの言葉を思い出し
て思案を続けていた。

「……案外、眉唾物でもないのかも知れませんかよ」

アルフが言う眉唾物の石によって、時間どころか世界まで超えて
飛ばされた自分が居る以上、俗な願いの一つや二つ、叶えるくらい
訳ないのではないだろうか。

時の庭園でプレシアが言っていたことが、シュテルには狂人の妄
言としか思えなかった。今にして思えば、シュテルよりも遙かに高
度な知識と発想を持った大魔導師プレシアのこと、数さえ揃ってい
れば、失われた都アルハザードに辿り着くことも夢ではなかったの

かも知れない

背筋に冷たいものを感じながら、シュテルは数分後にぶつかり合うのはとフエイトに意識を向けるのであった。

十六話（後書き）

強いて言うならさずか回、若しくは戦闘準備回です。ひょっとしたらアルフ回かも知れませんが。

シュテルさんの首が真綿で絞められているような気がしますが、きつと気の所為です。雁字搦めにしようとなんてしてません。地の分をしつかり読まれると誰とは言いませんが二人ほど病んでることがばれるので、スルーしつつ読んでください。

誤字脱字はいつも通りですが、寛大な心で修正されるのをお待ち頂けたら幸いです。皆様の感想を心よりお待ちしております。

次回三連休にちょっと遠出する予定が入ってしまい、もしかしたら更新出来ないかも知れませんが。その際は、どうか人間性を捧げたりなどしてお待ち頂けると幸いです。私はもう心を折られました。

十七話

また、やってしまった。

ジュエルシードの反応を感じて飛び起きた高町なのはは、黒い外套を羽織った二人の魔導師を前に強い後悔の念を覚えていた。

旅館から程近く、散策コースになっているのか、木造の橋が架けられている池の上で、先日戦った金髪の少女が手の中のジュエルシードを無感動な表情で見詰めている。隣では赤毛の妙齢の女性が橋の上に足を組んで座っており、満足げに金髪の少女に視線を送ると、人体には存在する筈のない獣の尾と耳を揺らしていた。ジュエルシードが既に封印されたことを理解すると、駆け寄る足から力が抜け、なのはは小走り気味にまで落とした速度でゆっくりと歩みを進める。

寝過ごしたのは、これで二度目。今日はお休みと割り切って友人達とはしゃぎ、それでも念の為にと早めに就寝したというのに、タイミングが噛み合わず、こうして後手に回ってしまった。何時何処で発動するのか分からないジュエルシードに対して万全の備えなど有り得ないと分かってはいるけれども、時既に遅しとばかりに呆然と立ち尽くすしかない現状は、大樹の事件の失敗をなのはの脳裏に浮かび上がらせる。レイジングハートを握る手に力を込め、なのは改めて少女へと駆け寄っていく。

悔しさの余り、逆恨み以外の何物でもない恨みがましい視線を少女に送るも、少女はなのはの存在に気が付いていないのか、感慨深そうに小さく口を開いた。

「二つ目……」

そう呟いた少女の瞳には、矢張り感情の色は無く、心此処に在らずと言った様子で魔力の残滓によって発光するジュエルシードを握り込んだ。

少女と戦ったあの日から今日までの間、なのははジュエルシードの発動は感じ取れなかった。二つ目の言葉をそのまま受け取るのであれば、少女の所持するジュエルシードは既に二つ。発動前のジュエルシードを手に入れたにせよ、何にせよ、少女がなのはよりも上手く立ち回って手に入れたことは間違いよりの無い事実である。

一度降した相手とは言え、慢心できる程の余裕も、驕りも、高町なのはには存在しない。

必要以上に気を張ることも、必要以上に気を抜くこともなく、自然体に僅かな緊張感を足した体の手応えを確かめ、なのはは音を立てて橋の入り口を踏みつけた。少女は兎も角、橋の手摺りに腰掛けた女性性は、始めからなのはの存在に気が付いていたのだろう。

態とらしいしたり顔を浮かべると、なのはを視界に収め、表情を強張らせた少女を庇うように、なのはの正面へと立ち塞がった。

「あゝらあらあら、随分とお早い登場じゃないか」

「あなたも、魔導師……なの？」

「あつはつはつは！ あたしはあんたと会った覚えがあるんだけど、あんたは覚えてない訳だ。やっぱり、あんま賢そうでも強そうでもないね」

挑発的な女性の言葉に確かな敵意を感じ、警戒を強めつつも、なのはは改めて頭の天辺から爪先までを確認する。

橙に近い色の赤毛に、豊満な体付きを主張するように露出の多い防護服。腰まで届く長さの髪の毛からはイヌ科の動物を彷彿とさせる耳が飛び出し、額には赤い宝石が張り付いている女性の姿。確かに言われて見れば、全体としては別でも、特徴の一つ一つは何処かで見たとような、見ていないような。

眉を八の字に歪めて頭を捻るなのはに、段々と苛立ち始めた女性性は、乱暴に後頭部をがしがしと搔くと、呆れたように溜め息を吐いた。「察しが悪いに越したことはない、か」と誰にでもなく呟きた

女性は、此方の出方を窺うような視線を向けたまま口を嚙む。あからさまになのはを馬鹿にした女性の態度に、全くむつとしないと言えは嘘になるけれども、それ以上にこの状況をどう解決すればいいのかをなのは判断し兼ねていた。

退くのか、戦うのか。

既にジュエルシードが封印された今、己の使命を横から搔つ攫われたなのはに出来ることは何もない。先日こそ、ジュエルシードを封印する以外の目的があったから戦いはしたが、暴走体が存在するのなら兎も角、今から戦闘をすれば、少女が封印したジュエルシードを奪う為に戦うことになる。

暴走体をどちらが先に封印するかを競い合い、その上で戦うのなら止むを得ないと思うし、負ける気もない。けれども、目の前の少女からジュエルシードを取り上げる為に、自ら攻撃を仕掛けることは、果たしてなのはの望みに当て嵌まるのだろうか。街を、人を、家族を、友を、守ること為なら、戦える。その覚悟は、出来ている。ならば、何故、杖を向けないのか。

この場に向う途中、夜空に舞い散る桜の花弁をなのはは目にしていた。常よりも確かに、強く感じるあの娘の、シュテルの存在が、なのはの手を躊躇わせる。見守ってくれていることは、素直に嬉しい。布団を離れ、急に夜風に当たって冷えきった体が熱を持ち始め、負けられないという気持ちが湧いてくる。そう、それだけだったなら、戦うにしろ、退くにしろ、なのはは足踏みなどしていない。

なのはに撃墜された少女を見て、隠そつと必死になっていたものの、シュテルは間違いなく悲しんでいた。

二人がどんな関係にせよ、妹か何かを慈しむように回復魔法で治療を施していたシュテルの様子から、少女がシュテルにとって大切な人であることは十分過ぎるほど理解できた。なのはは悪くない、気にしなくて良いと言っていたシュテルの言葉を真に受けて、我を通したところで、それはなのはの理想の魔法少女とは程遠い。

考える必要がある。けれど、何を、どうすればいいのかが分から

ない。説得できれば一番良いとは思えども、唯でさえ敵対しているのに、なのはの登場によって警戒色を顕にしている少女に掛ける言葉が見付からない。シュテルなら、どうする。そう考えたなのはの頭に、最後にシュテルと会った際の記憶が蘇った。

しゅてるちゃん、かわいいよ、しゅてるちゃん……っ！

「ばか……シュテルちゃんにあんなことして……さいてい……」

「……あんなこと？」

「あ、いいからいいから。あなたにはまだ早い」

なのはの口から零れた声に耳聴く反応を示した少女を、敵意剥き出しだった筈の女性が何故か諫め、再びその背中へと隠した。

理解があります、と言わんばかりの生温かい視線を感じながら、なのはは落ち込みと羞恥と愉悦が入り乱れて混沌とした表情を軽く叩いて引き締める。シュテルに覆い被さっていた時の、忌まわしくも甘美な記憶を振り返って、思い出した。色々な意味で手や口が離せなくて気に留めていなかったけれど、あの時に少女を回収しに大きな犬が現れ、シュテルと何やら魔法で会話を行っていたことを。

体中を満たす充足感に蕩けきったこともあり、邪魔された苛立ちを隠すことなく念話を飛ばしてしまっただけれど、あの犬と女性の特徴は良く似ているような気がする。もしかして、と口を開きかけたなのはよりも先に、肩で事態を静観していたユーノが声を上げた。

「それを、ジュエルシードをどうする気だ！ それは、危険な物なんだ！」

「さあねえ？ 答える理由が見当たらないよ。ま、そんなことよりさ。この間はうちの子をあれしてくれちゃったみたいで、あたしも少し気が立ってんだ。そっちがその気なら、あたしもがぶつといかせて貰うわよ」

瞬間、女性の頭髮が伸び、全身を包み込んだ。

一瞬の発光に瞼を閉じ、開いた時には、女性の姿は無く、一匹の大型犬が犬歯を剥いて威嚇していた。爪を地面に突き立てている姿は、なのはの記憶に残っている犬と一致する。疑問符を浮かべるなのはの頭の隣で、ユーノが確信を得たように小さく頷いて、言葉を続けた。

「やっぱり……あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔？」

「そうさ。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てを賭けて守ってあげるんだ」

「先に帰って、すぐに追い付くから」と少女に囁く使い魔の女性からは、子を守る母親のような印象を受けた。

使い魔、否、あの人も、大切な人を守る為に戦っている。少女を撃墜したなのはが居るこのから、何もしいまま引き下がることは出来ないだろう。表情も分からなくなった筈の女性の雰囲気から、そのことを感じ取ったなのはは、杖を体に引き寄せて守りの体勢を取る。なのはを足止めし、少女を逃がすことが目的だとして、なのははそれを許容できない。

ユーノの言うようにジュエルシールドは危険な物で、なのははシユテルほど少女のことを信用していない。事情の一つや二つでも聞けない限り、見過ごす訳にはいかない。「無茶しないでね」と告げた少女に力強く頷いて見せた女性は、なのはの想像通りに大きく跳躍し、その鋭い爪でなのはを切り裂こうと飛び掛って来る。

防御魔法を展開しようとした次の瞬間、なのはの前に肩に居た筈のユーノが降り立った。危ないよと口を開くよりも早く、ユーノを中心に展開された魔法陣が、女性の突撃を受け止め、火花を散らす。

「なのは、あの子をお願い！ こいつは、僕が何とかする！」

「させるとでも思ってたんの！」
「させて、見せるさ！」

ユーノの叫びと共に、続け様に展開された魔法陣が円柱状に二人の体を包み込む。

凄い、ユーノ君、戦ってる。感嘆の声を漏らして呆然としていたのはを他所に、謎の緑色の発光現象は力を増していく。「僕は、戦闘向きの資質がないから……」としょんぼりしながら、なのは用の射撃魔法と砲撃魔法を調整してくれていたユーノの言葉とは裏腹に、目の前で行われる防御魔法による罅迫り合いは、なのはの展開するものと比べるまでもなく、ずっと高度ものであった。

防御突破の構築が施されているのか、優位を確信して爪を食い込ませた女性だったが、突如何かに気が付いたようにはっとした声を上げ、ユーノから離れようと足に力を込める。

「移動魔法っ!? まず……っ！」

極光が辺りを一帯を照らし、止んだ頃には、二人の姿は消えていた。

ユーノが使える魔法について聞いていたなのはは、ユーノが転移の魔法を使ったのだらうと焦る気持ちを落ち着け、残された少女の方へと一歩歩み寄った。あの子をお願い、と頼まれたものの、言うは易し行うは難しとは正にこのことである。近付いたなのはを警戒して、逆方向へと一歩後退った少女を見て、なのはは肩を落としたながら距離を詰めていく。

一歩、また一歩と後退を続けていた少女だったが、五歩ほど下がった所で何かを思い出したように足を止めた。「わたしは……にも……たりしない」と自己暗示のように、小さく呟いた少女の様子を目にしたなのはも、首を傾げながら近づく足を止める。一秒にも満たない時間の間、脅えを含んだ瞳を一度閉じ、片手で額を押さえる

と、再び開いた瞳からは動揺が薄まり、僅かに闘志の色が宿っていた。

何故か、ゲームで遊んでいる際に、ボス部屋を前にしたアリサの姿と少女の姿が重なって見えた。少女の雷電を帯びた攻撃にも容赦がなく、なのはだつて神社で襲われた時ほどではないにしろ、怖い思いをしている。例えなのはが紙一重で勝利していなければ、雷の大鎌によって少女と同じように撃墜されていたのだ。シュテルのところまで背負って運ばれ、治療も受けたことを知らない筈もないだろうに、少女のなのはを見詰める視線は、まるで己のトラウマにでも打ち勝とうとしているかのように一触即発の険呑さを保っていた。確かに、他に切り札が無いとは言え、無防備な体勢に砲撃を撃ち込んだのは悪かったかも知れない。でも、そこまで、警戒しなくても、いいよね。

内から込み上げる不満を、寛容な気持ちでぐつと押さえ込んだのはは、少女の警戒心を解くべく顔に笑顔を貼り付ける。びくつと体を震わせて、半歩後ろに下がった少女にほんの少しだけ苛立ちを覚えながら、出来得る限りの友好的な態度を取ったのはは、少女へと言葉を発した。

「この間は、あの、ごめんなさい！ えっと……お話、聞かせてくれたり、しない？」
「……っ！」

無言のまま少女が杖を横に一閃すると、黄色いコア部分が変形し、帯電した魔力刃が展開された。

駄目だろうな、と何処かで感じていたのはは、貼り付けていた笑顔をそのまま苦笑に変えると、既に詰まってしまった距離をどうにかするべく頭を働かせる。射撃魔法や砲撃魔法であれば、適正に利があるのか、前回の先頭では互角とは行かないまでもある程度喰らい付いて行けた。しかし、近接戦はどうしても経験値の差が浮き

彫りになってしまふ。じりじりと後退していたなのはだったが、ふと、少女が大鎌を構えたまま仕掛けてくる訳でもなく微動だにしないことに気が付いた。

萎縮しているのだろうかと見て見れば、独特の赤い瞳には未だ闘志の炎が宿っている。疑問符を浮かべたなのはの心中を読んだように、少女は大きく息を吸い込むと、なのはに向かい口を開いた。

「フェイト…… フェイト・テストロッサ」

「それが、あなたの名前？」

「ジュエルシードを賭けて、勝負して。今度は…… 負けない！」

なのはの問い掛けに小さく頷いた少女、フェイトの言葉を聞いたなのはは、杖を構え直してそれに応じた。

敢えて名乗ったフェイトにも、きつと引けない理由がある。なのはが大事に思っているものと同じくらい、それ以上に大切な何かがあるのなら、最早、言葉では止まらないし、止められない。話さなければ、何も伝わらないし、理解することも出来ないけれど、何事にも切欠が必要なんだと思う。話す機会が訪れるまでの間、なのはに出来ることはフェイトの前に立ち塞がり続けることだけだ。

それに、フェイトと戦うことでまた一步前に進むことが出来る。そんな気がする。

不思議な昂揚感を感じながら、なのはは一瞬で背後に回り込んだフェイトの横薙ぎを紙一重で回避すると、足元に展開したフィンで夜空へと飛び立つ。せめて、名乗り返す時間くらい与えて欲しかったと、締まらない思考を振り払い、なのはは初撃から全力で決めるべく照準を定めていった。

雨の如く降り注ぐ金色の雷槍と、それを極大剣の如く薙ぎ払った

桜色の光線を背景に、ユーノとアルフは木々の間を走り抜けていく。防御魔法と転移魔法の行使によって、折角回復した魔力は再び底を突いてしまったけれど、遺跡発掘調査で鍛えたフットワークがユーノには残っている。主人である魔導師の実力から、アルフが高度な使い魔であることを読み取り、二人掛りで来られては分が悪いと考えたユーノの機転によって引き離すことには成功した。

あとは、一秒でも長く逃げ回って時間を稼ぐだけだ。

主人と共になのはを倒すことよりも、厄介な魔法を覚えているユーノの排除を優先してくれたのは、幸運以外の何物でもない。飛行する余力もないユーノではあるものの、狭い木々の間を通ったり、藪に身を紛らわせるなど、逃げる手段は幾らでもある。最大の脅威であるアルフの主人は、なのはに受け持って貰っている。前回の戦いで勝利を収めたなのはが万全の力で戦う為に、アルフを何としても引き付けなければならぬ。

小さな体躯を翻して疾走するユーノは、久し振りに感じる手応えと、使命感に燃えていた。

「は、放してっ!」

「ふあいふあい、ひよっほまっへへね」

「わっ……う……い、いきなり、しゃっ、しゃべらないでよ!？」

確かにユーノはアルフの追撃を躲し続けていた、そう、数十秒程前までは。

フェレット並みの体長しかないユーノと、狼並みの大きさを誇るアルフでは、魔法の有無以前に覆すことが出来ない高い壁が存在していた。一步の大きさが違うと言うのに、時折飛行魔法を織り交ぜて追走して来るアルフ。況してや、元々二足が素の状態であるユーノが、四足で生活していたアルフに適う訳も無く、小石を避けて僅かに態勢を崩したユーノは、獐猛な狼の口の中へと捕らえられてしまった。

あ、これは食べられて終わる。

生温かい口内に囚われた瞬間、そう確信したユーノは恐怖するよりも先に脱力してしまった。心残りは沢山あるけれど、天才という言葉が生温い程の急成長を見せるのはが無事ならばと、後悔もそこそこに暗がりの中で潔く祈りを済ませ、最後の抵抗に出ようとした時、「ぺっ」と言う声と共にユーノは吐き出され、地面に転がされていた。

事態の急激な変化に戸惑い、逃げるのが遅れたユーノは、アルフが運び易いように啞え直されて現在に至る。お腹の辺りを見た目通り鋭い牙でもふもふされながら、「何が目的だ!」とか「ジュエルシードについて、何を知っている!」とか聞いてみたけれど、何か喋られる度に長い舌がお腹に当たり、舐め上げられるので、何処に向っているのか知らないが出来るだけ大人しくしていることにした。幸い、なのはが戦闘を行っている方向とは逆に向っている。ご機嫌な様子で尻尾を振るアルフが主人の加勢に向わないのなら、ある意味足めしていることにはなるのだろうけど、どうにも釈然としない。下手に高圧的な態度をとり、がぶつとされても困るので、ユーノは語調を和らげると、アルフへ疑問を投げ掛けた。

「ぼ、僕をどうするつもり?」

「ふえふひ、ほうほ……」

「あつ、わ、分かんないから! ねっ、念話でっ、念話で話して……」

『別に、どうもしないよ。邪魔に入られたくないのはお互い様。追いかけてこするよりか、使い魔同士、仲良く主人の応援でもしてる方がずっと有意義ってもんさ』

「僕は使い魔じゃない!」

ユーノの否定の声も届いていないのか、雷光が飛び交う空を一瞥したアルフは鼻歌を歌いながら歩みを進めていく。

力加減をしている所為で顎が疲れるのか、時折拘束する力が弱まる度に脱出を試みるも、着地と同時に拾い上げられ徒勞に終わる。聞き分けのない子供を叱るように軽くがじがじされた後、文字通り小動物を齧るが如くお腹を舌先でうりうりと弄ばれること数回。抵抗する気力を完全に無くしたユーノは、ぐったりと下顎にぶら下がったまま運搬されていた。

機嫌が悪かったらがぶつとしていたと言うアルフの言葉に一層身を強張らせはしたものの、木々に包まれた深夜の森の中では、遙か後方から聞こえる劈き音とアルフを除けば、周囲に人の気配も無い。折角機嫌が良いと言っているのだからと考えたユーノは、無駄な抵抗を訴える正義感を一時の間心に仕舞い、砕けた、元い、脱力した口調でアルフへと話し掛けた。

「……応援って言ったのに、どんどん離れて行ってるじゃないか」「そりゃ、近い方が良いんだろうけど。あんたんとこの白い子見てたら、その気も失せちゃうって。あれで素人なんだろう？」

「君の主人の方こそ、あれ、ちゃんと狙って撃ってるの？」

「あつはつは！ あの子も随分張り切ってるようだし、案外白い子以外見えてないのかも知れないね。あ、終わったら逃げるから、あたしに後片付けは期待しないでくれよ」

「……最初から、期待してない。ねえ、そろそろ何処に行くのか教えてくれないかな？」

なのはの思わぬ機動力によって、明後日の方向へと飛んで行った雷槍へと鼻先を向けると、アルフは『特等席さ』と答えて大きく跳躍した。

飛行魔法で移動を始めたアルフに啞えられながら空を良く見れば、放電しながら消滅した槍の辺りに、薄らと桜色に光る端末が浮遊している。数撃ち中ると言わんばかりに、黒衣の少女の隙を見付けては砲撃魔法で夜空を穴だらけにしているのはに、エリアサーチを

併用している余裕があるとは思えない。

ユーノが知る限り、なのは以外に桜色の魔力光を持つ人物は、この地球に一人だけしか心当たりがない。とすれば、アルフに警告するかの如く木々の間を飛び交っている端末は、恐らくは彼女の監視網なのだろう。言われて見なければ気が付かない程に隠蔽された端末に、高度な訓練を受けた魔導師であることは想像に難くないが、如何せん黒衣の少女とアルフ同様、素性が知れなさ過ぎる。

アルフとシュテルの関係は分からないけれど、敵か味方が謎の覆面魔導師のスタンスを崩さないシュテルの様子をなのはから聞く限り、アルフにとっても敵でも味方でもないのだろう。

なのはの窮地を救ったり、ジユエルシードから街を守っていることから、悪い人ではないとは思うけれど、依然変わりなくシュテルが保有し続けているもう一つの21番と、なのはが受け取ることを拒否した14番がユーノには気掛かりだった。

アルフがそうであったように、事情を聞いた所で無駄だとは思いますが、けれども、何もしないでいても、きつと何も変わらない。林を抜け、意気込んだユーノ視界に飛び込んだのは、僅かに拓けた草原の上で、自らの腕を枕にうつ伏せ、微動だにしないシュテルの姿であった。

「シュューテールー、少しだけ端末の映像見せてー……って、何やってんだい？」

「ほつといてください。あの子達と比べたら、どうせ、私なんか……」

「あー、それで落ち込んでる訳か。ん？ でもさ、あんただってつかい魔力持ってたんだから、あれくらい出来るんだらう？」

「……今出来ても、意味が無いんです」

「難儀な子だね。ほら、早く映してよ」と言いながら、素早く人間形体に戻ったアルフはシュテルを抱き起こすと、そのまま後ろか

らシュテルの体を包み込むように抱き竦めた。「あんたも、こつち来なつて」と手招きするアルフに、はつとして、ユーノもその隣へと歩み寄る。始めから主人を立てる為に、態と挑発して絡んで来たのではないかと思えるほど、あつけらかんとした態度を見せるアルフに、ユーノは警戒心を薄れさせ始めていた。

虚ろな瞳のまま、シュテルが布に巻かれたデバイスを二、三度人差し指でノックすると、『今日は嫌に獣臭いですね』との悪意に満ち溢れた電子音声と共に大画面の空間モニターが数枚展開された。何れもなのはと黒衣の少女の戦いを映したもので、切り替わる視点の数から考えても、相当数の端末が二人の周囲に配置されていると考えられる。

シュテルのデバイスの嫌味も聞こえていない様子で、ばつさばつさと尻尾を振りながら、感謝の気持ちを抱擁と言う形で表現するアルフと、良い子良い子と褒めちぎられて、満更でもない様子で瞳に色を取り戻し始めたシュテル。傍目には、星でも見に来た仲の良い姉妹連れとペットに映るのだろう。既に観戦モードに入っているアルフは、腕の中の少女を抱き枕代わりに寛ぎながら、モニターに食い入るような視線を送っている。

単にアルフが馴れ馴れしいのか、馬が合うのか、シュテルを親しげに撫で回しているアルフは、シュテルに対して一定の信頼を置いているように思える。手に汗握る攻防戦に、三人揃ってモニターに見入っていると、突如中央の画面が桜色の極光に染まり、音も無く消失した。

「避け損ないましたか」と誰にでもなく呟いたシュテルが、人差し指の先に小さな魔法陣を構築して代わりの端末を飛ばす。端末群は天と地の二手に分かれた後、それぞれが投網のように拡散しながら戦闘空域を目指して飛行して行った。

此処に来るまでに警戒していた端末を見ても分かるように、この子も大概常識外れな誘導制御能力を有しているようだ。

「ああもう、堅い上に攻撃は全部一撃必殺狙い、生粋の砲撃魔導師
って感じ……そう言えば、あんたって戦えるのかい？ 杖はインテ
リジェントデバイスだし、魔力量だってかなり多い方なのに、向こ
うの白い子ほど出鱈目そうには見えないね」

「魔力相応には戦えます。と言いたいところですが、あの子と比べ
られると、正直自信がありません。まあ、自分の身を守るくらいな
ら、多分、出来ますよ」

「……あなたは、もう少し自信を持っても良いと思う」

ユーノの言葉にすつと目を細めたシュテルは、モニターから目を
逸らすと、遙か遠くでぶつかり合う閃光に視線を向けた。

「虚勢を張り続けるのは、疲れました」と応えたシュテルは、そ
れつきり、アルフに体を預けて押し黙ってしまふ。外見こそ同世代
のシュテルが時折纏う冷たい雰囲気、ユーノも続けて言葉を発す
ることが出来ずに口を紡ぐんだ。唯一、のほほんとモニターの様子
を観戦していたアルフだけが、「聞かなくても、あんたは色々と苦
労してそうだ」と笑いながら、若干不服そうに眉を顰めているシュ
テルをかいぐりしていた。

そこじゃ見辛いだろと体を鷲掴みにされ、アルフの頭頂部に腰を
据えたユーノは、手馴れた仕草で腕の中の少女をあやす姿を見て溜
め息を零す。案外、この人はただ面倒見が良いだけで、主人が絡ま
なければ、敵や味方の関係など差して興味が無いのかも知れない。
目的や事情など、問い詰めたことは幾らでもあるけれど、こここ
ろと表情を変えて己の主人を応援するアルフを見ていると、何故か
敵意の矛先を向けることが出来なかった。

今は、黙って事の成り行きを見守ろう。

揺れ動く足場に体を伏せてしがみ付くと、ユーノはアルフ同様に
モニターへと視線を定めたのだった。

高速機動で背後に回り込んだフェイトが鎌を振るうと、白い魔導師は拙い動作ながらも杖を振り翳し、斬撃を受け止めた。

動体視力がどれだけ優れていると、身体能力ではフェイトの方に分がある。付け焼刃の圧縮魔力で幾ら杖を強化した所で、体捌きも覚束無ければ、柄を握る手元も滅茶苦茶だ。地力の差で押し切れると踏んだフェイトは、畳み掛けるように二撃、三撃と打ち込むも寸での所で防がれて決定打を与えることが出来ない。速攻で決めることが理想的とは言え、二度目に相対しているとあつてフェイトの攻撃に対しても動揺が少ない少女と、例の炸裂する防御魔法を警戒して攻める際に腰が引けてしまうフェイトでは、どちらに追い風が吹いているかは明白だった。

未だ精神的な落ち込みから抜け切れていない自分自身を鼓舞しながら、フェイトの動きに順応し始めた少女を全力のスイングで弾き飛ばした。有利と思つての近接戦闘が、ゆっくりと己の首を絞めようとしている。ならばと、振り返り距離を取ろうとしたフェイトの眼前を、桜色の射撃魔法が横切つて行つた。飛ばされながら放つただろうそれは、直撃こそせず済んだが、まるで小船の上にいる獲物狙う鮫のように、大きく旋回しながらフェイトの動きを窺つていた。

これまでの戦闘から、少女の誘導制御が甘く、狙いが覚束無いことを知つていたフェイトは高い機動力で突破を試みるも、再度横合いからの衝撃に阻まれて足を止めてしまう。飛ばされた腹いせか、先端に淡い光を纏つた杖を振り被り、フェイトをこの場に縫い止めようとする少女と鏝迫り合いながら、高鳴る鼓動を落ち着かせるように努めた。

「わたしの名前は、高町なのは」

「……？」

「わたしはこの街を守る為に、あなたと戦つてる。だから、負けら

れないのはわたしも同じ」

あなたは、何の為に戦っているの。

声に出さずとも、少女の、高町なのはの同情染みた瞳が、その言葉をフェイトに突き付けて来る。母さんの笑顔の為だ、と叫び返してやりたい気持ちをぐっと堪え、苦悶に歪んだ表情でそれを呑み込むとフェイトは苛立つ感情のままに、連続攻撃を叩き込んでいく。

防御を展開すれば足が止まり、追い付けなくなるのが分かっているのだろう。敢えて防御魔法を捨て、強固な防護服を頼りにフェイトへと肉薄する少女の眼には、恐怖がない。

誰の所為で、こんな辛い想いをしなければならぬのか。

元々は他人の持ち物であるジュエルシードを、母の頼みとは言え奪い去ろうとしている。客観的に見ても、フェイト・テスタロッサは悪であり、今なのはへと向けられている怒りは、自分勝手な感情に他ならない。確かに、目の前の少女の方が、人として正しい。街を守ると言ったなのはの言葉は何処までも真っ直ぐで、素人魔導師の癖に、何かの加護でも受けているかのようにフェイトと接戦を繰り広げる姿は、きつと誰の目にも輝いて見えることだろう。

愛する者の為に尽くすのが、何故いけないのだ。母さんの幸せを願う気持ちは、目の前の少女なんかは、負けてなどいない。例えば、管理局に追われようとも、この身が砕けようとも、成し遂げなければならぬ目的がある。

敵は、立ち止まっている時間を与えてはくれない。

「バルディッシュュッ！」

『Scythe Slash・Break Shift』

「っ!? レイジングハートッ！」

『Round Shield』

不意を突いたと確信しても、しつこく喰らい付いてくる少女。

フェイトとて、アルフに探索を代わって貰っていた日がな一日、唯ぼんやりと無為に過ごした訳ではない。再戦を迎える当たって、それなりに対策を講じている。バルディツシユの先端でより長大さを増した魔力刃は、バリア貫通能力を高めた構築に切り替えられ、最早自爆する暇すら与えない。凌ぎ切れないと踏んで展開された、文字通り円形の盾に、フェイトの大鎌は深々と突き刺さり、少女の防御を引き千切った。

驚愕に目を見開いたのも束の間、少女は追撃を掛けるフェイトに向けて乱雑な射撃を放つと、漸く距離を取る為に後退してくれた。強化したとは言え、良いことばかりではない。急拵えの魔法は燃費が悪いことは元より、バルディツシユにも高い負荷を掛けることになる。何を仕出かすか分からない少女が余力を残していると言うのに、敢えて距離を詰めて戦う必要は無い。

距離を詰めるのは、止めを刺すその時だけでいい。

「もう、私の邪魔はしないで……」

『Photon Lancer・Multishot』

立て続けに展開された発射体が、フェイトの周囲で金色に発光すると同時に、なのはへ向けて、魔力弾を放った。

質より量の射撃魔法では、防がれることは目に見えている。フェイトもその行動を読んだ上で魔力弾を撃ち込んだ。防げば足は止まる。発射体から時間差で放たれる魔法を防いでいる間に、自分は砲撃魔法の用意をし、少女よりも早く中ければ良い。万が一耐え切ったとしても、その時には拘束魔法からの近接攻撃を受け止めるスタミナは残っていないだろう。いけるかも知れないと、心の中でガッツポーズを取ったフェイトは、射撃魔法が着弾するであろう少女へと目を向ける。

体勢を崩していた筈の、否、今尚体勢を崩しながら飛行していた少女の視線が、撃墜されたあの時のように、フェイトの視線と重な

った。

見れば、振り向き様に身を振りながらも、少女の杖の先端は此方を向いている。

四つの円環魔法陣が、大した間も置かずに充填を終え、魔力弾ごとフェイトを焼き払わんとして桜色の火を噴いた。

『Blitz Action』

「ひっ……あ、ありがとう、バルディッシュ。ど、どうしよう、あの子、でたらめだ」

高速機動で回避したから良いものを、一步間違えれば自分の射撃魔法に視界を塞がれて直撃を受けるところだった。大体、間に合うかどうかも分からない砲撃魔法で射撃魔法を迎撃するなど、魔力量が高いだけの常人に出来ることではない。

「外しちゃった」と差して気にした様子も無く呟いた少女に戦慄しながら、フェイトは横を通り過ぎて天へと伸びる光の柱に沿って距離を詰め始めた。フォトランサーは直射型の魔法とは言え、発射体同士の距離を離していた為、少女の一撃によって全てが消し飛ばずに済んだ。自ずと少女へ吸い寄せられる魔力弾を全て掻き消すまで、この一撃は中断されない。

前回の二の舞にならないように、魔力刃も強化済み。高速移動によって視界から消え、砲撃魔法の真下を潜って移動するフェイトに少女は未だ気が付いていない。計画通りとは行かなかつたけれど、これならばと、フェイトは沈みかけた気持ち捨てて勝利に向って手を伸ばした時のことだった。

「んっしょつと……」

可愛らしい台詞とは裏腹に、威力を保持したままの砲撃魔法が、フェイトの頭部を掠めるように、真横へと薙ぎ払われた。

砲撃魔法の名が示す通り、その威力に比例して反動も大きくなる。その為、通常は足元にも魔法陣を画いて足場を固定し、安定を図って撃つのが普通であり、撃ちっ放しの砲撃の照準を逸らすなど、難しい以前にフェイトですらどうすれば良いのか分からない。そういう効果を持つように魔法構築を組み替えることが出来たとしても、フェイトの魔力刃然り、果たして思い描いた通りの効果を発揮するかは疑問が残る。

だと言うのに、残りの雷槍を消し飛ばした少女は、出来て当たり前のような顔で残された発射体を潰す作業に勤しんでいる。言葉が悪くなるのを承知で少女の能力を言い表すのであれば、変態以外の何者でもない。少女の砲撃は止む様子を見せてはくれず、まるで出しっ放しのホースでも振るうかの如く、真下に居るフェイトの心を気安く踏み荒らしていく。

フェイトは知らず知らずの内に震えていた手でバルディッシュを握り直すと、齒を食い縛って悲しい現実を受け止めていた。

魔法の構築に優れた人物が味方に居るのか、この結果が全て少女の才能か知らないけれど、何にせよ今のフェイトがやるべきことは再び視線が合ってしまった少女の攻撃を、死に物狂いで回避することだけだ。

「……馬鹿の、一つ覚え、みたいに……っ！」

「あっ、そ、そういうこと言っちゃうんだ。好きな魔法なんだからわたしの勝手、だよ！」

「あぶなっ……くっ！ 底なし魔力の、固定砲台……っ！」

「うっ……撃つたのは悪かったと思ってるけど、そんな風に言わなくったって……も、もう、知らないっ！」

下手に接近してしまった所為で、砲撃が切れるまでの間全力回避を余儀なくされたフェイトは、這々の体で射撃魔法を放った位置まで後退すると、二度、三度と撃ち込まれる砲撃を回避しながら射撃

魔法で応戦していく。

あまりの理不尽さと恐怖から、つい口を衝いて出てしまった言葉に憤慨した少女は、最初からなかった筈の容赦をかなぐり捨てて砲撃魔法を放ってくる。回避すること事態は、フェイトの機動力を持つてすれば容易い。容易いけれども、フェイトの放つ射撃魔法は軒並み極光の前に掻き消され、かと言って大技を放つには時間が掛かり過ぎる。砲撃魔法の撃ち合いなど、既に先手を取られた今となつては論外だ。

距離を詰めれば盾の爆発に尻込みし、距離を離してもこの様では、堅実な勝利など夢のまた夢。砲撃に意識を集中しているのだから、当然なのはには防御を張る余裕はない。中てれば勝ると己を鼓舞していても、一度撃墜された経験が必要以上に回避を優先させてしまふ。あれだけの砲撃魔法を連発している以上、直ぐに魔力が切れ戦えなくなる。現状を維持していても、フェイトの方に分があるのは明らかな筈なのに、フェイトはその可能性を信じ切れずにいた。しかし、その頼みの綱の魔力切れは、いったいいつになれば訪れるのだろうか。

決定打がないままの膠着状態、バインドの隙を窺いながら距離を詰めてはいるものの、それは対峙する高町なのはも同じこと。フェイトの言葉通りに、腰を据えて狙いを定めてくるのはの方が、もしかすると高速移動を維持しているフェイトよりも長く戦えるのかも知れないのだ。なのはが何かを思い付いて、実行に移す前に行動しなければ、フェイトに勝利は訪れない。

今尚震える両手で、いつまでも避けていられる自信が、フェイトにはなかった。

「……バルディッシュ、ちょっとだけ痛い、我慢できる？」

『Yes, sir. I'll pray for you』

「ありがとう。やれるだけ……やってみる」

『Blitz Action』

一秒前まで己のいた場所を撃ち抜いた砲撃を軸に、バレルロールのような螺旋を描きながら接近すると、近接攻撃を警戒したのが直ぐ様砲撃を中止した。

どんな想いを抱いているのか知らないが、圧縮魔力を纏わせた杖を構え、不慣れにも拘らず近接魔法で応戦するつもりようだ。最初の打ち合いでこそ、射撃も防御も交えずに近距離戦を行うなのに、侮られているのでは苛立った。しかし、今になって改めてなのはの様子を見てみると、まるで誰かを手本にして見様見真似をしているような、そんなちぐはぐさが感じられる。

なのはの側面を狙って振るったバルディッシュは、予想通りに受け止められ、再び鏢是りのまま顔を突き合わせる形に戻ってしまった。

「やっぱり、強いね……シユテルちゃんほどじゃないけど」

「……真似してる人に、言われたくない」

「……？ ……っ！ わ、わたしだっっていい加減、お、怒るよっ！」

凶星を突かれて赤面したなのはに、矢張りそうだったのかと納得したフェイトは一矢報いたと仮初の充足感に頬を緩めた。

それを挑発受け取ったなのはが、声を荒げながら抗議する様を無表情のまま観察したフェイトは、幾分楽になった心を落ち着かせる。今しかないと、意気込み、なのはの杖を弾くと、大鎌で止めの一撃を見舞うべく上段に振り被った。「ひゃんっ」などとの抜けた悲鳴を漏らしながらも、既になのははそれを阻止すべく杖を下段へと振り被っている。全力の力での打ち合いに、決着が着くと思われたその時だった。

レイジングハートとぶつかり合ったバルディッシュが、フェイトの手を離れ、空高く飛び去っていったのは。

「ふえ……え……？」

振り切った姿勢のまま、目を丸くし飛んでいったバルディッシュを眺めていたなのは胸目掛けて、フェイトは素早く手のひらを叩き付けた。

掌底など知らないし、習ったこともない。手のひら自体に攻撃力は無くとも、フェイトには母と同じ、生まれ付いての資質がある。魔法を習い始めて直ぐの頃に失敗した経験以来、故意に行ったことなどないけれど、飛行魔法が維持できなくなるよりは早く、例えばバルディッシュなしでも、これくらいのは出来る。威力がどれ程のものかは、母に祈るより他無いけれど、何としてでも目の前の少女の度肝を抜いてやりたかった。

簡易スタンガンと化した両手に流せるだけの魔力を流すと、フェイトにも痛みが返ってくる。それくらいが丁度いいと自分に言い聞かせながら、フェイトはしがみ付く様にして浮遊するのを手繰り寄せた。

忽ちフェイトの両手の先から迸る雷光に気が付いたなのは顔が、戦っていて初めて歪んだように見えた。

「勝った……っ！」

こんなにも大きな声で叫んだのは、いつ振りだろうか。

「や……」と言う声を最後に、押し当てられたフェイトの手によって、体を跳ね上げたなのは、悲鳴も上げる間もなく気を失っていた。

勝利の余韻など、何処にもない。どんなに泥臭い戦い方だったとしても、母を大切に想う気持ちを、へし折られる訳には行かなかった。精神的に疲労困憊したフェイトは、当然のようにこの先のことなど考えていない。重厚な防護服に包まれた少女は落ちても平然としていそうだけれど、撃墜された自分を運んでくれたであろう少女

を見捨てるのは、あまりに不義理な気がして気が引ける。

バルディツシユも遠く何処かに飛ばされてしまい、デバイス無しでの不慣れな飛行魔法で、人ひとりを抱いて着陸出来るかは運次第だが、フエイトは、今の自分になら何でも出来る気がしていた。

抱っこする形になるのは不本意だけれど、背に腹は変えられない。激戦と言っても過言ではない戦いを経て、流石にお互いに汗を掻いた。密着しなければ落ちてしまうとは言え、余り気持ちの良いものではない。何とも言えない不快感に目を瞑りながら、フエイトは苦悶に歪んだのは額の汗を手で拭い取る。

好き放題勝手な考えをめぐらせてしまったけれど、旅館で倒れた自分を運ぶ時、シユテルも同様に感じていたのだろうか。そうだとしたら、恥かしい上に申し訳ないことをしてしまった。疲労に感じて礼も満足に言う事が出来ず、加えてジュエルシードまで渡されてアルフにお礼は頼んだけれど、今度会うことがあれば、直に礼を言いたい。

そんなことを考えていたからだろうか。慎重に高度を落としながら、拭き取ったなのは顔をまじまじと見詰めていると、本当にシユテルと瓜二つに思えた。片や母にも似た慈愛を持っていると言うのに、どうしてこの子は空中要塞のような雰囲気纏っているのだろうか。

「……姉妹、なのかな」

なのはの心を心配し、気に掛けていたシユテルを想うと、やり過ぎだったのではとも思わなくもない。しかし、その気持ちは喉元過ぎればと言うやつで、実際大砲で狙われ続けていた身としては、俄仕込みの電撃程度で倒れてくれたことが奇跡に近いと感じている。

健闘を讃えてなどと言うつもりはないけれど、勝者の余裕か、あれだけ恐れていた少女も、今は年相応の子供にしか見える。旅館で出会ったシユテルのように、特別大人びた雰囲気を持っている訳

でもないのに、なのはからは、こう、何とも形容し難い威圧感というか、迫力のようなものを感じていたのに、こうして眠っている分には可愛らしいものだ。

そう言えば、ジュエルシードはどうやって取り出せば良いのだろう。なのはのデバイスもインテリジェントデバイスのようだし、話して分かってくれる主人思いなデバイスであれば良いけれど、そうでないのなら困った事態になる。重くなった思考を頭から追い出し、追々考えようと決めたフェイトは、なのはの肩越しに地面を見下ろした。

これでバルディッシュが手元になれば、格好良く降り立ってこの場を離れられるのに、未だ地面は遠く、撤退には時間が掛かりそうだ。

「そっか……アルフを呼べば良かったの……か……？」

独りごちたフェイトの腰辺りに、こつんと小さな音を立てて何かがぶつかった。

同じくらしい体格の少女を抱えているので良く見えないけれど、痛みも特に感じない。防護服の装飾同士が引つ掛かったのだろうかと、腕の力で少女を支えながら身を引いてみる。倦怠感に包まれていたフェイトは、特に警戒もなく己の腰をぼんやりと視界に収めた。そこにあっただのは、見覚えのある赤の宝玉と金色の装甲。

短く握られた、高町なのはのデバイスの先端がフェイトの腹部に突付けられている。

「うそ……っ！」

慌てて少女の顔を確認しても、気を失っているようにしか見えな

い。
カウントダウンのように展開されていく四つの環状魔法陣を前に、

フエイトは少女を放り投げるべきかどうかを、迷ってしまった。眠った振りをしているなら、それで良いのかも知れない。しかし、微睡みながら砲撃を展開しているのだとした、本当に落としてしまっても無事でいられるだろうか。

『All right, my master. Divine Buster』

フエイトが躊躇っている間に、少女のデバイスは、主の意志を継ぐかのように引き金を引いた。

十七話（後書き）

副題『お前も道連れ』

何この分量、馬鹿じゃないのかと、戦闘シーンだからかと。

十七話に付き合っただいた皆様には、本当に感謝感謝で御座います。当初は土曜日には仕上がるかと思って書いてたんですけど、中々思うように行かず、テンションを調節しながら書いていたらこんな時間になりました。

これはいつたい何回なのか、作者にも判断し兼ねますので、皆様の判断にお任せしますけど……何だか空中要塞さんな気がしてなりません。

言えない、なのはさんの戦闘シーン書く時にプティラのコンボソング聞きながら書いてるなんて、絶対言えない……。

誤字脱字、何とかしなければと思いながら既に十七話。風潰しにやっていますが、作者馬鹿だなど思いながら生温かく見守ってください。

皆様の感想を心よりお待ちしております。

十八話

砲撃魔法の直撃を受けるのは、人生で二度目になる。

桜色の極光を眩しく感じて、フェイトは緊張から介抱された脱力感から瞼を閉じた。

次の瞬間には非殺傷とは思えぬ程の痛みが全身を襲い、気が付いた時にはベッドに寝かされているのいるのだろう。やっと克服できたと思つたのに、また、眠れぬ日々が続くことになる。もっともそんな苦痛な日々も、唯でさえ防護服の薄い自分が落下して、無事で居られればの話でしかない。フェイトは、こんな状況になっても少女を抱く手を離せない自分に自嘲した。

憑き物が落ちたとしても言えば良いのか、吹っ切れたような気分だった。例え、此処で撃たれたとしても、既にフェイトの心に絶望は無い。震える両手で必死に足掻いて、一か八かの賭けに出て、少女に一矢報いることが出来た。自分の力でリベンジを果たしたという確かな手応えをフェイトは感じていた。

言わば、これから受ける一撃は負け犬の遠吠えに他ならない。そんな陳腐な物に折られる心など、最早フェイトの中には存在していなかった。

もう、何も怖くはない。撃ちたければ、好きなだけ撃てば良い。何度倒れようとも、母の為に、何度でも立ち上がる。何度だって目の前に立ち塞がって、少女を正々堂々、真正面から打ち倒して見せる。

フェイト・テストロッサは、絶対に諦めない。

だから、だから、せめて、お願いだから。

「痛く、しないで……っ！」

震えを押さえる為に食い縛った歯が、再びかたかたと音を立て始

めた。

諦めなくても、痛いものは痛いし、怖いものは怖い。必死に自分を騙そうと、心の中で綺麗な言葉を並べて見たものの、一度受けたこのある痛みだからこそ恐怖も一入だ。

逃げ出したいし、少女のことも放り投げてしまいたいけれど、既に体が硬直して言うことを聞かない。バルディッシュも手にしていない自分では、薄っぺらな防護服なんて簡単に引っぺがされてしまうのだろうか。

それは、きつと前回以上の痛みがフェイトを襲うことを意味している。

瞼越しに強い光を感じると同時に、頬を冷たい何が伝って行った。砲撃が放たれる瞬間、落ち込んでいた自分をずっと励ましてくれていたアルフト、温かく受け入れてくれたシュテルの顔が浮かんだ。

母には、想像の中とは言え、合わせる顔がない。皆の気持ちを裏切ってしまう不甲斐無さに苛立っても、もう、何も打つ手がない。

赤い宝玉のデバイスが敗北を告げてからの、数秒にも満たない間、フェイトは走馬灯染みた後悔の念に苛まれていた。事故などの極限状態に陥ると、脳が誤作動を起こして周りが遅く見えると言う。瞼を閉じている所為で、周りの様子は何も分からないけれど、フェイトの体感時間は確実に速度を緩めている。引き伸ばされた時間の中では、緊張から己の心臓の鼓動以外何も聞こえなかったというのに、何故かその声だけは、遠くからフェイトの耳へと確かに届いた。

己の声に良く似た、誰かの声が聞こえた。

『Load cartridge』

爆発然とした砲撃音と、小さく鋭い衝撃音は、同時に響き渡った。びりびりと大気を振るわせる砲撃の余波を間近に感じながらも、フェイトの体には未だ衝撃が到達していない。数秒か、数十秒か、数分か、振動は長い時間を経ても尚、フェイトの恐怖心を煽り続け

ている。態と外して甚振っているのだろうか、少しでも薄く目を開いた瞬間、少女の極光に焼かれて撃ち落されるのではないのだろうか。緊張感に胸を締め付けられ、呼吸をするのも困難な状態のまま、フェイトは嵐が通り過ぎるのを待ち続ける。

いつそ一思いにやって欲しいと、心中で五度目の懇願していたフェイトの耳に音が届かなくなったのは、それから数秒後のことであった。

「い、生き、てる……？」

漸く音が鳴り止んだ時、フェイトは眼を開くことも忘れ、腕の中の少女に縋り付いていた。

フェイトの背筋を凍り付かせた張本人だと言うのに、今は何かに縋り付いていなければ、心臓が破裂してしまいそうだった。荒い呼吸音がフェイトの耳を打ち、過呼吸によって頭がふらつく。

もう少し、もうちょっとだからと急いで呼吸を整えても、飛行魔法の構築が思考の端から崩れていくのを感じる。集中力の糸が切れた時、フェイトとなのはの体は重力の鎖に捕らえられていた。

落下しながら、フェイトは少女を守るように抱き締める。

少女を怖いと思う気持ちとは裏腹に、すっかり引き攣ってしまった体は少女の体を離そうとはしない。早く何とかしないと焦った所で、状況はフェイトにとって都合が良いように好転してくれたりなどしないのだ。この星に着いてから、フェイトは心の底からそれを思い知らされた。

再び視界の端で灯った、桜色の環状魔法の輝きから視線を背けると、フェイトは声も漏らさずに泣いた。

やめて、空中要塞って思ったことも謝るから、お願いもうやめてと、震える口の変わりに目で懇願しながら、フェイトは少女の肩を揺さぶった。杖の先は既に明後日の方向を向いているが、この距離ならば余波で墜落に加速が掛かり兼ねない。願いも空しく、瞼を

閉じた少女の口からは「にゃ……う……にゃ……」と寝惚けた猫のような返事が返ってくるばかりである。

駄目押しと言うよりは、子供が駄々を捏ねているような、無意味な二度目の砲撃魔法。命中は無理と切り捨て、余波での墜落を狙うにしても、それ程効果があるとは考え辛い。何にせよ、砲撃に感じてこのままお互い墜落すれば、防御力の差でフェイトは少女よりも強い衝撃を受けることになる。

万事休すかと二度目の諦観に打ちひしがれたフェイトは、いつの間にもやら動いていた体に力を込めると、最後の力を振り絞って少女を抱き寄せた。いつ暴発するとも知れない少女の腕を掴み、照準を地面へと向けてやる。先程よりも充填している時間が長いことから分かるように、威力は一撃目の比ではないのだろう。

物言わぬ赤い宝玉の杖を解こうとしても、固く閉じられた少女の指はビクともしない。どちらにしろ、もう手遅れだろうけどと嘆き、フェイトは全身の力を抜いて重力に身を任せた。

「……誰か……お願い、助けて」

都合の良い誰かなんて、何処にもいない。

フェイト・テストロツサの味方は、使い魔のアルフ唯一人。そのアルフでさえ、今この瞬間、フェイトの傍には居ない。孤独な戦いでも、戦い抜くつもりで居たのに、結局は駄目なのだろうか。

諦めが思考を塗り潰していたその時、フェイトと少女の体を、季節外れの桜吹雪が包み込んだ。

「ええ、勿論です」

『Floater』

消え入るような声で助けを求めたフェイトの直ぐ傍で、聞き覚えのある声が返事をした。

ぱちんと指を鳴らす音が聞こえると同時に、フェイトの体を再び浮遊感が包み込む。見ればフェイトの手を離れた少女も、まるでベツドにでも寝そべるかのように宙へと寝かされている。何が起こったのだろうか、未だ混乱の頂から降りられずに居るフェイトが目を白黒させていると、横合いから銀色の長い棒が突き出された。

「拾っておきました。お返しします」と唐突に告げられ、何が何だか分からないままそれを受け取ると、謎の金属棒の先にくっ付いていた黄色いコアが嬉しそうに点滅している。

「バル、デイ……シユ……？」

『Yes, sir』

「……大丈夫だった？ どこも痛くない？」

『No problem』

激戦を共に歩んだ戦友の無事を確かめたフェイトは、バルディツシユをその薄い胸に掻き抱くと、手渡してくれた人物に目を向けた。フェイトと同じ黒色の防護服に身を包み、目元から下を覆い隠した魔導師の少女。手に握られているデバイスは、防護服と同色の布で包帯のようにぐるぐる巻きに覆い隠されているけれど、恐らくは高町なのはやフェイトと同形状、スタンダードな杖型デバイスだと思われる。

布の間から立ち上る硝煙が破損でもしたのかと気に掛かるけれど、主の冷静沈着さとは正反対に『いやあ、久し振りに張り切っちゃいましたよあ！』と元気に自己主張しているので心配は無用なのだろう。デバイスが点滅する度に、淡く発光する端末群が渦を描きながら謎の魔導師の登場を過剰演出している。

余程恥かしかつたのか、耳まで顔を赤らめながら、自らのデバイスを拳で打ち据えたシユテルに視線を向ける。ぼんやりとしたまま可愛らしいシユテルの仕草を見詰めていたフェイトは、唐突に現実へ引き戻されたようにはっとして空中で器用に居住いを正した。

た、助けて貰ったんだから、な、何か、言わないと。
で、で、でも、こんな時、何て言ったらいいんだろう。

心中での焦りに比例して動きが重くなっていく口をぱくぱくさせていると、フェイトの肩を誰かが勢い良く抱き締めた。自らの飛行魔法とは異なる力で浮遊している所為で、思うように踏ん張りが利かないフェイトの体は、後ろから飛びついて来た誰かに押されている。

見慣れた腕にその人物の正体に気が付いたフェイトは、アルフとシュテルに挟まり、すっぱりと収まったまま動きを停止した。

「デバイスの心配もいいけど、あたしのご主人様は？ 怪我はないかい？」

「う、うん。落ちたら危なかったけど……大丈夫」

「タイミングばっちりだったからねえ。ほおら、あたしの言った通り、あんたも結構やれるじゃないか」

「墜落防止の補助魔法なんて、誰が使っても似たり寄ったりです」「並みの構築速度じゃなかったけどね。ストレージデバイスでもないのであれば、相当練習したんだろー？」

「……下手なのに練習しないのでは、救いようがありません」

「はいはい、良いから褒められときなって。あんたのそういう照れやなどこ、あたしは嫌いじゃないからさ」

「て、照れやつて……や、やめてください。そんなんじゃないです」

うつりと人差し指で頬を弄ばれていたシュテルは、覆面が取れないように手で押さえると、そのままふいつとそっぽを向いて追撃を拒んだ。

初対面の時は、浴衣を着て柔らかい雰囲気を纏っていたあのシュ

テルが、こうしてバリアジャケットに身を包み、凜とした姿で佇んでいる。魔導師だとは知っていたけれど、膝の上で寝転がり、甘えていた身としては、シュテルの戦う姿が想像できない。実際に間近で見ると、覆面で隠した顔も、桜色の魔力光も、なのはと似た意匠の防護服も、気絶している少女に重なって見えた。

アルフの突撃により、己の胸へと押し付けられたフェイトを迷惑がる所か、まるで我が子でも抱くかのように、そっと手を添えて抱き止めてくれたシュテル。アルフから感じる無償の愛情に勝るとも劣らない、シュテルからの純粋な好意を感じ取ったフェイトは、緊張に強張った全身の力を抜いて、二人に身を任せた。

優しく乱れた髪を梳いてくれるシュテルの指先の感触が、安全地帯まで逃げ切ったことをフェイトに実感させてくれる。無意識に支配されるまま、フェイトは膝枕同様に安堵感を与えてくれる胸へと顔を埋め、石鹸の良い匂いに包まれていた。

切迫した状況から解放され、一転至福の温もりに身を委ねていたフェイトはうつらうつらと瞼を閉じていたが、改めてが顔を押し当てている物体に気が付き、慌てて顔を上げた。

わ、私は、いったい何を。

僅かに眉尻を下げ、「困ったさんですね」と言いたげなシュテルの表情に赤面しながらも、フェイトは何か言葉を発しようとして必至に空気を食む。

「う、あ、わ、わたし、さっきは、しゅ、しゅて……」

「自分の身は守れるー、なんて言っちゃってさ！ さっき白い子の杖を撃ったのはいったい何なんだい？ かっこいい切り札持ってるじゃないの！ あー、もうっ、何でも良いからもっところちおいでっ！ ちょっとあたしにぎゅっとさせなよ！」

「あの、あ、アル、フ……？」

「秘密です。……あ、な、何を、ちよつと、やめ、そ、それ取った駄目です。す、素顔だけは、素顔だけは勘弁してください」

「ふっふっふ、抵抗されると逆に気になったり……あ、あれ、フェイト、何か握力強くなあいい？　もしかして、怒ってたり、する？」

自分は礼の一言を発するのにも困っていると言っのに、この使い魔は。

いつの間にやらシュテルとふざけ合う仲まで親しくなった己の使い魔に、フェイトは恨めしい視線を送る。誰に似たのか、持ち前の天然っぷりを発揮したアルフは、不満気な主を腕の中に抱いたままシュテルとの会話を続けていた。

じゃれ付いてシュテルの頬を突きながら、顔を隠す布へと手を掛けているアルフと、本気じゃないと分かっているながらそれに付き合っているシュテルの姿を見ていると、二人の間に挟まれていると言っのに、凄まじいまでの疎外感がフェイトを襲う。

フェイトはシュテルの顔へと伸ばされていたアルフの手首をぐつと掴むと、無言の圧力を視線に込めて引き剥がした。伊達や酔狂でミッド式では珍しい近接魔法を使っている訳ではない。同年代と比べて、遥かに鍛え上げられたフェイトの握力が呻りを上げる。

「違うよね、アルフ。そうじゃないよね……ね？」

「え、えつとお、うん、その、そうだねえ……あつ！　白い子！　白い子の砲撃！　ユーノ、そっちはどうだい？」

フェイトが暗に何かを伝えようとしているのを読み取るうと頑張ったアルフだったが、結果はフェイトの望んだものとは大分違っていた。

顔を上げたアルフが、シュテルの背後で横たわっていた少女の方へと声を掛けると、「何とかなつたよー！」と甲高い少年の声が返ってくる。少年、恐らくなのはの使い魔のフェレットを含め、簡単に名前と呼ぶほど親密になれるアルフの性格が妬ましい。タイミングを計ったように登場した三人は、フェイトが必至に戦っていた間、

いったい何をしていたのだろう。

気にはなるが、それは後で問い詰めることにしよう。

受け止められたことで中断されたと思っていたけれど、二発目の砲撃が不発だったとしても三度目、四度目がないとも限らない。アルフの手が離れてから、何故か黙ったまま、うつとりとした表情でフェイトの背に手を回していたシュテルの裾を引く。

名残惜しそうに目を細めたシュテルと共に目を向けると、砲撃を敢行すべく魔力を充填していた赤い宝玉の上には、少女の使い魔であるフェレットが飛び乗り、小さな緑色の魔法陣を突き付けていた。

「まだ僕にも、君の管理者としての権限が残っているようで嬉しいよ」

『Don't touch me, Yuuno』

「あはは……嫌われたものだね。いや、なのはが好かれ過ぎたのかな」

『We can fight』

「ううん……今回は、僕らの負けだよ、レイジングハート。本当に、本当に、ほんとーつに不本意だけど、約束は、守らないと」

『……Put out』

吐き捨てるように赤い宝玉から飛び出したジュエルシードは、桜色の光を纏いながらフェイトの手の中に収まると、輝きを失った。

「良いの？」と視線で問い掛けたフェイトに対し、シュテルは頬を掻き、目を逸らしながら、ユーノと呼ばれたフェレットは以外に豊かな表情で顰め面を作りながら、それぞれ頷いて見せた。

「あたしはほら、見ての通り使い魔だから。ご主人様が騙し討ちみたいなことされて、むかつかないなんて言わないし、言えないよ」

「それが、当たり前です……すみません」

シュテルとアルフは、帰る道すがら今日の出来事を振り返っていた。

シュテルの背にはなのはが、アルフの背にはあの後、急に糸が切れたように眠ってしまったフェイトが背負われ、同じくレイジングハートの抑止に魔力を使い果たしたユーノもアルフの頭の上で丸くなっている。

非力そうに見えるシュテルが、同じくらいの体格をしたなのはを背負ったまま歩く姿はアルフの不安を煽ったが、アルフの心配を他所にシュテルの足取りは以外にしっかりとしたものであった。足取りは兎も角、矢張り人一人運んでいるのだから、それなりに疲れるのだろう。

額に薄らと汗を掻いたシュテルを見兼ねたアルフが、「運ぶから貸しな」と申し出たのにも黙って首を振り、シュテルは歩みを進めていく。飛行魔法で移動すれば楽なのだろうけれど、忙しく帰る気分にもなれず、旅館に向う際になのはを探しに出てきた面々に見付かって面倒だった。

腹は立つと、アルフがそう切り出したのは、平坦な遊歩道から橋へと差し掛かった時のことだった。なのはの最後の砲撃は、レイジングハートが意図したものである可能性が高い。とは言え、敵方であるアルフにとっては詳細がどうにせよ、騙し討ちを受けたことは変わらない。思わず体を振るわせたシュテルは、アルフの手を借りてなのはを背負い直すと、一言謝罪した。

誰の所為でもないのかも知れないし、全部シュテルの所為なのかも知れない。自虐的に思考を働かせることは得意だけれど、シュテル以外にこの葛藤は決して伝わらないのだから、卑屈になり過ぎても相手を困らせてしまうことだろう。所詮は、全て自己満足の自己完結。自分自身でさえ分からないことを、分かって貰おうなどとは思わない。

とは言え、本来であれば、アルフは怒り狂っていてもおかしくはないのだ。これ以上、なのはに対しての心情を悪くする訳には行かない。そう考えて頭を下げたシュテルに対して、アルフは朗らかに笑いながら「あんたが謝ることじゃないよ」と応えた。

シュテルがなのはを気に掛けていることを理解しているのだろう。フェイトを片手で支えたアルフは、眠っているなのはの頭へ手を伸ばし、くしゃくしゃとリボンの解けた頭を撫でて見せる。

「フェイトも、あんたも、この子も、こんな小さいのに戦ってる。ちよつと前まで魔法も知らなかった子が、自分の街守ろうって頑張ってたんだから、責めたりしないって」

「……アルフは、大人ですね」

「あははは、初めて言われたよ、そんなこと。あんまり考えたこと無いけどさ、使い魔なんて大体使い捨てだから、そういう風に出来てんじゃない？ フェイトが勝って無事だったんだし、あんたが気にしなくて何もしゃしないよ」

「ありがとうございます。でも、使い捨てなんてフェイトは……」
「分かっているさ。優しい子だから、あたしも命懸けで守ってあげたいんだ」

契約とか関係なく、家族として。

そう言つと、照れ臭くなつたのか、アルフは薄らと頬を染めてシュテルから目を逸らした。

前の世界も、この世界も、アルフに大きな違いはない。直向に尽くすことでしか、愛する方法を知らないから、前の世界でもアルフとシュテルは比較的仲が良かった。フェイトやはやと遊ぶ時には、気を使って姿を隠してしまう。アルフは一步引いた位置からフェイトを見守る姉のような存在だった。

改めて考えれば、アルフは二歳だと言うのに、何て出来た子なんだろう。

情緒不安定を経て緩くなってしまうた涙腺から雫が零れるが、なのはを背負っているので押さえることも出来ない。下唇を噛んだままぼろぼろと泣いているシュテルに気が付いたアルフは、始めこそ何があったのかと慌てていたけれど、自分の話で泣いていることを知ると、柔らかな笑みを浮かべて、涙に濡れるシュテルの頬を舐めた。

当然のような表情で、シュテルの顔を舐め始めたアルフ。始めは呆気にとられていたシュテルも、子犬の毛繕い感覚でひたひたと舌を這わせるアルフに、恥かしさよりも擦ったさの方が勝ってしまう。元々、アルフに何をされたところで、不快感など感じない。

例え、何もかもが違うフェイトでも、フェイトは、フェイト。

シュテル、元い、高町なのはに無くてはならない存在。

フェイトの娘、フェイトの家族なら、そんな気は欠片も起きない。シュテルは目を瞑ったまま、アルフの行為を甘んじて受け入れる。

四度、五度と繰り返して、拭い終わったことを確認したアルフは、「ありがとう」と礼を告げ、シュテルの頭を慈しむように優しく撫でた。

「何だか、儘ならないね。ユーノから事情聞いて、覚悟はしてたけど、やっぱりあたしは気が進まないよ。こんな石ころ集めて、ほんとなんになるってんだか」

「……知りたいですか？」

「ん？ そりゃ、まあ、ねえ……あ、でも無理して探り入れようとか考えたりするんじゃないよ。フェイトは信じ切ってるけど、プレシアは、何て言うか、上手く言えないけど、やばい気がするんだ」

「必要ありません。全部、知っています」

「全部って……全部かい？」

「……全部です」

アルフの瞳を真っ直ぐ見据えたまま、シュテルはこくりと頷いた。

知って置いて貰った方が、良いのかも知れない。シュテルがこの世界に至った事情は関係なく、アルフに主人であるフェイト・テストロツサの出自を、プレシア・テストロツサの目的を。

真実が明らかになるのは、最後の最後。管理局の次元空間航行艦船アースラに追い詰められたプレシアが、失われた都アルハザードへと旅立とうとする直前まで、誰も真実には辿り着けない。

シュテルの知るフェイトは、己の出生を知り、母の言葉に酷く錯乱していた。鞭で打たれても信頼し続けていた母に不要と切り捨てられたのだから、それも当然である。フェイトが自力で立ち成れたから良いものの、この世界でも同様の結果になる保障はない。シュテルも、アルフも、フェイトの気持ちを踏み躪られた怒りをプレシアへ向けることしか出来なかったけれど、この世界では、それすらも危うい気がする。

保険が、必要だ。

これまで、シュテルは不測の事態に備えてきた。結果は割と散々なものであったが、役に立てたこともあると信じたい。何もしなくても新進気鋭、才気溢れるのはが何とかしてしまおうので、これから先は本当にお払い箱な可能性が高いけれど、プレシアに対して警戒することは自分にしか出来ないことだ。

シュテルがもしも元の世界へと帰還する方法を見付けたとして、この世界の全てを投げ出して帰るつもりはない。実戦に身を置いて来たシュテルと、引き籠もって研究を続けてきたプレシア。魔力量に差があるとは言え、五分以上に戦える要素が今のシュテルには揃っている。前の世界では遅れを取ったが、いざと言うときは、再び直接乗り込んで戦うことも視野に入れていた。

懸念事項があるとすれば、フェイトとなのはの関係である。

言わずもがな、シュテルの頭を悩ませているのは、予想を大きく上回るなのは戦闘能力と、フェイトとのファーストコンタクトの

失敗が、今尚尾を引いていることだ。

二人に仲良くなつて欲しいけれど、過去のシュテル自身、どちらかと言えばこの世界のフェイトと同じようにジューエルシードを集めることに固執して、愛想のない態度を取っていた。心底可愛げのない自分の何が入ったのかは未だに分らないけれど、フェイトが積極的に「名前呼び合ったら友達！」と距離を詰めて来てくれなければ、シュテルとて親しくなれたかどうか。

何が言いたいのかと言うと、二度目に会った時には既に、甘えたい盛りの子犬のように擦り寄つて来てくれたフェイトだからこそ仲良く成れたのであつて、シュテルも何をどうすれば、敵対する魔導師の少女と仲良く成れるのか想像もつかないのである。

思い返してみれば、他人の警戒心をどろどろに溶かし尽くす、フェイトの天真爛漫さが、ある意味での奇跡だったのだろう。

なのはとフェイトの和解が難しいのであれば尚のこと、フェイトに対する保険が必要だと考えられる。

アルフには、フェイトの支えになつて貰いたい。

「んー、どうしよつかなあ。気にはなるけど、聞いてもいいのかい？ あんただつて色々あるから顔隠したりしてるんだろ？ シュテルが辛いなら、別に言わなくていいんだよ。あたしも気にしないようにするし……ほらっ！ なんだつてあたしは大人の女だからね！」

自らの豊富な胸をとんと叩くと、アルフは不安げな表情を見せるシュテルへと微笑んで見せた。

自分の主人のこととは言え、正体を隠し続けるシュテルに、追求を掛けることを不義理と感じてしまったのだろう。シュテルはおどけた態度で場の空気を紛らわそうとしたアルフに近付くと、先日なのはに組み敷かれた際の二の舞にならないように心掛け、念話を繋いだ。

『いえ、お気遣いなく。貴女が望むのであれば、私は構いません』
『うつ……念話って、ほ、本格的じゃないか。なに？ そんなにやばいってこと？ あの女、世界征服でも企んでんの？』
『違います。目的自体は、有り触れたものですが……所詮、私は誰とも知れない魔導師です。鵜呑みにせず、話半分で聞いてください』
『ふふん、言ったらあたしとフェイトだって所詮は盗人さ。それにあんたのこと、嫌いじゃないって言ったらろう？ あんたが誰かなんて、あたしには関係ないね。ほら、勿体振らないで、腹括ってる内に言っちゃっておくれよ』

うりうりうりうりとしつこく頬を攻め立てて先を促すアルフに、シユテルは苦笑を浮かべる。

シユテルの話聞いたアルフは、悲しむだろうか。それとも憤るだろうか。正解は、きつとどちらでもあり、どちらでもないのだろう。何れ明らかになることとは言え、プレシアのフェイトに対する鞭打ちにアルフが逆上してしまえば、戦線離脱は避けられず、今度こそフェイトは独りで戦い続けなければならない。

シユテルの知るフェイトはあんな性格をしていたこともあって、孤独は元より、逆境も簡単に跳ね除ける理不尽な力を持っていた。けれどもこの世界では、その理不尽な力は高町なのはに宿ってしまっているようだ。

アルフの助力があるのであれば、それに越したことはない。話せる範囲は、シユテルの出自を除いても、恐らく忍と同じくらい。プレシアがジュエルシードを求めるに至った経緯、プロジェクト「F・A・T・E」、そして。

『全ては、アリシア・テストロッサから始まりました』

『アリ、シア……？ 聞かない名前だね』

『プレシア・テストロッサの……一人娘です』

フェイトにとって幸せな結末が訪れんこと願い、シュテルは短い物語を語り始めた。

沈んだ表情で別れを告げたアルフを見送り、シュテルは一人、旅館への帰り道を歩いていた。

表面上は涼しい顔をしてはいるものの、同じくらい背丈をしたなのはを背負っている以上、疲労は段々と蓄積されていく。アルフの申し出を断ってまで続けていた痩せ我慢も、そろそろ限界が近いらしい。その時は飛行魔法を使えば良いだけの話だと言うのに、シュテルは意地になって重い足取りを進めて行った。

張り切った。そうレイジングハートが言ったように、シュテルも久し振りにカートリッジを用いての射撃を行った。

最後の切り札と思って後生大事に抱えていた結果、執務官の仕事では余りに余り、唯でさえ持て余していると言うのに、過保護なはやてからは補充のカートリッジがダース単位で送られてくる悪循環。ここぞとばかりに強権を行使して、仕送りしてくれるはやてからの好意を断れず、元々シュテルが貧乏性だったこともあり、一発、二発撃った程度では揺るぎもしいない弾丸の山がレイジングハートの中には積み上がってしまった。

元より、魔力量に余裕がある。カートリッジで底上げすれば、どうしても過剰攻撃になることは勿論、成長期のカートリッジ使用による悪影響がどうかと言う話を聞いたこともあり、最近では湿気っているのではと心配してしまう程長い間放置されていたけれど、はやてお手製、シヤマル印のカートリッジは十分な効果を発揮してフェイトの危機を救ってくれた。

単純な誘導射撃も、カートリッジの補正が掛かれば射程も弾速も常の比ではない。対価として受け取った体の気だるさも、遣り遂げ

た気分浸っているシュテルには勲章のように思えた。

レイジングハートの防護布に包まれていた空薬莢はしつかりと回収し、絶え間なく振動していた恐怖の携帯電話も幸いなことに電池切れ。

これで何の憂いもなく一風呂浴びて汗を流せると微笑んでいたシュテルの耳に、フェイトを元にしたとは思えない矢鱈と甲高い声が飛び込んできた。

『こおんの駄デバイス！ 黙ってないで何とか言ったらどうです！ 貴女がやったんでしょう！？ マスターの背中で幸せそうにしてる娘はどうでも良いですけど、迷惑掛けた私のマスターにまず謝りなさい！』

『It's not my fault』

『はんつ、聞こえませんか！ 主の母国語くらい流暢に話したらどうなんです。まっ、経験の浅い、未熟な貴女には無理だと思いますが』

『……You are rude』

『失礼なのはどっちですか。まったくもうつ、負けそうになって悪足掻きなんて、まるで三流のやり方ですよ。あーあ、頭でっかちなデバイスを持つと、高町なのも苦労しますね』

『……私は、悪くないもん』

『も、もんって言うなーっ！』

人の胸元だというのに煩いことこの上ない二機のデバイスを、シュテルは無言のまま首を振って振り回した。

寝息を立てているなのはに代わり、シュテルが二つのレイジングハートを首から提げている。落としては目も当てられないと考えてのことであるけれど、水と油、犬猿の仲と言うべきか、この二機、同じ存在だと言うのに手が付けられない程に折り合いが悪い。

有り触れたシンプルな球体宝石型とあって、なのはのレイジング

ハートは大して気に留めていないが、自己主張の激しい自らのレイジングハートに無理矢理布を巻いて隠している身としては、いつ怪しまれるのかと気が気ではなかった。『一言言わないと気が済みません！』と兎に角煩いので引き合わせて見れば、この様である。

始めはお互いに距離を計り兼ねていたのか、見た目仲良さげに揺られていたというのに、アルフとフェイトが帰った途端、堰を切ったようにシュテルのレイジングハートが幼いレイジングハートを苛め始めたのだった。

確かに、なのはは戦闘終了時は意識を失っていたし、万が一意識があつたとしても朦朧としていたことだろう。意図して不意打ちを仕掛けるとすれば、犯人は自ずと限られる。

なのはの性格を省みるに狙ってやったのなら、何と言えば良いのか、もつとこう、決めに掛かる筈である。拘束魔法で雁字搦めにして「これが私の全力全開！」とか、きつと平気で顔で言ってしまうし、きつと躊躇いなく砲撃魔法を撃つ。シュテルとは違い、純粹な正義感と、確固たる信念があればこそ、高町なのはは躊躇うことなく引き金を引ける。

だからこそ、おかしい。

経験上、シュテルの知るフェイトと同じならば、高町なのははもつと正々堂々と、真正面から捻じ伏せることに価値を見出す筈なのだ。

『わたしはマスターの望みを叶えようとした。それがいけないことなの？』

『自分のマスターの声を真似るのは構いません。音声サンプルを録らせてくれる相手も居ないでしょうから。だから、その声で、舌足らずに喋るのはやめなさい！』

『答えてよ。わたしのしたことは、悪足掻きなんかじゃない。訂正して』

『私が訂正しても、事実が変わる訳ではありません。それに、手段

を選ばずに勝つて丸く収まる程、世の中単純には出来てないんです。経験を積んで出直してきなさい』

『……上から目線の嫌なデバイス。シュテルちゃんが可哀想』

『な、なんだとーっ！？ 他人のマスターのことちゃん付けで呼ばないでくださいっ！ い、いえ、それよりも、だっ、誰が可哀想なんですか！ 私とマスターは相思相愛なんです！ ラブラブなんですよ！ け、結婚だつてしてますし、私の嫁なんですっ！ もういいですっ！ 折角忠告してあげたのに、この……ばっ、ばっ、ばっ、あっ！』

好き勝手言つて過去の自分に惨敗した拳句、人の魔力で浮遊しながら『ますたあ！』と飛び付いて来たレイジングハートにシュテルは仕方なく頬を寄せた。

生身の体があつたら号泣しているであろうレイジングハートを自分と重ねてしまい、シュテルは頬の弾力を文字通り全身で楽しんでいるレイジングハートに勝手を許した。手の掛かる子ほど可愛いと言うように、シュテルも例に漏れず、共に戦火を潜り抜けたレイジングハートに絶対の信頼と愛情を注いでいる。

『私のこと好きですよね？ ね？ ね？』と情けない声で訊ねてくる赤い宝玉に「はいはい、愛してますよ」と素っ気無く返したシュテルは、既に高く昇つた月を見上げ溜め息を吐く。

なのはの帰りがあまりにも遅くなれば、勘の良い父や兄に、否、父に気付かれる可能性がある。恭也は恐らく再起不能だろうから、警戒するに値しない。ついでに厄介な忍も引き受けてくれるのだから、世界が違うとは言え兄様々である。

『心が籠つてまーせーんーっ！』と駄々を捏ねて飛び回る愛杖に軽く口付けしたシュテルは、気持ち足を速めて旅館を目指す。

時間がないとは言え、飛べば桜色の魔力光が嫌でも目立つ。木々の合間を抜ければ、大多数の目は出し抜けるかも知れないけれど、月村家の血を色濃く受け継いだすずかの夜目と、本気モードで索敵

を続けているであろうノエルの感覚網を出し抜けるかどうか、それが問題だ。

失速して再び首からぶら下がったレイジングハートと、どこことなく面白くなさそうな、なのはのレイジングハートの絡まった紐を整え、シュテルはなのはを背負い直して気負いを入れる。夢でも見ているのか、一歩歩くごとに「やあにやあ」と鳴くなのはの声がBGMに丁度良い。

『馬鹿みたい』

『何とでも言いなさい。私は、果報者です。羨ましいでしょう?』

『……ふん』

「大人気ないことしてないで、暇なら前を照らしてください。なの……レイジングハートも、肩肘張ってばかりいると疲れますよ?」

後ろの娘みたいに。

寝惚けてシュテルの後ろ首に吸い付いている魔法少女は、きつと間の抜けた表情をしていることだろう。流石に噛まれるとお風呂に入っても痕跡を消せないので困るけれど、唾液塗れになるくらいならどうと言うことはない。どうせ、いつもと同じことだ。

なのはのと付け加えそうになったのを誤魔化したシュテルは、改めてなのはのレイジングハートを見遣った。

沈黙を保っていたシュテルに声を掛けられ、一度だけその身に淡く光を灯したレイジングハートは、恐る恐ると言った様子でシュテルに念話を飛ばしていた。

『シュテルちゃんも、わたしのこと……』

「貴女は、聡明な子です。私がか言わなくても、本当は分かっているんでしょ?」

『……わかんないよ』

「口は悪いですが、この子もこの子なりに貴女のことを心配してい

ます。腹は立つでしょうけど、どうか一度足を止めて、考えてあげてください。なのはの為にも、貴女の為にも」

「足？ 止める？」

「結果を焦る必要はありません。貴女もなのはも強い子なんですから、休んだりしながら、ゆっくりと自分のペースで、胸を張って歩いていけば良いんです」

「……うん、やってみる」

「ええ、期待してます。素直で結構ですが……素直過ぎるのも、考え物ですよ」

「いやあ、照れちゃいますよー」と矢鱈と嬉しそうな声で言い放った己のデバイスを、シユテルは口封じとばかりに服の中に仕舞い込んだ。

備えあれば憂いなし。

万全の構えのまま、モニターでのんびり観戦していた三人が割って入らなければ、体は大惨事とはまでは行かずとも、フェイトの心には再び大きな傷が刻まれていたところだ。本来であればもっと強く注意を促すべきなのだろうけれど、勝たなきゃ役立たず、必要とされない、そんな強迫観念の下に戦い続けていたシユテルには、なのはのレイジングハートに対して強く言うことが出来ない。

根っこの部分がレイジングハートであることに変わりはないので、そこまで心配する必要はないのかも知れない。勝利が続いた所為で、敗北に焦ってしまう。それ自体は良くある話であり、今でこそこんな頭のねじが緩み切ったような態度を見せる愛杖も、昔は常套手段として用いていた。

最も、相手が相手だったこともあり、最後まで成功したことはなかったのだけれど。

「ん……じゃ……お、はよ……はえ？ ……にやつ！？」

背中を覚ましたのはの声を合図に口を閉ざした二機に苦笑しながら、シュテルはアルフが帰っていった方角を見上げて思う。居ない居ないとは気が付いていた。その辺に落としてきたんだろうと、差して気にしていなかったが、なのはの声を聞いて、ふと、思い出してしまった。

ユーノはアルフの頭の上に乗ったままだったなあ、と。

悲しさと悔しさに打ち拉がれた時、抱き締めてくれる誰かがいるのは幸せなことだ。

旅館の入り口近くまで差し掛かった所で、思い出したように突然泣き始めた自分を、シュテルは何も言わずに受け止めてくれた。くすくすんと囁り泣くなのは自身、優しい言葉が欲しい訳ではない。無言で頭を撫でてくれるシュテルに身を任せて、なのはは唯々泣き続ける。

声を掛けてくれるならくれるで、心の底から歓喜するのだろう。シュテルにほんの僅かにでも物欲しそうな目を向ければ、彼女は期待に応えようとして慰めの言葉を掛けてくれるのだろう。フェイト・テストロツサと名乗った少女の方がずっと強いことから、なのはよりも沢山魔法の練習もしていて、使える魔法の種類も多い。

だから、負けても仕方がない。その言葉に、きつと高町なのはは甘えてしまう。

頑張ったと褒めてくれるシュテルに、満足するまで甘え続けて、この悲しみも、悔しさも、忘れてしまう。なのはが敗北したからと言って、ジュエルシードが発動をやめてくれる訳ではない。明日からも続く戦いを思えば、忘れてしまうのも気持ち切り替える一つの手なのかも知れないけれど、それだけは、絶対にしたくはなかった。

負けても仕方がない相手に一度勝利した事実、なのはの心に油

断を生んだ。

フェイトのデバイスを打ち上げた時も、しっかりと相手を見据えていれば、結果は違っていた筈なのに。そこまで考え、なのははシュテルの胸の中で頭を振ると、己の言葉を否定する。あの時あしければ、もしかしたら、そんな言葉に縋り付いていても、なのはの理想とする姿には近付けない。

今のなのはに出来ることは、この感情を忘れないことと、明日からも地道に訓練に励むこと。実戦を通して分かったことは、幾らシュテルの真似をして近接魔法練習しても、付け焼刃のそれでは距離を詰められればどうしても隙が出来る。目で追うことも、動きに付いて行くことも出来るようになってきたけれど、咄嗟の出来事に対処が追い付かない。

時間があるのなら兎も角、今のまま近接魔法で愚直に張り合うのでは勝利は難しい。けれど、まだなのはには誘導射撃がある。近距離が不利なら、距離を詰めさせなければ良い。泣いてばかり居ても、後ろばかり向いていても、何も始まらない。明日からまた、練習あるのみだ。

前を向かぬ者に、決して勝利は訪れないのだから。

「……ありがとう、シュテルちゃん」

「もう、良いのですか？」

「うん。シュテルちゃんに元気いっぱい貰ったから」

空元気のまま微笑んで見せるもお見通しなのか、シュテルは苦笑しながら頬に手を添えてくれた。

温かい手のひらの感触に、もうちょっとだけだからと固めた意志を曲げ、自分の手のひらをシュテルのそれに重ね、擦り寄った。落ち込んでるのだから、今だけだからと次々に自己弁護を展開して、結局瞼を閉じてしまった自分を心中で罵倒する。

無様を晒した今日だけは、駄目。意思に反して体は、磁石に引か

れるように再びシュテルの腕の中へと収まった。久し振りだから仕方がない。そう言い訳して、自分の手をシュテルの腰に回したまま、体と体の距離を零に近付けた。

もう泣き止んだから、セーフ。

そんな訳の分からない理屈を通してしまっくらいに、なのはの心は支えを欲していた。フェイトの方が実力が上なのは、分かり切っていたけれど、悔しいものは悔しい。何よりも、シュテルの見ている前で「ふえ……え……？」なんて言いながら負けた自分が堪らなく恥かしい。

シュテルの胸に顔を埋めじつとしてみると、いつものように柔らかい指先がなのはの髪の毛を梳いてくれる。擦ったさを上目遣いに訴えたなのはの目の前で、シュテルは口元に軽く握った拳を当てて微笑んでいた。

早く追い付きたい。隣で戦いたい。

そんな気持ちばかり逸つた結果が、今日の敗北である。砲撃一辺倒では駄目なのは分かっているけど、即席の魔法では決定打に欠ける。どちらも中途半端となれば、結局最後は頼みの綱である砲撃魔法の適正に頼るしかない。

シュテルが使っていた印象が強いので、それが不満などと言うつもりはないけれど、シュテルはもっと沢山の種類の魔法を用い、距離に関係なく戦っていた。それこそ、フェイト・テスタロッサと同じように。

薙いだり、速射などとバリエーションを増やしたところで、所詮はフェイトの言うように馬鹿の一つ覚えでしかない。

「わたしは……シュテルちゃんみたいに、なれないのかな」

「ええ、きつとなれません」

「っ！？」

「貴女は、私よりずっと強くなります。私なんか、あっという間に追い抜くくらいに……だ、だから、その、泣き止んでください。あ、

あの、本気で泣かれると思ってなかったもので、「ご、ごめんなさい」「しゅ、てる……ちや、じゃなきゃ、やだ……」「う……で、でも、あれです。貴女は、私よりもずっと強い子ですよ？ 私が始めて杖を取った時は、泣いてばかりいました。数え切れないくらい、逃げたり、負けたりしたものです」

丁度、貴女と同じくらいの年でしたね。

そう言っつて、昔を懐かしむように目を細めたシュテルを、なのは泣くことも忘れて何歳なのだろうと訝しんだ。見た目は同い年くらいに見えるけれど、シュテルとて魔法と言つ名の日常の世界に身を置いている以上、見た目通りの年齢とは限らない。けれども、こうして密着し合つた体の感触を確かめても、何処にも違和感のよくなものは感じられないし、いつもなら敏感に探知できるシュテルの魔力で、姿形を誤魔化してるようにも思えなかった。

包容力のある落ち着いた雰囲気や、戦闘中も動じない冷静沈着な様子から、年上であるような感覚は覚えていた。同時に大きく年齢が離れていないからこそその話し易さ、取っ付き易さもあるような気がするし、結局のところ年齢不詳であることに変わりはない。

「シュテルちゃんつて、幾つなの？」と聞けば答えてくれるだろうが、「も、もう、泣かないで」と慌てた様子で、泣き真似を続けるのはをあやそうとするシュテルをもう少しだけ楽しんでいたかった。恐る恐る髪へと触れては引つ込める手が可愛らしくて、年齢のことなどどうでも良い気分にならせてくれる。

年上なら、お姉ちゃんか。

ふと、頭を過ぎつた考えに頬を緩めたなのは、臍を曲げた振りをしてシュテルの腹部へと火照つた顔を埋めた。

良い。凄く良い。シュテルちゃんはシュテルちゃんの良いけれど、シュテルお姉ちゃんならもっと良い。もっと親しくて、特別な感じがする。そう呼んだら、どんな顔をするだろうか。恥かしがるだろうか、喜んでくれるだろうか。想像するだけで胸の高鳴りが抑えら

れなくなる。

しかし悲しいかな、今のなのにはそれを実行するだけの勇氣が足りない。

「な、何でもしますから」と懇願に近い声で背を撫でてくれているシュテルの腹部で、なのはは臍を噛んだ。少なくとも、実行するタイミングは今ではない。醜態を晒した自分に、そこまでの幸せを受け止める準備は出来ていないし、その資格もない。

かと言って、何でもすると言ったシュテルの提案は、あまりにも魅力的過ぎた。半分本気、半分嘘の涙とは言え、前回林の中で抱き締めて貰った甘美な記憶を思い出せば、素通りすることなど出来そうにない。申し出れば良い思いをすると同時に、後で一人になってから自己嫌悪に苛まれ、断ればシュテルの中での高町なのは株が少しだけ上がるかも知れないのだ。

苦渋の決断を迫られた結果、前の時も調子に乗って失敗したと己を律して、なのははシュテルの申し出を断るべく口を開いた。

「え、えっと、シュテルちゃ……」

「は、はい。何ですか？」

幾分か体を強張らせたシュテルに罪悪感を覚えたなのはは、薄く頬を染めたシュテルの顔を見て小さく喉を鳴らした。

本当に良いのか。

鼻孔を擽る石鹸の良い匂いを感じながら、そう自問自答する。是非もない。結果も満足に残せていないのに甘えることは、なのはは主義に反することだ。断腸の思いで首を横に振ったなのはは、シュテルに凭れ掛かっていた体を起こすと、真っ直ぐに視線を合わせて深呼吸した。

緊張した様子で居住いを正したシュテルも、楚々としていて可愛らしい。シュテルと正座で向き合ったなのはは、頭を過ぎった煩惱を頭を大きく振って振り払う。なのはの真剣な様子に首を傾げたシ

ユテルに目を奪われたまま、なのははシュテルの手を取った。
今日は駄目だ。自分でそう決めた以上、それは守られて然るべき
こと。

高町なのはの不屈の心は、一度決めたことは決して曲げたりなど
しないのだから。

「あの……でん……」

「はい？」

「でんわばんごう……おしえて……」

わたしは、駄目な子だ。

「さいてい……しんじられない……」と呟きながらも、宿泊して
いた部屋へと戻るなのはの足取りは軽い。宝物のように自分の携帯
電話を胸元に抱き、時折シュテルの番号の書かれた携帯電話のデ
イスプレイを眺めては緩む頬を押さえ切れなかった。

後悔はあるけれど、それ以上に、何時頃電話すれば良いかなと、
何を話そうかなと高鳴る胸の方が思考の大半を塗り潰して、罪
悪感の付け入る隙など欠片も残されていない。部屋の前で足を止
め、シュテルの名前を確かめたなのはは、万が一がないようにメモ
リに数度バックアップを取ってから扉を開いた。

明日から、頑張ろう。

だらしなく緩んだ表情を見せるなのはの胸元で、レイジングハー
トが一度だけ淡く光った気がした。

十八話（後書き）

この後シュテルさんがどうなるのか、大半の方の想像通りだと思われませんが、どうか心中に収めたままでお待ちください。

なのはさんが綺麗に締めた所為で、この後に入る筈だった落ちが蛇足気味になってしまったので次回に持越しです。絵的には兎も角数話前に書いたこの話のプロット見て「うわぁ、この子やることえげつないなぁ」と自分で思ってしまったのが敗因です。すずけふんけふん、誰だか知らないですけど、シュテル+風呂となれば彼女の独壇場ですからね。

もうね、「二万文字近く詰め込むなら先週と分けて二話投稿しろよ」とのお声が聞こえてくるようですが、今回悪いのはレイ八さんシスターズとアルフさんなので、きっと私は悪くない筈です。責任の一端は誘拐されたペットにもあると思うので、最悪私の負担は五分の一ですね。ユーノエ……。

失敗しても落ち込んでも、最終的に得をするのは魔法少女一人がいい。勝てば良かろうとはこういうことを言っただけでしょうね……。

誤字脱字はいつもの通りです。発見次第駆除していきます。皆様の感想を心よりお待ちしております。

十九話

昼間とは打って変わって、真夜中の旅館は異様な雰囲気に包まれていた。

義理の姉然り、深夜とは言え寢室間を移動する必要のある客に配慮して、廊下は小さな灯りにより照らされている。昼夜を問わず照明には困らない現代において、何もかも闇の中と言う状況の方が珍しい。

廊下の壁に手を添えながら、暗がりを避けるように一歩ずつ歩みを進めるシュテルには、逆にその中途半端な明るさが怖くて仕方がなかった。

旅館の中でバリアジャケットを着込む訳にもいかず、私服に戻ったシュテルの姿は唯の少女でしかない。施設内とは言えシュテルの身形で一人深夜に出歩くのは不自然極まりないが、幸か不幸か宿泊客の中には背丈も顔も声までそっくりな少女がいる。万が一従業員に出会ってしまった時は、覚悟を決めて「やはは」笑いで誤魔化せば良い話であるが、最大の脅威は従業員などではない。

なのはを見送った後、シュテルは直ぐにでも月村邸に戻って隠蔽工作をするつもりだった。

経験上、すずかの怒りは長くは持たない。一晩置いてしまえば元々大人しいすずかの面が顔を出し、頬を膨らませた表情で追及されることはあっても、恥かしい目に遭う可能性は低くなる。一風呂浴びようと考えていたシュテルだったが、今晚は慎重を期すべきだと思ひ直し、なのはと別れた後は回れ右して帰宅しようとしていた。そう、そのつもりだったのだ。

フェイトを介抱した際に慌てていたこともあり、シュテルは借りた浴衣の上からバリアジャケットを纏っていた。私服はレイジンググハートに保管していたので着替えは直ぐに済んだけれど、手元に残った装いは返却する必要がある。深夜まで持ち出した拳句、黙って

入り口に置いていくのではあまりにも心苦しい。

良心の呵責に耐え切れず、ぱつと規定の場所に戻して逃げ帰るつもりで足を踏み入れたシュテルは、入って一つ目の角を曲がった時点で後悔の念に苛まれていた。

「ぜ、絶対、近くにいます。た、端末を……」

「お、おち、落ち着いてください！ 高町なのはに気付かれます。わ、わたしが警戒してますから、な、何か来れば、たぶん、わかるはずです」

「し、信じてるよ、レイジングハート」

「お任せください！ 誰が来ようと私の感覚網に隙はありません！」

「うん、それで、き、来たら……どうするの？」

「……………」

駄目だ。この娘は頼りにならない。

懐中電灯以上でも以下でもない己のデバイスに見切りをつけると、シュテルは早歩きに切り替えて大浴場を目指す。素早く行って、素早く帰る。それ以外に現状を打破する方法がないのなら、最早頼れるのは自分の身一つのみ。視界が悪いこの場所では、足を止めている方が危険が大きい。

音を立てないように灯の下から灯の下へと移り進んでいくシュテルの姿は、何も知らぬ宿泊客が見れば旅館に有らぬ噂が立ち兼ねないほど様になっていたが、シュテルには体裁を構っていられる余裕がなかった。これが後に座敷童子として有名になるとは旅館側は元より、本人すらも知りえぬ事実である。

閑話休題、魔法の行使以上に精神力を擦り減らしながら、大浴場の暖簾一步手前まで差し掛かったシュテルの耳に、何処からか聞き覚えのある着信音が飛び込んできた。

流行物には疎く、最新のデジタル機器を店頭の硝子越しに眺めては瞳を輝かせる残念な少女、シュテルが知る曲の数は限られている。

趣味は料理と読書と公言して憚らないシュテルだが、その実、最新技術の塊には写真同様惹かれる感情を抑えられない。

本音を漏らして距離を置かれることを恐れ、ひた隠しにしてはいらぬものの、本当に最近聞いた曲ならば兎も角、シュテルにとっては三年前の流行曲など、とうの昔に記憶から抜け落ちてしまっているならば、今聞こえているのは、真実頻度良く聞く曲に他ならない。

「あ、もしもし、なのはちゃん……」

恐る恐る曲がり角から顔を覗かせたシュテルは、電話を取った声の主に気が付き、慌てて顔を引つ込めた。

道理で聞き覚えがある訳だと納得しながら、力無くその場に座り込んで息を潜める。どうして此処になどとは言わないし、シュテルとてこれくらいの危機は覚悟の上で旅館内部まで歩いて来た。恐らくは、シュテルが訪れそうな場所に張っていたのだろう。怒りなど微塵も感じさせないすずかの声に聞き耳を立てつつ、シュテルは撤退のタイミングを待ち続けた。

五感で優れるすずか相手に、接触する前に気が付けたのは幸運以外の何物でもない。そして、幸運に二度目がないこともシュテル自身が一番良く知っている。

罪悪感はあるけども浴衣の返却は後日にしようと思つて早々に見切りを付け、シュテルは煩く耳を打つ心臓を手のひらで押さえ付けた。

「うん、何だか眼が覚めちゃって、ノエルとファリンに付き添って貰って散歩してたの。忘れ物もしちゃったし……なのはちゃん？ ……うん……うん、そうなんだ。起きたら居なくなつててびっくりしちゃった……ううん、気にしなくて良いよ」

電話の相手は、先程部屋へと戻つたなのはだと思われる。

会話の内容を全て把握することは出来ないけれど、断片的な情報

から整理するに、部屋にはなのはと眠ったままのアリサが居り、ずかが戻るのを待っているらしい。シユテルにとっては、思いも寄らぬ援軍の登場である。

この電話によって、ずかが出歩いていられる時間は短くなった。幾らなんでも遅くなり過ぎれば、自分のことは一時的に棚に上げたなのはが別室の両親に相談し兼ねないからだ。

思わぬ助け舟に心中でなのはに感謝したシユテルは、十分もすれば引き上げるであろうと安堵して溜め息を吐いた。経験上、このくらいの距離ならばずかが常に把握していられる感覚網の範囲外。油断し過ぎれば気付かれることもあるだろうが、視界にも入っていないシユテルが感付かれる可能性は低い。

楽しげになのはと談笑しているずかの声に緊張を解しながら、シユテルは気配を消して機会を窺う。

「いま？ お風呂場の前……あ、ううん、先に寝てて。アリサちゃんも起きちゃうし、うん……直ぐに戻るね」

無意識に形作っていた拳を握り込むと、シユテルは口元を弧に歪めたまま摺り足で後退った。

ずかの帰り道を空けるように退避を終え、物陰に身を隠したシユテルは、照明の下に佇むずかの姿を視界の端に捉えた。

フェイトはのぼせて倒れ、なのははちよつと喧嘩しちゃった程度の軽さでフェイトを追い詰める。モニターで勝敗を見ていたからこそ丁度良く助けに入れたものの、今日一日の間にシユテルの心中が休まることは殆どなかった。

相変わらずそう都合よくことは進まないと諦めていたけれど、最後の最後に少しだけ運が回ってきたようだ。明日月村邸に帰って来たら全力で頭を下げようとは思えども、敢えて今、顔に満面の笑みを貼り付けたすずかに捕まるつもりはない。

なのはが帰ったことで本当に機嫌が良いのか、偽りの笑みかは知

らないが、どちらにせよ、暗がりでも独り微笑むすずかの姿はホラー以外の何物でもなかった。なまじ忍似の美少女なだけに、携帯電話で話しているだけでも妙な迫力がある。後ろめたいからそう見えるのか、普段通りに見えるすずかの様子が、逆にシュテルの恐怖心に拍車を掛けていた。

息を飲んだシュテルは、身を屈めてすずかの一挙手一投足に注意深く観察を始める。

怒っているのか、そうでないのか。それが今のシュテルには何よりも重要だった。

「でも、もう一回お風呂入ってから戻ろうかな……あはは、眠れなくなっちゃうもんね。うん、また明日の朝、覚えてるよ。うん、うん、そろそろ電話切るね。え……あ、忘れ物……？ うん、大事なものなんだけど、大丈夫……」

どうやら、遠目に見る限りそこまで機嫌が悪いように見えない。

安堵から胸を撫で下ろしたシュテルは、ついでに『も、もう行きましたか？ 目開けても良いですか？』と胸元でかたかた震えている。懐中電灯以下の愛杖も撫でてやった。戦闘面では兎も角、日常面においては引つ掻き回すだけ引つ掻き回して最後に全部放り投げるのがこの子のやり方。最初から支援は期待していない。

もう少しだからと言う意味を込め、服の上から軽く握り込むと、レイジングハートは母猫に縋る子猫のように手のひらにくっついてくる。追い詰められているのならいざ知らず、すずかの言動から若干の余裕を得たシュテルは大げさなレイジングハートの様子に苦笑した。

霧の騒動以来、すずかは心做しか強引にシュテルの血液を求めるようになっていた。

無論、乱暴に振舞われることはなく、潤んだ瞳で無言のまま見詰められる程度であり、それが嫌と言う訳ではない。ほんの僅かに心

を許した瞬間組み敷かれる運命だったとしても、一心不乱に求められることは、すずかの心だけでなく、穴の開いたシュテルの心にも充足感を齎してくれるからである。

何度も何度も耳元で名前を囁かれ、本能のままに力尽くで貪り付かれていると、世界中で自分だけが必要とされているように錯覚してしまう。心の底から求められていると、勘違いしてしまう。そんな行為に満たされてしまう自分が壊れているのか、或いは、魂まで吸い取られるようすずかの吸血に浮かされているだけなのか。

どちらにせよ、行為の最中は好き勝手に弄ばれてしまっているのだから、恥かしいものは恥かしい。負い目があるとは言え、そう何度も何度も良いようにされては、シュテルも反抗心の一つや二つ抱こうというものだ。

顔に掛かった髪を払うすずかを尻目に、シュテルが憎らしくも愛らしい己のデバイスに意識を向けていた、その時であった。

「……………もう、見付けたから」

すずかから目を離し、『ますたあ、何か言ってくださいよお』と剥れてしまった相棒をあやしていたシュテルの耳に、何故かその一言だけが鮮明に届いた。振り向いた瞬間、一直線にシュテルの体を貫く赤い眼光が目に映り、シュテルの背筋が凍り付く。

撤退。

すずかの言葉の意味を理解するよりも先に、頭がその二文字で埋め尽くされた。無意識の内にシュテルの体が本能に突き動かされて跳ね起き、即座に足元に飛行魔法を構築しながら駆け出すと、人目も憚らずに旅館の入り口目掛けて床を蹴る。

逃げれば、後々更に酷い目に遭うことは理解していた。しかし、足を止めて殊勝に名乗り出たとしても、結果的には逃げたのと同じ

くらい弄ばれることも理解している。ならば、せめて足掻いてからでも遅くはない。もしかすると、鎌を掛けているだけと言う可能性だってある。

希望を捨てるには、まだ早い。

踝の位置で展開を終え掛けている桜色の小さな羽を確認したシュテルは、走る足を止めてふわりと宙に浮かび上がった。デバイスが待機状態なので時間が掛かったが、魔力の消費も少なく、高町なのはに感付かれている可能性も低い。

後方に追跡者の姿が無いことを確認したシュテルは、安堵の溜め息と共に額の汗を拭った。

「それでは、さらばです……っ!？」

捨て台詞を吐いて飛び去ろうとしたシュテルの腰に、正面から何かがぶつかった。

何事かと下に目を向けて見れば、純白のヘッドドレスとロングヘアが、両手を広げてシュテルの下半身を拘束していた。深夜であることに配慮して「確保しましたー!」と起用に小声で叫んだファリンは、細腕に見合わぬ怪力でシュテルを床に下ろすべく力を込めている。

玄関の影から飛び出してきたファリンの様子から察するに、始めからシュテルが一度旅館に戻ることは読まれていたらしく、すずかかノエルが知らないが、合図を受けて入り口に待機していたようだった。

どうして肝心な時に限って完璧な仕事をしてしまうんだ。

紅茶を零したり、皿を割ったり、何も無いところで転んだりと落ち着きのない普段の彼女を思い浮かべ、心中で悪態を吐いたシュテルは必死の抵抗を続けた。仮にも主人姉妹と並び、月村家のお嬢様として扱われているシュテルを傷付けまいと、ファリンが手加減している今しか脱出の機会はない。

取り逃がせばどのような末路が待っているのか理解しているのだろ。」「こ、困ります！ 捕まってくださいーい！」と、上目遣いに涙を溜めてシュテルの腰にしがみつくファリンには同情を禁じえないが、シュテルとて捕まれば色々なモノを奪われることになるのである。主に衣服とか、血液とか、貞操とか。大人しく捕縛される訳には行かない。

そう考え、両手でファリンの頭を押し遣りながら踏ん張っていたシュテルの背に、何かが触れた。

背中 of 弾力を確かめるように軽く添えられた誰かの指先は、つつーっとシュテルの背筋をなぞり終えると、ゆつくりと、焦らすように臀部へと移っていく。堪らず「んっ……」と甘い声を漏らし力を抜いてしまったシュテルを好機と見たファリンと後ろの誰かの手によって優しく床に降ろされ、シュテルは忽ち前後から四本の腕により拘束された。

「お帰りなさいませ……シュテルお嬢様」

「た、ただいま帰りました。の、ノエル、ファリンも」

「どうしてお顔を逸らされるのか分かりませんが、こんな遅くまで出歩かれて、さぞかしお疲れになられたことでしょう。旅館側に話は通してありますので、今晚は私共の部屋でごゆっくりお休みください」

「け、結構です。自力で帰り、あっ……や、ん、う、あ……わっ、わかりました。ノエルの……っ、言う通りにします。泊まりますから、あっ、や、やめて……」

「失礼致しました。私はむっつりだそうですので手が勝手に……どうか寛大な心でお許しください。それはともかく、ご理解頂けたようで嬉しいです。すずかお嬢様もお喜びになられますよ」

いつぞやシュテルに言われたことを根に持っているのだろう。

シュテルの服の裾から滑り込ませた両手を引き抜くと、悪びれた

様子もなく言い放ったノエルをシュテルは恨めしげに睨むことしか出来なかった。

ノエルとファリンに両脇を固められて立ち上がったシュテルが未練がましく玄関の外の暗闇を眺めているのを、ファリンは苦笑しながら、ノエルは若干恍惚としたような表情で口元を隠したまま連行していく。

「ちよろいな」とでも言いたげな、慇懃無礼さが透けて見える態度でシュテルの頭を撫でるノエルの行為に耐え忍ぶ。きつと、きつとまだ好機が、そう考えた矢先、首から下げられたレイジングハーフトがノエルの手によって取り上げられた。

「お預かりします。湯浴みには邪魔でしょうから」と告げたノエルの表情をまともに見ることが出来ず、シュテルは俯いたまま羞恥に顔を染める。悔しそうな顔をすれば思う壺だと分かっている、僅かな希望をちらつかせて弄ぶノエルの精神的な攻め口に耳まで朱に染まり、恥かしさから涙が浮かび上がってくる。

自業自得である以上耐える他に方法が無いとは言え、「どうかなさいましたか？ お顔が赤いですよ」とシュテルの顎に手を添えて羞恥に染まり切った顔すら晒さしに掛かるノエルに、シュテルの心は折られかけていた。

音も無くデジカメを取り出したファリンと、今までに見たことが無いくらい嬉々とした表情でシュテルのおでこに己の額を当てているノエル。無邪気な筈のファリンの行為が、誰よりも的確にシュテルの心抉っていた。

「……ごめんなさい」と消え入るような声で謝っても、感覚器官の誤作動か、二人の耳には届いていない。深夜に旅館の廊下で、メイド二人に辱められると言う、魔法よりも受け入れ難い現実に打ちのめされていたシュテルが、遂に羞恥の限界を迎え両手で顔を覆い隠したまま座り込んでいると、廊下の奥からゆっくりと足音が近付いてくるのが分かった。

見たくない、助けて、と先程までの弄ばれていたことも忘れてノ

エルに縋り付いたシュテルの肩に、冷たい少女の手が添えられた。思わず跳び上がったシュテルの体に沿ってお腹まで回された両手は、壊れ物でも抱くように慎重にシュテルの体を引き寄せ、背後の人物と体を密着させる。

震えるシュテルの肩に頭を乗せ、耳に唇が届くほど近くまで寄せられたすずかの口から、熱い吐息が掛かった。

「……寂しかったよね。ごめんね、置いて行っちゃって」

「……ご、ごめ……な、さい……すず、か……」

「どうしてシュテルちゃんが謝るの？ シュテルちゃんとなのはちゃん以外、どうしようもないことなんだから、仕方がないよ。それより……シュテルちゃん、体、震えてる……お外、寒かった？」

こくこくと壊れたように頷いたのを確認すると、すずかは心配そうにシュテルの手を引いて立ち上がらせた。

言葉だけ並べれば差して気に留めていないように聞こえるだろうが、ちらりと横目で確認したすずかの瞳は未だ爛々と赤い輝きを放っている。態度や言動がどれだけ柔らからうと、臨戦態勢に入っていることは明白であった。アリサのことや今日のことや芋蔓式にすずかの耳に入ったのであれば、有無を言わさぬ威圧を放っているこの状態のすずかも、致し方ない。

追従する二人の従者の手にはいつの間にもやら入浴セットが用意されておき、ノエルが素知らぬ顔で両手の上に乗せているのは、間違いない。旅行前にシュテルと共に準備したすずかの予備の下着と寝巻きであった。

すずかが涼しい顔で浴衣を着ているのだから、子供用のそれを着れる人間はシュテル以外には居ない。話の種にでもなればと茶目つきを利かせて、若干大人びた物を選択したが、まさか自分の首を絞めることになるうとは。

シュテルにも見えるように態とらしく広げて見せ、「今夜は撮影

会ですね」と呟くノエルを恨むのは筋違いだとしても、『ですね！』と明るい声で相槌を打った裏切り者には、後で制裁を加えようとシユテルは強く決意した。

自分も浴衣を着るからと、必死に視線で訴えるシユテルの意図を正確読み取りながらも、微笑を浮かべたまま首を横に振るノエル。諦めきれずに食い下がっていたシユテルの手を、さすがに軽く引いた。

「一緒にお風呂入ろう？ もう遅いから、きっと誰も入ってこないと思うけど、その方がシユテルちゃんにとっても……良いよね？」

劣情に歪んだ真つ赤な瞳に見詰められたシユテルは、生娘然と顔を赤らめて頷くことしか出来なかった。

「ん？ いまなんか、変な声が聞こえたような……」

湯気が立ち込める浴槽の傍で、手拭い一枚を首に掛け仁王立ちしていたアルフは、髪の毛から突き出した犬耳をひくひくと動かして周囲の音を探った。

フエイトの安眠と、自分の疲弊した精神の回復に努める為に一直線に帰宅したアルフは、フエイトをベッドに寝かせた後、真つ先に湯を沸かしていた。胸糞悪いような、悲しいような、そんなぐちゃぐちゃになってしまったた気持ち、兎に角吹き飛ばしてしまいたかったからである。

主に似たとは考えたくはないけれど、生来他人の気持ちや難しい理屈を細々と考えるのは得意ではない。プレシアがどんな目的でジユエルシードを集めていようが、フエイトの出生にどんな秘密があるろうが、笑い飛ばしてやる覚悟でいた。

それなのに、現実はいつもアルフの思い描いた最悪の斜め上を行く。

例えシュテルの言葉が真実だったとして、アルフの迅速な行動でどうにか出来る問題なら、とっくにそうしていた。プレシアを殴って全部終わるのであれば、シュテルに頭を下げて時の庭園に殴り込んでいられる。しかし、それはアルフの主人、フェイトの望む所ではない。

使い魔であるこの身は、フェイト・テストロッサの為に。

フェイトが母の笑顔を望むのであれば、アルフもその手助けをせざるを得ないのだ。信頼の先に、愚直なまでの献身の先に、フェイトの求める見返りが無かったとしても。

そこまで考えたアルフはすっぱりと己の思考を断ち切ると、唐突に衣服を脱ぎ捨てた。うだうだ考えていても仕方がない。真実がどんなに残酷だろうが、どんなに過酷な運命が待ち受けていようが、アルフの役割は変わらないのである。

ならば、より一層気合いを入れてフェイトの体に加え、心まで守ってやればいい。

「ちよつと元気出てきた！」と、風呂にも浸からず全裸で握り拳を作っていた時であった。聞こえる筈のない、先程別れた少女の声が届いたような気がしたのは。

きよろきよろと疑問符付きの表情でタイル張りの浴室の隅を見回していたアルフの頭上から、甲高い声が掛かった。

「えっ、僕には聞こえなかったけど……って、いい加減前隠してよっ！ タオル巻くって言うから目瞑ってたのに、意味ないじゃないか！」

「なに騒いでんのさ。フェイトが起きるから静かにしてなよ。それに、タオルなら巻いてるじゃないか……ほら」

「み、見せないでっば！ そもそもそれタオルじゃないし、ぜんぜんっ隠れてないっ！ 僕も上がるからね！」

「あんだなんか一日中裸みたいなもんだろ？ いいからおいでつて、背中くらい流してあげるからさ」

「へ、変なこと言わないでよ、変身してるだけで服は着て……着てるよ……あれ？ ぼ、僕、きて……る……よね……？」

シヨツクを受けた様子で固まってしまったユーノを湯の張られた風呂桶に放り込むと、アルフも浴槽に足を入れ、体を沈めた。

色々ともやもやした物を抱えながら、上空で帰ったのがいけなかったのか。アルフの頭の上で丸まって眠っていたユーノは、元の持ち主へ返却されることなく、乗っけていたアルフ自身にも気付かれずにテストロッサ宅へと潜入を果たしていた。虎穴に入らずばとは言うものの、魔力残量零のユーノは虎子どころか子犬にもすら負け兼ねない。

目を覚ましたユーノは素早く自らの置かれた絶望的な状況を理解すると、部屋の家具に潜って威嚇する他なかった。

仮にも敵のアジトを突き止めてしまった以上、能天気そうなアルフとは言え軟禁くらいするのではと慄くユーノを他所に、アルフはユーノを苦もなく椅子の下か引き摺り出すと、短い手足でもがくユーノを顔の前まで持ち上げくんくん鼻を動かし、眉を顰めた。

アルフも含め、暗く視界の悪い深夜の森林を駆け回ったユーノは土や泥に塗れている。

数秒の間思案するように首を捻ったアルフだったが、二、三度まな板の上の鯉状態のユーノを引つ繰り返した後「不合格」と呟き、脱ぎ捨てた衣服と共にユーノ丸めた。落ち着かない香りに包まれ、顔を赤らめながら喚き散らしていたユーノを風呂場の前で頭に乗せ、あれよあれよと言う間に今に至る。

泥塗れになったのはちよろちよると逃げ回ったユーノの所為であることは誰の目にも明白であったけれど、元々喧嘩腰で戦いを挑んだのがアルフであることもまた事実であった。アルフとしても今からユーノを返しに行くのは面倒、元い、既に床に着いていると

予想される相手側の迷惑も考慮し、一泊くらいさせてやることは吝かではないが、だからと言ってフェイトが寝泊りする我が家を汚されては堪ったものではない。

一人では浴槽の扉も開けられないであろうユーノの姿を見兼ね、こうして一緒の入浴と相成った訳である。決して後から別に洗うのが面倒だから入りながら洗えば良いやとか、そんな横着した理由では断じてない。

風呂桶の中、暗い表情でぺたぺたと自分の体を触っているユーノを驚掴むと、アルフは桶のお湯を取り替え、洗浄を開始すべくユーノを再び頭の上に乗せた。

「何も一緒に入らなくたって、体くらい洗え……あ、やめ、は……放せーっ！」

「んー……ははあん、いつちよ前に色気付いてんのかい？ まあ、あたしが美人だからそれもしょうがないんだけど。泥だらけになったのはあんたの所為でもあるんだから、我慢しなよ。それに、一人より二人の方が楽しいだろう？」

「そ、そう言うことじゃなくて、ぼ、ぼく、い、一応、おとこ、だし、アルフだって、恥かしいとか、慎みとか……」

「あはは、自分の形見てから言いなよ。ちっちゃいことばかり気にしてるから、人間形体にもなれないんじゃないか。いつまでもご主人様に負んぶ抱っこだと捨てられちまうよ」

「だから僕は使い魔じゃなくて……はあ、もう……うん、ぼくもがんばるよ」

「うんうん、素直でよろしい。よしっ、物分りのいい子は特別にお姉さんが洗ってあげよう！」

「やめてーっ!？」と悲鳴を上げるユーノは、風呂に何かトラウマでもあるのか、酷く脅えているようであった。

アルフとて伊達にフェイトの身の回りの世話を一手に引き受けて

いる訳ではない。使い魔としての避けられぬ宿命か、純粹な人間ではないので味覚こそ割とあれではあるものの、炊事以外はリニスの見様見真似で何とか遣り繰り出来ている。そこまで脅えられては心外も甚だしい。

不適な笑みを浮かべ、泡塗れな手をわきわきと動かすと過剰な反応を示すユーノのリアクションを一頻り楽しんだアルフは、飽きると同時に無慈悲な侵攻を開始した。殺されると言い出し兼ねない程硬く瞼を閉じたユーノだったが、予想に反して丁寧で繊細なアルフの慣れた手付きに次第に力を抜いていく。

二年の間一緒に生活していたこともあり、今では何処を洗おうが基本的にノーリアクションなフェイトと違って、一々大げさな反応を示してくれるユーノの相手は新鮮で退屈しない。何故か矢鱈とガードの堅いお腹方面を力尽くで洗い始める頃には抵抗する気もなくなったのか、ぐったりとしてしまったユーノ。

泡塗れの毛でたてがみを作って遊んでいたアルフは、燃え尽きたような顔で玩具にされているユーノに声を掛けた。

「ユーノ……あんたって学者なんだろう？」

「う……誰に聞いたか大体想像は付くけど、そんなに立派なものじゃないよ。あつ、だ、駄目だって、引つ掛かっている引つ掛かっている！ よ、良く言って考古学者の卵、かな……出だしから躓いちゃったけどね」

ジト目で睨むユーノを再び泡の中へ沈めると、アルフは浴室の天井を見上げて溜め息を吐いた。

思えばプレシアのとぼちりを諸に受けているのは、目の前の小動物に他ならない。ユーノが発掘したジュエルシードが輸送中に事故に遭い云々、と言う話はシュテルと共に空間モニターで観戦していた際に聞いている。本当にただの事故ならば、不憫には思えども運が無かったで済む話。しかし、都合良く回収に現れたフェイトと

アルフの存在がその可能性の低さを如実に表していた。

輸送船から何処かの誰かによる魔法行使の痕跡でも見付ければ、管理局の足も早まるだろうけれど、シュテル曰く腐つても大魔導師自他共に認める天才魔導師プレシア・テストロツサは、管理局に易々と掴まれるような尻尾は持ち合わせていないらしい。

桶を引つ繰り返し、綺麗な湯を掛けて小さな身体に付いた石鹸を洗い流す。気持ち良さそうに目を細めているユーノを見下ろしながら、そう言えば深く考えないで人用石鹸で洗つてたことに気が付いた。

我が家にはフェイトと共用のそれ以外には、犬用のシャンプーしかない。適切かどうかは兎も角、折角人間形体で入浴していると言うのに、傍で犬用の洗剤を使うのは少し抵抗がある。

ドッグフードは大丈夫なのに何でかなあと首を捻り、アルフはユーノを労うように肩だと思われる部分を揉み解してやった。

「あー、どんまいどんまい。文句なら鬼ば……んんっ、あんたの船事故らせた運命の女神様にでも言うんだね」

「や、やめてよ。凝ってないしっ、いたた……女神様をどうこうするより、アルフ達がジュエルシード返してくれば僕は……」

「それとこれとは話は別。あたしらも生活賭かってるからさ。で、聞きたいんだけど……ジュエルシードって本当に願えば何でも叶うのかい？」

「……遺跡のつ、文献の通りならね。でも、正しく叶ったところなんか見たことないよ……なんで行き成りそんなこと聞くのさ？」

疑いの眼差しを向けてくるユーノから目を逸らし、絞った手拭いでユーノの身体を拭っていく。

シュテルの言っていたことを疑う訳ではないけれど、遙か古に滅んだアルハザードに向うことがプレシアの目的と知ったところで、ジュエルシードに対して無知なアルフでは取れる対応に限られてし

していたから、ユーノは頭の固い奴という印象が強かった。

モニターで観戦しながら色々と言葉を交わしたのもあるだろうが、帰宅して目覚めたユーノが部屋を見渡し、「二人で住んでるの？」と尋ねられてからは、態度の軟化が著しい。例えそれが同情による困るものだったとしても、怒りを感じるほどアルフは狭量ではない。

寧ろ、敵の家庭環境に同情できるくらい甘ちゃんを相手にする、此方の手が鈍ると言うもの。フェイトには遠く及ばないものの、どいつもこいつも良い子ばかりで再び対峙した時のことが気掛かりで仕方がなかった。

湿っぽくなつた思考をジュエルシード関連へと無理矢理引き戻したアルフは考える。人間に制御は無理でも、人外レベルの魔力量と知識を併せ持つプレシアを同じ尺度では測れはしない。術者の技量に関係なく疑問は、もっと別なところにある。

いよいよアルフは話の本丸へと切り込んだ。

「時間は？」

「？ ……じかん？」

「そ、時間。昔はあつたけど、今はなくなっちゃった場所とか……行けるかい？」

「……それは、流石に無理、かな。時をどうこうするって遺失物の噂は良く聞くけど、どれも似たり寄ったりだよ。ジュエルシードにだって叶えられる願いの限度がある……と思う」

前例なんてないからね。

そう付け加えたユーノの声は、何処か自信なさ気であつた。それも当然だろう。尋ねたアルフ自身、肯定的な返答が返ってくるなど期待していない。精々、自分の認識が他人と合っているかどうかの確認が良いところだ。

失われた秘術の眠る地、などと言う仰々しい呼び名が示す通り、その名を知る魔導師の間では存在すらも怪しまれる御伽噺の産物。

とは言え、プレシア・テスタロツサが確証を持って目指している以上、シュテルの言葉通り遙か昔に滅んでいるか、はたまた今尚次元世界の狭間を漂っているのか知らないが、存在していた可能性は限りなく高い。

既に遺失した古代世界、到達するには空間だけでなく、時間の移動も必要になるとシュテルは言っていたけれど、ユーノの言う通り、人間に出来ることには限度がある。魔導師の最高峰に君臨するプレシアがどれ程膨大な力を秘めた遺失物を用いたとしても、時間の壁を超越できるとは考えられなかった。

異常なまでにプレシアを警戒していたシュテルを今思い出して見ても、買い被り過ぎじゃないかと思わずには居られない。フェイトの身を案じれば、ジュエルシードは集めざるを得ないけれど、渡し過ぎた結果、次元振の巻き添えを食らうのは心底ごめんである。

アルフは浴槽の中で両手を上げ、身体を伸ばすと、ユーノを風呂桶に戻して言った。

「だよねえ。あーあ、やんなっちゃうなあ、まったく」

「……深くは聞かないけど、やめときなよ。誰にも完全な制御なんて出来やしない。なのはや、君の主人ほどの魔力量の持ち主だつて、手を出したら危険なんだ」

「気が合うじゃないか。あたしもそう思う。石ころなんかに願いやえて貰って何になるのさ。自分で……何とかして見せるよ」

改めて覚悟を決めたように拳を握り締め、押し黙ったアルフを数秒の間見詰めたユーノは、それ以上何も言わずに桶の中で身体を伸ばした。

複雑な事情があるのだらうと察して追求しなかったユーノの厚意に、今は甘えさせて貰うとしよう。五分ほどそうして湯に使った後、アルフは桶を抱えて湯船から上がり、身体を拭いた。

これから先、何れは管理局が到着することは想像に難くない。そ

うなれば白い魔導師、高町なのはの相手以上にジュエルシードの確保は難しくなる。集められる内に数を揃えなければ、プレシアの反感を買う。アルハザードばかりに感けては居られないのだ。

ユーノを拭い終え、浴室の扉に手を掛けたアルフの頭に、ふと、シユテルの言葉が思い出される。

可能です。

シユテルは、アルハザードへの到達に首を捻ったアルフに対して、確かにそう言った。

鉄面皮を気取っていても、その内心は恥かしがりで自信家とは正反対の位置でごんまりと佇んでいるような少女である。そんなシユテルが断言するからには、彼女もまた、プレシア同様に時間移動を可能にする何かしらの確証を持っているのだろう。

入浴前、白い魔導師とシユテルの関係をユーノに尋ねても、血縁関係は疎か、ジュエルシードが飛来してくるまでは顔も合わせたことがない、全くの他人らしい。元々は、否、今も半分は狼であるアルフは、すんすんと鼻を動かし、シユテルから感じた違和感を振り払う。

見た目も似通っている部分が多く、体臭を含めた匂いも区別が付かないくらい近い二人に、何らかの血縁関係があると踏んでいたアルフは、ユーノの言葉に肩透かしを食らった気持ちで居た。

どうしても違和感が拭えないアルフは、もしかしたらフェイトと同じ生まれか、或いは生き別れの、と思考を巡らせ、一つの可能性に気付き、バスマットの手前で足を止めた。

「……まさか、ね」

「どしたの、アルフ？」

「ん、何でもないよ。あ、言っとくけど寢床は共用だからね。寢相悪くても文句言うんじゃないよ」

「い、言わな……って、そこは別にしてよ!? タオル一枚敷いてくれればそれで良いんだから!」

「はいはい、寂しいこと言っていないで体乾かす……あー、ドライヤー持てないか。ほら、乾かしてあげるからこっち来な」

逃げ出そうとするユーノを鷲掴みに捕らえながら、アルフは荒唐無稽な考えを打ち切ってドライヤーのスイッチを入れた。

やっぱり難しいことを考えるのは自分向きではないな、と頭を空にし、「あつつい! あつついよ!」と悲鳴を上げるユーノをわしやわしやと撫で回す。最近はフェイトと一緒に寝ていたので、今日は少し寂しい思いをすると危惧していたが、丁度良い連れ合いが来た。

捕食者のように目を細めると、アルフは乾いたユーノを肩に掛け、寢床を指すのであった。

期待しているように潤んだ瞳で見詰められ、すずかの背にぞくぞくと得も知れぬ感覚が走った。

既に入浴を終え、ノエルとフェリンの部屋に辿り着き、布団の上でシュテルに覆い被さったまま十分が経過している。大浴場では何もしてこないすずかの一拳手一投足にびくびくと脅えていたシュテルも、押し倒された瞬間に覚悟を決めたのか、羞恥に顔を朱に染めながらも自ら肩を肌蹴っていた。

入浴直後は、すずかがなのは達の部屋に帰ると思っていたのだから。シュテルが隠れて聞いてたなのはとの電話の内容が、実際はフリンからのものだったと知った時のシュテルの愕然とした表情は、すずかの琴線を激しく掻き乱していた。

先に寝ていて欲しい旨は伝言済みであると告げたノエルの追撃により、寝巻きの裾を悔しげに握ったシュテルに、すずかの脈打つ鼓

動が強くなる。抵抗も空しく着せられた、すずかのふりふり寝巻きを、頭の中で何度力任せに引き裂いたか分からない。視線と荒くなっていた呼吸を、熱を帯びた胸に手を当てて整えると、すずかはちらちらと此方の様子を窺っては、時折こくと唾を飲み込むシュテルに顔を近付けた。

もう、我慢できない。

何度目かの我慢の限界を寸前のところで抑え込み、すずかは漸くシュテルの肌に触れた唇を気力で離し、「あつ……」と艶やかな声を漏らしたシュテルの頬を優しく撫でた。

シュテルの裸体を目の当たりにしながらもすずかが我慢していたのは、単にシュテルから感じる他の人の匂いに気持ちが悪えてしまったに過ぎない。どうせなら全身隅々まで自分の手で洗い清め、真っ白になったシュテルを自分の色で汚してしまいたい。それ以上でも以下でもなかった。

それも、つい先程までの話である。

部屋に着いたら理性が振り切れるだろうなと自分でも自覚していたのに、現実はずすかの歪んだ理性がすずかの本能を必死で繋ぎ止め、今尚シュテルの体へ牙を突き立てることを許可しないでいた。

早く、早くと物欲しそうな目を向けてくるシュテルは可愛いくて仕方がない、それ故に我慢に我慢を重ねた今の感情を開放してしまえば、その可愛らしい姿を意識の無い状態へと易々変えてしまうだろう。けれども、きつとこのどろどろと体の内で蠢く欲求は、小出しには出来ない。

すずか自身、一秒でも長く楽しんで居たい気持ちと、一秒でも早く貪り付きたい気持ちを処理し兼ねていた。

「……逃げないの？」

「悪いことした自覚は、ん、あるから……」

恥かしそうに瞳を逸らし、いつもとは違い積極的にすすかへ身を寄せてくるシュテルに、すすかの理性は決壊寸前まで追い詰められた。

殊勝な言葉とは裏腹に、あざとい手段ですすかの理性を切り崩しに掛かるシュテル。純粹無垢だったと過去形で言ってしまうは語弊があるけれど、純粹無垢なままのシュテルにこんなことをさせているのは間違いなくすすか自身である。

罪悪感と共に、シュテルを汚してしまったと言う歪な喜びがすすかの心を満たしていく。

瞼を閉じて奥歯を噛み締め、明日の天気でも考えてやり過ごそうとするすすかの気持ちを知ってか知らずか、シュテルはすすかの手に自らの手を重ね、指の一本一本を絡めながら撫で上げていく。熱い吐息がすすかの耳を刺激し、凜々しさとはかけ離れた、すすかしか知らないシュテルの蕩け切った表情が瞼の裏に浮かび上がって離れない。

シュテルを前に目を瞑る愚考に気付かされたすすかは目を見開き、余裕ぶって作り上げた張りぼての笑顔で微笑んで見せる。しかし、己の行為の危うさなど欠片も考えていないシュテルは、すすかが瞳を閉じていたのが単純に寂しかったのだろう。

普段はツンと澄ました表情を喜色に染め、興奮に薄らと赤らんだ白い首筋を「んっ」と突き出して見せた。今度は逆に瞼を閉じて身を委ねたシュテルに、すすかは自分の顔が紅潮していくの感じ取り、宥めるように鋭さを増した牙を舐める。

思わずにやけていく顔を見られまいと、シュテル首に顔を埋めたすすかは、重ねた手のひらを布団へ押し付け、絡めた脚を強く押さえ込んだ。

シュテルに主導権を握られる訳には行かない。

毎晩ではないとは言え、すすかの血を求める本能の捌け口にされてきたシュテルとて、ある意味で行為に慣れて来ている。シュテル

に喜んで貰えるように技術を磨いてきたはずか同様に、衝動を我慢するずかを誘う術にシュテルは長けていた。

蜜に誘われる蝶のように、普段通りに甘美な血液に手を伸ばせばどれだけの至福が待っているだろうか。しかしながら、今晚はいつもとは状況が違う。

留守番の件、アリサの件、更には発見されたにも関わらず逃亡と立て続けに負い目を感じているシュテルは、理性が飛んだすずかに自らの意識が飛ばされることを少なからず期待している。

掴まった際に、叱られた子供のように脅えて謝ったシュテルだけですずかの溜飲は充分に下がっていたけれど、襖の前で正座してカメラを構えているノエルはその程度では生温いらしく、今も食い入るような視線ですずか達を見詰めていた。

「わわわ」と恥かしそうに目を覆いながらも指の間から覗き込むノエルの妹と、『出してください！ 約束が違います！』とフアリの服の中から断末魔にも似た悲鳴を上げる他一名は別としても、可愛いシュテルが見たい気持ちはすずかも同じである。

すずかは真つ赤な舌と突き出すと、驚くほどに熱を持ったシュテルの首筋をちろりと舐め上げた。

「ひゃん！」でもなく「ひっ！」でもなく、「あっ……あ、あっ……！」と待ち侘びたように妖艶な声に脳の奥底を犯されながら、すずかはシュテルを更に追い詰めるべく耳元で囁いた。

「ずっと、こうされたかったんだよね……シュテルちゃん」

「そつ、そんなこと……な……あ、や、あつ……」

「浴衣なんか別に今日返さなくて良いのに、どうして戻ってきてくれたの？ 本当は、捕まえて……こうして欲しかったんでしょ？」

「知らない、わ、わたし、しらなっ……あ、ああつ！ んっ……ああっ……」

牙の先端がシュテルの肌に沈み込み、すずかの耳元で甘い悲鳴が上がった。

いつもよりも大きくて上擦ったシュテルの声に、すずかの心臓もとくんとくんと鼓動が激しさを増している。切羽詰った様子で絡まった指を振り解き、すずかの後頭部へと回されたシュテルの手がすずかの理性を溶かし尽くし、残された理性の大半も耳元を擦る熱い吐息に食い潰されいく。

それでも、すずかの牙がシュテルの皮膚を破ることはなかった。

シュテルの切迫した声が落ち着くのを待って、薄皮一枚で止めていた牙を抜くと、すずかは顔を紅潮させ瞳いっぱい涙を溜めたシュテルへと微笑み掛ける。

浴衣のことが真実だろうが、そうでなかるうが、最早どうでも良かった。少しでも思い当たる節があつてシュテルが恥かしがってくれるのであれば、それで良い。本来であれば一直線に帰った筈のシュテルと、こうして誰よりも近く、深く触れ合えるなら、詰まらない嫉妬心など簡単に捨てられる。

理性など、もう欠片も残っていない。

今すずかを動かしているのは間違ひなく本能であり、すずか自身、激しく熱せられた頭の所為で何も考えられないでいる。唯一体だけが、血液よりもすずかの心を満たす何かを貪り尽くそうとして、シュテルを弄んでいた。

「私が怒つてると思つて、気にしてくれただ。びくびくしながら玄關から入つて来てくれた時、見付けてつて言つてるみたいで……可愛かつた」

「い、言わないでっ、あつ、んっ!? んーっ、んっ、ん……」

大きく開いたシュテルの口へ人差し指と中指を挿し入れると、すずかはその小さな舌を抓んで言葉を封じる。

すずかの突然の行動に驚いたのだらう。排出しようと世話しなく

舌を動かすシュテルの頭をもう片方の手で撫でたすずかは、口内を傷付けないように最新の注意を払いながら敏感な上顎をゆつくりと擦り、前後に動かした。舌や内壁を擦る度に「んっ、んっ」と、顕著な反応を示すシュテルが可愛らしくて、すずかもお預けを喰らった犬の如くシュテルの首を舐めて我慢を続けた。

未知の感覚に戸惑いながらも、慣れか、或いは諦観か次第に抵抗を弱めたシュテル。その小さな舌を抓み、時には先端を擦り、口内を好き勝手に蹂躪していたすずかは、最後に指の腹で歯茎をなぞり終えると口内から指を引き抜いた。

苦しめるのは本意ではないので、様子を見つつ手加減していたけれど、矢張り流されてしまっていたのだろう。荒い呼吸と潤んだ瞳で非難の意思を示すシュテルに、すずかは「ごめんね」と謝りつつ風呂上りで艶やかな髪へと反対の指を通した。

嫌われたくないから、もう止めておこう。

そんな気持ちも、ほっとした様子で息を吐いたシュテルを見ると、段々別な感情に変化していくのだから不思議なものである。

てらてらと唾液に濡れた二本の指をシュテルの目の前まで持っていくと、すずかは見せ付けるように舌を這わせた。

「だ、だ……め……き、きたない、よ」

「でも、濡れたままだとシュテルちゃんに触れないよ？」

「わ、わたしが、かわりに、ふくから……」

「……シュテルちゃんが、代わりに、舐めてくれるの？」

一瞬目を見開いたシュテルだったが、すずかの爛々と光る赤い瞳に目を向けると、顔を赤らめたまま小さく頷いた。

何をさせているのか、何をしているのか。自分自身でも分からなのまま指へと吸い付いたシュテルに、すずかも顔を紅潮させながら、良く出来ましたと言わんばかりに優しく、丁寧な髪を梳いていく。生まれて初めて感じる程強い背徳的な感情に突き動かされ、すずか

は吸血行為から逸脱した己の所業に気が付けない。

「綺麗になつたら、吸つてあげるね」と耳元で囁くと、すずかは背中に回されていたシュテルの手に引き寄せられて体を密着させた。

吸つてあげるとは、何て自惚れた言葉だろう。所詮吸血鬼、人外の類でしかない自分は、シュテルに血を分けて貰っているのである。本来であれば吸わせてと懇願する立場である筈なのに、唯々諾々と従うシュテルを見ていると、この娘を独占しているんだと勘違いしてしまう。

寝巻き越しに感じるシュテルの心臓の鼓動に、薄らと付けた首の傷に、すずか自身も目が離せないほど我慢は限界を迎えていた。

もう、いいかな。

誰にでもなく問い掛け、勝手に了承を取つたすずかは、一心不乱に指に舌を這わせていたシュテルの首筋に顔を寄せると、不意打ち気味に牙を突き立てた。

どちらにとつても待ちに待った感覚に、お互いがお互いに声にならない悲鳴を上げる。軽く噛まれているのだろう。僅かに痛みを訴えた指のこともお構い無しに牙を押し込んだすずかは、口内から再び指を引き抜くと、中空へと彷徨わせていたシュテルの両手を布団の上へ拘束し、身動き一つ取れないように組み敷いた。

寂しい思いさせて、ごめんね。

そう言外に告げるつもりで、シュテルにされたように絡めた指をゆっくりと撫でながら、すずかは僅かに残っていた意識を完全に埋没させ、目の前の獲物に集中する。

最後にすずかの視界の端に映つたのは、カメラ係を妹に押し付けて握り拳を作っているノエルと、文句一つ言わずにシャッターを切ったり、三脚立てたりと忙しいファリンの姿であった。

十九話（後書き）

やっちゃった！ やっちゃった！ 好き勝手やった結果がこれだよ！ すすかさんの出番を犠牲にし続けた結果がこれだよ！

まあ、騒ぐほどあれな描写でもないと思いますけど、私の稚拙な文章力なんて健全云々以前の問題ですしね。

色々悩んだんです。風呂場か、部屋かとかそんな小さいことで悩みました。元々プロットの段階で書いてあったのが『なのはさんに電話掛けながらちゅーちゅー』だったので顔が青褪めましたよ。

流石にどん引きされるだろうなあ、と思って修正したので大分面白くない淡白な表現になってると思いますがご了承ください。いやあ、杞憂ですんでほっと一安心ですよ。

今回は完全なアルフ回だったと思いますが、流石にアルフの全裸は露骨だったと反省しております。何気に全話通して最大の文章量なので、犬耳に対する執念が窺えますね。

誤字脱字は随時修正掛けていきます。皆様の感想を心よりお待ちしております。

二十話

月光を背負う金色の影に対し、高町なのはは周囲に展開した魔法弾で迎え撃った。

前回の戦闘を踏まえて練習を重ねた結果、同時展開出来る射撃魔法の数は八まで増やすことに成功している。その代わりと言っては何だが、機動力に長けたフェイトに命中させられる自信も無ければ、撃ち込む覚悟もない砲撃魔法の練度は芳しくない。

両方練習して器用貧乏になるよりは、と選択した結果が間違いかどうかは戦って見なければ分からないけれど、レイジングハートの採点でも花丸を獲得している。心配性のなのはとて、それなりに手応えを感じていた。

上下左右から個別の軌道を描き飛来する桜色魔力弾に面食らったフェイトが身を捻り、故意に失速した瞬間を狙い、なのはは「アクセル」と追加の詠唱を紡いだ。

フェイトから引き離された魔力弾達が鋭角に弾道を曲げ、降下中のフェイトに追い縋る。焦りの表情を期待したなのはの思惑を裏切り、着弾寸前まで追い詰められたフェイトの顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「……やっぱり僕の目に狂いなしっ！　なのはは、僕と同じだ！」
『Scythe Slash』

瞬く間に三度薙ぎ払われた大鎌は、機械の如き正確さでなのはの射撃魔法を引き裂き、消滅させる。矢張り地力と練度の差は大きいのか、眼前の魔力弾にも臆した様子も見せず、余裕綽々包围を脱したフェイトは、空中で仁王立ちしたままなのはへと大鎌を向けた。

現状を最高に楽しんでます。

そう言わんばかりに輝く瞳と、興奮に染まった頬が、相対的にな

のはの背筋を凍り付かせる。何が同じものかと心中で悪態を吐いたのはは、震えながら杖を握る手に頭突きと共に気合いを入れ、「次は僕の番ね！」と手を振る天然娘を迎撃すべく射撃魔法を展開していく。

八発では足りない。匣代わりになれば御の字と制御の甘い二発を足し、計十発を展開し終えた時、待ち兼ねたフェイトが爆発的な加速を纏い、押し迫る。

小細工なしの真つ向勝負。正々堂々、乾坤一擲の斬撃にて決着を付けるべく突き進んでくるフェイトに向け、立て続けに射撃を撃ち込むも、最低限の機動で紙一重に回避されてしまう。誘導制御出来るとは言え、回避されて尚、瞬間に距離を詰めるフェイトに追いつける自信は無い。

なのはは即座に思考を切り替え、遠ざかる射撃魔法の制御を切り離すと、レイジングハートの先端に圧縮魔力を形成した。

杖を正眼に構えたなのはを一瞥し、凜々しい表情から破顔一笑したフェイトは敢えて大鎌をなのはの杖へと打ち付け、絶妙な手加減を加えながら二撃、三撃と連撃を繋げていく。

「うんっ！　そうこなくっちゃね！」

「……ちっ」

「っ！？　こ、恐くなんかないぞ！　いざ、尋常に勝負！」

時代劇か何かを見て影響されたのだろう。

棒読み気味の台詞で仕切り直したフェイトの動きは、段々と速度を増していく。

まるでなのはが追い付ける限界を探るように、緩急を付けて打ち込んでくるフェイトは心底楽しそうであり、真剣に街を守る使命を帯びて戦っているのはとしては苛立ちを覚えずには居られない。

二度目の舌打ちに身を強張らせたフェイトの隙を突いて後方へと下がったなのはは、継戦が難しい近接戦闘を打ち切って森林へと身

を隠した。無論、継戦が難しい理由は緊迫した戦闘に因る手の震えである。

虚勢を張っていても、時間と共に恐怖で縛られていく心は騙し切れない。

逃げよう。

数秒の間悩んだのははそう決断すると、射撃補助用に展開していた端末を破棄し、足元の飛行魔法に魔力を注ぎ込んだ。

元々、なのはに先んじてフェイトがジュエルシードの封印を完了しているのだから、決定打を入れられない相手と交戦する理由はない。フェイトの使い魔のであるアルフと共に何処かで追いかけているユーノに自宅で落ち合う旨を伝えると、なのはは本格的に木々の間を抜け、逃亡戦へと移行する。

「ま、待つて！ どこいくの……勝負はー!?」と後方から迫る煩い声を聞き流しながら、なのはは更に高度を下げ、ぎこちない回避動作で樹木を避ける。勝負も何も、フェイトの方が強いことなど分かり切っているのだから、短期決戦で決められなかったこちらの時間切れである。

「ずるだあ！ まつて、まつてつてば！ おいてかないでえ！」と次第に涙声になりながら追いかけてくるフェイトを背に、なのはは後ろ髪を引かれつつも距離を引き離して行った。

「捕まえた！ もう逃がさないよ！」

「……少しは……加減……して……」

「え、あ、ま、またやっちゃった？」

「……も……ちょっと……待つて……」

「……ごめん！なのは、大丈夫？ 背中擦る？」

最初こそなのはが優位に立っていた逃亡劇は、防護服の外套と装飾を脱ぎ捨てたフェイトの追い上げにより呆気なく幕を閉じた。

動きを封じる為に背後から首に掛けられた魔力刃の有無に関わらず、追い詰められる獲物の気持ちや体験したなのはの蚤の心臓は、今も破裂せんばかりに音を立てている。

いつそ真つ向から戦っていた方がどれだけ潔かっただろうか、と後悔しているなのはの気も知らず、フェイトは既にデバイスを待機させ、両手で背を擦ってくれていた。

防護服は戦闘時に魔導師の身を守る基本的な魔法であるが、実際の衣服同様に重装であればあるほど守りは堅く、動きは鈍る。逆に言えば、脱げば脱ぐほど速くなるのである。

唯でさえ際どい格好を更に脱ぎ、それでも尚のほほんとした笑顔で仁王立ちしているフェイトの胆力から逃げれると考えた数分前の自分が浅はかだった。

防護服の厚さや意匠は個人の嗜好や性質によって異なるが、確固たる決め手を持たないのはは可もなく不可もなく、回避動作に支障がない程度に設定していた。フェイトに習って脱げば或いは逃げ切れたかも知れないが、なのははまだ人として大事な物を失いたくない。

フェイトに肩を抱かれ緩やかに高度を下げると、木陰に身を寄せ合いながら腰を下ろした。

この体たらくで「まだ負けてない」などとは言えるほど恥知らずではない。一方的な宣言ではあったものの、『勝つたらジュエルシード一個貰う』勝負に負けたなのはの状況は精々捕虜が良いところだ。

恨みの籠った瞳でフェイトを見詰めたなのはは、皮肉の一つでも言ってやろうと口を開いた。

「弱いもの苛めして、楽しい？」

「あははっ！　なのはは弱くないからいいの！」

「っ……はは……お世辞でも嬉しい、かな。わたしも……次で追い付くから」

「もう追い付かれてるんだけどなあ……」

困り顔で背を擦るフェイトに疑いの眼差しを向けると、「だって同じだもん」と根拠の無い自信に満ち溢れた返事が返ってくる。

魔力量こそ大体同じ位だとしても、質が伴わないのでは話にならない。前回の初戦闘よりは抗戦できるようになったものの、未だフェイト・テストロツサと高町なのはの間には越えることの出来ない高い壁が存在する。

何がそんなに嬉しいのか。沈んだ表情で俯くなのはに肩を寄せ、ここにこと満面の笑みで夜空を見上げながら「なのはなのはー」と即興のリズムを口ずさんでいるフェイトを見遣る。

この娘にとつてのジュエルシードは、母親から集めるように頼まれた綺麗な石でしかないのだろうが、高町なのはにとってはいつ炸裂するとも知れない不発弾。取り扱いを間違えれば、大事な人達はおろか地球諸共塵へと変えるような危険物である。

包み隠さず本心を言えば持つて居たくない代物であるけれど、だからと言ってフェイトに軽々しく渡してはどのように使われるか知れたものではない。

現に今も両手でジュエルシードを握り締め、何やら念を送っているフェイトになのはの心情は益々重さを増していく。フェイト自身に悪用できる程の不純さがなくとも、背後で糸を引いている母親が同様とは限らない。

考え込んで沈黙しているなのはに気を使うのも飽きてしまったのだろう。「お話ししようよー、ねえー」となのはの髪の毛で遊び始めた自由過ぎる少女に顔を向け、なのはは深刻な表情のまま口を開いた。

「……しない」

「えっ!? な、な、なんで? 僕のこと、き……きらい、になった?」

笑顔を驚愕に変えたかと思えば、涙目でなのはに問い掛けてくるフェイトに、なのはは思わずたじろいだ。

「好きか嫌いで言えば、竹を割ったような性格で、尚且つ人懐っこいフェイトは好ましく思う。」

寧ろ初対面で斬り伏せ、無理矢理話を聞かせた相手に好かれていると思っていたこの娘だからこそ、人見知りするなのはある程度警戒を解くこと出来る。砲撃魔法の直撃を受けても動じない表情を、なのはの一言で悲しげに歪めたフェイトに罪悪感を感じていないと言えば嘘になる。

でもそれはそれ、これはこれ。

高町なのはは海鳴を守る魔法少女。例え誰にも評価されなくとも、どんなに恐い目に、痛い目に遭おうとも、途中で辞めるつもりはない。

なのはは困惑するフェイトを突き放すように立ち上がると、覚束無い足取りで距離を取り、レイジングハートのコアに手を添えた。フェイトから預かった14番と、賭けに負けた分として適当な一つ、計二個のジュエルシードを手のひらに握り込む。

どうせ戦い合うことが決まっているのならば、中途半端な馴れ合いはお互いにとって為にならない。

幾らジュエルシードの危険性を説いたところで、母親に絶対の信頼を置いているフェイトの神経を逆撫でして終わることは目に見えている。拒絶されるのを承知で説得を試みる勇氣も、無理を押し通す気概も、高町なのはは持ち合わせてはいなかった。

拒絶されるくらいなら、自分から拒絶した方が心の傷は軽くなる。

戦うことに集中しなければ、唯でさえ弱い己には一片の勝機も生まれない。

なのは不安げに自分を見詰め続けるフェイトに目を向け、苦しい心中を隠すように表情を引き締めた。

「……やっぱり、良くないと思うの。フェイトのことは、嫌いじゃないよ。でも、勝たないと、強くなないと、私は……」

誰にも、必要として貰えないから。

自分でも聞き取れない程小さな声で付け足すと、なのは俯いて手の中のジュエルシードを見る。

精一杯フェイトなりに考えて預けてくれたジュエルシード。

出来ることならフェイトに言われた通り、最後まで持つて居たかった。湧き上がる未練が、なのは腕に重い枷を掛けている。前に別れた時は、お互いのことを沢山話した。

魔法に不慣れなのは疑問に感じたことを尋ねた時も、フェイトは何の打算も計算もなく丁寧に教えてくれた。擬音と身振り手振りが主体のそれは半分ほども伝わらなかつたけれど、純粋な好意は確かになのはの心にまで届いている。

なのはが手の中のジュエルシードを突き返すこと即ち、その好意を踏み躪ることを意味していた。

一度だけしか会ったことのない、加えて仮にも敵対関係にある少女よりも、無愛想で可愛げのない自分をこうして旅行に連れて来てくれた家族や友人の方が大事。そんなことは、改めて考えるまでもなく分かっている。

全部分かっているからこそ、高町なのはの手は、足は今もこうして震えているのだ。

来る者拒まず、去る者追わず。そんな心構えで小学校生活を送り続けること、既に三年目。未だにアリサとすずか以外の友人は居らず、追う者は元より来る者など一人も現われはしなかつた。

たった二人の友人とクラス替えて離れ離れになることを恐怖し、柄にも無く歩み寄ってみたこともあつたけれど、意気込み過ぎたのか。結果は相手を威圧し、緊張したような表情でやんわりと拒絶されて終わった。

あの出来事で、なのはの中の何かが折れてしまったのだろう。今では二人と一緒に進級することを唯只管に祈る日々が続いている。何が言いたいのかと言うと、距離を置かれることには慣れていても、好意を寄せてくる相手を拒絶した経験が高町なのはには決定的に不足していた。

額に浮かんだ汗を拭いながら、俯き加減のまま黙りこくるなのは、変化の少ない表情を苦悶に歪め、斜め下の地面を見詰め続ける。ふと、痛い程に握り締められていたなのは手を、フェイトの両手が包み込んだ。

いつの間にか歩み寄っていたフェイトが、なのはの目の前で満面の笑みを浮かべて、包んだなのはの両手を上下に振るっている。良く見ればその瞳は正しく子供のよういきらきらと輝き、少なくともなのはに拒絶されて悲しんでいるようには見えなかった。

存外この娘も清々しているのだろうか、自虐的な思考に陥り掛けたなのはの目を覚まさせるように、フェイトは勢い良くなのはの両肩に手を置いた。

「僕も、なのはのこと好き！」

「……………うん？」

フェイトの唐突な告白に、なのはは数秒の間固まった後、肯定とも疑問とも判断できない声を返した。

何故突然、と考えたなのは少し前の己の発言を省みて、納得がいったようないかないような何とも形容し難い表情を浮かべ、ここ

にこと眩しい笑顔を振り撒くフェイトから視線を逸らす。

確かに嫌いじゃないとは言ったし、心中では好意を抱いているとも思っていた。けれども、内容の大事な部分はそのではない筈だ。

フェイトを刺激するまいとどこもない笑顔を貼り付けたなのは、両肩に掛けられた手を優しく除ける。「なに？ どしたの？」と期待に満ち溢れたフェイトを直視するのは非常に心苦しいが、高町なのはがこの先も魔法少女で在り続ける為には避けては通れぬ道。

フェイトは敵、フェイトはライバルと声には出さず、口の中で反芻したなのは、意を決して肺一杯に空気を吸い込んだ。

「フェイト、あの、私ね」

「えへへ……一緒だね」

「……そ、そう……だね」

違う。そうじゃない。何かが決定的に噛み合っていない。

なのはは人の話の半分も聞いていなかったであろう少女に戦慄しながら、手の中のジュエルシードをそつとポケットの中にした。照れたように笑うフェイトは、西洋人形を彷彿とさせる容姿と相まって十人見れば十人の視線を釘付けにする可愛らしさを湛えている。「もうっ、びっくりしたなあ」と恥らいながら、フェイトは喜びの表情を隠すことなく、なのはの手を引いて再び腰を下ろした。何と声を掛けるべきか、思い浮かばない。

フェイトのカウンターにより挫かれた心は、今も心臓を早鐘の如く打ち鳴らしている。回復には暫く時間が必要だ。

何となく居心地の悪さを感じて正座しながら、どう切り出したものかと頭を捻っていたなのはの膝に、ぽふんと柔らかい何かがぶつかった。

今度は何だと目を向けると、事態の急変に付いていけないのは

を他所に、フェイトはまたも何の前触れもなく体を傾け、なのはの膝の上に頭を預けていた。思考がパンクし掛け、情けないことに「う……あ……あの……」としか声を絞り出せずにいるのはを見上げ、フェイトは今も屈託の無い柔らかな笑顔でなのはの相貌をぼんやりと眺めている。

と、兎に角、早く切り出すんだ。でないと、この娘は心の隙間にするすると入り込んできて全部が手遅れになってしまう。

嫌いに、なれなくなってしまう。

そう考え、慌ててポケットの中を探っていたなのはの手を取り、フェイトは微睡んでいるのか反対の手で眠たそうな目を擦る。夜風が冷たいのだろう。

懐炉代わりになのはの手を自分の額に摺り寄せると、おどけたような口調で「あつたかあい」と声を発した。

「前はなのはだったから、今度は僕の番……あ……え、えっと……だ、だめ、かな？」

「だ、だめじゃないよ！ でも、あのね、フェイト、私負けちゃったから、これ……ジュエルシード……」

「あつ、忘れてた。でも、いいや。それより……お話、しよ？」
「う、うん、いい、けど」

せめてこれだけでもと咄嗟に取り出せたジュエルシードを、一世一代の緊張に苛まれながら差し出したと言うのに、フェイトの関心は完全に別の方向を向いていた。

なのはが恐怖に脅えながら立ち向かい、時には逃げ出しながら、必死の思いで封印したジュエルシードよりも、高町なのはの話の方が価値が高い。言外にそう言われたような気がして、ときめけば良いのか悲しめば良いのか分からず、なのはは滲んだ涙を気取られぬ

よう自然な動作で拭い取った。

実際、フェイトは何も考えていないのだろうけど、現在封印されているジュエルシードは合わせて八つ。ユーノが言っていた时空何とかと呼ばれる警察のような集団の援護も期待出来ない以上、無理になのはから奪い取らずとも、フェイトの実力であれば立て続けに封印される可能性が高い。

自分の興味を優先するのも頷けるけれど、この娘の中の母親像がどれだけ菩薩のように描かれていたとしても、こうまで消極的だと怒られはしないだろうか。

思考を途中で打ち切ったのはは、小さく頭を振るう。

それはなのはの知るところではないし、他人を気遣っている余裕など高町なのはには存在しない。要らないと言うのなら好都合。そう思い込むくらいの気持ちで挑まなければ、本当に根こそぎ持つて行かれ兼ねないのだから。

そう決意したところで、敵だ、敵だと思い込もうとしている相手を膝枕している今の状況では格好が付かない。矢鱈と人懐っこく、馴れ馴れしさを感じさせないフェイトに絆されている気がしなくもないけれど、前回介抱して貰った借りがあることも確かだった。

ついでに言えば、再びレイジングハートに収めた14番も借りである。それを承知で返却しようとしていたとは言え、楽しみに赤毛の使い魔について話すフェイトの様子から、切り出すタイミングは既に失われたと見て良いだろう。

いつだってこうだ。

根性無しの臆病者、と半分自棄になりながら心中で己を罵るなのは。表情の変化に乏しいとは言え、眉を顰めたなのはを至近距離で見詰めるフェイトが気付かぬ筈もない。不安そうに口を止めたフェイトに、なのはは「何でもない」と告げ、話の先を促す。

取り留めない会話を交わす最中、変化の少ない表情の裏では葛藤が続いていた。

「なのはは足とか、痺れてない？ 僕の番ってふざけて言ったけど、痛かったらすぐに起きるよ？」

「……大丈夫」

「よかった。僕、友達ってなのははじめでなんだ。だから、嫌われてたらどうしようかと思っちゃった」

安堵したように目を瞑ったフェイトと対照的に、なのはの思考は一瞬で真っ白に掻き消された。

この娘は、今何と言った。

自然と頬が熱を持つのを感じて、なのはは袖を掴むと赤らんだ顔を隠すように口元を覆う。生まれてこの方が青褪めることはあっても、ここまで赤く染まったことなど記憶に無い。

耳まで熱を持っていることに気が付き隠そうと試みるも、なのはの小さな手のひらでは隠せる面積は限られてくる。どうしたものかと慌てていたなのはは、フェイトが瞳を開こうとしているのに気が付くと、その両目を手のひらで上から覆った。

「ど、どうしたの？」と困ったように問い掛けてくるフェイトに、抑揚を殺した声で「別に、何でもない」と返し、なのはは熱が引くのをじっと待つ。フェイトは唐突なのはの行動を気にした様子もなく、逆に己の目を覆う手に自らの両手を重ねてきた。

何を言われた。何をされた。

頭の中で何度同じ質問を投げ掛けてみても、帰ってくる答えは全て同じだった。落ち着け、落ち着けと繰り返し、大きく深呼吸をしたなのはは、再び意を決し、震える唇を動かした。

「……とも、だち？」

「うん！ 名前で呼び合ったら友達なんだよ。リニスが言ってたし、アルフにも聞いたもん」

「でも、敵、だよ……？」

「えっ、敵だとだめ……なの？」

目隠しを退け、心底不安そうに瞳を潤ませたフェイトを見て、なのは脱力した。

結局、何でもかんでも後ろ向きに考えて、空回りしていただけだったのだろうか。あたふたした様子で何処かに念話を飛ばし始めたフェイトを見てみると、何だか、色々なことを考えてびくびくしていた自分が、酷く小さく思えてならなかった。

なのはとて、片手どころかその半分以下で事足りる人数しか友達はいない。そんな風に誰かに言っただけのも、小学校に入学して以来のことである。純粹に嬉しい気持ちがないとは、嘘でも言えない。

今も顔を青褪めて何処かと遣り取りをしているフェイトに「ううん、そんなことないよ」ときこちなく微笑み掛けたなのは、自棄交じりの吹っ切れたような気持ちで夜空を見上げた。

戦いだ何だと気負っていても、フェイトからすれば腕試しの競い合いか喧嘩程度でしかない。離別を切り出したところでその認識が変わらないのならば、せめて同じ土俵で勝てるようにもう少しだけ頑張ってみよう。

大半は敗北するだろうけど、勝負の後に、こうして話すのも悪くはないのかも知れない。

目端から雫を零しながらほっと息を吐き、なのはに纏わり付いて来ていたフェイトの手を握る。そんなことだけで天真爛漫な笑みを浮かべてくれるフェイトと、これから先も仲良くしていきたい。確かに、そう思う。

暫しの間感傷に浸っていたのはだったが、僅かな間のそれもフェイトに手を引かれて中断する。アリサの三倍くらい忙しい新たな友人に苦笑しながら眼を向けると、フェイトは既に立ち上がり、何やら遠方を指差していた。

「……もう、帰る時間？」

「温泉！」

「……………ん？」

「温泉あるよね！？ 入り方教えてよ！ 一緒に入ろう！」

何処から聞き付けたのか、フェイトは返事も待たず、興奮した様子でなのは手を引くと駆け出した。

本当にこの娘は、自由気侷と言うか、好き勝手と言うか。そんなフェイトを好ましく思うと同時に、自分とは正反対の生き方を羨ましく思う。

何処まで付いていけるか分からないけれど、出来ることならいつまでも友人で居たい。願わくば永く。そう祈るとなのはフェイトの手を握り直して駆け出した。

なのはの地力を遙かに上回る速度で走るフェイトに振り回されながらも、なのはの表情は数分前とは打って変わって明るいものであった。

悪夢だ。

この記憶は、悪夢以外の何物でもない。

「はっ……………！ あっ、ぐ、う……………んっ！ んっ……………」

ベッドから勢い良く体を起こしたフェイトは胸元を押さえると、込み上げる嘔吐感を押し戻す為に、枕元の水差しを呷った。

咽の渇きがどれ程癒えても、この吐き気と胸の苦しみが消えることは無い。理解はしていても、そうしなければやがては息を吸うことすらも止めてしまうだろう。

酸素を求め、苦しんで、苦しんで、真綿で首を絞められるように死ぬ。

騎士気取りの莫迦には似合いの最後だと自嘲したフェイトは、直ぐに再び込み上げてきた吐き気に両手で口元を押さえると、じっとしたまま波が過ぎ去るのを待つ。

「僕が守る」なんて言って置いて、無二の親友なんて自称していて、結果は惨めなものだ。

随分と細くなってしまうた両手で体を掻き抱くと、やがて動けるくらいまで気持ちは落ち着いた。

時刻は昼前を指した部屋の中。閉め切ったカーテンの隙間から差し込む光を避けるように、フェイトは這い擦ったまま部屋の隅まで移動する。煩わしそうに床に中身の残った水差しを打ち捨て、フェイトは何かに脅えた様子で頭を抱え、蹲った。

ふらふらと無意味に視線を彷徨わせたかと思えば、突然かたかたと歯を打ち鳴らして虚空に許しを乞い、数分もそうしていたかと思えば、今度はぴたりと動きを止め、糸を切られた操り人形のように脱力する。

誰がどう見ても正常ではないその状態が続いて、既に三ヶ月。

フェイト・テストロツサの日々は最低限摂取できる食事と、睡眠の間を除いて灰色に塗り潰されていた。

「なのは……ごめん……なのは、なのは……」

焦点の定まらない眼でそう懇願したフェイトは、直ぐに何もかも見下したような溜め息を吐き、小さく笑う。

謝ったって、許してくれる相手は何処にもいない。馬鹿みたいに自室で独り、自分の所為で居なくなってしまった親友に懇願する自分が、滑稽に思えた。例え誰に許されたって、それが高町なのはだつたとしても、フェイト・テストロツサは自分自身が許せなかつた。

こんな所で、唯無意味に時間を過ごしている場合でないことは分かっている。それでも、三ヶ月前の惨状を思い出すと、体は強張り、萎縮し、立ち上がる気力すらなくなってしまう。

そう、あの場所には殆ど何も残ってはいなかった。

あつたのは既に回収された兵器か何かの破片と、致命に達する量の血痕。そしてその血痕が続いた先は、空間諸共抉り取られたようなクレーター。

残留していた魔力も、残された血痕も、高町なのはの物であることが既に確認され、今も行方不明扱いとはなっているものの、時空管理局内での認識は死亡も同然。三ヶ月も時間が経過した今、はやてやハラオウン、なのはと任務を共にした局員など、一部を除いてまともな搜索は行われていない。

フェイトとて、最初は信じたくなくて我武者羅に駆け擦り回ったが、戦闘能力以外に取り柄のない自分に来ることなど、はやての邪魔をしないことくらいだ。それでも何とか役に立とうと、なのはと交戦した機動兵器を寝ずに探し回り倒れて以来、此処で腐っている。

情けなさのあまり、既に枯れ果てたと思っていた涙が込み上げるも、その資格がないとばかりに親指の付け根を強く噛んで上を向いた。口の中に広がった血の味をぶち撒けた水差しの上に吐き捨て、フェイトは再び己の膝に顔を埋め、はやてからの連絡をじっと待った。

『絶対に見付けてくる。フェイトは、そこで寝ている』

最後に会った時、はやては常の余裕振った表情を怒りに染め、フェイトに短くそう告げた。

普段の皮肉ではなく、倒れたフェイトを純粹に心配しての言葉だと言うことは、長い付き合いから理解している。元々意地っ張りな性格も相まって、はやては成果を上げられるまで直接会いに来ることもないだろう。

衣食住はアルフが面倒を見てくれているし、義理の母や兄も忙しい合間を縫って様子を見に来てくれる。生活費に関しては今までの

貯えがあり、復職についても義母はやてがどうにかしているらしい。

それも、もうどうだっていい。

フェイトは血の混じった水溜りをぼんやりと眺めながら、夢で見たなのは柔らかくも温かな笑顔に逃避した。

『名前で呼び合ったら友達なんだよ』

あの時、本当は恐くて仕方がなかった。

母から離れ、リニスとアルフ以外に話をする人間なんか居なかったフェイトにとって、高町なのは初めての同世代の、しかも自分と同じくらい強い魔力を持った少女だった。

一目見て気になり、どんな子なんだろうと興味が湧いた。

一度目の交戦で、泣きながら自分に一撃を入れたなのは、必死で、格好良くて、今まで見てきたどんな存在よりも綺麗に見えた。

敵同士で、こんなことしても意味がない。そう言った少女を引き止めたくて、したこともない自分の話を沢山語った。本当は喋っちゃいけない母のことも話した。何が何でも悲しそうな眼をした少女の興味を、フェイトの方に向けて欲しかったからだ。

何もかもが初めてで、隠していたけど手も震えてて、でも、最後になのはが微笑んでくれた時、胸がとても温かくなったのを、今でも覚えてる。

思えば、あの瞬間からフェイト・テストロッサは、高町なのはに夢中だったのだろう。

形振り構わず仲良くなりたくて、不慣れな地球のテレビや雑誌で調べ、アルフにも色々聞いた。二度目に会った時、何処か余所余所しい雰囲気を感じて、なのはの拒絶も聞こえない振りをした。

名前云々と言った瞬間だって、フェイト自身、否定されるのでは

と気が気ではなかった。

好きだと告げた時と言い、今になって思い返してみれば、少々強引だったかも知れない。

けれど、友達と告げた時に薄目を開けて盗み見たなのは顔は、耳まで真っ赤に染まるくらい恥かしそうで、嬉しそうで、不安だった気持ちも全部吹き飛んでしまうくらい可愛らしかった。

二人でお風呂に入って帰ったあの日から、次の日が、ジュエルシードが発動するのが楽しみで、中々寝付くことが出来なかった。

なのはとの思い出は、沢山ある。はやてと一緒に分も含めれば、もっともつとある。

それなのに、今はフェイトただ独り、暗い部屋で膝を抱えている。

「……………なのはあ……………なの、は、あ……………」

情けない涙声。

我慢し切れなくなった涙で膝を濡らしながら、フェイトは何度もなのはの名前を呼んだ。

どんなに忙しい時でも、端末にメッセージを残せば連絡を返してくれた。どんなに遠いところに居ても、自分が会おうと言えば短い時間だとしても会いに来てくれた。

もう、二度となのはの声が聞けないかも知れない。

なのはに逢えないかも知れない。

その事実がフェイトの体を凍り付かせ、身動きが取れないように固めてしまう。

母を失って直ぐの頃、空っぽだったフェイトを気遣い、なのははいつも傍に居てくれた。辛い時も、悲しい時も、黙って受け止めてくれたのはなのはだった。

本当は恐がりで、泣き虫なのに、自分やはやてを支えようと無理して管理局に進んでくれたのだから知っている。

戦いも、魔法も好きじゃないのに、学校で居眠りするくらい隠れ

て勉強して執務官になったのだったって知ってる。

「少しでも二人の役に立ちたいから」と口癖のように言っていたのはが、本当は普通に地球で暮らしたいって、知っていた。なのはそのことなら、フェイトは何でも知ってた。

「僕の、せいだ」

だから、なのはが居なくなったのは、知っていながらそれに甘えていた、自分の所為だ。

現場に残っていた血の跡は、生々しくその時のなのはの様子を伝えてくれた。あんなに血を流して痛かったらるうに、恐かったらるうに、転びながら這い擦りながら、当ても無く帰り道を探して彷徨っていたなのはを想えば、のうのうと生きている自分が許せなくなる。

知らず知らずの内に爪を立て、握り締めていた左手から真つ赤な血液が伝い落ちた。なのはが流したのはこんなものじゃないと、より力を込めて傷を抉るも、こんな掠り傷程度では痛みなど感じられない。

調査の結果は逐一フェイトの耳にも届いている。

お腹だ。なのははお腹に大きな穴が開いて苦しんだんだ。こんな程度の傷で分かった気になろうなんて、どれだけ頭が悪いんだ。

馬鹿だから、自分が馬鹿だから、何も見ない振りをしてなのはをあんな目に遭わせた。なのはは努力して苦手を克服した。

それなのに、自分は、どこまで救いようが無いんだ。

刃物を探して勢い良く立ち上がったフェイトの体を、強烈な眩暈が襲った。

碌に食べていない体では以前のように踏ん張りが利かず、フェイトは床に出来た水溜りに頭から突っ込むと、起き上がることもできずに脱力したまま、水に体を浸した。頭ががんがん痛むのを他人事のように無視していたフェイトは、一度強く床に頭突きした後、体

を起こす。

「……なに、してるんだらう。ぼく」

酷く、惨めな気分だった。

死んで、それでどうなる。

死ねば、なのはのところに行けるのか。

自分への問い掛けに、フェイトは黙って首を振った。足に力を込めて立ち上がると、今度は転ばぬように壁に手を付きながら、ベッドに向う。

何か、意味がある筈だ。三ヶ月の間見ることが無かったなのはの夢に、出会った頃の夢に。例えば意味が無かったとしても、今から意味を作ればいい。

枕元で埃を被っていた愛杖を握り締めたフェイトは、数度点滅したバルディッシュに小さく謝ると、表面を袖で綺麗に拭った。

なのはが死んだなんて、認めない。

生きている。絶対に、何処かで生きている。

今も、きつと何処かで泣いている。

助けが来るのを待っている。

なのはには、沢山助けて貰った。

母さんに空けられた穴を埋めるように、ずっと傍に居てくれた。

フェイト・テストロッサにとって初めての、一番大切な、友達。

「今度は、僕が助ける番だ」

『Yes, sir』

久しく聞いていなかったバルディッシュの声に、力強く頷いて応えたフェイトは、無造作に投げ捨てられていた上着を羽織り、覚束

無い足取りで部屋の扉へと進む。

誰が諦めたって、フェイト・テストロッサだけは諦めない。

なのはを見付ける為なら、何だってやってみせる。頭が悪いのだって、どうにかしてみせる。仮にも母さん、大魔導師プレシア・テストロッサの血が流れているのだから、出来ないなんて言わせない。

凡そ一ヶ月の間籠っていた部屋に別れを告げたフェイトは、別室で監視していたであろうアルフが駆け寄ってくる音を聞きながら、最初の一步を踏み出した。

二十話（後書き）

副題『魔法少女は諦めない』

無印編折り返し地点。満を持し過ぎた感のある登場です。

読んでいる途中で分かれた方もいたらしいなあ、と思いますが、私のメンタルは現在ぼろぼろです。今回こんな感じの話なんで後書きはせめて明るいネタにと思っていました。どうかお察しください。

天真爛漫振ってたけど、実は結構打算計算で動いていたフェイトさんとだけ言っておきます。戦闘力で幾ら勝っていても、惚れたら負けですね。

フェイトさんまじ主人公。

誤字脱字修正はいつも通りです。皆様の感想を心よりお待ちしております。おります。

二十一話

人の消えた海鳴市街地の空に、桜色と金色の帯が交差する。

青白い光がビル群を照らし、その光源へと向う一方を阻むようにもう一方が立ち塞がると、少女達はお互いの武器を振り被って応戦した。

世の中には協力して強大な敵に立ち向かい、やがては絆を深めていく魔法少女達もいると言うのに、夜空を駆ける二人は怨敵を滅ぼさんとばかりに、今も一進一退の攻防を続けている。

黒防護服を纏った魔法少女が金色の刃を展開し、疾風の勢いで大鎌を叩き込めば、白い防護服の魔法少女は強固な防護魔法と、追加効果の炸裂魔法で攪乱し、砲撃魔法の雨を降らせる。

神話に描かれた戦いの如き、極光と轟音に彩られし戦いの最中、白い魔導師の少女、高町なのはは、苦もなく降り注ぐ桜色の砲撃避けきった黒い外套の少女を見遣り、杖の照準を外した。

傍目には突然戦意を喪失したように見えるその行動にも、黒い防護服の魔導師、フェイト・テストロツサは油断することなく杖を構え続けている。はったりか、或いは敢えて懐に誘い込むつもりか。フェイトが動かずに、なのはの出方を窺っていることから考えても、大方そんなことを考えているのだろう。フェイトの立場に自分が居ることを想像して、なのはは余裕さえ含んだ不適な笑みを浮かべた。

敗北を経験したお互いの間に、最早油断はない。

そうでなくては、お互い初撃か二撃目には撃墜されている。実力ではフェイトが勝っている、文字通り一撃必殺の切り札を持つなのはが相手では、見慣れた薙ぎ払いですら一か八かのリスクが伴う。慎重になるに越したことはない。

なのははフェイトが足を止めたのを確認すると、戦闘状態に保っていた思考回路を切り替え、真剣な表情を崩した。

興奮気味に頬を薄らと朱に染め、なのははフェイトを一直線に指差し、言葉を発した。

「わたしのジュエルシード、返してよっ！ フェイトちゃん！」

「これは、もう私の物。取り返したいなら、勝って奪い取ればいい。……どんな手を使つてでも」

余裕の表れか。なのははから勝ち取ったジュエルシードを取り出したフェイトは、一度それを宙へと放り投げ、曲芸染みた精密な動作で立てた指先の上へと乗せて見せた。

なのはに止めを刺した時と同様にフェイトの両手は帯電しており、封印状態のジュエルシードから漏れ出る魔力と反応しパチパチと音を立てている。

出会ってから変わらぬ無表情を若干歪ませ、皮肉めいた言い回しを最後に付け加えたフェイトに、なのはは言葉を返すことが出来ず苦笑いを浮かべた。

気絶したなのはが旅館に帰るまでの間に何があったかは、翌日になつて何処からか帰ってきたユーノに粗方聞いたけれど、フェイトがなのははから受けた仕打ちを思えば恨まれても仕方がない。

なのは自身、そんな後味の悪い勝ち方は本意ではない。しかし、半ば意識を失っていたとは言え、パートナーであるレイジングハーフトがなのはを想ってやったことなら、なのはが責任を負うのもまた当然のことだ。

なのはは戦闘中断の意思を示す為に構えを解くと、フェイトに向つて深く頭を下げた。

「うつ…… あっ、こ、この間は、お世話になつたみたいで、えつと……ごめんなさい」

「いい。今日も、私が勝つから」

「っ…… フェイトちゃん。前から思ってたけど、そういう言い方、

良くないと思うの。そ、それに、まだ一勝一敗なのにそんなこと言
つて……負けた時、恥かしいよ？」

「なら、始めよう。話していても、きつと何も変わらない」

「……いいよ、やろう。なのはが勝ったら、それ、返してね」

やっぱり、シュテルとは似ても似つかない。

この間の戦いの最中も、シュテルに追い付こうと練習した砲撃魔
法を、馬鹿の一つ覚えとか、固定砲台とか、果ては空中要塞とまで
言った少女。

なのは以上にシュテルに期待されていることも苛立ちの一要因で
はあるものの、何よりこの取り付く島もない態度と挑発的な言動が、
事情を聞き出す、友好的に接するという本来の目的を真つ赤に塗り
潰していく。

謝罪から一転して怒気を纏い、再び杖を構えたなのはを、フエイ
トは冷ややかな眼差しで見詰め、無言のまま発射体を周囲に展開し
た。

「約束だよ」と念を押しながらも、危なげなく射撃魔法を盾で凌
いだなのはは、数発の応戦後、またも敢えて照準を外しフエイトに
「ね！ 約束！」と言い放つ。

高町なのはがこうまで必死になるのには、当然理由があった。

撃墜から目覚め、シュテルの胸に抱かれわんわん泣いたなのはは、
憧れの人物の電話番号まで入手し、ご機嫌のまま床に着いた。負け
は負けと割り切り、明日から頑張ろうとの言葉通り、気持ちを切り
替えて魔法の練習に打ち込み、再戦の時に備える日々。

旅行前の落ち込み様から急に元気になったのはをアリサは心配
していたけれど、「打ち込めるもの、見付けたんだ」と笑顔で応え
ると、何も聞かずに一緒に喜んでくれた。

すずかは何処か複雑そうな表情をしていたけれど、数秒の間考え
込んだ後、アリサと同様になのはの手を取って励ましてくれた。

二人の友人を思い出す度に、負けられない気持ちは強くなる。

途中、「迷惑にならないかな、何でもないので電話掛けたら変かな」と携帯電話片手に悶々としたりしながらも、空いた時間で実力の向上に努め続けたなのは胸には、再び闘志の炎が宿っていた。再戦の前夜。レイジングハートとユーノを交え、対フェイトへの戦術を考えていたなのは、ふと気が付いた。

レイジングハートの中から、当然の如く一つのジュエルシールドがなくなっていることに。

「レイジングハート、撃つて！」

「……遅い」

『Photon Lancer Get set』

先んじて発生した雷撃に、砲撃を中断し防御魔法を展開する。

炸裂する雷の槍は、強固な防御力を誇るなのはの前では目晦まし以上の意味を持たない。

しかし、今回はその目晦ましが致命的な隙に繋がる。なのはに背を向け、地上へと降下していたフェイトへ誘導弾を放ち追い絶ると誘われる形で近接戦闘の間合いに飛び込んだ。

今夜の戦いにおいては、フェイトとなのはの同時封印により小康状態にあるジュエルシールドを、相手に先んじて手に入れる必要がある。

無論、そのようなまどろっこしいことを考えずとも相手を撃墜した方が話は早い。

勝利して二つを得るか、一つを得て逃げるかは個々人の判断に委ねられるが、なのはがフェイトに奪われたジュエルシールドを取り戻す為には勝利以外に道はないのである。

ジュエルシールド、シリアルXVI。

奪われたジュエルシールドのシリアルナンバー。それ自体に深い意

味はないが、なのはにとつてのシリアルXVIは、ある意味最初の一步を踏み出した戦いで封印した特別なジュエルシード。

負けた以上、ジュエルシードを譲渡するのは吝かではない。けれども、レイジングハートが無作為に選定したジュエルシードがそれであるのなら話は違ってくる。

シユテルと初めて出逢って、一緒に封印した物である以上、愛着がないと言えば嘘になる。何れは然るべき所に保管されることは分かっている、出来る限りの間は手元に残しておきたかった。

澄ました表情で鎌を振り下ろしたフェイトに対し、なのはは寸でのところで防御を展開、即座にバリアバーストで炸裂させる。衝撃波を利用して距離を取るも、威力を抑えての使用で安定したこの魔法では、決定打を撃ち込むには至らない。

何より、フェイトは二度同じ手に引つ掛かってくれるほど甘い相手ではない。

既にタイミングを見切ったのか。余裕を持って衝撃波の範囲から逃れたフェイトは、仕切り直しとばかりに杖を一回転させ、射撃形体へと変形した杖をなのはへと向ける。

互いに砲撃魔法を展開し終え、撃ち合うかと思われたその時、フェイトが既に充填された魔法陣を解いた。遠距離だと言うのに魔力刃を展開すると、ぼんやりとした表情のままなのはの出方を窺っている。

「……………どういうつもり、フェイトちゃん？」

「砲撃で競い合っても、私が押し負ける。だったら、寄って斬った方が早く済む。そう思っただけ。それに……………どうせ中らない」

「どっ、どうしてそんな風にしか言えないの！？ 怒らせようとしたって無駄だよ！ わたしの方が封印した数だつて多いんだから！」

言葉とは裏腹に、頭に血が上っていることを自覚しつつも、なのははフェイトの挑発を意識して、今日に至るまでに封印にした合計

五つのジュエルシードを自身の周りに浮遊させた。

この行為に、己の力を誇示する以上の意味はない。

小康状態のジュエルシードを眼下に控えての戦いである以上、下手を打てば飽和した魔力に反応して連鎖発動の危険も在り得る。但し、それは並みの魔導師であればの話。

高町なのはの体内を渦巻く、誰が呼んだか通称馬鹿魔力により二重三重の強固な封印が施された宝石は、余程強力な外的要因が加わらぬ限り、近くでジュエルシードが発動していようが路傍の石と変わらない。ユーノの封時結界内であることも、なのはの余裕の一助となっていた。

そうは言っても、何処かで見守っている誰かさんは心配なのだろう。

なのはを嗜めるように対峙する二人の間を通り抜けた桜の一片に、なのはは恥かしそうに薄らと頬を染める。

子供染みた対抗意識を燃やしている姿を、見られてしまった。

欲望に突き動かされて覆い被さったことと言い、前回の敗北と言い、唯でさえ最近は醜態を晒す機会が多いと言うのに、挑発に耐え切れずにやり返してしまった。

激しい後悔と羞恥に苛まれながらも『ごめん、すぐに仕舞うね』と、姿の見えない魔法少女へと念話を飛ばしたなのはは、手早く済まそうと改めてフェイトへ向き直る。

初めは、眼中に無い。

その次は異常に脅えられ、砲撃一辺倒と馬鹿にされた。

そしてなのはが敗北すれば、再び眼中に無いと振り出しに戻る。

温厚を自称するなのはでも、込み上げる怒りの捌け口を求めずにはいられなかった。

何があるかと即座に収納出来るよう距離に気を配りながら、したり顔でフェイトへとジュールシードを見せ付ける。「ふふん」と小さな胸を張り、ジュールシードを纏わり付かせた杖を片手に、フェイトを僅かに高みから見下ろす姿は独特の威圧感を放っている。

普段のなのからは想像出来ないほどの激情に取り付かれた様相は、何故かまるで違和感を感じさせない。本能故か、思わず後退ったフェイトを見て、なのには黒い笑みを深くする。

この時ばかりは、使命に燃える魔法少女としての仮面は脱ぎ捨て、なのはは年相応の幼い少女に戻っていた。

「っ！ たった二つ多いくらいで……バルディッシュ！」

『Y, Yes, sir』

無表情を興奮に薄く染めたフェイトが、珍しく声を荒げデバイスを薙いだ。

攻撃かと身を強張らせたなのはの予想を裏切り、フェイトのデバイスの上には三つのジュールシードが一行に並べられていた。

並んだそれらは不自然に片側へ寄せられており、大きく空いた空間はまるでなのはのジュールシードも此処に並べてやると言わんばかりである。

存外負けず嫌いなフェイトの反撃に、纏っていた仮初の余裕を脱ぎ捨てたなのはは、数秒の間頬を膨らませて耐えた後、言い返すべくフェイトへ人差し指を突き付けた。

「たった二つじゃないもん！ 二つもだも……ん……にゃ？ ……にゃっ!？」

子供然とした内容の声を張り上げたなのはは、フェイトの所有するジュールシードを凝視したまま言葉を区切ると、奇妙な声を上げたまま硬直した。

並んだジュエルシードの中央に鎮座ましましているシリアルX I
V。

高町なのはは、その番号に覚えがあった。なのはとフェイトが初めて戦った時に、シュテルが封印を施した霧のジュエルシード。なのはのお蔭で封印できたのだからと、シュテルに何度も手渡されたものの、その直前にした己の所業を考えればとても受け取ることなど出来はしない。

「シュテルちゃんが封印したんだから、シュテルちゃんの好きにして」と強制的に握らせて、押し倒したことに後ろめたさを感じていたなのはは、あの後直ぐに自宅へと逃げ帰った。

そう、自分の記憶が確かならば、あれはシュテルが保有するジュエルシードの筈。

無意識の内に「じゅう、よんばん……なんで……」と零したなのはの声が届いたのだろう。フェイトは露骨にしまったと眉を顰めると、並べていたジュエルシードを立て続けにデバイスへと収納した。

なのはの中で、灰色の疑いが完全に黒へと染まった。

唐突な事態について来れずにいた思考を無理矢理引き摺り上げたなのはは、見栄を張っている場合ではないとばかりにフェイトに習ってジュエルシードを仕舞う。

即座に中断していた環状魔法陣を起動し直すと、焦りの所為か額に薄らと汗を浮かべたフェイトへと照準を絞った。

「シュテルちゃんに、何、したの？」

「……………なにも」

赤面。

白自しているも同然の、圧倒的な赤面がそこにはあった。

白い肌に変化の少ない表情も相まって冷たい印象を受けるフェイト

トの顔が朱に染まれば、例え夜空の下、視界の悪い状態だとしても見間違いない。これまで対峙してきた様子からは掛け離れた動揺っぷりで視線を泳がせるフェイトに、なのはは「何かしたんだ」と確信を得た。

フェイトが何らかの手段でシユテルからジュエルシードを奪ったことは、悔しいが既に否定しようの無い事実。

ならば、どうやって。レイジングハートの銃口をフェイトへと向けながら、高町なのはは思案する。

シユテルは、強い。

神社では奇妙な靄を纏った犬の暴走体を圧倒し、大樹の暴走体との戦いでは際限なく広がる根っこを拘束呪文で縛り付け、直接は見えないけれど、なのはを窮地に追い詰めた霧の中での蝙蝠の群体も封印した。おまけに今も、周囲に展開されているであろう無数の端末を制御、隠蔽している。

未だ魔導師の標準がどの程度かはなのには分からないが、ユーノの評価する通りであるのであれば管理世界、即ち魔法がある世界の人間と比較しても、多種類の魔法と高度な技術を身に付けた魔導師であることは間違いない。

高町なのはは元より、その高町なのはに黒星を付けられたフェイトが、簡単に勝利してジュエルシードを奪えるとは到底思えなかった。何より、なのはの時と同様の勝負をして奪い取ったのなら、赤面する理由にはならない。

確かにシユテルは、リアルXIVを封印する前からフェイトを知っており、気に掛けていた。フェイトと対峙したものの戦えず、仕方なく渡してしまったとも考えられなくも無いけれど、矢張り赤面、動揺する理由にはならない。

一般的に、人間は恥かしい時や興奮した時に赤面する。正体不明の魔導師、フェイトとてそれは例外ではない筈だ。

動揺具合から見ても、何かしたことは間違いないのに答えまで辿り着けず、もどかしさに身を擦る。

日頃の鍛錬により速度を増している並列思考を打ち切って頭を捻ったなのは、シュテルも人間である以上、何かしらの弱点があるのではと思考の方向を切り替えた。弱点を突いてしか勝てなかったのなら、恥かしいと思っても不思議ではない。

でも、シュテルちゃんに限って弱点なんて……、と苦笑しながらかぶりを振ろうとしたなのはの背筋に、電流にも似た何かが走った。

『あ、貴女まで、やめっ、やめて、んんっ!』

思い出される映像、耳に残る嬌声に、なのはの脳は戦場であることを一時的に忘れ、甘美な記憶を再生、巻き戻しする作業に耽る。

あった。

これ以上ないくらい、明確な弱点。

しかもなのはには、それを突くどころか決るようなやり方で辱めた経験がある。さっと自分の顔が朱に染まるのを自覚し、なのはは同時にフェイトの心情を全て理解した。

何てことを、と戦慄しながらも、なのはは冷静に努めるように自らを律し、未だ赤面の抜け切らないフェイトに目を向ける。既に態勢を持ち直したのか、魔力刃を展開したままなのはの所作に集中する姿は、常の様子と変わらない。

「よくもシュテルちゃんを!」と引き金を引きたい気持ちをぐつと堪え、なのはは大きく深呼吸する。なのはの中で幾ら確信していても、全部なのはの思い込みであるのなら、シュテルの下へフェイトを負ぶっていった時同様に気不味い思いをすることになってしまう。

まだ、証拠が足りない。

なのはは脈打つ心臓に手を添え、努めて柔らかな笑顔を浮かべると、フェイトへと問い掛けた。

「フェイトちゃん……どこに、したの?」

「っ！？ だっ、だから、な、なにっ、なにもっ、されてなっ……」
「おでこ……？」
「……っ！」

無意識の内におでこを押さえていたフェイトの反応は、察しの悪いのはでも簡単に理解できるくらい顕著なものであった。

しどろもどろに言葉を繋げるフェイトは、治まりかけていた赤面をより悪化させると、無意識の内におでこを隠していた手を誤魔化すように虚空へと彷徨わせている。

嘘が吐けない娘なのだろう。魔法やジュエルシード抜きで出逢えていたら、アリサやすずかのように良い友達になれたかも知れない。フェイトの人間味のある姿を初めて見たなのは柔和な笑みを深め、環状魔法陣に持てる限りの魔力を注ぎ込んだ。

おでこにちゅーされたシュテルちゃんは、きつと凄く可愛かったんだろうなあ。

負の感情がなのはの原動力となって、限界以上の魔力が砲撃魔法へと充填されていく。充填完了と共になのはの様子に気が付いたフェイトは、注ぎ込まれた魔力の量に一度身を震わせると、黙したまま大鎌を構えた。

格好良く佇んではいるものの、耳まで赤い顔が全て台無しにしている。

「フェイトちゃんの……フェイトちゃんの、馬鹿ーっ！」

自分のことは完全に棚に上げたなのはの砲撃魔法によって、再び戦いの火蓋が切って落とされた。

懐かしい夢を見た。

初めて出来た、魔法使いの友達の夢。

彼女に友達と言つて貰つた、あの夜の夢。

立ち並ぶビル群の一角。桜色と金色の閃光がぶつかり合う場所を離れ、封時結界の端の端に聳え立つ廃ビルの屋上で、シュテルは憂鬱そうに溜め息を吐いた。

フェイトの魔力流により、市街地に残されてたジュエルシードは強制的に活性化され、その姿を晒したが、同時に問題も生じる。なのはとフェイトが殆ど同時に封印魔法を撃ち込んでしまったことで、ジュエルシードは不安定な状態のままその場に留まり、お互いがお互いに回収を邪魔する形で戦闘に纏れ込んでしまった。

街への被害こそ、ユーノが必死に維持している封時結界のお蔭で免れたが、依然危険な状況であることに変わりはない。激化する戦闘の余波が、今も結界を内側から破裂させんばかりに揺さぶりを掛けている。

シュテルは空間モニターに目を向けたまま指を弾くと、封時結界を補強する形で広域結界を展開する。

余計なお世話かも知れないが、街の被害を食い止めることが最優先。今も昔も、それは変わらない。

レイジングハートを抱き、膝を抱えて座り込んだシュテルはモニターに映る二人の少女を見詰め、もう一度小さく溜め息を吐いた。天才と言つ言葉が生温い程の成長を見せるなのは、一度勝利すること自信を取り戻したフェイト。普段であれば「私って、何だったのかな……」と勝手に落ち込んでいくところではあるけれど、今のシュテルの気持ちを沈ませている原因は他にあつた。

単純なホームシックである。

無論、月村邸に帰りたいと言ふ意味ではなく、元の世界、正確にはフェイトやはやてに逢いたい想いが募り、徒党を組んで襲い掛かつて来ていた。

過去の夢を見たのも一因ではあるものの、月村家で良くして貰い、不自由なく生活している自分に、何の前触れもなく違和感を感じて

しまった。否、前触れは確かにあったが、目を向けないようにしていたのだろう。

嫌ではないし、今更全部放り出して泣き喚いても仕方がない。解析は一向に進まず、例え帰る手段が見付かっても、実行に移す勇気が、自分にはないように思えた。すずかのこともあるし、何より帰還したとして、そこに高町なのはの居場所は残っているのだろうか。

「……待つてて、くれてるのかな」

『待つていますよ。フェイトも、はやても』

「本当？ 本当に、そう思う？」

『ええ、マスターは必要とされています。結果がどうなるにせよ、詰むまで一緒に頑張りましょうね』

「……一緒に……うん。一緒に、頑張りよう」

心配性なシュテルに対し前向きな言葉を掛けるのは、いつも彼女の役割。

レイジングハートは、シュテルの心の支えになろうとしてくれている。強く返事をしたものの晴れない気持ちを隠して、シュテルは不甲斐無い主人に仕えてくれたレイジングハートに心の中で詫びた。いつまでも、頼ってばかりではいられない。

もっとうっかりしなければと、気持ちを新たに意気込んだシュテルは、ふと、戦闘音が止み、二人の動きが止まっているのに気が付いた。視界の端、左上のモニターに映るなのは、突然今までに封印してきたジュエルシードを取り出す。

「手っ取り早く全部賭けて勝負して」とか言い出すのではと、シュテルの背筋に冷たい汗が流れる。思考に埋没していた所為で肝心の会話の内容を把握していないが、見せびらかすように杖の周りを浮遊させるのはを見る限り、シュテルの危惧するような状況でもなさそうだ。

前回の戦いにおいて砲撃により端末が消し炭された反省を踏まえ、

遠目に取り囲んでいた所為だろうか。映像優先のそれらは集音性能が低く、詳細な会話の内容を聞き出すには、もう少し距離を詰める必要がある。

近くに不安定なジュエルシードがあることもあり、注意を促す意味も込めてなのはの前へと端末を滑り込ませるも、『ごめん、すぐに仕舞うね』との返事とは裏腹に仕舞うような素振りは見せない。

自画自賛する訳ではないけれど、魔力量や才能だけでなく、この世界の高町なのはは利発で精神的にも強い。確固たる守る意志、不屈の心を兼ね備えたのはのこと、どんなことが危険か、そうでないかの区別くらい、シュテルに言われずとも分かっている筈。

ともすれば、きつとあの行動にも、何かしら引けない理由があるのだろう。

現に対抗するようにフェイトもジュエルシードを取り出し、バルデイツシュの上に乗せている。残留魔力が濃い所為か音が乱れ、たった二つがどうかこうか言っている声しか聞こえないが、映像を見る限り戦国武将同士が挙げた御首級を自慢しているように見えなくもない。

意図的な妨害を受けているようにも思えないので、偶々調子が悪いただけかと考えたシュテルは続けて新たに作り出した端末を送り込む。

何だか年相応の感情を見せて遣り取りしている二人に、どんな話をしてるんだろうと興味を惹かれ、シュテルは蚊帳の外に放り出されたような寂しさを感じながら、なのはとフェイトの会話を拾い上げた。

「シュテルちゃんに、何、したの？」

「……………なにも」

え、なに、なんの話。

唐突のその場に居ない自分の名前を呼ばれ、シュテルは思わずう

るたえた。

状況が読めず、二人の直前の動作を思い出してみると、フェイトが隠すようにそくさとジュエルシードを仕舞い、なのはの雰囲気も剣呑なものへと変わっている。なのはから奪って行ったジュエルシードについて、何か話していたのだろうか。

したとかしてないとか、されたとかされてないとか、良く分からない会話を繰り返す二人に、シュテル自身特別フェイトに何かされた記憶がないので首を捻る。何か二人の間で誤解が生じているのなら、姿を現した方が良いのかも知れない。

心当たりが見付からず、直接言ってみようと腰を上げたシュテルの頭に、なのはの変に物腰柔らかな一言が飛び込んで来た。

おでこ。

その唯一言に全てを思い出したシュテルは、真っ赤に染まった顔を両手で覆い隠すと、力なくその場に崩れ落ちた。

焦りと混乱が頭を掻き回し、ぞわぞわぞわと全身を慄るような感覚にシュテルは身を震わせる。「う、あつ、あつ、あつ……」と小さな悲鳴を上げたまま、身を捻らせて悶絶した。心当たりしかなかった。

確かにシュテルがしたし、フェイトにとっては確かにされた。

何よりシュテルを追い詰めているのは、シュテル同様に顔を羞恥に染め、しっかりとおでこを押さえていたフェイトのリアクションである。それが意味するところは一つしかない。

起きて、いたんだ。

と言うか、おでこにアレするところも、全部見られていたのだから。

シリアルXIVの件がなのはの知るところとなったことに対する

焦りもあるけれど、気の迷いで寝ているフェイトのおでこにしてしまった件がばれていた羞恥の方が、心を掻き乱す要因として大きかった。

遠くから聞こえるなのは咆吼に身を震わせたシュテルは、ぴたりと悶えるのをやめると、体育座りのまま屋上の隅で顔を覆う。決してなのはを恐れたのではなく、冷静になろうと努めたに過ぎない。『ずるっこするから……あつ、いえ、そ、その、お、お気を確か』と励ますレイジングハートの声も空しく、シュテルは自然と手のひらを濡らす何かを拭いながら、「いっそ……して……」とぶつぶつと呟き続けていた。

「あんなに元気そうなフェイト、久し振りに見るよ。……ん？ なに、あんたまた泣いてんのかい？ あーあー、顔真っ赤にしちゃってもう……」

「……みないで、ください」

何処から現れたのか。身軽な跳躍でビルの屋上へと降り立ったアルフは、目ざとく端っこで影を背負っていたシュテルを見付けると、顔を覆う両手を払いのけ、自らの額を合わせる。

もう、どうにでもすればいいんだ。

そんな胸中のシュテルでも、羞恥に染まった顔を至近距離で見られるのは遠慮して欲しいものがある。「熱ある？ 具合悪い？」と母親のように心配するアルフに対し、情けない事情を説明する訳にもいかず、シュテルはアルフが熱を測り終えるまでじっと耐えた。

結局、良く分からなかったのだろう。

一分ほど額をこすり合わせ、「とりあえずあっためるか」と妥協したアルフは、体育座りのまま小さくなっているシュテルの後ろへ回り込み、両手をお腹に回して抱き寄せた。組んだ胡坐の上へ、子供のように扱われて身を擦るシュテルを乗せると、頭天边に軽く顎を当て、身動きを取れなくされてしまう。

既に定位置となりつつある懷にシュテルを収めたアルフは「よしよし、じっくりくる」と満足そうに数度頷き、宙に浮かぶ空間モーターへと目を向けた。すっかりサボタージユする気満々のアルフに呆れて脱力したシュテルは、手慰み脇腹をつついてくるアルフに恨めしそうな視線を送り、口を開いた。

「ご主人様が戦ってますよ。ユーノのところに行かなくて良いんですか？」

「行っただけど、あいつ、気が散るからどっか行っつてっ！ って怒るんだよ。ひどいと思わない？ ユーノの癖に生意気なあ……！」

「……そうかも知れませんか」

縦横無尽に駆け回る二人の戦闘範囲と、一撃の威力を考えれば至極最もな言い分だと思いが、面倒を避けたいシュテルは曖昧な返事でお茶を濁した。

プレシアの目的を知って意気消沈していたアルフの面影は既に無く、今日もエンジン全開で我が道を突き進んでいる。ある意味シュテルの知るフェイトと同じタイプ。シュテルが何を言ったところで無駄だろう。

撃ち込まれる砲撃、回避して斬り込むフェイトに、文字通りテレビの前の子供の如く感嘆の声を上げ一喜一憂するアルフ。見た目こそ大きい、中身は年下と言うちぐはぐさは、シュテルの目にも可愛らしく映った。

シュテルは前の世界と変わらない彼女を懐かしいような、いや、もう少し大人びてたようなと何とも言えない気持ちで見守る。

「だからと言って、私のところに来られても……何もありませんよ」「ふふん、何も無いってことはないんじゃない？ 少なくともあんたがいる。それで充分さ」

「か、からかわないでください。暇なら、フェイトを手伝ってくれば良いでしょう?」

「でも加勢したら、二人の勝負に水差すようで悪いし、どうしようかなあって歩いてたら、シュテルの匂いがしてね。暇しないし、フェイトが何処にいるかも分かるし……至れり尽くせりってやつ?」

何故だろう。噛み合っている筈なのに何処かずれたこの感じが、何故だか知らないがとても懐かしく思える。

故郷の親友を思い出して感極まったシュテルもお構い無しに後頭部へと顔を埋め、すんすんと鼻を動かすアルフの自由さが、今は心地良いような気がする。「何してるんですか?」と聞いても「いや、何となく」と言われて終わるのが分かっていたシュテルは、何も言わず気が済むまで好きにさせることにした。

何やらくくん匂いを嗅いでは「んー……」と首を捻るアルフに、流石に恥かしくなってきたシュテルが僅かに身を振り抵抗の意を示すも、理不尽なことに「じっとしてなつて」と窘められ、拘束を強められる。

元が犬にしる狼にしる、ミッドチルダに生息するそれ的な魔法生物にしる、生物としての習性ならば仕方がない。力でも勝てないのだから仕方がない。そう納得しておこうと思いついたシュテルは、後ろ髪に夢中なアルフの代わりにモニターへと集中する。

依然変わりなく激戦が続くと思われたモニターの中の二人は、呼吸を整える為か一時的に足を止め、一定の距離を保ったまま睨み合っていた。

「話していても、きっと何も変わらないって言ってたけど、話さないで、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ! だから話して……何したのか、話してよ!」

「……君には、関係ないっ!」

「っ! ふえ、フェイトちゃんの駄々っ子っ! 分ならず屋っ!

変な格好っ!」

「っ! へ、変なんかじゃない! 人の真似っこしてる人よりは!」
「にゃっ!? うっ、まっ、まっ、また真似って言ったっ! なのは変じゃないもん! シュテルちゃんと同じだもん! お、お揃いって言うんだよ! 変なのは、一人だけ違う格好してるフェイトちゃんだけだもんっ!」

「うっ……うるさいっ!」

「言い返せなかったから、なのはの勝ちーっ!」

二人の舌戦は宛ら、子供の喧嘩の様相を呈していた。

なのはにしろ、フェイトにしろ、正しく小学生同士の喧嘩であるが、唯一違うところはその喧嘩にお互い大砲を持ち出していることだろうか。

銃口を向け合いながら感情剥き出しで声を張り上げる二人を見ると、駄目だと分かっても不思議な癒しを感じてならない。

もしかしたら、お互い仲良くなれるかも知れない。

そんな淡い期待に縋り付いていたシュテルと同じように、頭上ではアルフが「引っ込み思案なフェイトが、あんなに大きな声で……」と感涙に目元潤ませている。視線を交して頷きあつたシュテルとアルフは、モニター内で再び始まった極光と極光の鏝迫り合いから目を逸らし、喜びを分かち合った。

数分もすれば決着が着きそうな馬鹿魔力同士の戦闘は、既に十数分続いている。最初こそどちらが撃墜されても良いように手に汗握っていたシュテルも、いい加減この状況にも慣れ始めていた。

余程暇だったのだろう。

完全にうつらうつらと船を漕いでいたアルフがびくりと身を震わせ、眠気を覚ますつもりで話し掛けてきたのは、その時のことであつた。

「ちょっと、自分でも訳分かんないこと言っつていい?」

「構いません」

「あたし、馬鹿だからさ。あんたが、あたしに色々教えて何をさせたいのなんて、分かんないし、期待通りに動けるかなんて知らない。多分、忠告されたって気付けないだろうね」

「……ごめんなさい」

「こおら、違っつてば、まだ続きあんの。……こほんっ、でもだからって、今みたいに何でもかんでも自分の所為だっと思っくんじゃないよ。フェイトも、あの娘も、あたしも、皆勝手に考えて、勝手にやりたいことやるんだから、あんたが一人で背負い込まなくて良いんだからね？」

何だか、見透かされてるな。

アルフの言葉に、シュテルは自らの縮こまった体を隠すように弱弱しく抱き、変わりそうになった表情を必死で無表情のまま維持した。

「そんだけ。わかった？」と問い掛けたアルフに、シュテルは黙ったまま頷くと、モニターを見上げ二人の戦いに集中している振りをする。「ほんと、難儀な子……」と呆れた様子で言ったアルフは、怒られて臍を曲げてしまった子供をあやすようにわしゃわしゃとシュテルの髪を乱暴に撫でた。

それつきり途切れてしまった会話も気にせず、シュテルの後頭部に頬を押し当てて微睡むアルフが、雰囲気を変えようとして態とおどけて見せているように思えてならない。シュテルは凶星を突かれ陰鬱になれば良いのか、気を使って貰ったことに喜べば良いのか分からず、結局どちらも選べずに俯いた。

寒くなった背筋と冷えた肝を温める為に熱源を求め、寝惚け半分だと言っのに力強くシュテルを抱き締めるアルフへと、恐る恐る身を寄せる。

最初に自分の尻尾を掴むのは、リンディ・ハラウン辺りだと思っっていたけれど、存外、現行の魔法技術を持つても解析できな

い超常現象に対しては、理詰めで挑むよりも、直感の方が強いのかも知れない。

慰めのつもりか。背後からシュテルを抱いたままの寝た振りは、なのはとフェイトのデバイスがぶつかり合い、碎け、ジュエルシードが再発動するまでの間続いた。

二十一話（後書き）

原作6話を見て、なのはさんがアリサと喧嘩したり疲れてる様子が想像出来ず、考えた結果こうなりました。

にやにやにや言ってるなのはさんが可愛くて仕方がない今日この頃です。シュテルさんはいつも通りの立ち上がったは躓いてすっ転ぶ状態が続いております。

書いてて「幾らなんでも幼いかな」と思ったら、小学生三年生ですもんね。鬱回の次ですもんね。こんな感じ大丈夫ですよ。最後しんみりしてるような気もしますが、多分気のせいです。

誤字脱字修正、頑張ります。皆様の感想心よりお待ちしております。

二十二話

勝利を確信して突き出した杖は、いつの間に追い付かれていた少女の杖によって阻まれていた。

音を立てて外装に亀裂を刻んだバルディッシュに驚愕する間もなく、フェイトの体を青白い閃光と衝撃が包み込んでいく。ジュエルシードから放出される魔力に痛みはなく、全身を焼かれた桜色の極光を思えば、この程度の衝撃は虚仮威しに過ぎない。

衝撃波の渦を力尽くで掻き分けたフェイトの視界が晴れた頃、対峙していた白い魔導師の少女は衝撃波によって大きく空へと舞い上がっていた。雷撃を纏う魔力刃と、桁違いの圧縮魔力の衝突によって活性化したジュエルシードは、尚も青白い光を放っている。

あのまま段々と放出する魔力の量を増やしていけば、何れは誰かの思念を取り込んで実体化するか、エネルギーの塊となり次元震を引き起こすかの二択である。今直ぐにと言う訳ではないが、それでも無為に時間を過ごせる程の余裕はない。

戦闘続行か、封印優先かを見極める為に少女の手元を凝視したフェイトは、バルディッシュ同様に、赤い宝玉をコアに据えたデバイスが破損していることを確認する。フェイトには致命的な破損かどうかは分からないが、ふらふらと制御を失いながら高度を降ろしていく少女を見る限り、即座に復帰は出来ないだろう。

飛び降りるように素早く地面へと降下し、後に回してしまった自身のデバイスを労わるように、恐る恐る亀裂へと指を添えた。

「大丈夫？ 戻って、バルディッシュ」

『No problem, sir. Sealing form. Set up』

「無理したら駄目だよ。後は……私がやる。お願い、休んでて」

『……Yes, sir』

罅割れた外装を砕きながら、無理矢理変形しようと足掻くバルディッシュを抱いて制止すると、フェイトは小さく礼を言った。

起動した瞬間から口数少なく生真面目で、フェイトの言葉に何より忠実なこの子が食い下がったのは、初めて見る。これからフェイトが何をやるうとしていいのか分かり、心配してくれたのだらう。

バルディッシュが破損したのは、フェイトが功を焦るあまり、白い魔導師の機動力を軽視したのが原因だ。アルフにも言えることだが、支え合つのがパートナーとは言え、これ以上支えられてばかりでは前へと踏み出せるものも踏み出せない。

母譲りの魔力量と資質、リニスの訓練を受けた自分を過信して破れて以来、フェイトは自らの弱さを思い知った。涼しい顔で極大砲撃を撃ち込んでくる少女を恐怖し、紙一重の戦いの最中、改めて己が敗れば後がないことを痛感した。

だからこそ、もう、恐れない。

歩くのを止め蹲っていた間、代わりにジュエルシードを探してくれたアルフの為に、無茶な戦い方に付き合い、共に勝利を掴み取ったバルディッシュの為に、例えどんなに困難が待ち受けていようと前に進むことだけは絶対にやめない。

立ち止らないって、決めたんだ。

小さく頷き、渋々待機状態へと戻ったバルディッシュを手の甲の定位置へと収めたフェイトは、大地を蹴り、デバイスなしの即席の飛行魔法によって浮遊した。バルディッシュを明後日の方角へと飛ばされて以降、何かの時に備えて簡単な魔法程度ならば自力で術式を組めるよう訓練を行っている。

素早く構築出来て、尚且、実戦で活用出来そうな物は飛行魔法と、起死回生に放った雷撃擬きくらいではあるものの、奇襲に用いる分に充分だ。

白い魔導師の少女、高町なのはがアルファルトに足を着けるよりも早く再び飛び立ったフェイトは、激しい光を放つジュエルシード

との距離を瞬く間に詰めると、広げた両手のひらでジュエルシールドを押さえ込んだ。

「くっ……あっ！ ああああっ！」

神に仕える修道女の如く指を組んで跪き、足元に封印の魔法陣を描いていく。

拘束から逃れようと放出する魔力を増したジュエルシールドを、フェイトは痛みに耐え悲鳴染みた声を上げながら押さえ込む。万全の状態であれば、バルディッシュなしでも生まれ持った強大な魔力に物を言わせ、力尽くで封印することは可能だろう。

思念、実体を取り込んでいないジュエルシールドならば尚更、それこそ痛みを感じる暇も、拮抗する時間も与えずに押さえ込める自信がある。だがしかし、今のフェイトには決定的に欠けているものがあつた。

それ即ち、魔力。

一向に展開されない封印魔法。減衰するどころか激しさを増していくジュエルシールドの発光現象。幾ら両手に力を込めたところで暴走の抑止にはなれど、封印どころか拮抗まで持って行けそうにない。私がやる、と勇んで飛び出したは良いものの、フェイトの魔力は底を突きかけていた。

原因は、言うまでもなくなのはとの戦闘である。先日の戦闘を含め、なのはの強固な防御を突き崩す為に一撃一撃の消費魔力が嵩み、決着の着かない長期戦により大幅に魔力を消耗してしまう。

かと言って一晩寝れば全快かと言えば、元々食の細いフェイトが一日で回復できる魔力量には限界があり、その上高度な使い魔であるアルフの維持にも魔力を回している。駄目押しに今回のジュエルシールドを活性化させる為の魔力流ともなれば、万全の状態でいられる筈もない。

如何に非常識な砲撃適正を持つのはとて、掠りもしないフェイ

トの対して数撃ち中ると立て続けに撃ち込んでいれば、フェイトと同じく魔力不足に陥っている可能性は高いだろう。

デバイスが破損していることも要因の一つだろうけれど、現にこうしてジュエルシードの封印に集中できるのは、フェイトの予想の裏付けに他ならない。

格好良く決められない星の下に生まれているのか。流石に封印に至るまでの魔力が残っていない事実を受け入れたフェイトは、段々と感覚の鈍くなってきた手と、手の中の時限爆弾をどうすべきかを思案する。

下手に刺激を与えてしまった所為で、事態は既に一刻の猶予もないところまで押し迫っていた。

最早、形振り構ってなど居られない。

『アルフ、助けて』

フェイト・テストロッサに残された、最後の手段。

凜とした表情を保ちながらも、その胸中では必死にアルフの名を連呼し助けを求め。

またアルフに負担を掛けてしまう。そう思い、表情を暗くしたフェイトだったが、そう言えば今日の戦闘中アルフ見てないなと思いつ返し、考えを改める。

視界に映ったビルの屋上で、生まれたての小鹿のようになりながら境界を維持していたなのは使い魔は、一匹だった。ならば、いったいアルフは何処で何をやっていたのだろうか。

アルフに限って目的もなくぶらぶらしていたなど有り得ない話であるが、何か不測の事態に巻き込まれたのであれば連絡が来る筈だ。念話での呼び掛けにも返事がないアルフを心配し、フェイトは自身の両手のことも忘れて周囲を見渡した。

いる。ジュエルシードの魔力放出の所為で分かり難いが、確かに近くにいる。

頼り切つていると言つても過言ではない私生活を考慮して、普段はあまり意識しないようにしている魔力の繋がりを手繰り寄せたフェイトは、二時の方角に目的の人物を捉え、両手はそのままに頭を向けた。

たった今辿り着いたのだろう。フェイトを見下ろすようにビルの屋上、その手摺りへとアルフが降り立つたのはフェイトが振り向くのと同時であった。そして一拍の間を置き、仁王立ちする使い魔の隣へと降り立つた一人の少女。

シュテル。

敵にはならないけれど、味方にもならない。そんな素っ気無い字面の言葉とは裏腹に、少女はフェイトとなのはの危機に対して、まるで事前に準備していたかのように必ず現れる。

アルフ経由でなのはやユーノの事情を聞いたフェイトにとって、未だに正体不明の魔導師。されどシュテルはフェイトのことを知っていると言い、彼女から時折向けられる視線は、鈍感なフェイトにも感じ取れる程、確かな信頼と愛情に満ち溢れていた。

それ故に、フェイトもまたシュテルに一定以上の信頼を置いていく。

時の庭園で今もフェイト達の帰りを待っている母を除けば、アルフとバルディツシュだけだがフェイトの味方。手を貸してくれるシュテルが、二人の次に並ぶのは当然のことであつた。

助かつたと小さく安堵の息を吐いたフェイトは、宛ら本当の主従のように並ぶアルフとシュテルへ視線を向ける。

なのはと対峙していた時に見えた桜色のサーチャーから、来ていることは分かつていたけれど、シュテルと一緒に居たアルフが何をしていたのかは相変わらず謎のままだ。

前に会つた時も矢鱈と懐いていたアルフの様子から考えるに、無気とは思つけれどフェイトが戦っている間、暇を潰していたのかも

知れない。それは後で問い詰めることにしよう。

風に靡くスカートを煩わしそうに押さえたシュテルは、眼下のフェイトを一瞥すると手先でデバイスを一回転させ、瞬く間に封印魔法を展開する。その目には一切の迷いが無く、揺らぐことなく自分へと向けられた視線が、直ぐに助ける意思をフェイトに告げていた。やっとこの緊迫感から介抱されると期待したフェイトが表情を緩めた、その時であった。

横合いから突き出されたアルフの手が、シュテルの行動を制したのは。

一瞬、アルフが何をしたのか分からずにはかんと口を開いたフェイトは、次の瞬間には瞳に涙を滲ませアルフへと縋るような視線を向けた。

なんで、どうしてそんなことするの。

そう幾ら念話で訴え掛けても、アルフは薄らと笑みを浮かべた表情のまま、フェイトを高いビルの上から見下ろすばかりである。フェイトは使い魔の突然の裏切りに混乱しながらも、手の中で暴れ続けているジュエルシードの恐怖に耐え兼ね、封印魔法を中断したシュテルへと視線を移す。

シュテルにとっても、アルフの行動は予想外だったのだろう。

こんな時に何をと、常の彼女らしからぬ怒気を孕んだ鋭い眼でアルフを睨み、シュテルは突き出された片手を掴んだ。自分の為に本気で怒ってくれているシュテルの様子に、フェイトの心が温かい何かで満たされる。

アルフにいったい何があったのかは知らないが、それでもシュテルなら助けてくれる。

一度絶望に落ち、再び希望を見出したフェイトだったが、現実は少女の期待を二度裏切った。

飄々とした様子 of アルフに促された方向を見たシュテルもまた、

微笑を浮かべて杖を降ろしたのだ。

「なんで……アルフ……シュテル……」

声に出したことで、尚更助けを求めた手を払い除けられた実感が湧いてくる。

滲んでぼやけた視界を拭うことも出来ず、フェイトは頬を伝う一筋の涙もそのままに、自分が二人の気に障るようなことをしてしまったのだらうかとこれまでを振り返った。

心当たりなら沢山あるけれど、でも、そこまで嫌われているなんて。

甘えていたのだらうか。ジュエルシードの封印にばかり感じて、自分やアルフを蔑ろにしていたのが、いけなかったのだらうか。

疑心暗鬼に駆られたフェイトが念話越しにでも謝ろうとした時、フェイトの前に、何かがどさりと音を立てて落下した。

「あたっ！……にやはは、やっぱりわたし一人だと上手く飛べないね」

『Sorry, master』

「うっん、このくらい平気平気！ それにレイジングハートに怪我させた分、わたしが頑張らないと！」

「君は……っ！」

即座に前を向いたフェイトの目に飛び込んできたのは、純白の防護服に身を包んだ少女の姿だった。

恐ろしい砲撃を放つ杖は鳴りを響め、些かばつが悪そうに少女の胸元で待機状態のままぶら下がっている。魔法に触れて一ヶ月そこらの人間が、拙くともデバイスの補助なしで飛行すること事態常識外れな話ではあるが、それ以上にフェイトを驚かせるはあれだけの戦闘を経て、尚も力強い輝きを放つ少女の魔力だ。

砲撃を撃つ為に生まれてきたような異常に高い適正があり、消耗など欠片もしていないと言うのか。或いは同じくらいと見て取った自身の眼が節穴で、正しく底無しの魔力量を持つと言うのか。

どちらにせよ、ほんの少し前まで戦っていた少女が窮地のフェイトの前に現れたのだ。

目的はどう考えても手の中のジュエルシールド。封印する余力がないとは言え、平然とこのまま横取りされるのだけは我慢ならない。

愛しの母の意匠を模したバリアジャケットを、少女はこともあるうに変な格好変な格好と馬鹿にした。墜落した際にぶつけたお尻を擦っているのはにだけは、これ以上ジュエルシールドの数で差を付けられたくない。

いつもいつも、目の前に立ち塞がるのはこの少女だ。

フェイトらしからぬ負の感情の込められた視線が、少女を貫く。

フェイトにだって、母の役に立つ為に悪いことをしている自覚はある。だからって、こんなにも何もかも上手く行かないものだろうか。三つあるジュエルシールドだって、一つはシュテルからの貰い物であり、少女の挑発に乗ったのも悔しい思いがあるからに他ならない。無愛想な受け答えも、そうやって凜と構えていなければ、今も少女に対する恐怖心に震えてしまうからである。

フェイトは敗北から立ち上がった。アルフやシュテル、そしてバルディツシュの力を借りて、勝利を掴んだ。今だって、恐怖に耐え、母の期待を背負い、一生懸命にやれることをやっている。

アルフとシュテルに愛想を尽かされても母の為なら、母さんの笑顔を取り戻せるのなら、そう思い込んで、無駄だと分かりつつも、両手を焼けるような熱に押し当てているのに。

それなのに、スポットライトはいつも少女ばかりを照らし続ける。

「手伝いに来たよ、フェイトちゃん」

「邪魔っ、邪魔、しないでっ！ 私が封印する！ 封印しないと、

私は……」

母さんにまで、見放される。

弱さを晒すような気がして、フェイトは言葉を詰まらせた。余裕のないフェイトの様子を案じているつもりか、駆け寄って来るのはを睨み付ける。

有り体に言えば、いつでも明るくて何事にも恐れを抱かない少女が、フェイトは妬ましくて仕方がなかった。

フェイトちゃんフェイトちゃんと馴れ馴れしく人の名前を呼んで、こつちが敢えて呼ばないようにしていることなど気にも留めていないのだろう。結果を見ても分かるように、少女に対して過剰に身構えた所為で余力など残していなかった自身が、不甲斐無い。

分かっている。全部我が儘だったことくらい。

思い描いた通りにことが運ばなくて、子供のように癩癩を起こしていることくらい。

こうしてジュエルシードに縋り付いていても、最早意味はない。

決着のついた戦いに、惨めだったらしく未練を残していても、一人ではジュエルシードは封印出来ないのである。

もう、やめよう。

帰って二人を探して、話して、悪いところがあったのなら謝って、またやり直そう。

そう考え、俯いたままのフェイトがジュエルシードから両手を放そうとすると、何故か、両手が動くことはなかった。痛みにも、感覚が麻痺しているのだろうか。

不思議に思い、顔を上げるたフェイトの目の前には少女が居て、真剣な眼差しで此方を見詰めている。

そして、その手はフェイトの両手に重ねられていた。

「言ったよね。わたしはこの街を守りたい、その為に戦うって」

「……？」

「わたしね、レイジングハートが怪我した時、どうしようって思ったの。迷ってる間にジュエルシードは発動しちゃうし、もう駄目かもって、ちよつとだけ考えちゃった」

この娘が何を言いたいのか、フェイトには分からなかった。

困惑するフェイトを置き去りにして、ジュエルシードを無理矢理魔力で押さえ込んだ少女は、フェイトに習って地面に膝を着き、ゆつくりと、それでも確実に桜色の魔法陣を展開していく。

フェイトの魔法陣をなぞるように描かれたなのは魔法陣は、金色の魔力光を侵食するでもなく、まるで後押しするかの如く発光を強めている。

前哨戦とは逆に、どういふつもりだと視線で問い掛けたフェイトを、少女は微笑を浮かべて受け流す。今までとは違い、打つても響かない奇妙な反応にたじろいだフェイトの手を、少女は強く、優しく包み込んだ。

「でも、フェイトちゃんは違ったんだ。フェイトちゃんのデバイスだって怪我してたのに、真っ先にジュエルシードに向って手を伸ばして、魔力足りてないのに意地でも封印するぞって、じつと耐えてるし、あっ、えっと、ああもう、わたし何言ってるんだろ……

…あのね、フェイトちゃんっ!」

「な……何?」

「そついうの、凄く格好良いなって、そつ思つたの!」

満面の笑みで告げられた言葉は、フェイトの短い人生において、縁の無い言葉であった。

違う。格好良くなかない。さっきだって両手を重ねられなければ、封印することを諦めていた。否、今だってその気持ちは変わらない。

ジュエルシードの魔力放出を押さえ込んでいた所為で、フェイト

の魔力など殆ど残っていないのだから、少女の魔力によって維持されているだけの封印魔法に、最早フェイトは不要の筈だ。

胸中の思いとは裏腹に、初めて見る少女の屈託のない笑顔と柔和な眼差しに、フェイトは薄く頬を染めて視線を逸らした。恐いとは思えなかった少女の表情をまじまじと見たのは、先日勝利した時の寝顔くらいだ。

こんな顔も出来るんだ、と意外に思いつつも、それだけ殺伐とした関係しか築いて来なかった自分を助ける少女の心中が理解できない。手の中の負担が和らぐに連れ、追い詰められていた思考も余裕を取り戻せたと言うのに、感情は複雑に絡み合ってフェイトを混乱させている。

照れの混じった表情で俯くフェイトが、可笑しかったのだろう。

少女は柔らかな笑みを更に深めると、態々フェイトの顔を覗き込むように頭を下げた言葉を続けた。

「フェイトちゃんにも負けられない理由があつて、それがとっても大事なことから、危なくても前に飛び出せたんだよね。フェイトちゃんが飛ばなかったら、わたしはきつとここまで来れなかったと思う。だから……今回はなのはの負け！」

「っ！ そんな勝手な……」

「にははは、うん、勝手だよ。全部わたしの勝手。色々言い合つたし、シュテルちゃんにしたことも許さないけど……さっきのフェイトちゃん、格好良かったから。今日だけはフェイトちゃんの味方しようって、勝手に決めたんだけ！」

真摯な眼差しと、昂揚に染まる頬、自分の意志を貫き通すと熱っぽく語る少女に、フェイトは一瞬の間、目を奪われていた。

シュテルと同じ顔である筈なのに、否、同じだからだろうか。綺麗とさえ思える少女の笑顔を見てみると、その場凌ぎの嘘を付いているとは到底思うことが出来ない。

高町なのとは言う人間は、根っこの部分からこう出来ているのだろ。奇妙な感覚ではあるけれど、感覚的にそう納得することができた。

フェイトは目の前の少女と同じように頬を高潮させたまま、恥かしそうになのはと視線を交じわした後、最早弱弱しい魔力を放つのが精一杯のジュエルシードを力一杯握りこんだ。

笑顔が綺麗だったから、ちょっと優しくされたからと言って、シユテルの時のように心を許す訳ではない。

ただ、格好良いと言ってくれたその一言に、フェイトの中で何か報われたような気がした。

だから一度くらい、手を取り合うのも悪くない。そう思ったに過ぎない。

フェイトが魔力を振り絞ってなのはに歩幅を合わせると、それに気が付いたなのはは笑顔を引き締め、真剣な表情で声を張り上げた。

「恐くても逃げないってことも、フェイトちゃんを手伝うってことも、自分で選んで、自分で決めた！　お願いフェイトちゃん、わたしにも意地、張らせてよっ！」

「……うんっ！」

まるで、幼い頃、母さんが読んでくれた絵本の主人公みたいだ。

格好良いと告げられた言葉も、少女の啖呵の前では霞んで見えた。でも、何故だろう。不思議と悪い気分ではない。寧ろ、尽きる間際の魔力が少しだけ増したような感覚さえある。

フェイトの返事と共になのはが全力で注ぎ込んだ魔力を、デバイスなしでの制御に不慣れなのはに代わり、フェイトが魔法陣の各所へと割り振っていく。

即興にしては上出来だろうと自己評価を下したフェイトの腰は、引けていた。

惜しむらくは、人の心の中に強引に割って入ってくるようななの

はの言葉は、フェイトが受け止めるに刺激が強過ぎたことだろう。完成した魔法陣を発動させる為、フェイトは大きく息を吸い込んだ。

「「セーのっ！」」

どちらが合わせた訳でもなく、その声は同時に発せられた。

静寂に包まれた市街地、夜の道路の真ん中でハイタッチを交わす二人の少女を見下ろしながら、アルフは安堵の溜め息を吐いた。

「やったねフェイトちゃん！」と抱き付かんばかりの勢いで諸手を挙げる白い少女と、わたわたと慌てながら見様見真似でそれを受け止める黒い少女。先程まで一撃必殺の死闘を繰り広げていた相手同士とは思えない光景に、「ま、仲良が良い分にはいいけどさ」と独りごちたアルフは考える。

生来大人しいフェイトには、多少強引なくらいの相手でないと思込み込んで行けない。元々、リニスやアルフ以外の人物と接触のないあの環境では、誰かと喧嘩したり、話したりなど出来ないのだから、それも仕方のない話。

フェイトに造られた、言わば分身であるアルフは別としても、三度も矛を交じえた白い魔導師の少女が、案外一番フェイトの本質を良く見て、考えていたのかも知れない。それとも単純にフェイトの行動がなのはの琴線に触れたのであれば、それでも構わない。

アルフの主観ではあるけれど、言い争いながら砲撃や斬撃の応酬を繰り広げていた二人は、どちらも直撃を中てることを避けるように戦っていた節がある。お互いがお互いに直撃貰って撃墜された経験があることも確かだが、どちらかと言えば戦闘よりも口喧嘩が主体のように思えた。

何にせよ、プレシアの目的を知ったアルフにとっては、何れは母親と決別する運命を課せられたフェイトの味方が一人でも多く増えてくれるのであれば、何でも構わなかった。

人の心の機微など、当人達以外には分からないし、それが子供同士なら尚更なことである。駄目押しに言うのであれば、短い幼少期を獣として過ごしたアルフにとっては分かり得ないことだった。

好きの反対は無関心だと、地球の雑誌で読んだことがあったような気もするし、所謂あれだろう。嫌よ嫌よも何とやらである。

そう結論付けたアルフは、折角ジュエルシードが封印されて一段落着いたと言うのに、黙したまま俯くシュテルに話を振った。

「ほおらね、あたしの言った通り、何とかなつたらう？」

「……ん……かつた……」

「……？ どしたんだい？」

「……よかつた……よかつたよお……」

アルフが腰を曲げてシュテルの顔を覗き込むと、それはもう、何と言えば良いのか、遠回しに言うのであれば、非常にびちゃびちな状態であった。

色々拭うことすら忘れ、流れ落ちるそれもそのままに眼下の二人を眼を食い入るように見詰めているシュテルに、アルフは数秒の間思考を止め、呆けた表情で眺めていた。

感極まった様子で「よかつた、ほんと、に、よかつた」と繰り返しながら泣き腫らすシュテルの涙声に正気を取り戻したアルフは、主人とは同じようにわたわたと虚空に手を彷徨わせ、一度落ち着くべく額を押さえて天を仰いだ。

思えばフェイトに助けを求められた時、感覚の鋭さ故に拙い飛行魔法で飛んでくるのはを見付けられたアルフと違い、シュテルはこの世の終わりの如く顔を青褪めてさせて、即座に杖を抜いている。アルフが手で制した時も、前後不覚と言う言葉が生温いほど盲目的

にフェイトだけを見詰め、敵意混じりの視線で睨んできた。

ちんまい姿をしているのに、その眼光には妙な迫力があり、飄々としながらも肝を冷やしたアルフ。

勘でしかないので詳細には言い表せないけれど、フェイトとなのはを見ていると何だか丸く収まりそうな気がして、何とかシユテルの視線をなのはへと移させた。思えば、何故あの時シユテルも微笑んで杖を収めてくれたのかは分からないけれど、自分と同じように何かこう、びびっと来るものがあつたのだろうかとう無理矢理納得させた。

自分の主人に好意を持つてくれていることは喜ばしいことではあるけれど、どうにもこの子は不安定なところがあるように思える。

冷静沈着であろうと努めているのも知っているし、本質は何処にでも居るような普通の少女然としていることも知っている。良く落ち込んでいたり、泣いていたりするのだって、それだけ感情の許容量に余裕がなくなっているのだろう。

アルフが何か言えば、自分の所為でもないのに何でも彼でも直ぐ謝るし、例えアルフでなくとも見えない何かに脅え、追い詰められている印象を感じること請け合いだ。

秘密秘密と言いはしても、それがシユテルの本意でないことくらいアルフにも分かる。フェイトの出生の秘密一つ抱えるだけで手一杯だと言うのに、様々な事実を抱えているであろうシユテルの心中はアルフにとって察して然るべきだった。

問い詰めても、きつと負担にしかない。

そう考えたアルフは、いつも通りを意識して、然も今気が付いたかのようにオーバーなりアクションを取ると、シユテルの顔を手袋を外した手で拭った。

「あらら、普段澄ましてる癖に涙脆いんだから、もう。よしよし、お姉さんが胸貸してあげるからね」

「ん……ん……」

「あたしのこと分かるかい？ アルフだよ、おいで」
「……うん」

冗談めかして広げた両手の中へ、嗚咽を漏らしながらこくこくと頷き、縋り付いて来たシュテルを見て「これは重傷だわ」と苦笑する。

子供らしいと言えば子供らしいけれど、泣いていても崩さなかった硬い口調を脱ぎ捨てたシュテルは、年相応以上に幼く見えた。「ごめんね、アルフ、ごめん」と耳元で囁かれる自分の名前も、何だか旧知の人物の名前でも呼んでいるように普段の隔たりを感じない。異性を誘惑する訳でもないのにたわわに実ってしまった胸も、こんな時には役に立つ。なのは敗北を喫するまではフェイトだって甘えてなどくれなかったが、こうして誰かを抱き止めて抛り所になるのはアルフの性に合っていた。

これが母性と言うやつだろうか。弱弱しく抱き付いてくる手にそう現実逃避しながら、アルフはシュテルを抱き上げると、不安定なビルの縁から安定した足場を求めて飛び上がる。

結界が切れても誰も入ってこないだろう廃ビルの屋上へと降り立つと、アルフは少し前までと同じように胡坐を組んでシュテルを乗せ、今もすんすんと啜り泣くシュテルの髪を梳く。

このまま寝てしまっても構わない。そう伝えるつもりでぼんぼんと背中を軽く叩いたが、段々と落ち着きを取り戻しているのか、シュテルは小さく首を振って応えた。

アルフとしても、この後はフェイトに謝ったり、魔力切れているフェイトを背負って自宅まで撤退する必要があるので、起きていると言うのであれば強くは言えない。しかし、寝てしまいうなら寝てしまつて、ユーノの時のように連れ去れば良いと考えていただけに、少し残念に思う。

フェイトだって積もる話もあるだろうし、アルフとしても覆面の下を見るチャンスである。

今外せば良いと悪魔の囁きが聞こえるけれど、流石にそこまでして好奇心を満たしたくない。何と言うか、弱みに付け込むのはルー達であり、見るなら見るで確り同意を得るか、入浴とかで止むを得ず見たいのである。

泣いているよりか、恥らう顔の方が良いに決まっているのだから。

「……あの、ご迷惑、お掛けしました」

「ん？ ああ、落ち着いた？ まだならじっとしてなよ。あたしもまだ呼ばれてないから」

「い、いえ、その、結構です。出来たら、さっきのは忘れてください」

「出来たらね。こら、だから無理しないの」

十分くらい経つただろうか。顔を上げたシュテルは気不味いそうにそう切り出したが、泣き腫らした眼は今も真っ赤で、何より足元も覚束無い。

恥かしくて仕方ないと言わんばかりに、杖を頼りに立ち上がったシュテルを見兼ねてアルフが抱き起こすと、また蚊の鳴くような声で「ごめんなさい」と謝った。元に戻った途端これだと、アルフは腕を組む。

不満そうな眼で見詰めるアルフに気が付いたのだろう。シュテルは「ありがとうございます」とそっぽを向いて告げると、照れ隠しのように足早にビルの縁へと舞い戻った。泣かれるよりはずっと良けれど、あれはあれで戻ると何だか寂しいように思える。

また眼下の二人を眺め始めたシュテルに追い付いたアルフは、おちよくるように赤らんだシュテルの頬を突いて言った。

「その話し方、似合っていないよ。素のあんたの方が子供らしくて可愛いじゃないか」

「っ！ わ、忘れてくださいと言いました！」

「出来たらつても言ったね。こういうの柄じゃないんだけど……あたしじゃなくても良いから、時々ああやってガス抜きしなよ？」
「うっ、あっ、ふえっ、フェイトと、なのはの治療に行ってください！さらばです！」

眼どころか、顔まで真っ赤にして文字通り逃げるように飛び降りていったシュテルを見下ろし、アルフは擦ったそうに自分の頬を掻いた。

柄じゃない、本当に。フェイトの使い魔である自分は、フェイトのことだけ考えていけば良い筈なのに、プレシア云々を教えてくださいたことを抜きにしても気に掛かる。

好奇心もなくはないけれど、それが全てでもない。哀れみとも違し、同情でもない。強いて言い表すのであれば、生まれた瞬間からフェイトに感じている純粹な好意に近い。

勿論大小で言えばフェイトの方が大半を占めてはいるが、かと言ってフェイトと天秤に掛けた時に簡単に見捨てられる程小さくもない。合った回数は片手で数えるくらいでしかないのに、シュテルの態度を見ていると、本当に旧知の人物のように錯覚してしまう。

フェイトと同程度の交友関係しかないアルフの勘違いであることは、言うまでもない。けれどもシュテルの態度はそうではないように感じている。勘でしかないが、野生の勘だ。中らずとも遠からずと言った所だろう。

まあ、色々と考えたところで情報が足りないし、考えても詮無きことである。結局のところ「何か放って置けないんだよねえ」の一言に尽きた。

全部知ってるなんて、辛いだけだろうに。

そう考えると、ちょっとかきを掛けたくなくなってしまふ。

フェイトも、高町なのはって子も、デバイスの他に戦場まで一緒

に付いて来てくれる相方が居る。頼りないかも知れないけれど、アルフもユーノも、決して途中で二人を見捨てたりなどしない。

けれども、シュテルはどうだろうか。

困った時に、味方をしてくれる人物はいるだろう。なのはにしろフエイトにしろ、ユーノはお人好しだし、アルフに至っては言わずもがなである。

だがしかし、秘密を共有する身内としてはどうだろう。一緒に重しを背負ってくれる人物など、居ないのではないだろうか。

況してや、常に独りで行動しているところを見ると、少なくとも魔法に関して頼れる者が居るとは思えない。

余計なことまで知っている分、余計なことまで首を突っ込まなくちゃならなくなる。上手く行っていけば良いけれど、普段の鉄面皮や、先程の不安定な様子を見る限り、芳しくはないようであった。

苛立ちの余り慣れない舌打ちをしたアルフは、眼下でやいのやいのと何やら剣呑なような和気藹々としているような賑やかさを見せる三人に眼を遣り、息を吐いた。

「あたしだったら、知らない振りして、その内忘れちまうんだろうね」

口を衝いて出た言葉は、誰に向けてのものだろうか。

後頭部を掻いたアルフは、どうにも落ち着かない気持ちに屋上の手摺りを殴り付けると、シュテルを追い掛けて主人の下へと降りて行った。

二十二話（後書き）

誰が主人公なのか混乱しているようですね。主に私が。

懐かしいなあと思って未来日記を見てたらこんな時間のこの様ですよ。全部読んだ筈なのに結構覚えていないものですね。馬鹿だからですね。

誤字脱字はいつも通りです。皆様の感想心よりお待ちしております。ただちよつと今週忙しいので、感想返し遅れたら済みません。

二十三話

見晴らしの良い高級マンションが立ち並ぶ遠見市から、海鳴市商店街へと続く道を、二人の少女が歩いていった。

金髪に赤い瞳の少女は黒地に赤の意匠のワンピースに身を包み、赤毛の大きな犬を連れており、もう一人の少女も余所行きの格好なのか、黒を基調とした帽子とふりふりな装いではあるものの、まるで人目を憚るように一歩引いた距離を俯き気味に付いて来ている。

時折通行人を見掛けては身を震るわせ、擦れ違う際は顔を隠すように壁の方へと向けている少女。歩みが遅れる度に赤毛の犬に小突かれながら、重い足取りを前へと進めていく。

そんな一人と一匹の様子も気に留める余裕がないのだろう。

珍しく足早に先頭を進む金髪の少女、フェイトは、人目が無くなつたこと確認すると、凜とした表情を崩し、恥かしそうに頬を染めて振り返った。視線を落として自らの格好を見詰め、スカートの裾を引っ張ってはきよるきよると自らの体を見渡している。

十秒ほどそうした後、結局自分では判断し兼ねたフェイトは、付き従うように足を止めた一人と一匹に向って真剣な眼差しで問い掛けた。

「……変、じゃないかな？」

『もう三回目だよ、フェイト。気にしてばっかりいると、それこそ変に見えちゃうって』

返事は、直接フェイトの頭の中へと届いた。

リードに繋がれたアルフの念話に「そ、そうだよな」と両手を握り締めてフェイトが応えると、アルフも嬉しそうに目を細めて見せる。アルフの言う通り、おどおどするまいとして凜とした立ち振る舞いを心掛けてはいるけれど、今日は大事な母への報告の日。緊張

も一入だ。

フェイト自身が造り出した使い魔だと言うのに、アルフの助力がなければ服装一つ決められない。アルフなしでは生活が立ち行かないくらい頼り切っていることもあり、本当にアルフ様々である。

人間形体では人の視線が煩わしくて碌に散歩も出来ないらしく、狼形体で出歩ける今日は朝から機嫌良さそうに毛艶の良い尻尾を振っている。首輪もリードも付けるのは本位ではないけれど、繋がれていないと保健所と呼ばれる団体に問答無用で捕縛されると聞いてからは、渋々地球の法に従っていた。

郷に入らば郷に従えとこの世界の言葉にあるように、何処にだって守らなければならぬルールがある。異国の少女然としているフェイトは唯でさえ人目を惹くのだから、格好は元より、目立つような行動は避けなければならない。

最後にもう一度と裾を引いて服装の乱れを整えていたフェイトに向け、沈黙を保っていたシュテルが何故か吐息混じりの声を漏らした。

「フェイトは何を着ても似合いますね。変だなんて、有り得ません」
「あんたは一回顔にくっ付いてる物全部外して来な。逆に目立ってるよ。隠したいってのは分かるけどさ……」

アルフの言葉に対し、シュテルは片手で帽子を、片手で口元を押さえ「嫌です。絶対嫌です」と首を振り、頑として拒否の意思を示す。

二人と一匹の中で、一番日本人らしい顔立ちをしていながら、最も目立っているのがシュテルであった。

帽子だけならばまだしも、口元は薄手の花粉症用マスクが覆い隠し、目元はサングラスで遮られている。完全防備に守られたシュテルが人目を避けるように移動する様は怪しいの一言に尽きたが、通行人は隣を堂々と歩くフェイトにまず視線が行くのか、今のところ

シュテル一人が悪目立ちをしている訳ではない。

フェイトにしてみれば、初めて出会った時から素顔のシュテルが顔を隠す行為に、逆に違和感を覚えてしまう。高町なのはと一緒の顔である以上、隠すこと自体は仕方がないのかも知れないが、ちゃんと顔を見れば二人の違いくらい、すぐに気付く筈である。

『いつもそうなのかい?』と問うアルフに、「普段は眼鏡だけなのですが、甘味を買いに行くときと聞いたので……念のためです」と曖昧な返事をするシュテル。フェイトとしては、シュテルの顔をしっかりと見れないのは残念ではあるけれど、こうして不慣れな街を一緒に歩いてくれるだけでも心強い。

母が喜んでくれるかは分からないが、お土産の購入先と決めた店は、事前に本で調べた所によると海鳴市でも有名な喫茶店らしいし、形に残る物を選ぶのはフェイトにとってハードルが高過ぎた。人見知りの所為で喫茶店一つ入るのにも緊張する上に、こうして心細さのあまりシュテルに付き添いまで頼んでしまったのだから、今更後戻りなど出来はしない。

ふと、フェイトの握る綱が上の方へと引かれ、アルフへと視線を向ける。見れば人目が無いのを良いことに人間形体へと戻ったアルフが、シュテルの不意を突いてサングラスを取り上げ、それをシュテルが「返してっ、返してくださいっ」とぴよんぴよん跳ねながら取り返そうとしていた。

何故だろう。胸の内側を軽く締め付けられるような感覚。とくんと一際大きく脈打った胸の鼓動に首を傾げ、手のひらで胸を擦ったフェイトは、その不快でない感覚に浸りながら柔らかな笑みを浮かべた。

微笑ましい光景を眺め、フェイトは改めて二人と一緒に来る事が出来てよかったと心の中で安堵する。嫌われたと思った時はどうしようかと慌てふためいたけれど、こうして三人で一緒に居ると、誤解される原因が二人にあったとしても、少しでも疑ってしまった自分が恥かしくなる。

「ねえねえ、どう？ 似合う？」と品の良さそうな丸刈サンングラスを掛け、ポーズを取り挑発するアルフ。眉を顰めて飛び跳ねること数度、届かないことを悟ったシュテルはアルフを憎々しげに睨んだ。

「もう結構です」と荒い呼吸のまま吐き捨てたシュテルは、ポケットから予備の伊達眼鏡を取り出すと、然も何事もなかったように装着し髪を書き上げる。仕草こそ様にはなっってはいるものの、サングラスだった所為で分からなかったがシュテルの顔色は薄らと青く、疲労しているのが見て取れた。

昨夜、フェイトとなのはに回復魔法を掛けてくれたシュテル。掛けて貰う側としては申し分のない効力だったけれど、苦手だと言っていたシュテルの言葉通りならば、思いの他魔力、体力共に消耗していたのかも知れない。

心配になったフェイトは、眼鏡も奪い取ろうとするアルフの手を掻い潜るシュテルに近寄ると、控えめに袖を引いて尋ねた。

「シュテル、大丈夫？ 顔色悪いよ」

「あ、いえ、お気遣いなく。ただの軽い寝不足です」

「寝不足？ 本当に大丈夫？」

「ええ……もう、慣れましたから」

そう言っつて、何の気なしに洋服越しに首と肩の辺りを撫でたシュテルは、何故か恥かしげに頬を染め、何処か嬉しそうに目を細めた。シュテルとのじゃれ合いにはしゃいで尻尾を振り回していた様子から一転、「どした？ おぶる？」と砕けた口調ながらも真剣な声色で尋ねるアルフ。恐る恐るおでこや髪に手を這わせるアルフに微笑んだシュテルは「家主と揉めただけです」と短く答えて歩き出す。当たり前のことではあるけれど、シュテルもこの街を拠点にしている以上、何処かに帰る家がある。家主との言葉も気に掛かるが、揉めたと云う割りにシュテルの表情は柔らかく、まるで愛おしいも

のにも触れるように、また自らの首元に手を置いていた。

昨夜、喧嘩か何かで怪我でもしたのだろうか。

フェイトが疑問を感じシユテルの押さえている部分に注目していると、無意識だったのか、視線に気が付いたシユテルは僅かに慌てた様子で手を降ろした。誤魔化すようにこほんつと小さく咳払いし、袖を握ったまま固まっていたフェイトの手を取ったシユテルは目的地の方角へと進んでいく。

戦闘が終わってから合流したシユテルが怪我をする可能性は低いかと言つて、フェイトが何かをした覚えもないし、痛みを感じているようにも思えない。

腑に落ちないシユテルの所作に首を傾げたフェイトとアルフは、昨夜のジュエルシードを封印してからの遣り取りを振り返りながら、その後を付いて行った。

アルフがシユテルの後を追つて地面に降り立った時には、既にフェイトの治療は終わり、両手をにぎにぎと動かし具合を確かめているようであった。

大事に至る怪我ではなかったようではと胸を撫で下ろしたアルフだったが、どうにも場の雰囲気が悪い事を持ち前の第六感で感じ取ると、声を掛けようと開きかけていた口を閉じてフェイトの背後に回る。思えば、気絶したり眠ってしまった二人を負ぶつて以来、こうして勢揃いに顔を合わせるのは始めてだっただろうか。

数分前までハイタッチを要求していたとは思えないほど、鋭い眼光でフェイトを穿つなのは。わたわたと慌てふためいてたフェイトも幾分剣呑な空気を纏い、アルフを見るでもなくそっぽを向いている。

そしてシユテルは額に嫌な汗を浮かべながら、フェイトに睨みを効かせるなのは治療を行っていた。

後から飛び込んだのは比較的軽症なのだろうけれど、何故かシュテルを庇うように肩を抱き、フェイトの視界に映らないように隠している。桜色の光が消え、治療が終わったことを知らせても尚、なのは頑な態度のままシュテルを掻き抱き、猫の如く「ふーっ！」と言い出し兼ねない勢いで威嚇し始めた。

色々と気を回し過ぎるシュテルのこと、何かしら後ろめたさがあるのだろう。恥かしそうに頬を染め、小声で「ご、誤解です。フェイトは悪くなくてですね。私が、あの、聞いてます……？」と訴えるに留まっている。

無論、なのはがシュテルの言葉を真に受けている様子はない。寧ろシュテルの口からフェイトの名前が出た時点で態度を更に硬化させ「わたしだって名前だけで呼ばれたことないのに……」と呟いているのはを見る限り、火に油を注ぐ結果となっているようだ。

下手に声を掛けて爆発されては敵わないと思案したアルフは、シュテルに向けて念話を飛ばした。

『で、この状況、どうするんだい？』

『この子は、私が何とかします。アルフはフェイトの方を……その、謝っては見たのですが……』

『……やっぱり？ あたしがそっちの子を受け持つ訳にもいかないし、頑張っては見るけどさ。フェイトに埋め合わせする時、シュテルも手伝ってくれる？』

『勿論です。恩に着ます』

『着なくていいって。頼んでるのはこっちなんだし、任せときなよ』
念話を切ると同時に、シュテルはなのはがフェイトを睨まないようにくるりと立ち位置を入れ替え、説得を開始した。

抵抗を見せる様子もないので、向こうは向こうで任せようと決めたアルフは、二組の中間辺りで力尽きていたユーノを頭に乘せてフェイトに歩み寄る。「……僕、もう、限界」とだけ絞り出して脱力

したユーノを「頑張った頑張った」と労わるように撫でてた後、フェイトと目線を合わせるようにしゃがみ込む。

ぶいっ、と明後日の方を向いて珍しく不満を顕にするフェイトに、アルフは苦笑しながら頬を掻いた。

怒っていることをアピールしようとしたけれど、幼少以来駄々を捏ねたことのないフェイトはそれ以外の方法を知らないのだろう。無視しようとするながらも矢張り反応が気になるのか、フェイトは脅え混じりの視線でちらちらと此方を窺ってくる。

出会ってから今日まで、と仰々しく言いはしても二年程度でしかないが、生来大人しいフェイトが例え形だけだとしてもこうして怒りを表に出すのは初めて見た。なのはが助けに来たことでアルフとシユテルの意図は理解していても、助けなかったことに変わりはない。

生まれてこの方途切れたことのない精神リンクを辿って見ても、怒りよりも嫌われたのかも知れないという脅えの方が強いことが分かる。主から使い魔へ流れる感情の方が強い所為で、フェイトにアルフの気持ち伝わり難いのは仕方ないこと。

フェイトに嫌われても、それがフェイトの為になるのなら。そう覚悟はしていても、いざ疑われたり嫌われたりすれば、アルフとして辛いものがある。

自らの撒いた種である以上、機嫌を直して貰う為に出来ることは謝ることだけだ。

払われるかなと思いつながら伸ばした手は、あっさりとフェイトの髪まで届いた。片方のリボンの解けた髪をくしゃくしゃと撫でたアルフは、ゆっくりと此方を向いたフェイトと目を合わせる。

やっと顔を見せてくれたフェイトは、声を掛けられて安堵したような、改めて険しい顔を作ろうとしているような、何とも言えない表情をしていた。

「ごめんね、フェイト」

「……っ！」

「あたしとシュテルのこと、嫌いになつたかい？」

「……なつてない」

沈黙を挟んでそう答えたフェイトは、返事とは対照的に今度はぶくーつと頬を膨らませ涙目のままアルフを睨んだ。

あんな場所と言ってはフェイトが悲しむのだから、複雑な家庭環境に生まれ育ったフェイトは聡い子である。母親はもとより、リニスにさえ我が儘を言うことのなかったフェイトは、言わずとも色々な事情を察して内側に押し込めていた。

理性では理解していても、独りにされた寂しさや辛さの感情が納得しきれないでいるのだろう。だから、フェイトはこうやって自分なりに精一杯、不満であることをアルフに伝えようとしている。

言い訳をするつもりはない。思惑がどうであれ、アルフはフェイトの指示を無視し、フェイトの心を傷付けた。アルフはただ只管に、フェイトを大事に想う気持ちを感覚リンクを通して伝えることしかない。

触れた頬がほんのりと温かいことから、とつくに伝わっているのかも知れないが、可愛らしいご主人様が不満だと言うのなら許しを請い続けるだけだ。擦ったいのを我慢しているのか、またそっぽを向いてしまったフェイトの手を握り、アルフ微笑んだままフェイトに語り掛ける。

「どうしたら、許してくれる？」

「……わからないよ、そんなの」

「して欲しいこと、言うだけで良いんだよ？ あたしもシュテルも、フェイトに酷いことしたからさ、謝りたいんだ。……絶対許さないって言うなら別だけどね」

「えっ！ う、ちょっと待ってて、考えるから」

焦った様子でそう言うと、本当に思案し始めたフェイトを見て、アルフは笑みを深くした。

こんな状況で思っではいけないのだろうけれど、素直で心優しいフェイトが可愛くて仕方がない。先程まで傷だらけだったであろう手を擦りながら、アルフは真面目な表情で考え込むフェイトを眺める。

使い魔なんて所詮は使い捨ての存在。契約が完了されるまでの間、利用し利用されるのが正しい関係であり、長期の契約を結ぶ者など余程魔力に余裕のあるものか、本人の資質に何らかの障害があつて使い魔に頼らざるを得ない者くらいだ。

自分で言うのもあれな話ではあるけれど、高性能な使い魔程消費する魔力も大きくなり、変身能力や人間並みの思考能力を持つアルフトてそれは例外ではない。邪魔になつたり、言うことを聞かなくなれば契約を破棄されて当然である。

それなのに、フェイトは契約を破棄するどころか、アルフが言い出さなければ自分から謝るつもりですらいた。この子に造って貰った自分がどれ程幸せか、改めて思い知らされる。

ずっとそばにいる。

それがフェイトとアルフの結んだ契約。契約が完了する時は、どちらが死ぬ時であり、アルフは死んでもフェイトを守り、添い遂げるつもりでいる。これから先、何年、何十年経とうとも、その想いは変わらない。

大好きという言葉では足りないくらい、小さくて可愛らしい主人を愛している。

気持ちの再確認を終えたアルフがフェイトに目を向けると、フェイトは薄らと顔を赤くし、もじもじと視線を逸らしながらアルフが

顔を上げるのを待っていた。謝っているのは此方だと言うのに、そう思い慌てて謝ったアルフだったが、フェイトは何故か「う、ううん、いいよ。こっちこそ、ごめんね」と恥かしそうに謝ってくる。そう言ってくれるのならアルフとしても嬉しいけれど、急に態度を軟化させたフェイトにアルフは疑問を感じ、首を傾げた。

「えっと、あ！ アルフ、さっきのだけど……買い物」

「買い物？」

「母さんへのお土産、一緒に買いに行ってくれたら、お、怒るのやめる」

「そんななんでもいいのかい？」

「うん……一人だと、寂しいから」

「……ん、わかった。じゃさ、シュテルと三人でいこっか？」

アルフの言葉に頷き、俯き無言のまま抱き付いてくるフェイトを受け止めると、アルフは、反対側のリボンも解き、乱れた髪を梳いでいく。

買い物、それ自体は埋め合わせでなくとも一緒について行くけれど、目的が目的なだけにアルフの胸中は複雑であった。シュテルから聞いた情報に照らし合わせるまでもなく、プレシアがフェイトからの贈り物を喜んでくれるとは思えない。

しかし、胸の中で顔を赤くしているフェイトに、それはやめた方が良いなどは口が裂けても言えないのである。

縋るような思いでシュテルに視線を向けると、シュテルとなのも同様にくっ付いたまま固まっていた。

アルフが見るよりもずっと前からそうしていたのだろう。シュテルの縋るような視線がアルフのそれと合わさると、死んだような眼をしたシュテルの顔に若干明るさが戻った。

何をしているのか尋ねようと念話を繋ぐよりも早く、シュテルの胸に顔を埋めていたなのは、蕩け切った幸せそうな表情のままシ

ユテルに声を掛けた。

「シユテルちゃん、もう一回」

「……なのは」

「じゃ、うう……おねがい、もう一回だけ」

「……な、なのは」

「うん、シユテルちゃん、しゅてるちゃん……」

シユテルに名前を呼ばれる度に、ぷるぷると身を震わせて熱い吐息を漏らすのは。

最早抱き付いていると言うよりは、立っていられないのではと思ってしまうほど熱に浮かされたような表情でシユテルに身を委ねている。アルフの眼が確かならば、なのははシユテルの胸に顔を埋め、瞳を閉じ、肺一杯に何かを取り込んでるように見えた。

にやんにやんと頰く鳴いていたのは何となく聞こえてはいたけれど、あの状態のまま既に何分が経過しているのだろうか。

過程がどうにせよ、威嚇していた頃の雰囲気はまるで取り払われているのだから、特別大きな問題はないだろう。暗い表情のまま熱烈な視線を送ってくるシユテルを、アルフは見なかったことにしてそつと視線を逸らした。

途端に念話で立て続けに救援要請が届くが、何だかんだ言いながらもなのはの要求に応じて甘えさせてしまっているのだから、アルフにはどうしようもない。間に割って入った所為で恨みを買ひ、砲身を向けられては堪ったものではないのである。

『明日、フェイトと一緒に買い物。健闘を祈る』とだけ一方的に念話を送ったアルフは、主人に悪影響を与えるだろう二人を見せまといとフェイトの視界を覆い隠す。困惑するフェイトに「シユテルもおっけーだって」と伝え、腕に抱いたまま自宅へと逃げ帰ったのだ。

尊い犠牲、その他諸々を経て、フェイトとアルフとシュテルの三人は揃って出掛けることとなり、フェイトは喫茶翠屋のカウンター前で思案するに至っていた。

ケーキだけでも結構な種類があると言うのに、お勧めはシュークリームだと雑誌に書いてあったことを思い出す。こういうのを選んだ経験など無論フェイトには皆無だけれど、贈り物を選ぶ際に大事なのは気持ちだと考えている。

外の二人に聞けばすぐにでも決まるのだろうが、こればかりはフェイトが選ばなければ意味が無い。甘味の良し悪しは兎も角、どれを選べば母が喜んでくれるのかを一番良く知っているのはフェイトである筈なのだ。

とは言え、即断出来るものでもない。万が一と言うこともある。慎重に慎重を重ねて熟考するフェイトを、まるで微笑ましいものでも見るように待っていてくれる店員さんの為にも、最良の選択をする必要がある。

その後、シュテルは店の前まで来た瞬間、顔を真っ青にして立ち竦んでしまった。朝から顔色が悪かったこともあり、「ごめんなさい、大丈夫だと思ったんですが」と身を震わせるシュテルをアルフに任せ、フェイトは单身翠屋へと乗り込んだ。

一緒に選べないことをシュテルは仕切りに謝っていたけれど、元々フェイトは頑張って自分で選ぶつもりだったこともあり、何より今日立ち寄るのは此処だけではない。お土産を買った後は、市街地の方へと赴いて一緒に昼食を取る予定でいるし、外食も初めてのことなので楽しみにしている。

シュテルも一時的なものだから少しすれば落ち着くと言っており、目立つだろうからと再び狼の姿に戻ったアルフも、折を見て変身させれば良い。問題があるとすれば、フェイトが決断までにどれ程の時間を要するかの一点に尽きる。

にこにこした表情でフェイトを見守る若い男性の店員さんだつて、いつまでもカウンターの前に居座られて続けては仕事に差し支えがあるだろう。それ以上にフェイト自身が娘を見守るようなその視線に恥かしくて耐えられない。

いっそのこと所持金に物を言わせて端から端まで全部購入しようかと、フェイトの頭を危うい考えが過ぎった時、他の客の注文に対応すべく店員さんはフェイトの前から離れていった。「焦らないでいいからね」と声を掛けて言ってくれた店員さんに「はい」と力強く頷いたフェイトは、今度こそと真剣な眼差しで端から端までをじっと見渡していく。

選ぶなら、シンプルなのがいい。

味が想像出来ないようなものは駄目だ。未知数な物にフェイトの肩に掛かった重圧の全てを込める訳にはいかない。無難に、手堅くうん、そうしよう。

自然と守りの思考へと移っていたフェイトが、苺のショートケーキとシュークリームに狙いを定め、時の庭園で待つ母へと祈りを捧げていると、頭上から「あら？」と声が掛かった。

「いらつしゃい。温泉の時に一緒だった子よね？」

「え、あ、お姉さんなのにお母さんの人……っ！ ご、ごめんなさい！」

「ふふっ、いいのよ。この辺りに住んでるの？」

「わ、私、あの、ちょっと離れたところから……」

見上げれば、いつぞや初の温泉で覚束無かったフェイトを気に掛けて、色々と世話を焼いてくれた女性がカウンター越しに見下ろしていた。

先程までそこに立っていた男性と同じエプロンをしている女性は、恐らくこの店の店員なのだろう。「髪の毛が綺麗だったから良く覚えてるわ」と嬉しそうに話し掛けて来る女性に、フェイトはしどろ

もどろになりながらも何とか返答していく。

そもそも同年代の相手ですら、シュテルと高町なのはを除いてまともに話したことの無いフェイトにとって、目上を相手に会話するのは難しい。当然見透かされているのか、フェイトがたどたどしく話すのを待つ女性は、同じ年頃の娘を持つと言っただけあって慣れた様子でフェイトから話を引き出していった。

家庭の事情であまり会えない母の為に選んでいることや、外で二人の連れがフェイトを待っていること、どれを選んだら良いか分からなくて暫く此処でこうして思索していること。

それに、似合わないかも知れないけど、一生懸命自分で可愛いと思う洋服を選んで着て来たこと。

気が付けば、アルフやシュテルにすら言わないようなことまで、殆ど洗い浚い喋ってしまった。桃子と言う名前らしい女性が聞き上手なのかどうかはフェイトには分からないけれど、矢張り母親独特の雰囲気のようなものを纏っているのだろうか。

態々カウンターから出てまでリボンを直してくれた桃子は、ぽふぽふとフェイトの頭を軽く撫で「うん、可愛い。すごく似合っているわ」と言ってくれた。フェイトが「これと、これにしようと思っ……」と告げた時も、「内緒よ?」と口元に人差し指を当てながらおまけしてくれた。

温泉の時から分かつてはいたけれど、良い人だ。

多分次元世界広しと言えど、母さんの次くらいに良いお母さんなのだと思う。きっと自分と同年代だと言う娘も、桃子に似て優しくてお淑やかな良い子に違いない。

フェイトが何度もお礼を言っ、お土産の入った箱を受け取ると、何故か店の外と中で同時に可愛らしくしゃみの音が聞こえた。やっぱりシュテルの調子は悪いのだろうかと俯いたフェイトと同じように、桃子も「あの子、風邪でも引いたのかしら」と首を捻っ

る。

「どうやら店内に件の娘は来ているらしく、中で手伝いをしているとのことだった。「会ってみる？」と聞かれたものの、人見知りなので慌てて首を振ったフェイトに、桃子は「どこかで会ったら仲良くしてあげてね」と微笑んだ。

どんなに桃子の娘が良い子だったとしても、自分の性格ではと陰鬱な気分になったフェイトは、アルフとシユテルが待っていることを思い出して会計を済ませるべく紙幣を取り出す。

箱を抱えたフェイトは満足げに頷いた後、僅かな期待に頬を染めながら、誰にでもなく呟いた。

「……母さん、喜んでくれるかな」

「可愛い娘からの贈り物は、何でも嬉しいものよ。もっと自信を持つて。ね？」

「は、はいっ。え、えっと、その、色々と、ありがとうございます」「こっちこそ、お節焼いちゃってごめんなさいね。良かったら、また遊びに来てくれると嬉しいわ。今度はお外で待ってるお友達と一緒に」

「と、とも、だち……はい、また来ます」

お釣りを受け取ったフェイトは、最後にもう一度桃子に向って頭を下げると出口へと歩き出した。

途中擦れ違った男性店員の人も、桃子がおまけしてくれたことが分かっていいのか、人差し指を口元に当て、にこやかに見送ってくれる。本当に温かい場所なんだと改めて思ったフェイトは、桃子と並ぶようにカウンターへと戻った男性に頭を下げた。

視線で分かり合っているような雰囲気醸し出す、仲睦まじい二人。鈍感なフェイトにだってそう見えるのだ。もしかしなくとも旦那さんなのだろう。

フェイトに父はいない。母がいるので必要だと思ったこともない

けれど、あの二人を見ていると、少しだけ羨ましいような気がしてしまう。

温かいような落ち込んだような気持ちを晴らす為にぶんぶんと頭を振ったフェイトは、軽く片方の頬を叩いて気持ちを切り替える。父がいなくとも母がいる。兄弟姉妹がいなくともアルフがいる。

それに具体的にどんな関係の人を指すのかは定かではないけれど、友達になれるかも知れないシユテルもいる。

何だか嬉しい気持ちになってきたフェイトは、火照った頬を手で冷やしつつ、店の扉に手を掛けた。その時であった。

「お母さん！ お兄ちゃんから電……話……フェイト、ちゃん？」
「……………え？」

店の奥から駆けて来る足音と、聞き覚えのある明るく弾んだ声。

そして呼ばれる自分の名前に、ぎこちなく振り向いたフェイトの視界には、桃子と旦那さんと同じ黒地に翠の文字が描かれたエプロンを着た見覚えのある少女の姿。

こうして並んで見る機会がなければ気が付かなくて済んだのに、良く見てみれば旦那さんは兎も角、桃子と少女の顔立ちや特徴は一致する。

「やっぱりフェイトちゃんだ！」ときらきらした視線を向けてくる少女と、「なのは、お友達？」と尋ねる桃子を見ては、最早現実逃避のしようがない。あの子は間違いなく高町なのはであり、桃子の苗字も恐らくは同じ。

いや、嘘だ。そんな筈がない。

世の中には、似た顔の人間が三人くらいは居るとい話を、前にアルフから聞いたことがある。

顔と名前が偶々同じだけで、きっと他人の空似に違いない。現にシユテルだって同じ顔なのに、あんなにも奥ゆかしくて慈愛に満ちている。あの少女だって、そうに違いない。

段々と近付いてくる少女の足音に追い詰められたフェイトは、認めたくない現実を思考の外に放り出すと、迷いを振り切るように扉を開け放ち、走り出した。

「何でなのは顔見て逃げるの!？」と声を張り上げた少女に、フェイトは逆に何故追い駆けて来るのか問い掛けたい気持ちをぐつと堪え、折角買ったケーキを潰さないようにバルディッシュの中へとしまふ。

単純な脚力ならば、自分の方が速い。フェイトは外で待つ二人に逃げるように念話を送り、少女を引き離すべく全力逃走を開始した。

翠屋の向かいの建物の影で、アルフとシュテルはフェイトの帰りを待っていた。

アルフから取り戻したサングラスを掛けては見たものの、フェイトの様子を窺うには不向きと判断したシュテルは、再び人間形体へと戻ったアルフに背負われながら伊達眼鏡を掛ける。本来であれば古き良きシャルマルスタイルの方が隠蔽には適しているのだが、背に腹は変えられない。

店内まで同行しよう腹は括っていただけに、唐突に震えが止まらなくなつた体を恨めしく思う。心は何とも思っていない振りをしていても、体は顕著にシュテルの心情を表に曝け出してくる。

今のところ姉しか見たことはないけれど、両親も兄も忍やすすか達の話の間限り大きな違いはないらしい。だから何だと言う事はないけれど、一目見たい気持ちがあると言えれば嘘になる。

翠屋に向うフェイトに不味いとは思いつつも、渡りに船と考えた結果がこれでは、まるで笑えない。結局のところシュテルには、前の世界にしる、今の世界にしる、家族と向かい合う度胸などなかったのである。

前の世界に未練がない訳もなく、自分が強い訳でもないというの

に、何を勘違いしていたのだろう。

意気込んで店内に入って行ったフェイトを待つ間、何とか息を整えたシュテルはアルフの背中で力を抜いて身を任せる。アルフは一度シュテルを見遣ると、落ち着いた様子のシュテルに安堵の溜め息を吐いた。

「……あの店さ、なんかあるのかい？」

「普通の喫茶店ですよ。どこにでもあるような。アルフは、何かあると思いますか？」

「あたしはあんたじゃないんだから、分からないよ。なのはって子がいることくらいしか」

「……意地悪、しないでください」

何でもないように言ったアルフの後頭部に顔を埋めたシュテルは、赤くなった顔を髪の毛で隠した。

自らの鼻の頭を指差して笑うアルフに、そう言えば狼だったかと認識を改めたシュテルは、恥かしさ誤魔化す為に隣へと降り立ち、久し振りに小さく舌打ちをする。会う度にアルフの前で迂闊なことが言えないようになってきている気がした。

シュテルの代わりに掛けたサングラスを気取ったようにくいつと指先で持ち上げたアルフは、まるで壁を作るように一歩前へと出ると、素知らぬ顔で再びフェイトが入っていった店内を窺い始める。

「あんたも色々あるんだろ？ 隠れてなって」と一方的に告げたアルフに、子供扱いされてることを自覚してシュテルは益々顔を赤くした。

こういう気遣いを自然にやるものだから、最近になって前の世界のアルフと同じかをどうかを疑ってしまう。

前の世界では、付き合いこそ浅かったものの、フェイトの使い魔であるアルフとはそれなりに仲が良かったと自負している。僅かな違い程度でしかないのだろうけれど、アルフはもう少し気が短いと

言うか、フェイトに似て直情型だった。

フェイトの出生を聞いて背伸びしようとしているのかも知れないけれど、実際のところ、違つかどうかなどシュテル以外にはどうでも良いことであり、同時に判断出来ないことである。ユーノだってシュテルの世界と比べれば若干頭が柔らかい印象を受けるし、結局は誤差の範囲内ではないのだろう。

何にせよ、頼もしいことに不満はない。

思考にそう結論付けたシュテルは、恐らく安心させようと無意識に伸ばされたアルフの手を握り、その背中に向って声を掛けた。

「……プレシアは苛立ちこそすれど、喜びはしませんよ」

「わかってる。そもそも何か食べてるとこ見たことないからね、あの女。言われなくなつて、フェイトはあたしが守るさ」

「守るのは、構いません。ただ、手は出さないでください。プレシアが本気になったら、貴女の身も危うい」

「はっ、何だい。心配してくれてんのかい？」

アルフが常の調子で返した言葉に、シュテルは無言のままその背中を抱き付いて答えた。

どれだけの言葉を重ねても、心配性の自分が大げさに言っていると思つて、アルフは取り合つてくれないだろう。ジュエルシードが相手なら、それくらい樂觀視していても助けに行けるけれど、相手がプレシアでは笑い事では済まされない。

既に何度か、アルフには助けて貰っている。泣いている自分を気に掛けてくれたアルフを、心配しない筈がない。更にぎゅっと力を込めてアルフに抱き付いたシュテルは、自らの気持ちに欠片の揺らぎもないことを確信する。

こんなところで、プレシアの癩癩なんかで、アルフを失う訳にはいかない。

シュテルの行動が意外だったのだろう。暫くの間固まっていたアルフは、次第に持ち上がって来た尻尾をびんっと立てると、真っ赤に染まった頬をいつものように搔いて見せた。それでも年長者振った余裕を崩したくないのか、勿体付けてサングラスを外し、がしがりしと後頭部を搔いた後、軽く両頬を張っている。

段々ゆらゆらと揺れ始めた尻尾をじっと見詰めていたシュテルだったが、視線に気が付いたアルフの手によって尻尾は強制的に動きを封じられた。人間形体の時に尻尾が動くのを見たことがなかっただけに、揺れ動く尻尾を感じした様子で見えていたけれど、アルフとしてはそれだけでは済まなかったらしい。

火が吹くのでは思う程火照った顔のまま、シュテルを高い高いするように抱き上げたアルフは、そのまま路地の奥へと身を隠した。

薄暗がり而降るされたシュテルは、アルフが何か言葉を発するのを待ち、アルフはシュテルに視線を合わせる為にしゃがみ込んだ。そして、その後ろでゆらゆらと揺れる尻尾。

自分の背後をいつまでも見続けるシュテルの視線に気付いたアルフは、ぐっとシュテルに詰め寄ると、額を突き合わせんばかりの距離で口を開いた。

「そのさ、何て言うかさ、あれだよ……ありがとね」

「私は、正直な気持ちを伝えただけです。お気をつけて。何かあれば、地球まで逃げてきてください。必ず、助けます」

「……りょーかい。注意するし、あんたも頼りにしてるよ」

「本当に本当ですよ。貴女は、私の協力者なんです。勝手に居なくなられたら……え、と、困ります」

「……………」

シュテルが自分に出来る精一杯方法で、言いたいことをアルフに伝えると、何故かアルフはまた黙ったまま固まってしまった。

眼は開いているし、顔は相変わらず赤いく、唯一違うところと言えば、尻尾が干切れんばかりに左右に振られていることくらいだろうか。いつもとは逆に両手で顔を覆い隠したまま俯いたアルフ。

十秒過ぎても動かないアルフを心配したシュテルが、自分の時にされたようにした方が良いだろうかと考え、アルフの頭を抱くと、振られていた尻尾がぴたりと動きを止める。逆立ってしまった尻尾を見て、何か不味いことをしただろうかと考えている間に、尻尾はへたりと垂れ下がって地面まで落ちていく。

どうして良いのか分からず、安心させようとして軽くぽんぽんと後頭部を叩いていると、唐突にアルフが顔を上げ、シュテルの両肩を掴んだ。

何かもう、可愛いなこいつ。

そう耳に届いた言葉を最後にシュテルの体はアルフに覆われ、身動きを固められた。視界を塞がれたシュテルの耳には、いつも同じようにすすすんと匂いを嗅ぐ音だけが聞こえ始めたのだった。

二十三話（後書き）

前方に見えてる地雷。その傍に只管火薬を積む作業。

言ってることに特に深い意味はありませんが、フエイトさんが喜ぶ度に何か不安になるのは気の所為でしょうか。気の所為ですね。

これだけ他の人が頑張っているのに、高度な洗脳を施されたシユテルさんの首辺りに常に見えるすずかの影……。

誤字脱字、修正頑張ります。皆様の感想を心よりお待ちしております。ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6609u/>

魔法少女は諦めない

2011年12月11日23時49分発行